

的場遺跡

—常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書I—



SD4 漢跡 出土遺物

平成26年3月

宮城県山元町教育委員会

東日本高速道路株式会社 東北支社 仙台工事事務所

序 文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の的場遺跡の調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成23年度・25年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、縄文時代、古墳時代、中・近世の人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成26年3月

山元町教育委員会
教育長 森 憲一

例　　言

1. 本書は、宮城県亘理郡山元町山寺字的場地内に所在する的場遺跡（第1・2次調査）の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う事前調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、平成22～25年度に、調査原因となった事業主体者である東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所から業務委託を受けた山元町が実施した。
3. 本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。的場遺跡の現地発掘調査・報告書作成業務を行った平成23～25年度の職員の体制は下記のとおりである。

教　育　長	森　　憲一
課　　長	渡邊 隆弘（H23）、斎藤 三郎（H24・25）
班　　長	武田 賢一
主　事	山田 隆博
主　事	丹野 修太（任期付職員）
調査補助員	藤田 祐、渡邊 理伊知（H23・24）、佐伯 奈弓
発掘作業員	飯川 幸男、石井 進、伊藤 清、伊藤 成夫、岩佐 吉則、太田千佳子、大村 敏雄、小野 正文、小野 和喜子、後藤 征郎、佐藤 明、桜井 政敏、立谷 重晴、寺崎 崇徳、富樫 治男、南條 義博、橋本 礼子、深澤 久美、増川 悠記、三浦 長、桃井 謙人、森 忠男、遊佐 豊美、横山 真、渡部 修、玉田 真智子、松本 昭彦、相原 一智、斎藤 健二
整理作業員	梅村 真智子、及川 博子、齊藤 則彦、西山 ゆり子、永谷 佳歩美、高橋 みゆき、萩本 厚子、橋本 礼子、橋元 和子、深澤 久美、三浦 則子、水本 恵子、矢吹 共子、渡邊 洋子

4. 発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。
天野 順陽・初鹿野 博之・大坂 拓（宮城県教育文化財保護課）、石本 弘（福島県文化振興事業団）、川又 隆央（岩沼市教育委員会）、日下 和寿（白石市教育委員会）、佐藤 敏幸（東松島市教育委員会）、佐藤 洋（仙台市教育委員会）、鈴木 朋子（亘理町教育委員会）、辻 秀人（東北学院大学）、早瀬 亮介（髪加速器分析研究所）、森 秀之（恵庭市教育委員会）、草場 啓一・小鹿野 亮（筑紫野市教育委員会）、宮城県教育庁文化財保護課、東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所（敬称略）
5. 本遺跡の平成23年度に実施した航空写真撮影は（株）日本特殊撮影、基準点設置は高野弘幸土地家屋調査士事務所、平成25年度に実施した発掘調査における断面図作成は（株）リッケイに委託して行った。
6. 石器の石材については、筆者が肉眼観察を行った。
7. 陶磁器の産地については、仙台市教育委員会の佐藤洋氏にご教示いただいた。
8. 現地発掘調査について、指揮・監督を山田・丹野・藤田・渡邊が担当し、現地作業を発掘作業員、断面図の作成は橋本・深澤が行った。
9. 本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については、土器類は山田、石器は藤田が担当した。
遺物の実測図作成は、土器類を山田、石器を藤田、土器実測図のトレースは佐伯、石器実測図のトレースは渡邊（洋）が行った。また、土器類の一部は、（株）イビソクに委託し、実測図を作成した。遺物写真撮影・加工は（株）アートプロフィールに委託した。
遺構整理については、全般を藤田が担当し、断面図トレース、データ入力・校正を佐伯、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊（洋）・及川が行った。

10. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災前の値を基本としており、震災後のX・Y座標の補正データは()内の数値のとおりである。

Y-14 : X=-226343.509 (-226344.179) Y=3061.722 (3064.769) Z=41.157m(標高値)

R643 : X=-226363.676 (-226364.346) Y=3133.610 (3136.659) Z=38.027m

R644 : X=-226365.681 (-226366.351) Y=3129.629 (3132.678) Z=38.360m

R645 : X=-226351.701 (-226352.371) Y=3127.483 (3130.532) Z=38.934m

R648 : X=-226337.902 (-226338.572) Y=3124.687 (3127.736) Z=38.664m

R649 : X=-226332.166 (-226322.836) Y=3123.189 (3126.238) Z=38.546m

R653 : X=-226253.314 (-226253.985) Y=3112.030 (3155.079) Z=36.556m

R654 : X=-226233.476 (-226234.147) Y=3110.527 (3113.576) Z=35.776m

R655 : X=-226213.622 (-226214.293) Y=3109.322 (3112.371) Z=35.432m

R656 : X=-226193.745 (-226194.416) Y=3108.520 (3111.569) Z=35.108m

R657 : X=-226177.561 (-226178.232) Y=3107.832 (3110.882) Z=35.590m

※補正データの計算は、地殻変動に伴う座標値補正を行う座標補正ソフトウェア「PatchJGDtouhokutaihe(youki)2011.par」による。

11. 本書の第2図は、土地分類基本調査における1/50,000 地形分類図「角田」をもとに作成したものである。
12. 本書の第3図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000 の地形図を複製して作成したものである。
13. 本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帳 2010年版」(小山・竹原 1973) を参照した。
14. 本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」(文化庁文化財部記念物課 2010) を参考にし、以下の通りとした。

S I : 竪穴住居跡、S B : 挖立柱建物跡、S D : 溝跡、S K : 土坑、S E : 井戸跡、P : 柱穴・小穴

S X : 性格不明遺構、焼成遺構、その他の遺構

15. 出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。

A: 繩文土器、B: 弥生土器、C: 土師器、E: 須恵器、I: 陶器、K: 石器

16. 遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。

調査区全体図:1/500、調査区部分図:1/200、竪穴住居跡:1/60、溝跡:1/200、掘立柱建物跡:1/100・1/200、
土坑・井戸跡・性格不明遺構・焼成遺構:1/40、断面図:1/40・1/50、土器類:1/3、石器類:1/3・2/3

17. 遺物実測図において、土器類の実測図については、須恵器断面を黒塗り、他の土器を白抜きとした。
また、黒色処理が施された土師器については、スクリーントーンにより示した。石器類の実測図については、磨の範囲をスクリーントーンにより示した。

18. 本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ成形・ロクロ土師器、
ロクロを使用していないものを非ロクロ成形と呼ぶことにした。

19. 基本層序は、ローマ数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。

20. 標高は、水準点を基にした海拔高度で示した。

21. 遺構内の傾斜の部分は「TTT」、後世の搅乱は「搅」と表記し、その傾斜部は「= = =」で示した。

22. その他、発掘調査の方法等については、第Ⅲ章2にまとめた。

23. 本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、第Ⅰ章～第Ⅲ章・第Ⅳ章1(1)～
(2)・(4)・(5)、第Ⅳ章2～4は山田、第Ⅳ章1(6)は藤田、第Ⅳ章1(3)は佐伯が執筆し、図版の版組みは山田・
佐伯、報告書編集は山田が行った。

24. 本遺跡の調査成果については、遺跡調査成果発表会等でその内容の一部を公開しているが、これらと本書
の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。

25. 発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

調査要項

遺跡名：的場（まとば）遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 14070 遺跡記号 MB）

所在地：宮城県亘理郡山元町山守字の場

調査原因：常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る事前調査

調査期間：確認調査 平成 22(2010)年 12月 8日～12月 24日

事前調査（1次） A・B・C区 平成 23(2011)年 6月 27日～9月 9日、10月 14日～20日

（2次） D区 平成 25(2013)年 6月 28日～8月 9日

調査面積：約 6,790 m²（対象面積約 9,600 m²）

（A区：約 2,500 m²、B区：約 3,700 m²、C区：約 90 m²、D区：約 500 m²）

調査主体：山元町教育委員会

調査担当：山元町教育委員会生涯学習課

調査員：（平成 23 年度）

山田 隆博 【山元町教育委員会 生涯学習課 主事】

丹野 修太 【山元町教育委員会 生涯学習課 主事（任期付職員）】

藤田 祐 【山元町教育委員会 生涯学習課 臨時職員（調査補助員）】

渡邊 理伊知【山元町教育委員会 生涯学習課 臨時職員（調査補助員）】

（平成 25 年度）

丹野 修太 【山元町教育委員会 生涯学習課 主事（任期付職員）】

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課、東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所



的場遺跡 発掘調査の様子

目 次

序文

例言・調査要項

目次・挿図目次・表目次

第Ⅰ章 遺跡の概要	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	7
1. 常磐自動車道（県境～山元間）建設工事計画と発掘調査に至る経緯	7
(1) 調査に至る経緯	7
①路線内の埋蔵文化財の取り扱い決定までの経緯 ②文化財保護法に基づく手続き	
(2) 施工路線内の発掘調査の経過	8
2. 的場遺跡発掘調査の経過	8
第Ⅲ章 発掘調査	11
1. 基本層序	11
2. 発掘調査の方法	13
3. 発見された遺構と遺物	14
(1) 竪穴住居跡	26
(2) 挖立柱建物跡	42
①挖立柱建物跡の認定方法 ②B・D 区建物跡 ③A 区建物跡	
(3) 溝跡	86
(4) 土坑・井戸跡	95
①土坑 ②井戸跡	
(5) 性格不明遺構・焼成遺構・ピット	127
①性格不明遺構・焼成遺構 ②ピット	
(6) 遺構検出面、排土等出土遺物	133
第Ⅳ章 総括	134
1. 出土遺物の特徴と時期	134
(1) 繩文土器	134
(2) 弥生土器	134
(3) 土師器	137
(4) 須恵器	143
(5) 陶器	144
(6) 石器	144
2. 検出した遺構の特徴と時期	145
(1) 出土遺物・遺構の重複関係からみた各遺構の時期	145
(2) まとめ	148
3. 各時代の遺構の特徴と変遷	150
(1) 繩文時代の遺構	150
(2) 古墳時代の遺構	151
(3) 平安時代の遺構	154
(4) 近世の遺構	156
4. まとめ	161

引用・参考文献

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 山元町との湯遺跡の位置	1
第 2 図 的場遺跡及び山元町内の地形分類図	2
第 3 図 山元町内の遺跡分布と常磐自動車道建設関連遺跡	5
第 4 図 調査区の位置	9
第 5 図 的場遺跡基本層序	12
第 6 図 の湯遺跡 A～D 区主要遺構配置図	15・16
第 7 図 の湯遺跡調査区全景 (1)	17
第 8 図 の湯遺跡調査区全景 (2)	18
第 9 図 の湯遺跡遺構配置図 (1)	19
第 10 図 の湯遺跡遺構配置図 (2)	20
第 11 図 の湯遺跡遺構配置図 (3)	21
第 12 図 の湯遺跡遺構配置図 (4)	22
第 13 図 の湯遺跡遺構配置図 (5)	23
第 14 図 の湯遺跡遺構配置図 (6)	24
第 15 図 の湯遺跡遺構配置図 (7)	25
第 16 図 S 1 1 穴穴住居跡 (1)	27
第 17 国 S 1 1 穴穴住居跡 (2)	28
第 18 国 S 1 1 穴穴住居跡 (3)	29
第 19 国 S 1 1 穴穴住居跡 (4)	30
第 20 国 S 1 2 穴穴住居跡 (1)	32
第 21 国 S 1 2 穴穴住居跡 (2)	33
第 22 国 S 1 3 穴穴住居跡 (1)	35
第 23 国 S 1 3 穴穴住居跡 (2)	36
第 24 国 S 1 3 穴穴住居跡 (3)	37
第 25 国 S 1 4 穴穴住居跡 (1)	39
第 26 国 S 1 4 穴穴住居跡 (2)	40
第 27 国 S 1 4 穴穴住居跡 (3)	41
第 28 国 の湯遺跡 A・B 区掘立柱建物跡完掘状況	42
第 29 国 の湯遺跡掘立柱建物跡遺構配置図	43
第 30 国 SB 1 1～0 掘立柱建物跡 (1)	50
第 31 国 SB 1 1～0 掘立柱建物跡 (2)	51
第 32 国 SB 1 掘立柱建物跡平面・断面図	52
第 33 国 SB 2 掘立柱建物跡平面・断面図	52
第 34 国 SB 3 掘立柱建物跡平面・断面図	53
第 35 国 SB 4 掘立柱建物跡平面・断面図	53
第 36 国 SB 5 掘立柱建物跡平面・断面図	53
第 37 国 SB 6 掘立柱建物跡平面・断面図	54
第 38 国 SB 7 掘立柱建物跡平面・断面図	54
第 39 国 SB 8 掘立柱建物跡平面・断面図	54
第 40 国 SB 9 掘立柱建物跡平面・断面図	55
第 41 国 SB 1 0 掘立柱建物跡平面・断面図	55
第 42 国 SB 1 1・1 2 掘立柱建物跡	56
第 43 国 SB 1 3・1 6 掘立柱建物跡	57
第 44 国 SB 1 1 掘立柱建物跡平面・断面図	58
第 45 国 SB 1 2 掘立柱建物跡平面・断面図	58
第 46 国 SB 1 3 掘立柱建物跡平面・断面図	58
第 47 国 SB 1 4 掘立柱建物跡平面・断面図	59
第 48 国 SB 1 5 掘立柱建物跡平面・断面図	59
第 49 国 SB 1 6 掘立柱建物跡平面・断面図	59
第 50 国 SB 1 7～2 0 掘立柱建物跡	60
第 51 国 SB 2 1～2 3 掘立柱建物跡	61
第 52 国 SB 1 7 垂立柱建物跡平面・断面図	62
第 53 国 SB 1 8 垂立柱建物跡平面・断面図	62
第 54 国 SB 1 9 垂立柱建物跡平面・断面図	63
第 55 国 SB 2 0 垂立柱建物跡平面・断面図	63
第 56 国 SB 2 1 垂立柱建物跡平面・断面図	63
第 57 国 SB 2 2 垂立柱建物跡平面・断面図	64
第 58 国 SB 2 3 垂立柱建物跡平面・断面図	64
第 59 国 SB 1 1～2 3 垂立柱建物跡	65
第 60 国 SB 2 4～3 4 垂立柱建物跡	66
第 61 国 SB 2 4 垂立柱建物跡平面・断面図	67
第 62 国 SB 2 5 垂立柱建物跡平面・断面図	67
第 63 国 SB 2 6 垂立柱建物跡平面・断面図	68
第 64 国 SB 2 7 垂立柱建物跡平面・断面図	68
第 65 国 SB 2 8 垂立柱建物跡平面・断面図	69
第 66 国 SB 2 9 垂立柱建物跡平面・断面図	69
第 67 国 SB 3 0 垂立柱建物跡平面・断面図	70
第 68 国 SB 3 1 垂立柱建物跡平面・断面図	70
第 69 国 SB 3 2 垂立柱建物跡平面・断面図	70
第 70 国 SB 3 3 垂立柱建物跡平面・断面図	71
第 71 国 SB 3 4 垂立柱建物跡平面・断面図	71
第 72 国 SB 3 5～3 9 垂立柱建物跡	72
第 73 国 SB 3 5 垂立柱建物跡平面・断面図	73
第 74 国 SB 3 6 垂立柱建物跡平面・断面図	73
第 75 国 SB 3 7 垂立柱建物跡平面・断面図	73
第 76 国 SB 3 8 垂立柱建物跡平面・断面図	74
第 77 国 SB 3 9 垂立柱建物跡平面・断面図	74
第 78 国 SB 2 4～3 9 垂立柱建物跡	75
第 79 国 SB 4 0～4 1 垂立柱建物跡	76
第 80 国 SB 4 2～4 8 垂立柱建物跡	77
第 81 国 SB 4 9～5 3 垂立柱建物跡	78
第 82 国 SB 4 0 垂立柱建物跡平面・断面図	79
第 83 国 SB 4 1 垂立柱建物跡平面・断面図	79
第 84 国 SB 4 2 垂立柱建物跡平面・断面図	79
第 85 国 SB 4 3 垂立柱建物跡平面・断面図	80
第 86 国 SB 4 4 垂立柱建物跡平面・断面図	80
第 87 国 SB 4 5 垂立柱建物跡平面・断面図	80
第 88 国 SB 4 6 垂立柱建物跡平面・断面図	81
第 89 国 SB 4 7 垂立柱建物跡平面・断面図	81
第 90 国 SB 4 8 垂立柱建物跡平面・断面図	81
第 91 国 SB 4 9 垂立柱建物跡平面・断面図	82
第 92 国 SB 5 0 垂立柱建物跡平面・断面図	82
第 93 国 SB 5 1 垂立柱建物跡平面・断面図	82
第 94 国 SB 5 2 垂立柱建物跡平面・断面図	83
第 95 国 SB 5 3 垂立柱建物跡平面・断面図	83
第 96 国 SB 4 0～5 3 垂立柱建物跡	84
第 97 国 SB 18・24・25・51・52 垂立柱建物跡出土遺物	85
第 98 国 SD 1・2・3・5・6 溝跡 (1)	87

第 9 図	SD 1・2・3・5・6 槽跡 (2)	88
第 100 図	SD 4 槽跡 (1)	89
第 101 図	SD 4 槽跡 (2)	90
第 102 図	SD 4 槽跡 (3) - 1・2 層出土遺物 (1) -	91
第 103 図	SD 4 槽跡 (4) - 1・2 層出土遺物 (2) -	92
第 104 図	SD 4 槽跡 (5) - 3~6 層出土遺物 -	93
第 105 図	SD 4 槽跡 (6) - 出土遺物写真 -	94
第 106 図	SK 1・2 土坑	96
第 107 図	SK 3 土坑	97
第 108 図	SK 4~6 土坑	98
第 109 図	SK 7 土坑	98
第 110 図	SK 8 土坑	99
第 111 図	SK 9 土坑	99
第 112 図	SK 10 土坑	100
第 113 図	SK 11・12・13 土坑	101
第 114 図	SK 14 土坑	102
第 115 図	SK 15 土坑	103
第 116 図	SK 16 土坑	103
第 117 図	SK 17 土坑	104
第 118 図	SK 18・19 土坑	104
第 119 図	SK 20・21・22 土坑 (1)	105
第 120 図	SK 20・21・22 土坑 (2)	106
第 121 図	SK 23 土坑	107
第 122 図	SK 24 土坑	108
第 123 図	SK 25 土坑	108
第 124 図	SK 26・27 土坑	109
第 125 図	SK 28 土坑	109
第 126 図	SK 29 土坑	110
第 127 図	SK 30 土坑	110
第 128 図	SK 31 土坑	110
第 129 図	SK 32・33・34 土坑	111
第 130 図	SK 35・36 土坑	112
第 131 図	SK 37 土坑	112
第 132 図	SK 38 土坑	113
第 133 図	SK 39 土坑	113
第 134 図	SK 40 土坑	113
第 135 図	SK 41・42 土坑	114
第 136 図	SK 43・44 土坑	115
第 137 図	SK 45 土坑	116
第 138 図	SK 46 土坑	116
第 139 図	SK 47 土坑	116
第 140 図	SK 48 土坑	117
第 141 図	SK 49 土坑	117
第 142 図	SK 50 土坑	117
第 143 図	SK 51・52 土坑	118
第 144 図	SK 53 土坑	119
第 145 図	SK 54 土坑	120
第 146 図	SK 55 土坑	120
第 147 図	SK 56 土坑	120
第 148 図	SK 57 土坑	121
第 149 図	SK 58・59 土坑	121
第 150 図	SK 60 土坑	122
第 151 図	SK 61 土坑	122
第 152 図	SK 62 土坑	123
第 153 図	SK 63 土坑	123
第 154 図	SK 64・65 土坑	124
第 155 図	SE 1 戸跡	125
第 156 図	SE 2 戸跡	125
第 157 図	SE 3 戸跡	126
第 158 図	SX 1 性格不明遺構	127
第 159 図	SX 2 墓道構	128
第 160 図	SX 3・4 墓成構	129
第 161 図	Pit 出土遺物	130
第 162 図	その他の出土遺物一様出面・搅乱・表土・排水・表探	133
第 163 図	的場遺跡出土網文土器	134
第 164 図	的場遺跡出土弥生土器	134
第 165 図	的場遺跡出土土師器 (1)	141
第 166 図	口縁部に株状浮文・刻みのある壺の側例	142
第 167 図	的場遺跡出土土師器 (2)	143
第 168 図	的場遺跡出土須恵器	143
第 169 図	的場遺跡主要遺構の重複関係と所属時期	149
第 170 図	的場遺跡 繩文時代の遺構	150
第 171 図	的場遺跡 古墳時代の遺構	153
第 172 図	的場遺跡 平安時代の遺構	155
第 173 図	的場遺跡 近世以降の遺構	159

表 目 次

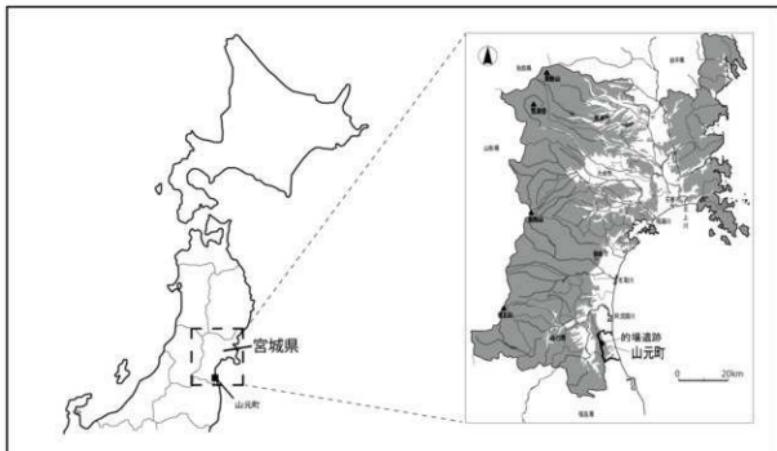
第 1 表	常磐自動車道建設計画に伴う開通道路・地点一覧	6
第 2 表	その他の山元町内の遺跡一覧	6
第 3 表	S I 1 壁穴住居跡床面施設一覧	26
第 4 表	S I 2 壁穴住居跡床面施設一覧	31
第 5 表	S I 3 壁穴住居跡床面施設一覧	34
第 6 表	S I 4 壁穴住居跡床面施設一覧	38
第 7~1 表	的場遺跡掘立柱建物跡属性表 (1) SB 1~24	44
第 7~2 表	的場遺跡掘立柱建物跡柱穴跡属性表 (2) SB 25~53	45
第 8~1 表	的場遺跡掘立柱建物跡柱穴跡属性表 (1) SB 1~20	46
第 8~2 表	的場遺跡掘立柱建物跡柱穴跡属性表 (2) SB 21~26	47
第 8~3 表	的場遺跡掘立柱建物跡柱穴跡属性表 (3) SB 27~42	48
第 8~4 表	的場遺跡掘立柱建物跡柱穴跡属性表 (4) SB 43~53	49
第 9 表	的場遺跡漢鏡属性表	86
第 10 表	的場遺跡土坑・戸跡属性表	95
第 11 表	的場遺跡性格不明遺構・後成造構属性表	127
第 12~1 表	的場遺跡ピット属性表 (1)	131
第 12~2 表	的場遺跡ピット属性表 (2)	132
第 13~1 表	的場遺跡出土状況 (1)	135
第 13~2 表	的場遺跡出土状況 (2)	136
第 14 表	埴輪式土器編年对照表	140
第 15 表	的場遺跡出土遺構の所属時期	148
第 16 表	的場遺跡近世以降の掘立柱建物跡一覧	157

第1章 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約40km離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる(第1図)。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの中には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高200~300mの山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開析された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した約7列の浜堤が認められる。

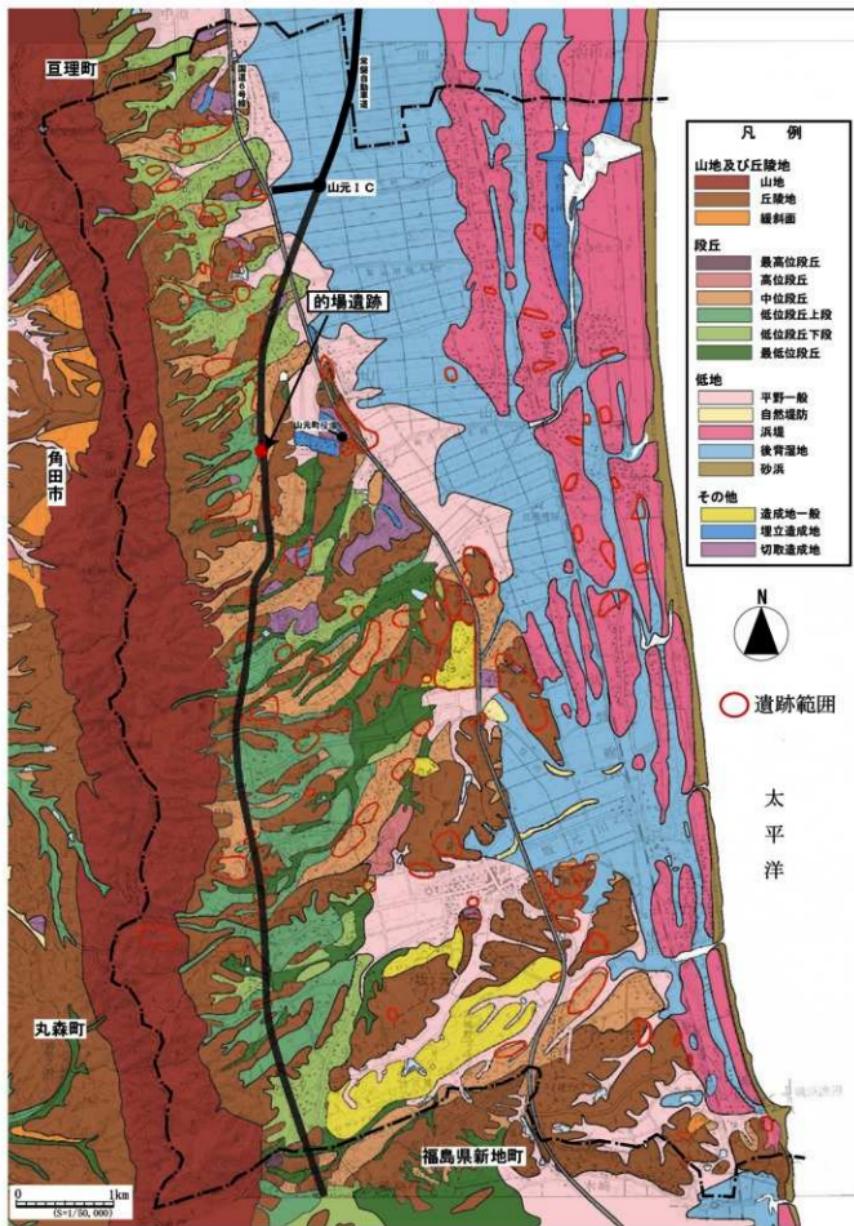
的場遺跡は、平成19・20年度に実施された分布調査により発見された遺跡で、亘理郡山元町山寺字的場に所在し、山元町役場の西約800mに位置する(第2・3図)。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵の山寺川と涌沢川に挟まれた標高33~41mの中位段丘に立地する(第2図)。遺跡の範囲は、東西60m、南北320mほどの広がりをもつ。現況は、畑地、荒地、道路である。



第1図 山元町との場遺跡の位置

2. 周辺の遺跡

山元町には、今まで100余りの遺跡が登録されている(第3図、第1・2表)。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく3つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査のより発見された遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が分布している。



第2図 的場遺跡及び山元町内の地形分類図

これまで山元町内の遺跡のうち本格的な発掘調査が実施された遺跡は、中島貝塚や合戦原遺跡、狐塚遺跡などわずか数例で、町内の原始から中世の歴史は未解明な点が多い状況にあった。しかし、平成21年度以降、町内では常磐自動車道山元IC開通に伴う周辺地区的開発や常磐自動車道（県境－山元間）建設工事、平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴う復興事業などに関連した発掘調査が継続的に行われ、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しづつ明らかになってきている。

以下これまでに調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。

【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡（42）、前期～中期の西石山原遺跡（16）、中期～晩期の中島貝塚（50）、後期の谷原遺跡（4）、晩期の中筋遺跡（1）などがある。

北経塚遺跡では、平成15・21・23年に調査が行われ、前期初頭の竪穴住居跡、土坑、遺物包含層、ピット群などが検出された（岡2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

西石山原遺跡では、平成22・23年に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴住居跡などが検出された（初鹿野ほか2012）。

中島貝塚では、昭和53年に調査が行われ、縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獸骨が数多く出土した（山元町誌編纂委員会編1986）。

谷原遺跡では、平成20・22・24年の調査により、後期の掘立柱建物跡で構成される環状集落が確認され、この他、土坑や遺物包含層などが検出された。

中筋遺跡では、平成24年の調査で、晩期の遺物包含層が検出された。

【弥生時代の遺跡】

中筋遺跡（1）、北経塚遺跡（42）、館ノ内遺跡（39）、狐塚遺跡（92）などがある。

中筋遺跡では、平成24年に調査が行われ、水田跡や遺物包含層などが検出され、中期中葉の舟形圓式の土器や石包丁、板状石器などが出土した。

北経塚遺跡では、平成21・23年に調査が行われ、中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

館の内遺跡では、平成13年に調査が行われ、中期後半の十三塚式の土器が出土している（引地2002）。

狐塚遺跡では、平成5年に調査が行われ、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土している。（窪田1995）。

【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡（1）・石垣遺跡（6）、前期～中期の北経塚遺跡（42）、中期の合戦原遺跡（61）、後期の狐塚遺跡（92）・日向北遺跡（2）・日向遺跡（3）・谷原遺跡（4）・井戸沢横穴墓群（88）などがある。

中筋遺跡では、平成24年の調査で、前期の木棺墓が検出された。

石垣遺跡では、平成23年の調査で、前期の竪穴住居跡が検出された。

北経塚遺跡では、平成21・23年の調査で、前期の竪穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された（山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

合戦原遺跡では、平成2年に調査が行われ、南小泉式期の大型の竪穴住居跡が検出された（岩見ほか1991）。

日向北・日向・谷原遺跡では、平成22～24年の調査で、後期の竪穴住居跡が検出された。

狐塚遺跡では、平成4・5年に調査が行われ、後期の竪穴住居跡・竪穴状構造・掘立柱建物跡が検出

された（千葉 1993、庄田 1995）。

井戸沢横穴墓群では、昭和 44 年に調査が行われ、調査された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群との類似することから、その関連性が指摘されている（佐々・志間・氏家 1971）。

【奈良・平安時代の遺跡】

館ノ内遺跡(39)、合戦原遺跡(61)、狐塚遺跡(92)、谷原遺跡(4)、涌沢遺跡(5)、内手遺跡(10)、上宮前北遺跡(13)、向山遺跡(93)、熊ノ作遺跡(94)などがある。

館の内遺跡では、平成 13 年に調査が行われ、規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され、墨書き土器や製塙土器などが出土している（引地 2002）。

合戦原遺跡では、平成 2 年に調査が行われ、奈良時代～平安時代の須恵器窯跡が検出された（岩見ほか 1991）。

谷原遺跡では、平成 20・22・24 年の調査で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・大溝・土坑などが検出され、円面鏡や風字鏡が出土している。

涌沢遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の集落跡や土器廃棄土坑、製鉄関連遺構が検出され、墨書き土器や八稜鏡などが出土した。

内手遺跡では、平成 23 年の調査で、平安時代の木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出されている。

上宮前北遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の製鉄炉が検出されている。

向山遺跡では、平成 25 年の調査で、奈良～平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房が検出されている。

熊ノ作遺跡では、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、「坂本願」と書かれた墨書き土器や風字鏡、石帶、木簡などが出土している。

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(42)、小平館跡(43)、日向遺跡(3)、谷原遺跡(4)、鷺足館跡(49)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年の調査で、13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑が確認され、中世の集落の存在が明らかになった（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

日向・谷原遺跡では、平成 22～24 年の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された。

小平館跡は、室町時代の天文年間(1532～1555 年)に直理要害 14 世直理宗隆が居館したとされている館跡で（柴桃 1974）、平成 24・25 年に調査が行われ、掘立柱建物跡・溝跡が検出された。

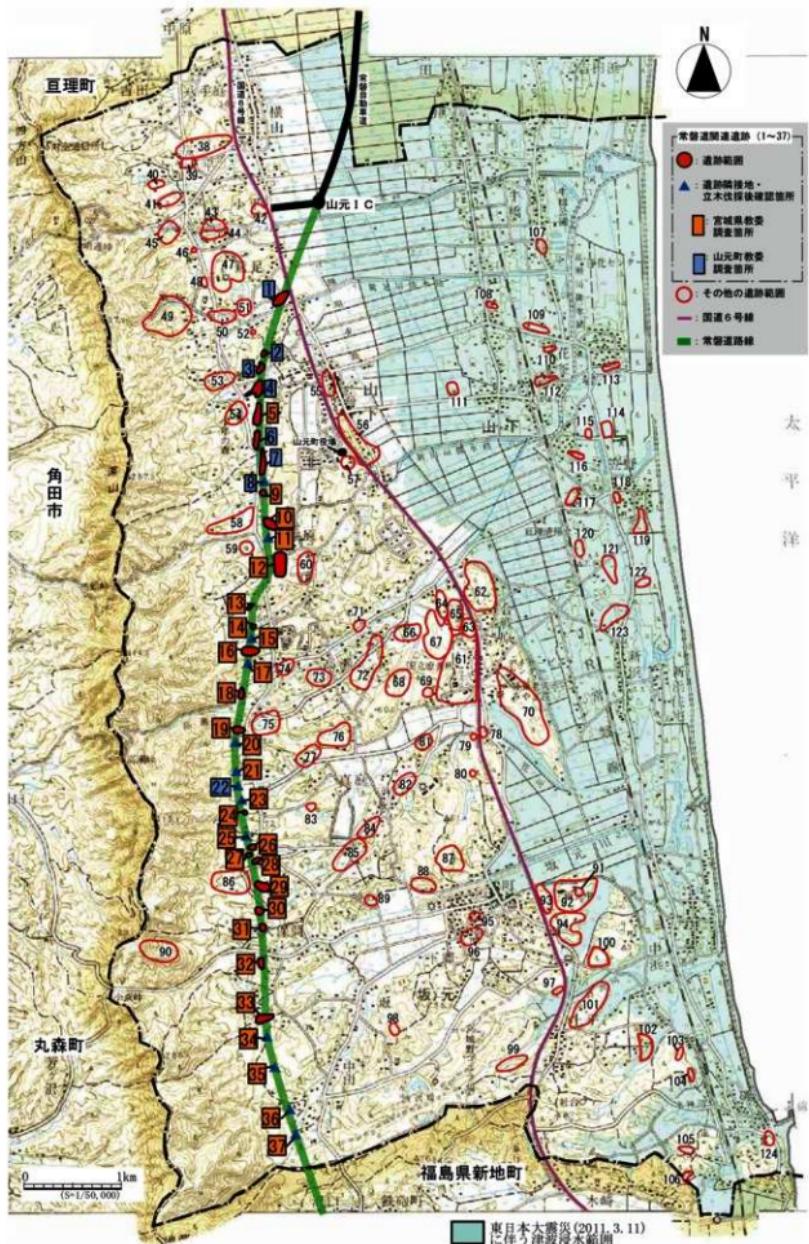
鷺足館跡は、山元町鷺足地区の山間部に位置する中世の山城で、平成 25 年に調査が行われ、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。

【近世の遺跡】

山王 B 遺跡(9)、蓑首城跡(96)などがある。

山王 B 遺跡では、平成 22 年の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された（初鹿野ほか 2012）。

蓑首城跡は、戦国時代末期に築城され、元和 2(1616) 年以降、大條氏が長期間にわたり居城した城で、平成 25 年に二ノ丸跡の調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡が検出された。



第3図 山元町内の遺跡分布と常磐自動車道建設関連遺跡

第1表 常磐自動車道建設計画に伴う間違遺跡・地点一覧

No.	遺跡名	種別	時代等	No.	遺跡名	種別	時代等
1	中筋遺跡	水田・畝傍・墓葬	縄文・弥生・古墳・中世 【平成22・23年度調査：町】	20	南山神B遺跡 隣接地	散布地	弥生・古墳・縄文時代の遺跡 西山山麓遺跡群に近い。【平成20年度調査：町】
2	日向北遺跡	集落	古代以前の遺跡群→日本の北遺跡として登録 古墳・土器等。【平成21年度調査：町】	21	—	—	弥生の遺跡、遺跡との関わりなし 【平成20年度調査：町】
3	日向遺跡	集落	古墳・土器等 【平成20年度調査：町】	22	—	—	弥生の遺跡、遺跡との関わりなし 【平成20年度調査：町】
4	谷原遺跡	集落	縄文・土器等 【平成22・23年度調査：町】	23	新田B遺跡 隣接地	散布地	弥生の遺跡、遺跡との関わりなし 【平成20年度調査：町】
5	涌沢遺跡	集落・生糞	古代以前の遺跡群→日本の北遺跡として登録 古墳・土器等。【平成21年度調査：町】	24	新田C遺跡 樹林地	散布地	六代・弥生の遺跡、河原中に遺構なし。 【平成20年度調査：町】
6	石垣遺跡	集落	縄文・土器等 【平成20年度調査：町】	25	新田E遺跡 隣接地	—	弥生の遺跡、遺跡との関わりなし 【平成20年度調査：町】
7	的場遺跡	集落	縄文・土器等 【平成23・25年度調査：町】	26	彌食E遺跡 散布地	散布地	縄文・古代～中世、おとし穴 【平成20年度調査：町】
8	—	—	古代以前の遺跡群、【成田牛糞遺跡：町】 復元遺跡の結果、遺跡不存在と判断	27	彌食B遺跡 散布地	散布地	縄文 【平成20年度調査：町】
9	山王B遺跡	集落	古墳、【平成22・23年度調査：町】 佐原土器・京成茶文化調査報告書第200集	28	彌食C遺跡 散布地	散布地	古代 【平成20年度調査：町】
10	内手遺跡	製鉄・生糞	中国 【平成20年度調査：町】	29	彌食D遺跡 製鉄	古代 製鉄 【平成20年度調査：町】	六代・弥生 【平成20年度調査：町】
11	内手遺跡 南隣接地	生糞	古墳の牛糞遺跡・古墳 【平成20年度調査：町】	30	荷駄場B遺跡 散布地	散布地	古墳 【平成20年度調査：町】
12	浅生原遺跡	散布地	縄文・古墳・中世、【平成22・23年度調査：町】 佐原土器・京成茶文化調査報告書第200集	31	荷駄場遺跡 散布地	散布地	縄文・弥生の遺跡、河原中に遺構なし。 【平成20年度調査：町】
13	上宮前北遺跡	製鉄	古代以前の遺跡群→上の宮前北遺跡として登録 古墳・土器等。【平成22・23年度調査：町】	32	上小山遺跡 散布地	散布地	古墳・中世 【平成20年度調査：町】
14	上宮前遺跡	散布地	古墳、中世、【平成22・23年度調査：町】 佐原土器・京成茶文化調査報告書第200集	33	法羅遺跡 散布地	散布地	縄文・弥生の遺跡、河原中に遺構なし。 【平成20年度調査：町】
15	西石山原遺跡 北隣接地	—	河原中の遺跡、遺跡との関わりなし。 【平成20年度調査：町】	34	—	—	弥生の遺跡、遺跡との関わりなし。 【平成20年度調査：町】
16	西石山原遺跡	集落	縄文・土器、平野、【平成22・23年度調査：町】 佐原土器・京成茶文化調査報告書第200集	35	—	—	復元遺跡の結果、遺跡と判断 【平成20年度調査：町】
17	西石山原遺跡 南隣接地	集落	河原中の古墳群 内部の遺跡無し。【平成22・23年度調査：町】	36	—	—	弥生の遺跡、遺跡との関わりなし。 【平成20年度調査：町】
18	北山神遺跡	散布地	縄文・土器・京成茶文化調査報告書第200集	37	—	—	弥生の遺跡、遺跡との関わりなし。 【平成20年度調査：町】
19	南山神B遺跡	散布地	縄文・土器、土器等、【平成22・23年度調査：町】 佐原土器・京成茶文化調査報告書第200集				

※太字ゴシック体：本報告遺跡

第2表 その他の山元町内の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
38	大平遺跡	城郭	中世	82	原山遺跡	散布地	古墳
39	轟の内道路	遺跡含む	古代	83	北櫛遺跡	散布地	平安
41	味曾野群穴墓群	堆塚	古墳	84	牛生遺跡	散布地	古代
41	味曾野群穴墓群	堆塚	古墳	85	南櫛現道跡	散布地	縄文終・前・古墳
42	北櫛現道跡	散布地	縄文・土器	86	影倉遺跡	散布地	縄文後・晚
43	北經原遺跡	水田・堆塚	縄文・土器、弥生・生糞	87	愛宕山壁跡	散布地	奈良
44	鏡穴六基群	堆塚	古墳後	88	芦戸穴積群穴墓群	堆塚	古墳後
45	湊遺跡	散布地	弥生	89	日向遺跡	散布地	古墳中・後
46	北ノ入遺跡	散布地	古代	90	新山古櫛跡	堆塚	中世
47	山崎櫛穴墓群	堆塚	古墳後	91	保坂古墳群	古墳	古墳後
48	多遺跡	散布地	古代	92	保坂遺跡	散布地	古墳・中世
49	笠原能跡	堆塚	中世	93	高山遺跡	集落・古墳	古墳・平安
50	中島貝塚	貝塚	縄文～中世	94	他の作遺跡	集落	古代
51	中島貝塚	貝塚	縄文～中世	95	雄下遺跡	散布地	弥生
52	中通遺跡	散布地	古墳後	96	置首城跡	堆塚	古墳
53	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生	97	作田櫛穴古墳群	堆塚	古墳後
53	石室遺跡	散布地	古代	98	川内遺跡	散布地	平安?
54	寺山遺跡	堆塚	中世	99	の沢遺跡	散布地	弥生・古墳
55	作田山鶴跡	堆塚	中世	100	天塚遺跡	集落・生糞	古代
56	山下鶴跡	堆塚	中世	101	朝隈原遺跡	散布地	古代
57	日向窯跡	窯	古代	102	新中永上遺跡	集落・生糞	古代
58	人山遺跡	散布地	縄文後・古代	103	東作経跡	遺跡	平安～室町
59	山王遺跡	堆塚	縄文・弥生	104	大堤小埋十三塙	塙	中世?
60	下大竹遺跡	散布地	縄文	105	雷神遺跡	集落・生糞	古代
61	合戦原遺跡	風景・堆塚・遺跡	古墳中・後、奈良・平安	106	山ノ上遺跡	散布地	古代
62	台戦原B遺跡	散布地	縄文	107	北泥沼遺跡	散布地	古代
63	台戦原C遺跡	古墳群	古代	108	差沼遺跡	散布地	古代
64	綾下窯跡	窯	古代	109	桜合遺跡	散布地	古代
65	中島鶴跡	堆塚	中世	110	北頭無遺跡	散布地	古代
66	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	111	新田遺跡	散布地	古墳後・古代
67	大久保B遺跡	散布地	古代	112	頭無遺跡	散布地	古代
68	北名生東窯跡	窯	古代	113	浜遺跡	散布地	古代
69	北名生東窯跡	窯	古代	114	花笠遺跡	散布地	古代
70	戸花山遺跡	窯	縄文～古代	115	西北谷地A遺跡	散布地	古代
71	寛後遺跡	散布地	古代	116	西北谷地B遺跡	散布地	古代
72	豊原遺跡	散布地	古代	117	西脇賀遺跡	散布地	古代
73	北の原遺跡	散布地	縄文草・前・後	118	笠野遺跡	散布地	古代
74	石山原遺跡	散布地	縄文	119	笠野遺跡	散布地	古代
75	南山神遺跡	散布地	縄文・草	120	北中須賀遺跡	散布地	古代
76	真庭寺跡	城郭	中世	121	御須賀遺跡	散布地	古代
77	北鹿野遺跡	散布地	古墳	122	笠浜遺跡	散布地	古代
78	貝吹城跡	城郭	中世	123	新浜遺跡	散布地	古代
79	印月城跡	城	中世	124	唐船寺跡	多市	古世
80	北越塚	塚	古墳?				
82	上台遺跡	散布地	弥生・平安				

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

1. 常磐自動車道（県境～山元間）建設工事計画と発掘調査に至る経緯

（1）調査に至る経緯

①路線内の埋蔵文化財の取り扱い決定までの経緯

宮城県亘理郡山元町は、常磐自動車道の事業計画地の一つとなっており、平成 11 年度に山元 IC から福島県の新地 IC までのおおよそのルートが決定したことを受け、日本道路公団東北支社仙台工事事務所長から平成 12 年 2 月 5 日付で、道路工事と埋蔵文化財の関わりについての「協議書」が提出された。宮城県教育委員会（以下、県教委）、山元町教育委員会（以下、町教委）では、協議の結果、事業の実施により、遺跡へ与える影響が高いと判断されたことから、平成 12 年 5 月 29 日付け宮城県教育庁文化財保護課長通知により、路線内に含まれる周知の遺跡 4 カ所については、遺構の分布状況を把握するために、「確認調査」を実施する対応に決定した。しかし、具体的な施工時期等が未決定だったため、その後の高速道路建設工事に関する埋蔵文化財の対応は、平成 19 年度までの一定期間、具体的な動きがない状態であった。

平成 19 年度になり、常磐自動車道の施工時期・具体的な路線が決定し、用地のセンター杭設置が完了したことを受け、東日本高速道路株式会社（以下、事業主）、県教委・町教委の三者で改めて協議を行った結果、山元 IC 以南から県境までの総長約 10km の路線について、本格的な分布調査を実施し、路線内の遺跡の分布状況について再度調査することとなった。

分布調査は、県教委・町教委のほか、事業主・町担当部局の担当職員が参加し、平成 20 年 2 月 26 日～28 日（県教委 7 名・町教委 2 名）、平成 21 年 3 月 23 日・24 日（県教委 10 名、町教委 1 名）の 5 日間にわたり実施された。その結果、路線内では、十数カ所で新たに遺跡が発見され、すでに確認されていた周知のものと合わせて 21 遺跡確認された。また、山林のため遺跡の有無が確認できなかつた箇所のうち、地形的に遺跡が存在する可能性のある箇所や遺跡隣接地に該当する箇所も 16 箇所確認され、路線内の要確認箇所は、合計 37 地点となった。

これを受け、平成 21 年 5 月に県教委・町教委・事業主の三者で、遺跡の取り扱い・調査体制等について協議した結果、路線内に多数の遺跡・確認箇所があり、かつ遺跡保存のための工法変更が難しいと判断されたことから、路線内 37 カ所の全てについて発掘調査が必要であると判断された。しかしながら、平成 21 年時点での町の調査体制では、提示された調査期間内に発掘調査完了見込みが立たないことから、発掘調査は県教委の全面的な協力を得て、県教委と町教委で分担することになった。また、用地買収の状況により、平成 21 年度中に路線内の発掘調査可能箇所について調査着手するものとした（しかしながら、平成 21 年 11 月の段階で、平成 21 年度中の発掘調査着手が困難な状況となつたため、本格的な発掘調査は、平成 22 年度から開始することになった）。

②文化財保護法に基づく手続き

上記の三者による協議終了後、新発見遺跡の遺跡登録手続きを実施し、平成 21 年 6 月 2 日には、事業主から路線内の 21 遺跡・その他 16 箇所についての「協議書」が提出され、平成 21 年 6 月 17 日付け「文第 519 号」宮城県教育委員会教育長通知により、周知の遺跡 21 遺跡、その他 16 箇所についての取り扱いが決定した（周知の 21 遺跡：確認調査実施後、遺構が存在する場合は本調査を実施、その他 16 箇所：立木伐採後、現地踏査・確認調査を実施し取り扱いを決定する）。その後、平成 21 年 9 月 1 日には事業主から文化財保護法第 94 条に基づく「発掘通知」が提出され、平成 22 年度から本格的な発掘調

査を実施した。発掘調査完了後には、完了した遺跡ごとにその都度、遺失物法・文化財認定に係る手続きを行った。

(2) 施工路線内の発掘調査の経過

常磐自動車道施工路線内の現地発掘調査については、前述のとおり、県教委と町教委が分担し発掘調査を進めた。発掘調査に先立ち、平成 22 年 4 月 1 日に県教委・町教委・事業主の三者で埋蔵文化財発掘調査に係る協定を締結し、その後、町教委については各年度当初に、事業主と山元町で業務委託契約を締結し発掘調査業務にあたった。施工路線内の発掘調査は、原則として高速道路 4 車線分の用地幅に対し、今回の施工分（2 車線分）と側道等の付帯設備のみを対象として行われ、切土部分や工法の関係で 4 車線分の工事を要する範囲については、用地幅すべてを調査の対象とした。また、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴い、常磐自動車道が「復興道路」に位置づけられたため、平成 24 年度以降の発掘調査実施にあたっては、「復興事業に伴う埋蔵文化財」の適用を受けることとなり、「復興の基準」（平成 23 年 6 月 3 日付け文第 268 号宮城県教育委員会教育長通知、平成 23 年 4 月 28 日付け 23 庁財第 61 号文化庁次長通知）で調査を実施した。

施工路線内の 21 遺跡、その他 16 カ所の合計 37 箇所の現地発掘調査は、平成 22 年度から開始し、平成 25 年度までの 4 カ年にわたり実施した（第 3 図・第 1 表）。山林のため遺跡の有無を確認できなかつた 16 箇所については、調査の結果、遺構が発見された日向北(2)・涌沢(5)・上宮前北(13)の 3 箇所は遺跡として新規登録、遺跡隣接地のうち遺構が発見された 3 箇所(11・17・20)は隣接する遺跡への範囲拡大措置がとられた。したがって、最終的な路線内の遺跡数は 24 遺跡という結果となった。

発掘調査は、用地買収等の進捗状況の影響もあり、平成 22 年以前に用地内の確認調査が実施できなかつたため、それぞれ遺跡の状況が把握できない状態での開始となつた。したがって、発掘調査に際しては、路線内の遺跡範囲について、まず確認調査を実施し、遺構が発見された場合は、事前調査に切り替えて調査を行う方法で行った。

なお、各年度の県教委と町教委の調査遺跡については、第 3 図・第 1 表のとおりである。

2. 的場遺跡発掘調査の経過

的場遺跡の確認調査・事前調査は、町教委が主体となり実施した。

(1) 確認調査の経過

確認調査は平成 22 年 12 月 8 日～24 日までの 11 日間実施し、的場遺跡範囲内の路線計画部分の全域にわたり遺構が残存していることが判明した。この結果を受け、事業主と協議した結果、4 車線分の路線とそれと付属する側道部分の範囲について、平成 23 年度以降本格的な調査を行うこととなつた。

(2) 事前調査の経過

事前調査は、平成 23 年度（1 次調査）と平成 25 年度（2 次調査）の 2 カ年にわたりて実施した。調査箇所は、1 次調査が A 区～C 区、2 次調査が D 区である（第 4 図）。調査が 2 カ年となったのは、1 次調査（A～C 区）の成果により、D 区にあたる既存の道路（町道 1 号線東街道線）下まで遺構が続いている状況が確認されたため、その部分が調査対象となつたためである。町道 1 号東街道線は、平成 25 年度以降に高速道路路線外に付け替える計画であったことから、町道付替工事完了後に、D 区の調査を行



第4図 調査区の位置

つたものである。

事前調査の実施期間は、1次調査が平成 23 年 6 月 27 日～9 月 9 日・10 月 14 日～20 日の 57 日間、2 次調査が平成 25 年 6 月 28 日～8 月 9 日までの 25 日間である。調査面積は、調査対象となった事業計画面積の約 9,600 m² のうち、遺構が確認された約 6,790 m²（A 区：約 2,500 m²、B 区：約 3,700、C 区：約 90 m²、D 区：500 m²）である。

【1 次調査（平成 23 年度）の経過】

1 次調査については、A・B・C 区を対象として調査を行った。本調査に先立ち、平成 23 年 6 月 1 日から現地発掘調査に係る事前準備（作業員雇用、現場プレハブ設置、測量機材借入、重機契約等）を行い、6 月 27 日から現地調査を開始（A 区の表土除去）した。遺構の検出・精査については、A 区は 7 月 1 日、B 区は 7 月 15 日、C 区 8 月 25 日から着手した。9 月 5 日には A～C 区の調査がほぼ完了し、9 月 7 日に A～C 区全面の空中写真撮影を業務委託により行った。その後、B 区北側の一部について 10 月 14 日から調査区を拡張し、10 月 20 日まで精査を行った。10 月 20 日には現場の資材等を撤収し、1 次調査箇所についてすべての現地作業を終了した。調査現場は、工事の関係から埋め戻しをせず、現地を事業主に引き渡した。1 次調査の発掘調査体制は、調査員 2 名、調査補助員 2 名、作業員 32 名である。

【2 次調査（平成 25 年度）の経過】

2 次調査については、D 区（町道 1 号東街道線下）を対象として調査を行った。本調査に先立ち、平成 25 年 6 月 26 日から現地発掘調査に係る事前準備（機材準備、作業員雇用等）を行い、6 月 28 日から現地調査を開始（D 区の表土除去）した。遺構の検出・精査については、7 月 2 日から着手した。平成 25 年 7 月は、雨天が多く、調査区の排水処理や環境整備に多くの時間を要した。8 月 8 日には調査がほぼ完了し、D 区全面の写真撮影を行った。8 月 9 日には現場の資材等を撤収し、2 次調査箇所についてすべての現地作業を終了した。調査現場は、工事の関係から埋め戻しをせず、現地を事業主に引き渡した。2 次調査の発掘調査体制は、調査員 1 名、作業員 23 名である。

（3）整理・報告書作成作業の経過

的場遺跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。的場遺跡の現地調査完了後も、その他の常磐道関連遺跡の現地調査を継続して進めたため、本格的な整理・報告書作成は、平成 24 年度以降から開始し、平成 25 年度末に作業を完了した。

【平成 24 年度の作業内容】

- ・出土遺物の整理作業（洗浄・接合・注記・復元）
- ・記録写真的ネーミング
- ・平面図、断面図の修正

【平成 25 年度の作業内容】

- ・出土遺物の実測図・拓本の作成、実測図のトレース、出土遺物の写真撮影
- ・断面図のトレース、平面図・写真類の版組み
- ・報告書執筆
- ・出土遺物、記録類の収納

第Ⅲ章 発掘調査

1. 基本層序

今回の調査区（A～D 区）は、標高 34～41m の緩斜面・平坦面に位置する。調査区南部の標高が最も高く、そこから北・東にかけて緩やかに傾斜し、A 区東斜面は急傾斜となり河川に至る。調査区の発掘調査実施前の土地利用状況は、A 区が宅地・原野、B 区が畑地・原野、C 区が原野、D 区が道路である。

調査区の基本層序は、調査地点によって若干の相違はあるが、原則として上から現代の表土・耕作土（I 層）、現代の盛土（II 層）、旧表土（III 層）、旧河川跡（IV 層）、地山（V 層）の順で構成される。遺構確認面は IV 層・V 層上面である。盛土（II 層）は B 区と D 区のみで確認され、旧河川跡（IV 層）は A 区のみに分布している。旧表土（III 層）は、調査区のほぼ全域に分布し、B 区の南部や D 区で残存していない箇所もみられた。こうした旧表土（III 層）の残存状況から、今回の調査区については、一部で後世の削平を受けているが、基本的に本来の地形は残存しているものと考えられる。

なお、それぞれの層の概要は以下のとおりである（第 5 図）。

I 層：表土・耕作土（現代）。層厚は 5～17cm。

II 層：盛土（現代）。B 区南側・D 区のみで認められた。層厚は 30～45cm 程度。B 区南側は土砂・碎石等により構成される盛土、D 区は道路造成に伴う盛土である。

III 層：旧表土。暗褐色（10YR3/3）シルト。層厚は 10～50cm である。調査区のほぼ全域に分布しているが、一部で現代の耕作により残存していない箇所もみられた。

IV 層：旧河川跡。河川起源の土と礫・砂で構成される層。土色と混入物の違いにより IVa 層と IVb 層に細別される。IVa 層：黒褐色（10YR3/2）シルト。層厚は 15cm 前後で、直径 5～15cm の礫を多く含む。IVb 層：暗褐色（10YR3/4）砂質シルト。3～5cm の礫を含む。IVa 層の直下に堆積している層。IV 層は A 区の南東部のみに分布しており、古墳時代～古代の遺物を包含していることから、それ以前に河川の氾濫等により形成された層であると考えられる。

V 層：地山。Va～d 層に細別され、Vd 層→Vc 層→Vb 層→Va 層の順に堆積している。

Va 層：明褐色（7.5YR5/6）シルト。粘性があり、小礫を微量含む。層厚は 10～30cm。

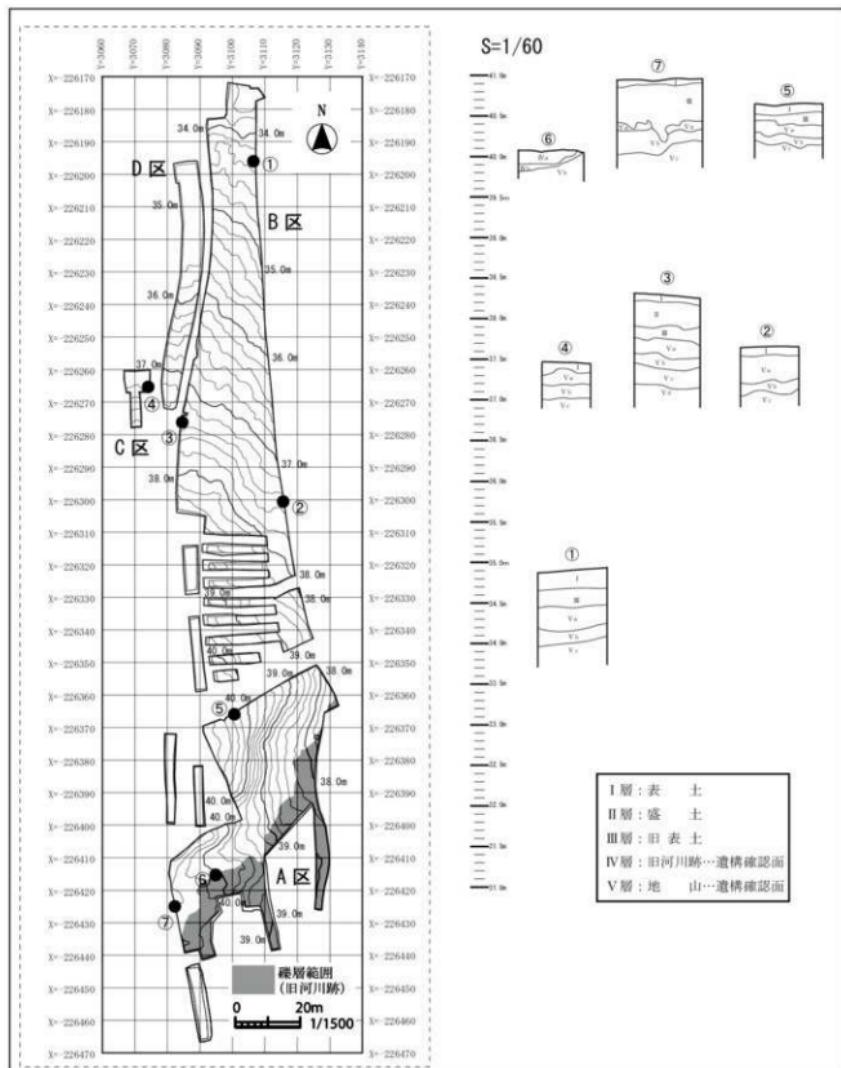
調査区のほぼ全域に分布するが、部分的に後世の削平により残存していない箇所もある。遺構確認面。

Vb 層：黄褐色（10YR5/6）シルト。粘性があり、小礫を多く含む。層厚は 10～30cm。

調査区のほぼ全域で部分的に確認された。遺構確認面。

Vc 層：にぶい黄褐色（10YR5/8）シルト。礫を非常に多く含む層。層厚は 6～24cm。

Vd 層：黄褐色（10YR5/6）シルト。粘性があり、均一なシルト土。層厚 1cm 程度。



第5図 的場遺跡 基本層序

2. 発掘調査の方法

今回の調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う発掘調査であり、本遺跡の現地調査・整理作業は下記の方法により行った。

（1）現地調査

【調査区の設定】

今回の調査範囲は、既存の町道により東西・南北に分断されている状況であった。このことから、道路を境として調査区を設定する方法をとった。調査区は、東西に走る道路の南側をA区、北側をB区とし、B区西側の南北に走る道路（町道1号東街道線）西側の調査区をC区、町道1号線東街道線下をD区とした（第4図）。

【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホー（0.45 m³）・ダンプトラック（10t）、遺構検出以降の作業は人力により行った。なお、遺構検出作業については、A区は基本層VI～Va層上面、B～D区は基本層Va～b層上面で行った。

【遺構測量】

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション（SRX5X）及び電子平板システム（遺構くん cubic 2011 7.02）、遺構断面図は手実測により縮尺1/20で実測した。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。なお、平成25年度調査については、断面図作成は業務委託（株式会社リッケイ）により作成した。

【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、それぞれの調査区（A～D区）ごとに1から通し番号（A-001～、B-001～、C-001～、D-001～）を振り、各種記録類を作成した。その後、整理作業の段階で、遺構番号を各遺構の性格ごとに再度振り直した。なお、遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。

【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構のうち、竪穴住居跡、溝跡、土坑、井戸跡、性格不明遺構については、原則として、すべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。これら以外の中世以降と判断される柱穴・ピット類は、調査を円滑に進めるため、遺構平面の下場計測や断面図・写真等の記録作成の一部を省略した。具体的には、建物を構成する柱穴については、必要箇所のみ断面図作成・写真撮影等を行い、これ以外の柱穴・ピットは、法量計測・土層注記の記録作成のみを行った。この他、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録した。

【遺物の記録・取り上げ】

遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物でかつ残存状況のよいもののみとした。

遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

【写真撮影】

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ（Nikon D90/レンズ AF-S NIKKOR 18-200mm/画質モード RAW

+FINE)、俯瞰撮影システム（CUBIC）を使用した。A 区・B 区・C 区の調査がほぼ終了した平成 23 年 9 月 7 日には、業務委託でラジコンヘリによる航空撮影(一眼レフデジタルカメラ、6×7 フィルムカメラ)を行った。

(2) 室内整理

① 遺物の整理作業

【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物（縄文土器・弥生土器・土師器）については、土器強化剤（使用薬剤：バインダー17）による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他（検出面・排土など）から出土した遺物の接合を行った。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー（第一合成株式会社）を一定期間リースし、機械による注記を行った。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

【遺物抽出・実測図・拓本図作成】

遺物の抽出・実測図作成は調査員・調査補助員が行い、拓本作成は整理作業員、報告書用の拓本図作成は調査補助員が担当した。

遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。

遺物の実測図については、原則として手実測により作成したが、一部の遺物は遺物くん cubic 2012.4.00 を使用して作成し、また、一部は民間調査機関（株式会社イビソク仙台支店）に委託して作成した。

拓本図の作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーで PC に画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

【実測図トレース・写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は、素図をスキャナーで取り込み、PC 上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は、民間機関（株式会社アートプロフィール）に委託した。

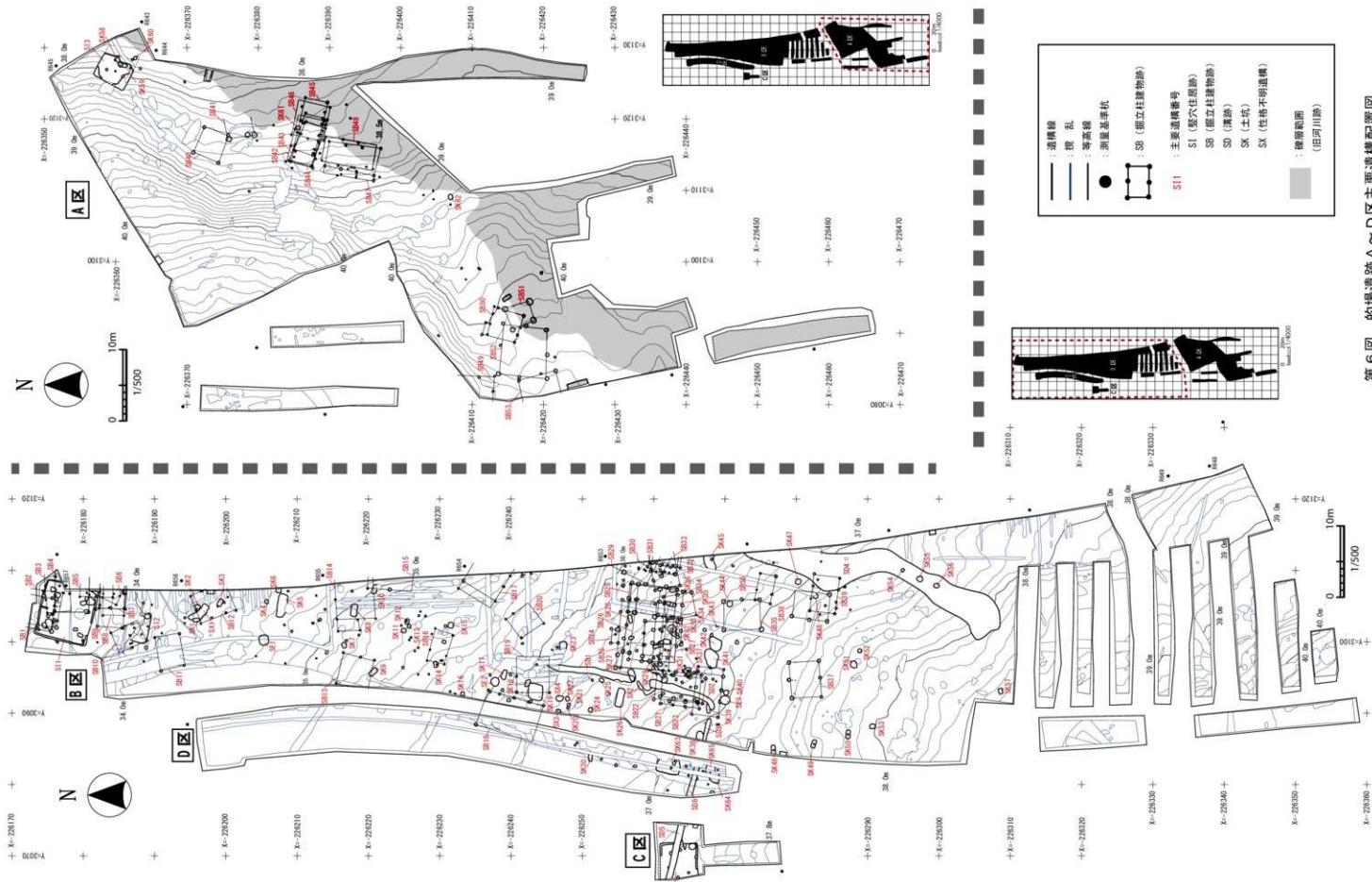
② 図面の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正・断面図修正・トレース・土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成・図面収納の手順を行った。報告書の執筆は、調査員・調査補助員が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成・写真画像処理、遺構図等の図版作成・報告書版組みについては、遺構くん cubic 2012.8.03、Adobe Illustrator CS5、Adobe Photoshop CS5、Adobe InDesign CS5、表データ・報告書原稿の作成については Microsoft Office Word ・Excel のソフトウェアを使用した。

3. 発見された遺構と遺物

今回の調査では、堅穴住居跡 4 軒、掘立柱建物跡 53 棟、溝跡 6 条、土坑 65 基、井戸跡 3 基、性格不明遺構・焼成遺構 4 基、ピット 221 個を検出した（第 6～15 図）。出土遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・石器などである。以下、遺構ごとに記述する。





1. 的場遺跡 調査区全景（北から）



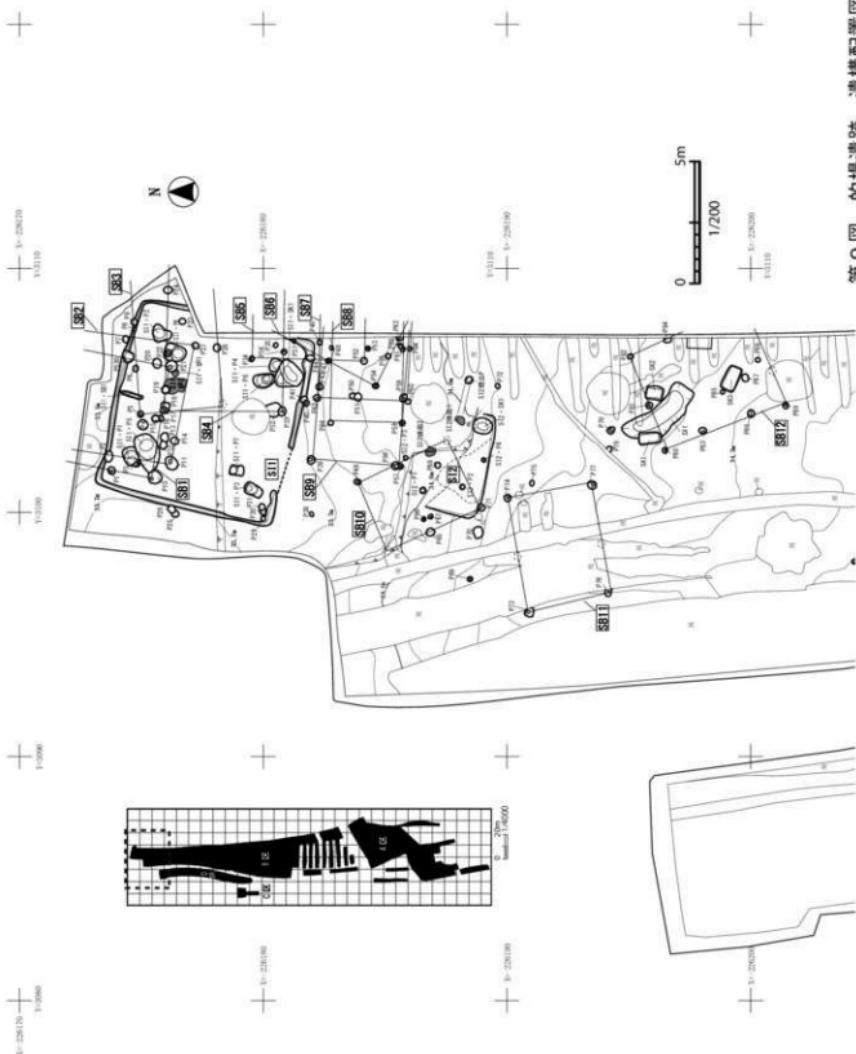
2. 的場遺跡 調査区全景（南から）

第7図 的場遺跡 調査区全景（1）

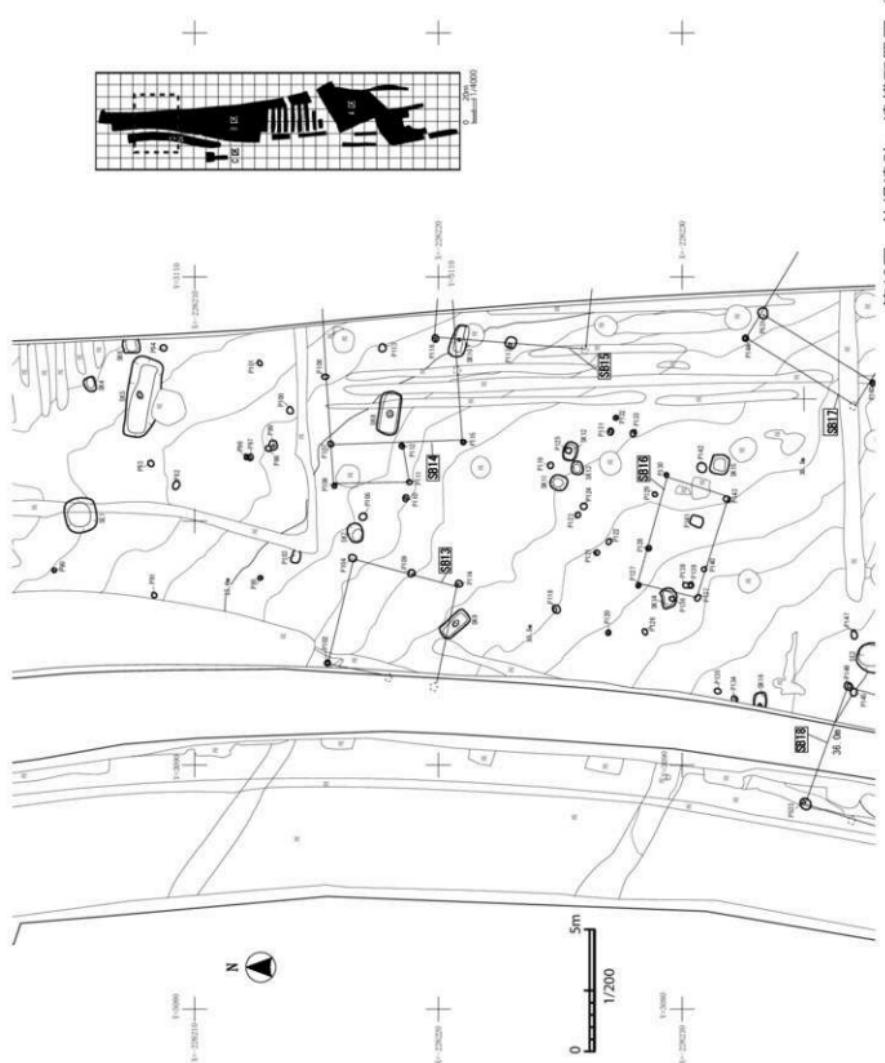


第8図 的場遺跡 調査区全景（2）

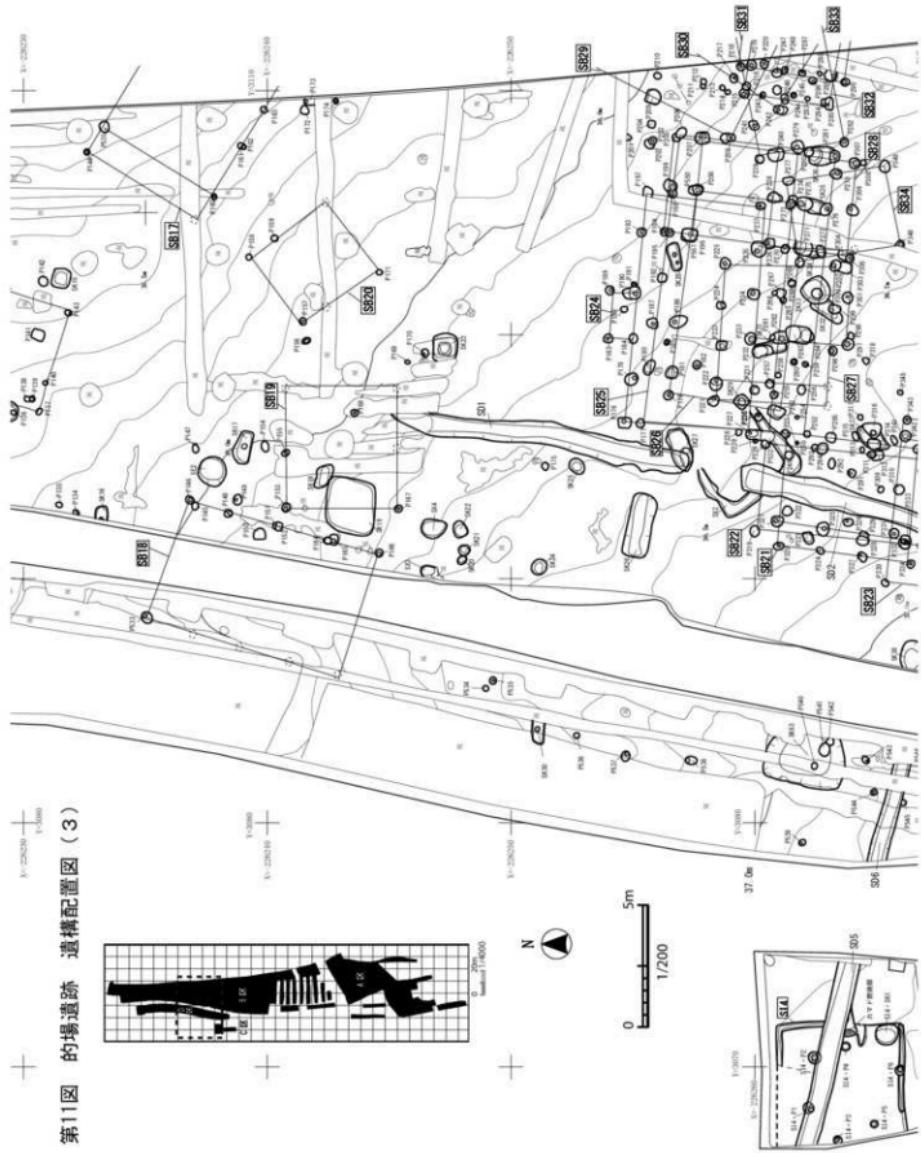
第9図 的場遺跡 遺構配置図(1)



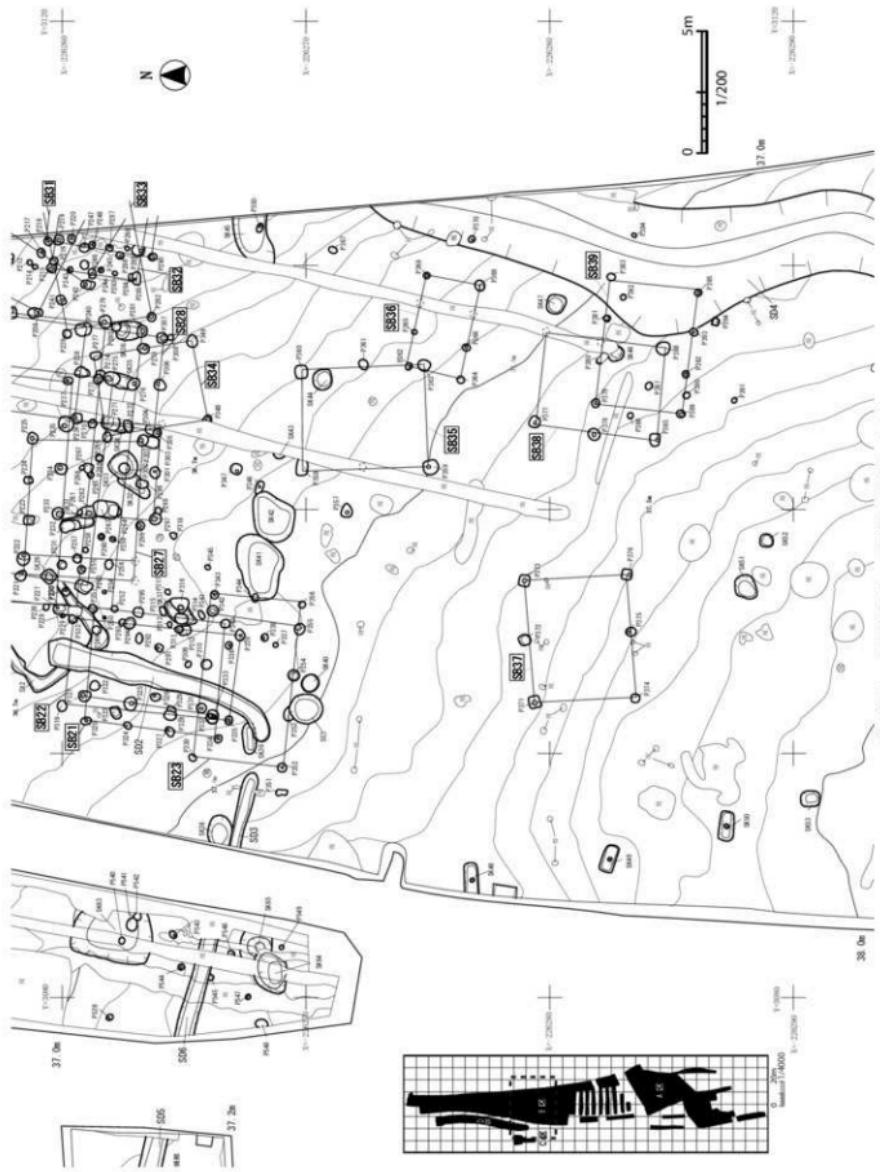
第10図 的場遺跡 遺構配置図(2)



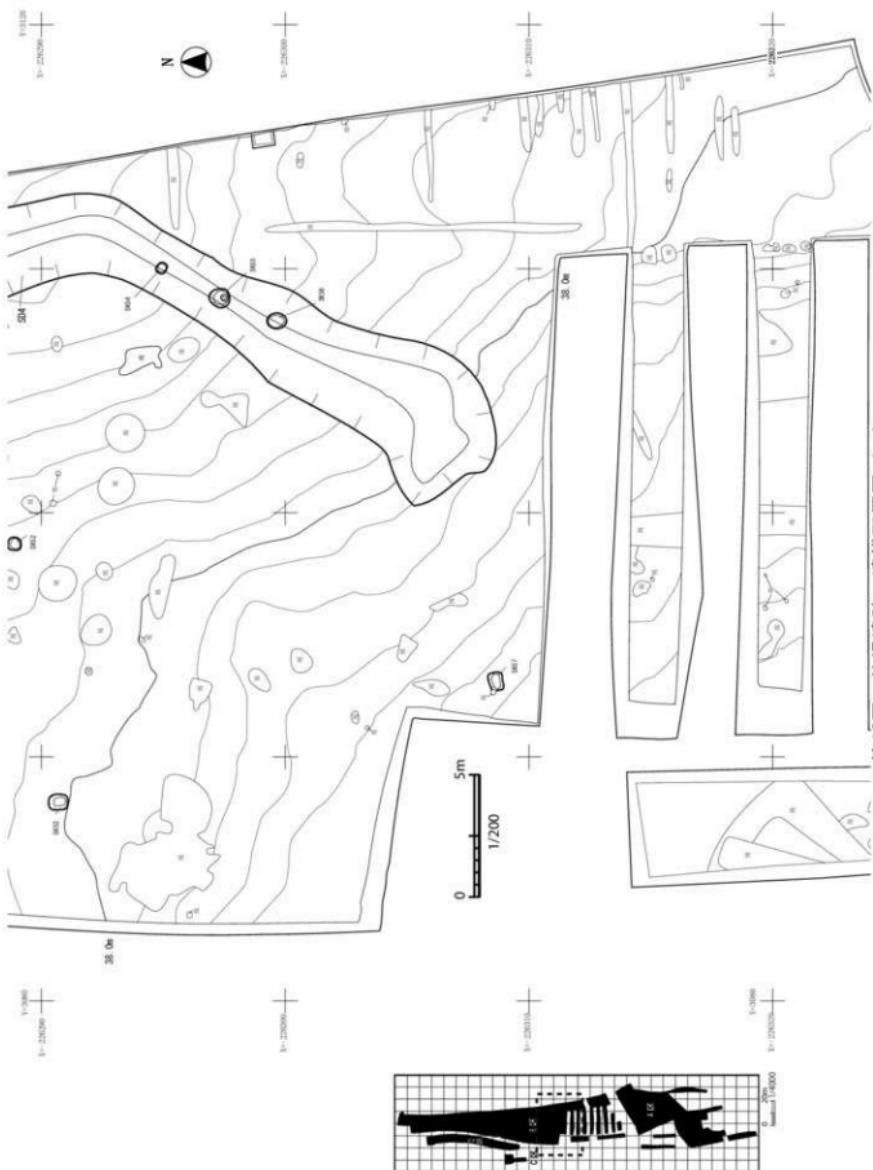
第11図 的場遺跡 遺構配置図(3)



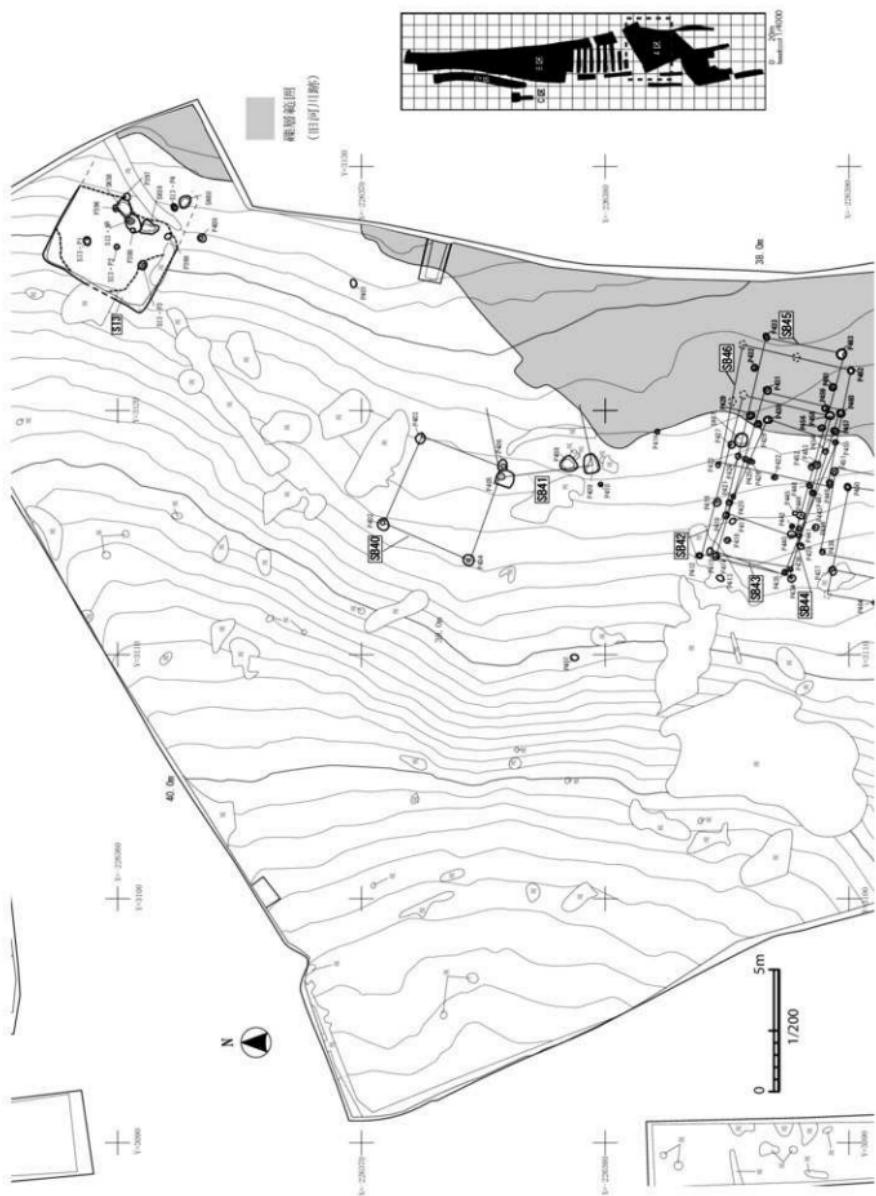
第12図 的場遺跡 遺構配置図(4)

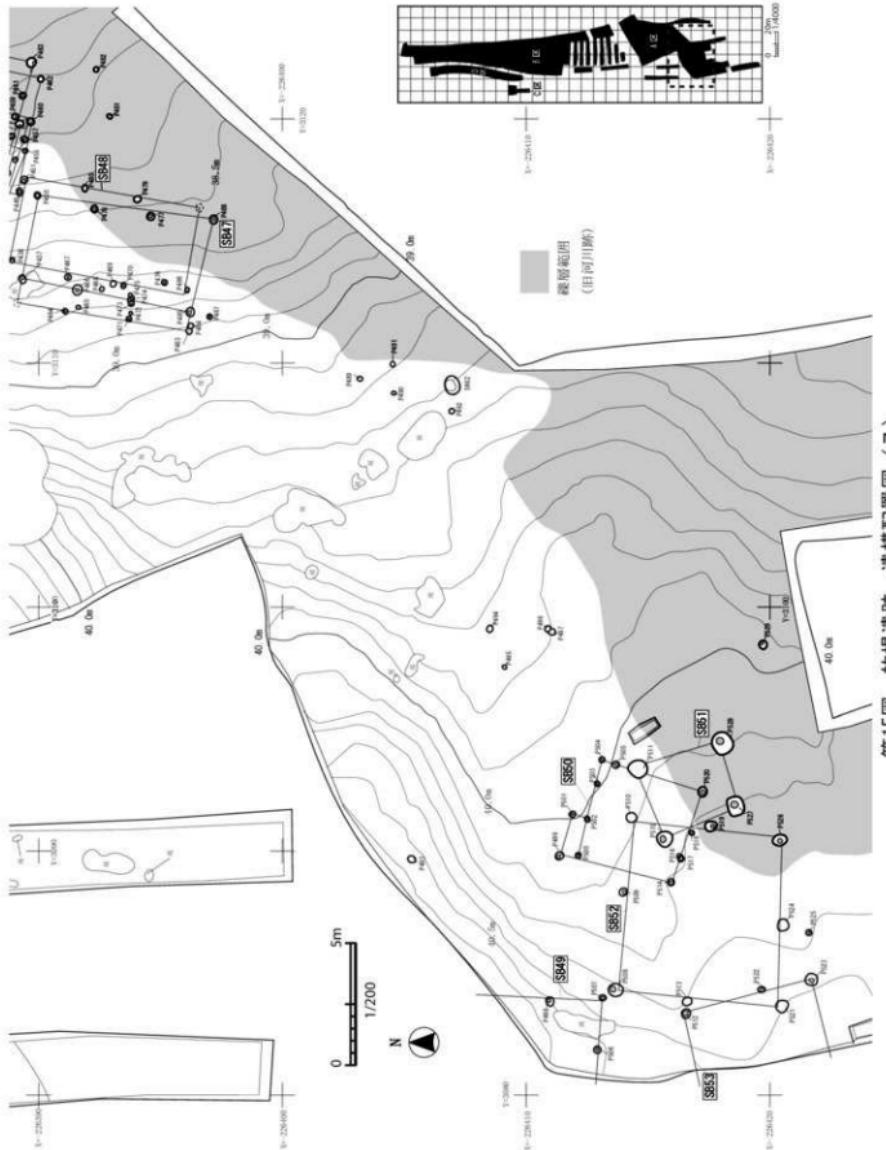


第13図 的場跡遺構配置図(5)



第14図 的場遺跡 遺構配置図(6)





第15図 的場遺跡 遺構配置図 (7)

(1) 壁穴住居跡

A 区北側で 1 軒 (S I 3)、B 区北側で 2 軒 (S I 1・2)、C 区で 1 軒 (S I 4)、合計 4 軒検出した。

【S I 1 壁穴住居跡】(第 16~19 図、第 3 表)

B 区北側で検出した。標高 33.5m 前後の平坦面に立地する。確認面は基本層 Va 層である。SB1~5、P3・4・8・12~15・18・19・20・23・26・29~32・35・37・40・41 と重複し、これらより古い。

【規模・平面形】東一西 8.1m、北一南 7.7m の隅丸方形を呈する。

【主軸方向】住居東辺・西辺が真北に対し、東に約 13° 傾く (N-13° -E)

【壁】住居南側と西側の一部で高さ 2~5cm 残存していた。

【床面】住居中央部は地山、周縁部は掘方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。炉の周辺に硬化面が認められた。

【主柱穴】8 個 (P1~8) 検出した。柱穴は住居の四隅に配置されている。柱穴は径 52~90cm の隅丸方形・隅丸長方形・方形・梢円形・不整形で、深さ 36~80cm である。P2・3・5・8 は径 11~20cm の円形の柱痕跡が認められ、柱はすべて切取られていた。P1・4・6・7 は、柱が抜き取られていた。

【炉】住居中央やや北寄りで 2 基認められた。いずれも地床炉で、炉 2 では掘方が認められた。

【周溝・溝跡】周溝は、住居壁際を巡る。ほぼ全周するが、住居南西部で途切れる箇所がある。上幅 12~40cm、下幅 8~23cm、深さ 6~20cm である。この他、溝跡 1 条 (SII・SD1) を検出した。その位置から間仕切溝である可能性が考えられる。

【その他の施設】主柱穴以外では、床面で土坑 1 基 (SI1・SK1) を検出した。SK1 は、住居南東コーナー一部で確認し、直径 113×113cm、深さ 94cm の不整形を呈する。堆積土は 5 層に分かれ、いずれも自然堆積である。住居内での遺構重複関係から、上屋構築後につくられた土坑であると考えられる。

【堆積土】住居の堆積土は 3 層に分かれ、1 層は住居堆積土で、2 層は周溝堆積土、3 層は掘方埋土である。1・2 層は自然堆積層である。住居の堆積土は住居南側・西側の一部のみで確認された。

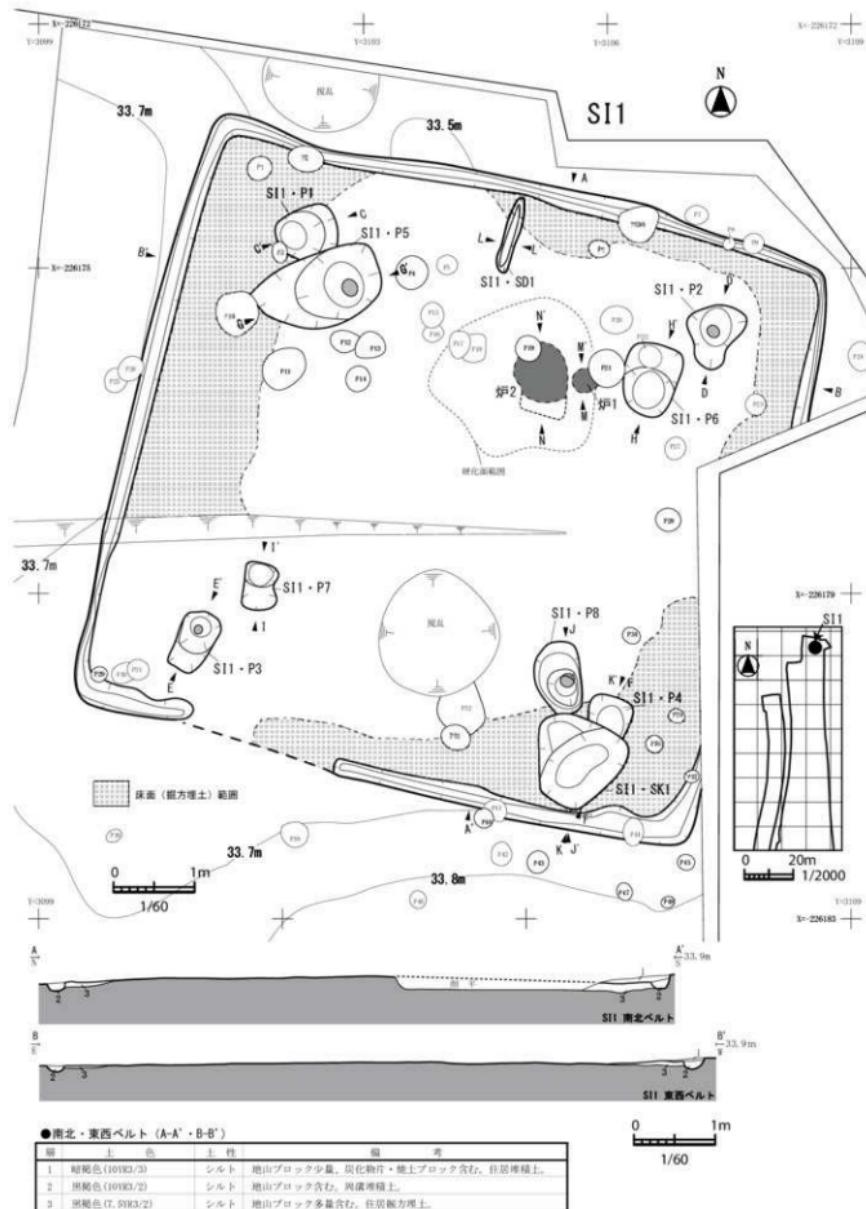
【出土遺物】住居堆積土・掘方埋土、P2・5・8、SK1、炉 2 から、繩文土器片・土師器片 (非ロクロ成形) が出土し、このうち、図示できたものは土師器甕 (第 18 図 1~4) である。

【その他】住居床面では、主柱穴がそれぞれのコ

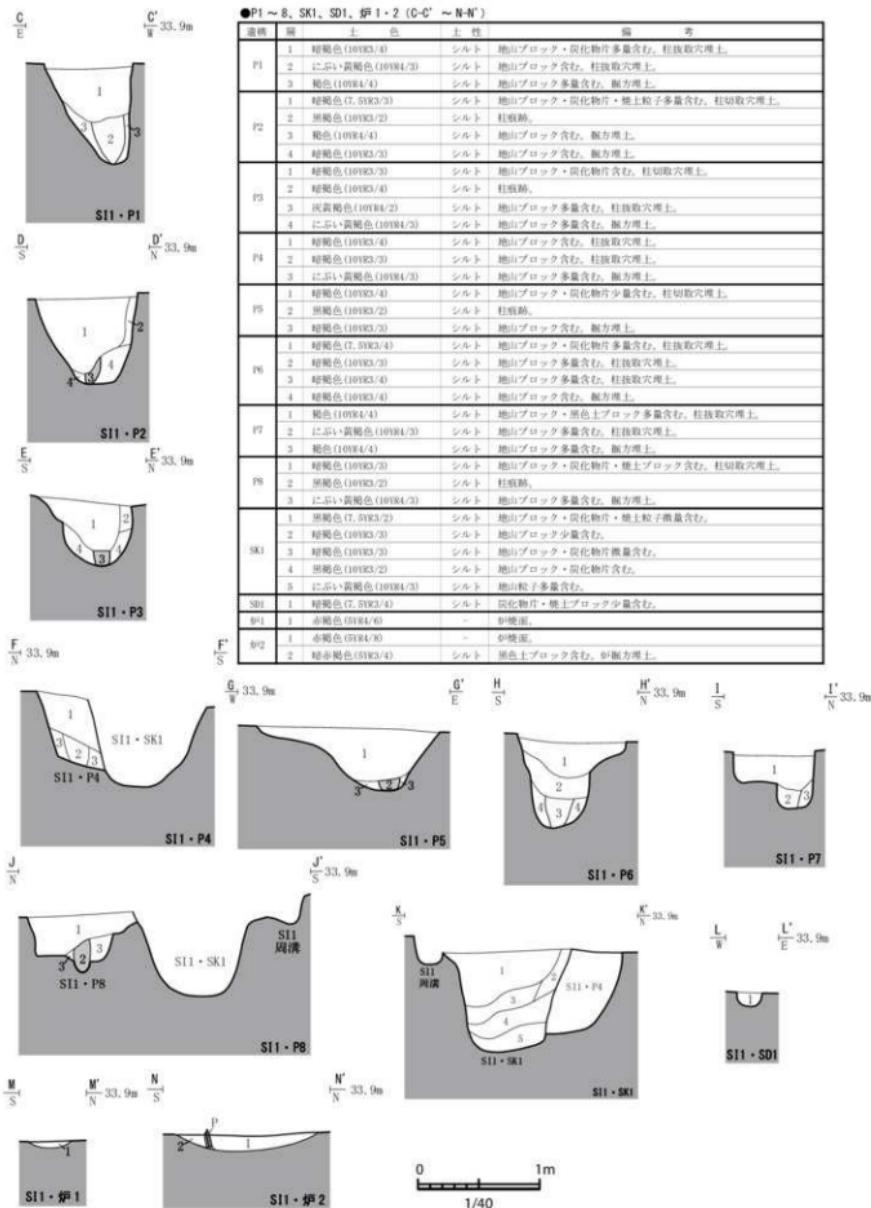
ーナーごとに 2 個ずつ確認され、これらはすべて柱切取のものと柱抜取のもので構成されている。このうち P1 と P5 は重複しており、P1 (柱抜取) よりも P5 (柱切取) が新しい関係にある。このことから、住居四隅で確認した柱穴 8 個は同時存在したものではなく、主柱穴 4 個が 2 時期存在したと想定され、住居の上屋が 2 時期あった (上屋の建替) と考えられる。これらの主柱穴の組み合わせは、柱抜取の柱 4 個 (P1・4・6・7) と柱切取の柱 (P2・3・5・8) と想定され、P1・5 の重複関係から、「柱抜取の柱」→「柱切取の柱」の順で変遷したとみられる。この想定から、炉についても 2 基同時存在ではなく、2 時期の可能性が考えられる。

第3表 SI1 壁穴住居跡 床面施設一覧

通過番号	種類	柱穴・ビット底面 (面積・深さ・残存度 %)				備考
		平面形	長軸	短軸	掘削深	
SII・P1	柱穴	隅丸方形	76	50	60	柱抜取
SII・P2	柱穴	不規則	85	63	75	柱抜取: 円形・径 15cm, 柱切取, 土師器
SII・P3	柱穴	方形	80	41	53	柱抜取: 円形・径 10cm, 柱切取
SII・P4	柱穴	長方形?	60	33	60	柱抜取
SII・P5	柱穴	梢円形	92	46	36	柱抜取: 円形・径 25cm, 柱切取, 繩文土器
SII・P6	柱穴	梢円形	90	56	75	柱抜取
SII・P7	柱穴	隅丸長方形	67	42	45	柱抜取
SII・P8	柱穴	梢円形	77	58	48	柱抜取: 円形・径 10cm, 土師器
SII・SK1	土坑	不規則	115	113	94	土師器
SII・SD1	溝跡	—	上幅	下幅	7~9	周辺切溝
SII・SP1	—	円柱?	30	(27)	4	
SII・SP2	—	不規則	89	67	10	土師器

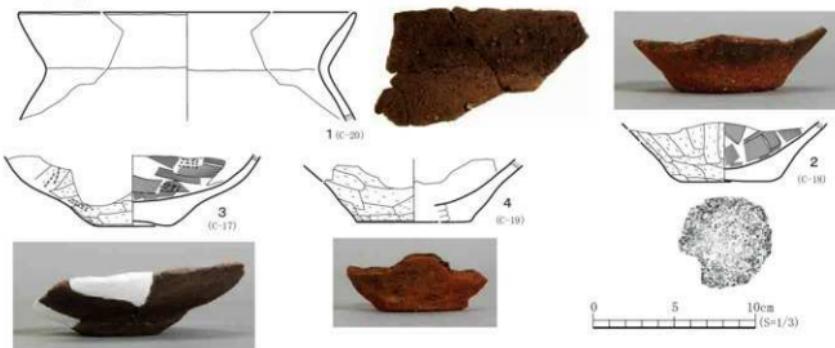


第16図 SII-1 積穴住居跡（1）



第17図 S I 1 豊穴住居跡（2）

SII 出土遺物



No.	種	種別	器種	現存	特徴【外径・内面】	状況
1	SII	土師器	甕	口縁部	外面：磨滅のため不明。内面：磨滅のため不明。色調：内外面にぶい赤褐色(SYR5/4)。法量：口径(20.6cm・残存高6.7cm・底厚0.5~0.7cm)	C-20
2	SII	土師器	甕	底部	外面：ヘラ削り・底部輪台技術？。内面：ヘラナダ。色調：外面にぶい赤褐色(SYR4/4)。内面にぶい黄褐色(YR18/3)。法量：底径5.6cm・残存高3.7cm・底厚0.5~1.4cm	C-18
3	SII	土師器	甕	底部	外面：ハケメ～ヘラ削り・底部中央押出。内面：ハケメ～ヘラナダ。色調：外面・底褐色(SYR4/2)，内面・褐色(SYR4/2)。法量：底径4.8cm・残存高4.4cm・底厚0.4~1.7cm	C-17
4	SII	土師器	甕	底部	外面：ヘラ削り。内面：磨滅のため不明。色調：外面・赤褐色(SYR4/6)。内面にぶい赤褐色(SYR4/3)。法量：底径(1.01cm・残存高3.9cm・底厚0.6~1.5cm)	C-19



1. S I 1 積穴住居跡 完掘状況（北から）

第18図 S I 1 積穴住居跡（3）



1. S I 1 · 炉 1 · 2 検出状況（西から）
※手前：炉 1・奥：炉 2



2. S I 1 · SK 1 完掘状況（東から）



3. S I 1 · P1 断面（北から）



4. S I 1 · P2 断面（東から）



5. S I 1 · P3 断面（東から）



6. S I 1 · P5 断面（西から）



7. S I 1 · P6 断面（東から）



8. S I 1 · P7 断面（東から）

第19図 S I 1 竪穴住居跡（4）

【S I 2 壓穴住居跡】(第 20・21 図、第 4 表)

B 区北側で検出した。標高 34.0m 前後の平坦面に立地する。確認面は基本層 Va 層である。SB10、P68 と重複し、これらより古い。住居北半は後世の削平を受けており、残存していない。

【規模・平面形】東—西 4.3m、北—南 2.1m 以上の隅丸方形を呈する住居跡と思われる。

【主軸方向】住居西辺が真北に対し、東に約 15° 傾く (N-15° -E)。

【壁】住居西側が最も残りがよく、高さ 20cm 残存していた。

【床面】地山を床面とし、中央から南側の一部にかけて貼床が確認された。床面はほぼ平坦である。

【柱穴・ピット】柱穴 3 個 (P1~3)、ピット 1 個 (P4) を検出した。柱穴・ピットは住居中央部の周囲に配置されている。P1 と P3 は住居床面残存範囲の外で確認されたが、その形状や堆積土の状態、位置関係から SI2 に伴う柱穴であると判断した。柱穴は径 21~25cm の円形で、深さ 6~20cm である。すべての柱穴で径 7~9cm の円形の柱痕跡が認められた。ピット (P4) は、長軸 20cm・短軸 15cm・深さ 10cm で、その位置関係から住居の柱穴である可能性が考えられる。

【カマド】住居東辺に付設されており、燃焼部の焼面と煙出 Pit のみが残存していた。カマド焼面の南側では白色の粘土塊が確認されたが、これはカマド側壁の一部であるとみられる。

【周溝】認められなかった。

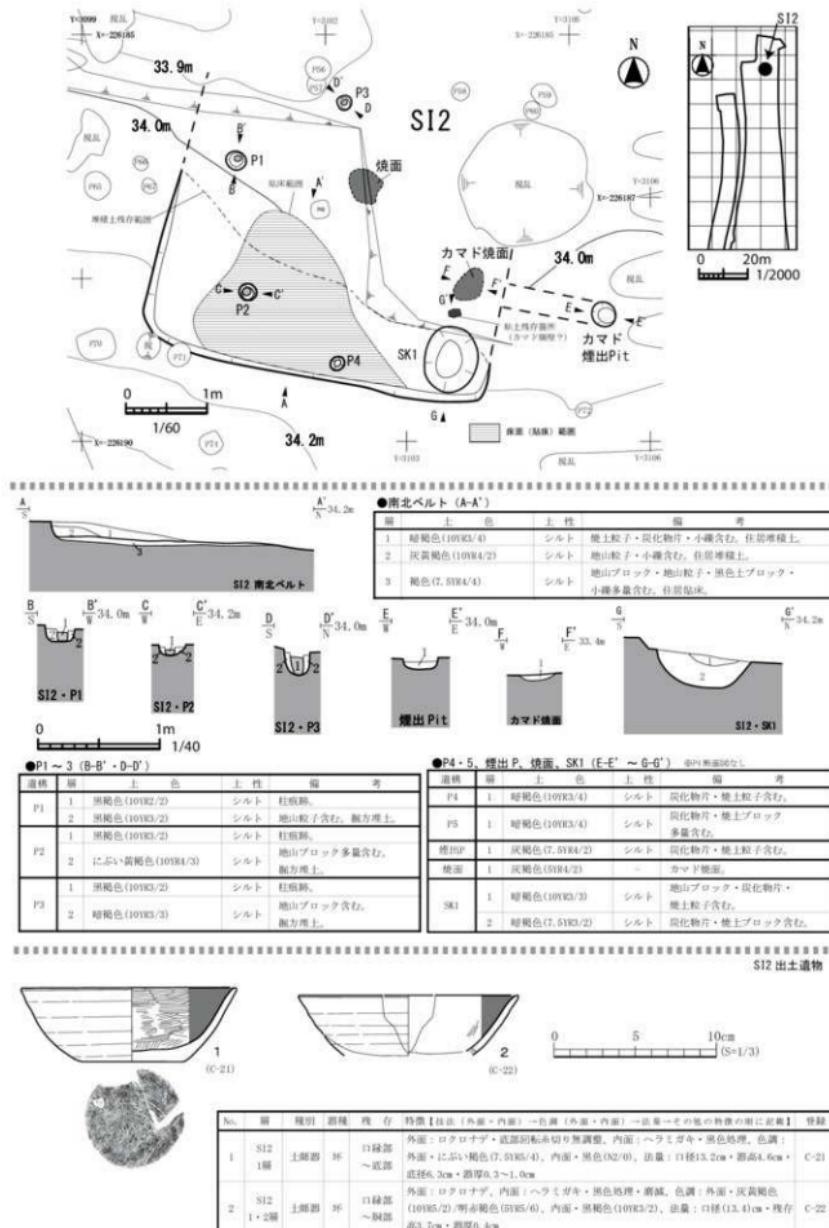
【その他の施設】柱穴・ピット以外では、床面で土坑 1 基 (SI2・SK1)、焼面を検出した。SK1 は、住居南東コーナー部で確認し、直径 80×76cm、深さ 25cm の円形を呈する。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも自然堆積である。カマドの南脇に位置することから、貯蔵穴であった可能性が考えられる。焼面は住居中央部や北寄りで確認された。

【堆積土】住居の堆積土は 3 層に分かれ、1・2 層は住居堆積土で、3 層は貼床構築土である。1・2 層は自然堆積層である。

【出土遺物】住居堆積土 1 層・2 層から土師器片 (ロクロ成形) が出土し、このうち、図示できたものは土師器坏 (第 20 図 1・2) である。

第4表 SI2 壓穴住居跡 床面施設一覧

施設 番号	種 類	柱穴・ピット配置 (長軸・短軸・深さ) -cm-				備 考
		平面上	長 軸	短 軸	残存 状	
SI2-P1	柱穴	円形	25	24	10	柱痕跡：円形・径8cm
SI2-P2	柱穴	円形	22	21	6	柱痕跡：円形・径7cm
SI2-P3	柱穴	円形	21	19	21	柱痕跡：円形・径7cm
SI2-P4	小穴	円形	20	15	10	
SI2-SK1	土坑	円形	80	76	25	
SI2-SI7 ■HP	-	円形	28	25	8	
SI2-焼面	焼面	不規則	37	30	3	



第20図 S12 堅穴住居跡 (1)



1. S I 2 積穴住居跡 完掘状況（北から）



2. S I 2・P1 断面（東から）



3. S I 2・P2 断面（南から）



4. S I 2・P3 断面（北から）



5. S I 2・SK1 断面（東から）



6. 遺物 (C-21) 出土状況（南から）

7. S I 2・出土遺物 (S=1/3)



(C-21)



(C-22)

第21図 S I 2 積穴住居跡（2）

【S I 3 壁穴住居跡】(第22~24図、第5表)

A区北側で検出した。標高38.0m前後の緩斜面に立地する。確認面は基本層Va層である。SK58~60、P397~399と重複し、これより古い。住居南東は後世の削平を受けており、残存していない。

【規模・平面形】北一南4.8m、東一西3.5m以上の隅丸方形を呈する住居跡と思われる。

【主軸方向】住居西辺が真北に対し、東に約30°傾く(N-30°-E)。

【壁】住居西側が最も残りがよく、高さ23~26cm残存していた。

【床面】住居中央部は地山、周縁部は掘方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。炉の周辺に硬化面が認められた。

【柱穴】3個(P1・3・4)検出した。柱穴は住居の四隅に配置されている。柱穴は径26~35cmの円形で、深さ8~15cmである。すべての柱穴で径10~16cmの円形の柱痕跡が認められた。

【炉】住居中央で1基確認した。地床炉で、炉には掘方が認められた。

【周溝】認められなかった。

【その他の施設】主柱穴以外では、床面でピット1個(P2)を検出した。P2は長軸21cm・短軸20cm・深さ11cmで、ピット内に礫が据えられていた。性格は不明である。

【堆積土】住居の堆積土は4層に分かれ、1~3層は住居堆積土で、4層は掘方埋土である。1~3層は自然堆積層である。住居堆積土は南東部が後世の削平を受け、残存していなかった。

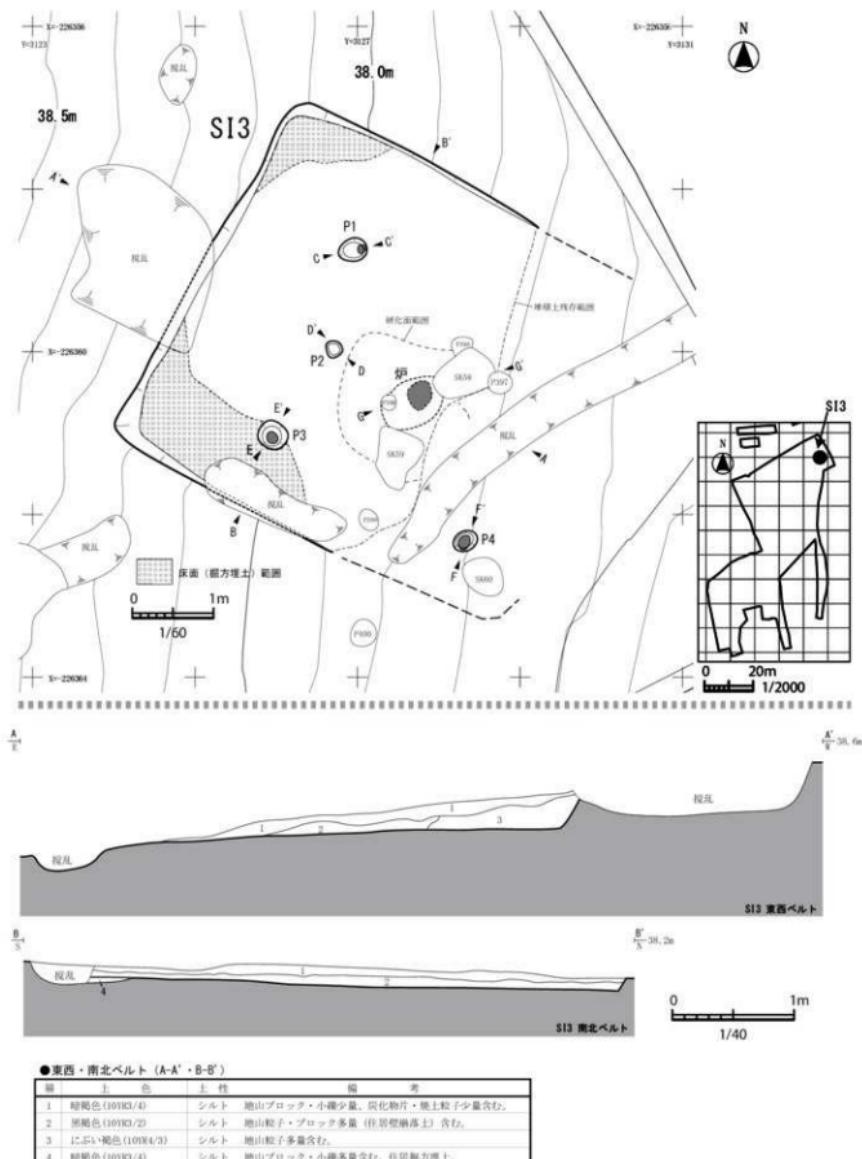
【出土遺物】住居堆積土・床面、炉掘方埋土から、土師器片(非クロコ成形)が出土し、このうち、図示できたものは土師器高坏(第23図1)・壺(第23図2~5)・壺または甕(第23図6~8)である。

第5表 SI3 壁穴住居跡 床面施設一覧

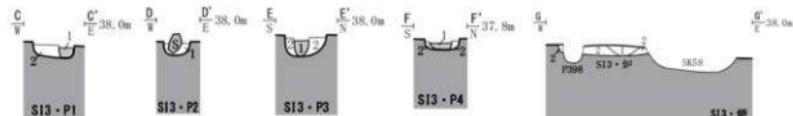
施設 番号	種類	柱穴・ピット掘方・床面・塗抹・焼成土・他				備考
		平面形	長 軸	短 軸	残存 状況	
SI3-P1	柱穴	円形	35	30	10	柱痕跡: 円形+径16cm、住居主柱穴
SI3-P2	小穴	円形	21	20	11	
SI3-P3	柱穴	円形	35	35	15	柱痕跡: 円形+径16cm、住居主柱穴
SI3-P4	柱穴	円形	26	26	8	柱痕跡: 円形+径16cm、住居主柱穴
SI3-P5	—	椭円形?	17.0	17	9	



SI3 壁穴住居跡調査風景（南東から撮影）



第22図 SI3 傾穴住居跡（1）

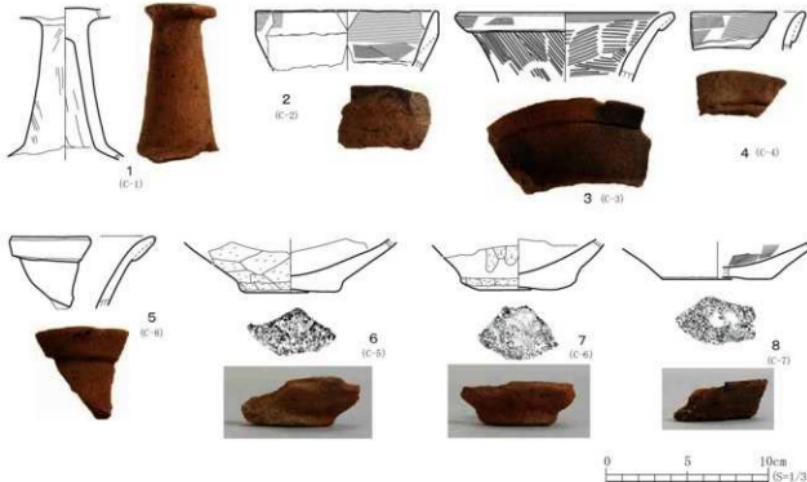


●P1～4, 窪 (A-A'・B-B')

遺構	層	土 色	土 性	備 考
P1	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	柱痕跡。
	2	暗褐色(7,5YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。柱穴擴方堆土。
P2	1	褐色(7,5YR4/3)	シルト	地山粘土多量。縫(大)含む。
P3	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	柱痕跡。
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。柱穴擴方堆土。
P4	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	柱痕跡。
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物片・埴土粒子含む。柱穴擴方堆土。
SI	1	赤褐色(5YR4/6)	シルト	地床砂礫面。
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック・炭化物片・小礫含む。柱穴擴方堆土。

0
1m
1/40

SI3出土遺物



0 5 10cm
(S-1/3)

No.	層	種別	源種	残 存	特徴【外側（外面部・内面）・色調（外面部・内面）→店番→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI3 1層	土師器	高环	脚部	外側：ヘラくガタ・瓶底、内面：磨滅のため小形。色調：外面部・内面・褐色(7,5YR4/6)、法量：残存高9.3cm・厚 0.3～0.8cm	C-1
2	SI3 1層	土師器	底?	口縁部	外側：素誠、ヨコナデテ、内面：ヘラナデ→ヨコナデ。色調：外面部・明赤褐色(5YR5/6)、内面・にぶい褐色 (7,5YR6/4)、法量：口径(11.0)cm・残存高3.7cm・厚壁0.5～0.8cm	C-2
3	SI3 1層	土師器	底?	口縁部	外側：口部ヨコナデ・頸部ハケメ・複合口縁、内面：口縁部ヨコナデ・頸部ハケメ、色調：外面部・にぶい 赤褐色(5YR4/4)・褐色(7,5YR4/3)、法量：口径(13.2)cm・残存高4.3cm・厚壁0.6～0.8cm	C-3
4	SI3 1層	土師器	底?	口縁部	外側：ヨコナデ・複合口縁、内面：磨滅・ヨコナデ。色調：外面部・にぶい黄褐色(10YR6/4)、法量：厚 0.4～0.8cm	C-4
5	SI3 床面	土師器	底?	口縁部	外側：磨滅のため不明・複合口縁、内面：磨滅のため不明。色調：外面部・赤褐色(5YR4/6)、法量：厚 0.5～0.8cm	C-5
6	SI3 1層	土師器	裏or底	底部	外側：ヘラ削り・底部輪台技法、内面：磨滅のため不明。色調：外面部・褐色(7,5YR4/2)、内面・にぶい褐色 (7,5YR5/2)、法量：底径(7.0)cm・残存高3.1cm・厚壁0.4～1.6cm	C-6
7	SI3 1層	土師器	裏or底	底部	外側：ヘラ削り・底部輪台技法、内面：磨滅のため不明。色調：外面部・明赤褐色(7,5YR5/6)、内面・褐色 (7,5YR6/4)、法量：底径(7.0)cm・残存高3.1cm・厚壁0.4～1.6cm	C-6
8	SI3 1層	土師器	裏or底	底部	外側：磨滅のため不明・底部輪台技法?、内面：ヘラナデ。色調：外面部・灰黃褐色(10YR4/2)、内面・にぶい 赤褐色(5YR4/4)、法量：底径(16.6)cm・残存高2.3cm・厚壁0.4～1.2cm	C-7

第23図 S I 3 壇穴住居跡 (2)



1. S I 3 竪穴住居跡 完掘状況（南東から）



2. S I 3・P1 断面（南から）



3. S I 3・P3 断面（東南から）



4. S I 3・P4 断面（東から）



5. S I 3・炉 検出状況（南東から）



6. 遺物 (C-1) 出土状況（南から）

第24図 S I 3 竪穴住居跡（3）

【SI4 壓穴住居跡】(第25~27図、第6表)

C区北側で検出した。標高37.1~37.2mの平坦面に立地する。確認面は基本層Va層である。SD5と重複し、これより古い。住居北西半は後世の削平を受けており、残存していない。住居西側は調査区外に続いている。

【規模・平面形】北一南5.2m、東一西4.9m以上の隅丸方形を呈する住居跡と思われる。

【主軸方向】住居の主軸方向はほぼ真北である(N-0°-E)。

【壁】住居南側が最も残りがよく、高さ15cm残存していた。

【床面】地山を床面としている。床面はほぼ平坦である。住居中央部やや東寄りのカマド燃焼部付近で硬化面が認められた。

【柱穴・ピット】柱穴4個(P1~3・6)、ピット2個(P4・5)を検出した。柱穴・ピットのうちP1~3・5・6は住居中央部の周囲、P4はカマド燃焼部付近に配置されている。柱穴は径31~48cmの円形・楕円形で、深さ22~45cmである。すべての柱穴で径15~24cmの円形の柱痕跡が認められた。

P4は、長軸35cm・短軸34cm・深さ7cmで、カマドに間連する遺構であると思われる。P5は、長軸31cm・短軸28cm・深さ14cmで、その位置関係から住居の柱穴である可能性が考えられる。

【カマド】住居東辺に付設されており、燃焼部の焼面、カマド南側の側壁と煙道の一部が残存していた。

カマドの北袖・煙出PitはSD5により破壊され、残存していなかった。カマドの側壁は、黄褐色粒子を多く含む褐色土と礫で構築されていた。

【周溝】住居壁際を巡る。周溝は全周せず、住居南部分と北東部分のみで確認した。上幅14~27cm、下幅4~15cm、深さ6~12cmである。

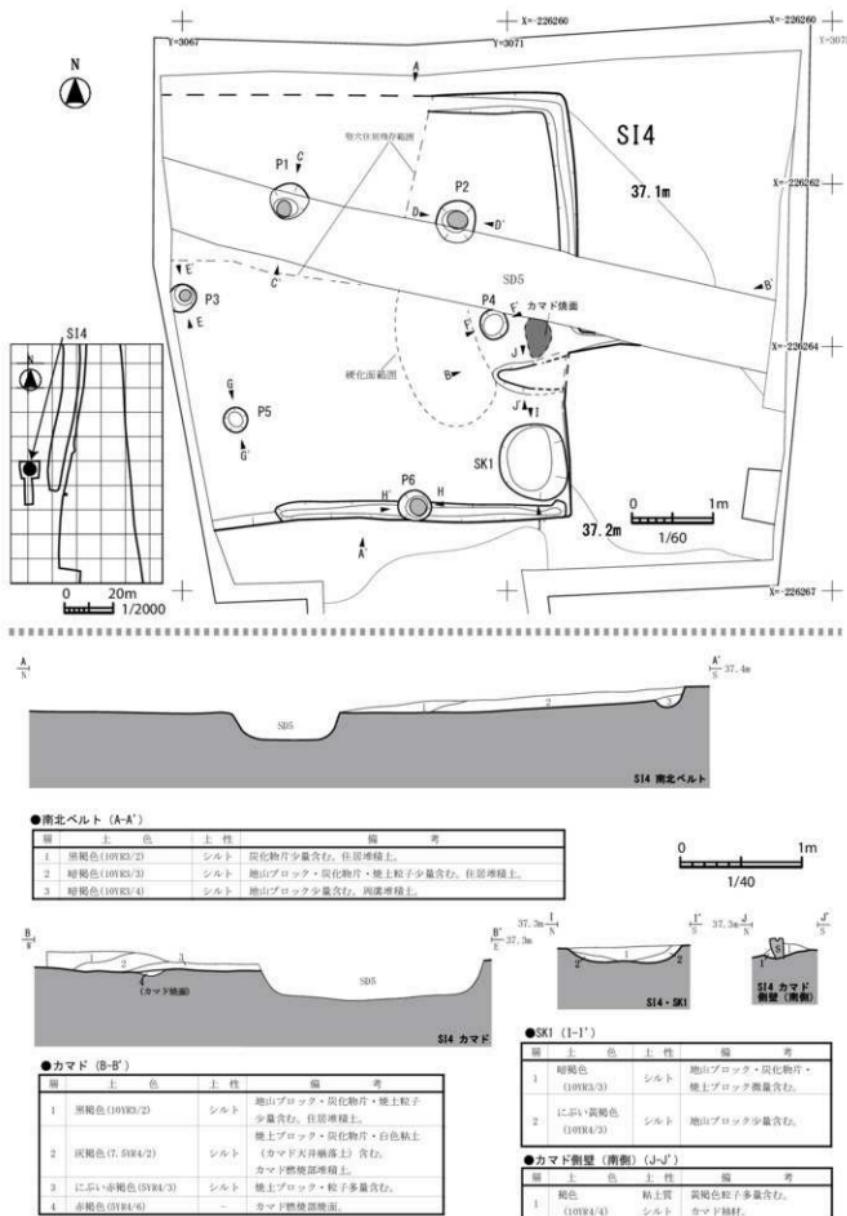
【その他の施設】柱穴・ピット以外では、床面で土坑1基(SI4・SK1)を検出した。SK1は、住居南東コーナー部で確認し、直径96×79cm、深さ13cmの楕円形を呈する。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。カマドの南脇に位置することから、貯蔵穴であった可能性が考えられる。

【堆積土】住居の堆積土は3層に分かれ、1・2層は住居堆積土で、3層はカマド煙道堆積土である。いずれも自然堆積層である。

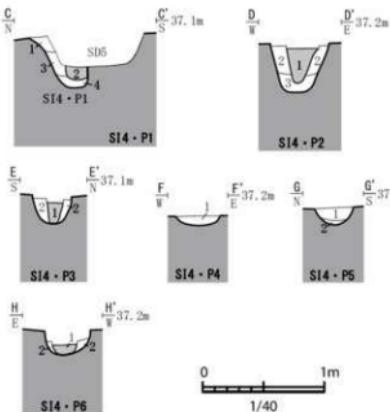
【出土遺物】住居堆積土1層・カマド燃焼部、P4、SK1から土師器片(ロクロ成形主体)・須恵器片が出土し、このうち、図示できたものは土師器壺(第26図1~3)・甕(第26図4)・須恵器壺(第26図5)である。

第6表 SI4 壓穴住居跡 床面施設一覧

遺構 番号	種 類	柱穴・ピット断面(底面・高さ・幅・深さ) cm				備 考
		平面形	高 さ	幅 cm	深 さ cm	
SI4・P1	柱穴	楕円形	47	38	45	柱痕跡・円形・径20cm
SI4・P2	柱穴	円形	48	46	42	柱痕跡・円形・径24cm
SI4・P3	柱穴	円形	36	30	23	柱痕跡・円形・径15cm
SI4・P4	小穴	円形	35	34	7	土師器
SI4・P5	小穴	円形	31	28	14	
SI4・P6	柱穴	円形	40	38	22	柱痕跡・円形・径20cm・柱跡跡
SI4・SK1	土坑	楕円形	96	79	13	土師器



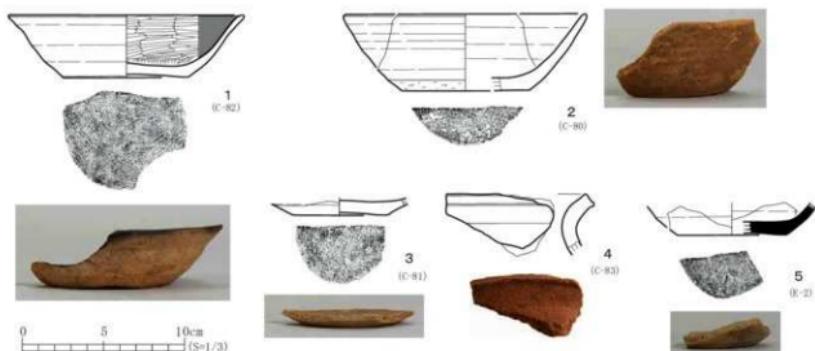
第25図 SI4 積穴住居跡 (1)



●SI4-P1～P6 (C-C' ~ H-H')

造形	層	土色	土性	備考
内	1	暗褐色(10YR4/4)	シルト	柱痕跡。
	2	にふい・黃褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック含む。 輪方理上。
	3	灰黃褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック含む。 輪方理上。
	4	にふい・黃褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子含む。 輪方理上。
P2	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	柱痕跡。
	2	にふい・黃褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック・炭化物片 含む。輪方理上。
	3	灰黃褐色(10YR4/2)	シルト	輪方理上。
P3	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	柱痕跡。
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。 輪方理上。
P4	1	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	炭化物片・燒土粒子多 量含む。
P5	1	にふい・黃褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック多量含む。
	2	灰褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒子微量含む。
P6	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	柱痕跡。
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック含む。 輪方理上。

SI4 出土遺物



No.	層	種別	断面	残存	特徴【目出（外側・内側）一色調（外側・内側）一法量→その他の性状の項に記載】	参考
1	SI4・SK1 1層	土師器	环	口縁部 ～底部	外面：ロクロナギ・底部削除系切り無調整、内面：ヘバミガキ・無色処理。色調：外面・にふい・褐色 (7.5YR4/4)、内面・黒色(5Y2/0)、法量：口径14.4cm・器高8cm・底径7.6cm・器厚0.3~0.7cm	C-82
2	SI4 1yri*燃焼部	土師器	环	口縁部 ～底部	外面：ロクロナギ・脚部下端削除・手削り・底部切り離し技術不明→切削～手削り再調整。内面：ロクロナギ。色調：内外面・にふい・褐色(7.5YR3/4)、法量：口径14.6cm・器高4.7cm・底径17.8cm・器厚0.4~1.0cm。 赤壁土器	C-80
3	SI4 1yri*燃焼部	土師器	环	底部	外面：ロクロナギ・底部削除系切り無調整・素焼、内面：ロクロナギ・素焼、色調：外面・にふい・褐色 (10YR6/3)、内面・にふい・褐色(7.5YR5/4)、法量：底径5.8cm・残存高1.1cm・器厚0.4~0.8cm、赤壁土器	C-81
4	SI4・SK1 1層	土師器	塊	口縁部	外面：ロクロナギ、内面：ロクロナギ。色調：内外面・褐色(7.5YR6/0)、法量：器厚0.8~0.9cm	C-83
5	SI4 1yri*燃焼部	土師器	环	口縁部 ～底部	外面：ロクロナギ・底部削除系切り無調整、内面：ロクロナギ。色調：内外面・にふい・黄灰色(2.5YR6/3)、法量：底径(6.7)cm・残存高2.0cm・器厚0.4~0.7cm	E-2

第26図 SI4 積穴住居跡（2）



1. S I 4 竪穴住居跡 完掘状況（南から）



2. S I 4・P2 断面（南から）



3. S I 4・P3 断面（東から）



4. S I 4・カマド完掘状況（西から）



5. S I 4・P6 断面（北から）



6. S I 4・SK1 断面（西から）

第27図 S I 4 竪穴住居跡（3）

(2) 堀立柱建物跡

A区の平坦面、B区の中央から北側の平坦面、D区中央で53棟検出した（第28・29図、第7・8表）。

①堀立柱建物跡の認定方法

今回報告する堀立柱建物跡については、原則として現地調査の段階で繰り返し検討を行い、建物を認定した。建物の認定に際しては、次の手順で検討を行った。①：遺構検出段階で、柱穴及び柱痕跡のプランを測量して作成した白図をもとに建物を検討。②：柱穴精査（半裁）時に遺構の重複関係・深さ・埋土の状態を確認し、①で検討した建物と照らし合わせ、切合の矛盾や柱筋等を考慮しながら再度建物を検討。③：①と②の検討により、建物として想定しても差し支えのないと判断できたものを建物として認定。④：建物として認定できなかった柱穴のみを抽出し、かつ、柱穴群の周囲を再度精査し、柱穴の検出漏れがないか確認した上で、残った柱穴で再度建物を検討。

以上のように、堀立柱建物跡を認定したが、今回の調査で認定できた建物跡以外にも、「柱穴跡」は多数残されている。これらは「ピット」として報告することとした（ピットの項参照）。ピットとして報告したものについても、本来は建物を構成する柱穴であったと考えられるが、これらは現地調査だけでなく、整理段階においても検討を行った結果、建物として認定できなかった柱穴である。したがって、今回の調査区内ではさらに建物跡が存在したことが想定される。また、建物として認定したものの中には、調査区外に延びていると想定したものもあり、実際には建物ではない可能性があるものも含まれている。このことから、今回報告する建物跡については、今後の周辺の発掘調査や堀立柱建物研究の進展、建物群の再検討等により、変更・追加する可能性がある。



1. B区堀立柱建物跡 完掘状況（真上から・上が北）

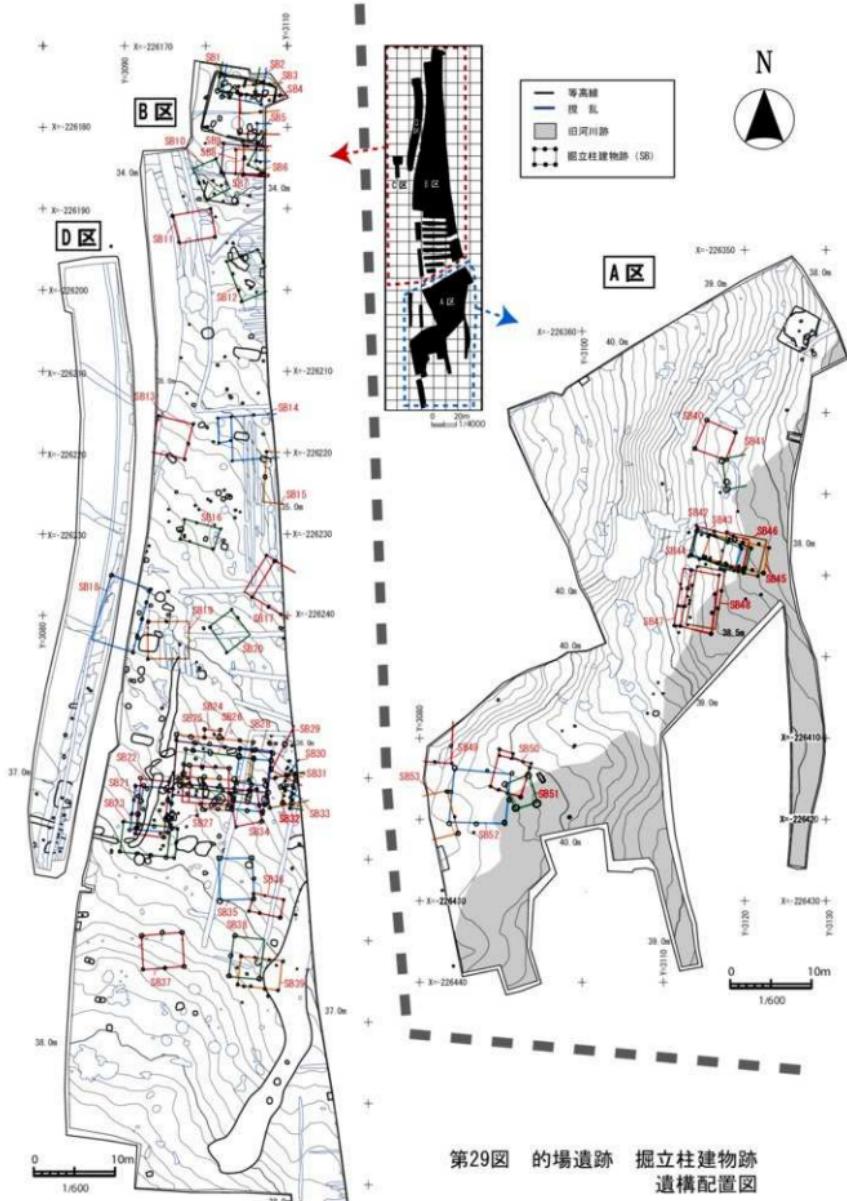


2. A区堀立柱建物跡 完掘状況（真上から・上が北）

第28図 的場遺跡 A・B区 堀立柱建物跡完掘状況

②B・D区建物跡（第30～78図、第7・8-1～8-3表）

S B1～39堀立柱建物跡の計39棟を検出した。確認面はVa～b層である。建物跡は、B調査区北半・D区中央の標高34～38mの平坦面に立地している。特に標高36～37mのB区北半中央部において多くの建物跡を検出した。以下、その詳細について説明する。



第29図 的場遺跡 堀立柱建物跡
遺構配置図

第7-1表 的場跡遺 据立柱建物跡 属性表(1) SB1~24

遺構 No.	建物間数		構方向	平面規模			建物の方向	建物傾斜角度 /真北基準	備考 【構成P1、重複関係、その他】
	横行	縦行		横行間数 (m)	/測定柱距/柱間寸法 (m)	縦行間数 (m)			
SB-1	1以上	2	南北?	1.73以上	東	~+1.7	4.6	南	2.5±2.1 N-9°-E
SB-2	1以上	1	南北?	2.5以上	西	~+2.5	4.8	南	4.8 N-9°-E
SB-3	2以上	1	東西	3.83以上	北	1.9+1.9+~	3.3	西	3.3 N-10°-W
SB-4	2以上	1	東西	4.93以上	北	2.3+2.6+~	4.9	西	4.9 N-9°-E
SB-5	2	-	南北?	4.6	西	2.4+2.2	-	-	南北? N-0°-E
SB-6	1以上	1以上	-	2.25以上	西	~+2.2	2.1以上	南	2.1+~ N-28°-W
SB-7	1以上	2	東西	2.33以上	北	2.3+~	3.7	西	1.7±2.0 N-2°-E
SB-8	1以上	1	東西?	3.03以上	北	3.0+~	2.9	西	2.9 N-9°-E
SB-9	1以上	1	東西?	2.93以上	北	2.9+~	3.6	西	3.6 N-5°-E
SB-10	2	1	南北	(4.2)	東	1.7+(2.0)	(3.1)	北	(3.1) N-24°-W
SB-11	(2)	1	東西	(4.4)	南	(2.2)+(2.2)	3.4	西	3.4 N-10°-W
SB-12	3	2	南北	5.2	西	1.7+2.0+1.5	4.0	北	1.9+2.1 N-19°-W
SB-13	2	1	-	4.5	東	2.5+2.0	4.3	北	4.3 N-13°-E
SB-14	(1)+1以上	2	東西	2.7以上	北	1.7+2.7	5.3	西	2.8+2.5 N-3°-W
SB-15	2	-	-	(6.2)	西	3.1+(3.1)	-	-	東? N-5°-E
SB-16	2	1	東西	4.5	北	1.5+3.0	2.1	東	2.1 N-13°-E
SB-17	(1)+2以上	1	東西	4.13以上	南	1.0+2.4+1.7	5.4	西	5.4 N-31°-E
SB-18	4	1	南北	8.1	東	1.7+2.2+2.3+1.9	5.1	北	5.1 N-16°-W
SB-19	2	1	-	(4.7)	北	2.3+(2.4)	4.7	西	4.7 N-9°-E
SB-20	2	1	南北	3.9	東	1.2+(2.7)	2.6	北	2.6 N-35°-W
SB-21	3	1	南北	5.5	西	1.8+1.7+2.0	3.6	北	1.0+3.6 N-6°-E
SB-22	3	1	南北	6.9	西	2.2+2.2+2.5	3.5	北	3.5 N-6°-E
SB-23	3+(1)	1	東西	6.1	北	2.0+1.8+2.3+0.6	3.6	東	3.6 N-6°-E
SB-24	5	(1)+1+(1)	東西	9.4	北	2.0+1.6+1.9+2.3+1.3	5	西	1.0+5.0+3.7 N-12°-E

◎平素面積の〔 〕内の数値は可変面積。

◎建物跡が南北面に延びているため、複数の不規則な建物を1つの建物として扱っている。下記のとおり表記した。

○面積南北に延びる建物・・・建物調査、「●1以上×1間」、平面規模: 長径を「●●0以上」と表記、短径「1間」。

○柱の一つが残存していない建物・・・延長・柱間のうちのうち、実際の柱間幅は●●、推定幅は●●とし、地員 (●●) - (●●) ~ (●●) と表記。

◎建物跡の概数「2+(1)」におけるのは、「身寄り部、南側または東側に東(または東出)1間)」であることを示す。

◎柱跡の柱は、東西方向のものが北から順に記した。柱跡の柱のオレック体数字は東または西に出し柱跡寸法を示す。

◎柱跡の柱は、東西方向のものが北から順に記した。柱跡の柱のオレック体数字は東または西に出し柱跡寸法を示す。

第7-2表 的場遺跡 捜立柱建物跡 属性表(2) SB25~53

遺構 No.	建物面積		棟方向	平面規模			建物の方向 建物組脚角度 真北基準	備考 【構成P1: 延長関係、その他】
	横行	縦行		横行面積 (m ²) / 测定柱例・柱間寸法 (m)	縦行面積 (m ²) / 测定柱例・柱間寸法 (m)			
SB-25	6	1+(1)	東西	11.8	北 3.3+1.9+1.8+1.9+1.6+1.1	4.9 東 4.9+1.6	東12° N-12°+E	構成P1: P177・189・187・192・195・198・P206・252・254・257・262・264・P267・270・272・273・276・279・P280・281・304・323 SR23+26、SR25+26、SR31+34、P274より新身合南側に延び付く
SB-26	3	1	東西	8.5	南 3.2+3.5+1.8	4.6 西 4.6	東10° N-10°-E	構成P1: P178・186・253・263・271・275・P250・531 SR25+28、SR31+34+35、P274より新
SB-27	(1)+3	1	東西	4.9	北 0.7+1.5+1.7+1.7	4.5 東 4.5	東3° N-3°-E	構成P1: P221・222・223・224・225・296・P299・302 SR32、P302より新身合西側に延び付く
SB-28	(1)+2	2	南北	6.4	東 1.0+3.0+3.4	3.8 北 1.7+2.1	東9° N-9°-E	構成P1: P194・196・199・200・205・207・P206・238・240・304・306・307 SR24+25・26・31.2点 身合北側に延び付く柱建物跡
SB-29	1以上	1以上	-	3.6以上	西 ~+3.6	3.3以上 南 3.3+~	東20° N-20°-E	構成P1: P208+209+220 建物調査区外に延びる
SB-30	1以上	1以上	-	2.2以上	西 ~+2.2	1.9以上 南 1.9+~	東30° N-30°-E	構成P1: P218+242+287 建物調査区外に延びる
SB-31	3	-	-	4.3	西 1.5+1.5+1.3	- -	東13° N-13°-E	構成P1: P215+244+285 建物調査区外に延びる
SB-32	2	-	-	3.5	西 1.7+1.8	- -	東12° N-12°-E	構成P1: P216+239+280+282+289 SR23+SR26より新身合調査区外に延びる
SB-33	1以上	2	東西	2.9以上	北 2.9+~	3.6 西 2.1+1.5	西10° N-10°-E	構成P1: P216+239+280+282+289 SR23+SR26より新身合調査区外に延びる
SB-34	2	1	南北	4.2	東 2.1+2.1	3.4 北 3.4	西10° N-10°-E	構成P1: P258+359+360+361+363 SR25より新
SB-35	2	1	南北	5.1	東 2.6+2.5	4.2 北 4.2	西3° N-3°-E	構成P1: P258+359+360+361+363 SR25より新
SB-36	3	1	東西	3.9	南 1.3+(1.3)+(1.3)	2.3 西 2.3	東13° N-13°-E	構成P1: P302・364・365・366・368・369 SR37より古
SB-37	2	1	東西	5.5	西 2.6+2.4	4.2 西 4.2	西3° N-3°-E	構成P1: P371・372・373・374・375・376 SR37より古
SB-38	2	1	南北	5	西 2.5+2.5	3.7 南 3.7	東8° N-8°-E	構成P1: P377+378+385+388 SR37より古
SB-39	3	1	東西	5.1	南 1.7+1.7+1.7	3.6 東 3.6	東8° N-8°-E	構成P1: P379+380+381+383+389+392・P390+395 SR37より古
SB-40	1	1	-	4	北 4	3.7 西 3.7	東22° N-22°-E	構成P1: P402・403・404・406 SR37より新
SB-41	1	-	-	3.8	西 3.8	- -	西12° N-12°-E	構成P1: P405+409 SR37より古
SB-42	3	1	東西	6.7	北 2.2+2.4+2.1	3.7 西 3.7	東14° N-14°-E	構成P1: P412+419+427+434+446+453+P458 SR35+452.5より古
SB-43	3	1	東西	5.7	北 2.2+1.6+1.9	3 東 3	東22° N-22°-E	構成P1: P415+421+426+430+435+441+P447+455 SR35より新
SB-44	4	1	東西	6.9	北 2.1+1.9+1.5+1.4	3.2 東 3.2	東16° N-16°-E	構成P1: P414+420+425+428+431+436+P443+448+454+460 SR35より古
SB-45	4	1	東西	7.6	北 2.6+1.7+2.0+1.3	2.9 東 2.9	東15° N-15°-E	構成P1: P418+424+429+432+433+440+P452+456+461+463 SR35より新
SB-46	2	2	-	4.8	南 2.2+2.6	4.6 西 2.4+2.2	東11° N-11°-E	構成P1: P422+423+449+457+462 SR35より新
SB-47	3	1	南北	7.1	東 2.4+2.3+2.4	3.8 南 0.7+3.8	東9° N-9°-E	構成P1: P437+440+464+466+471+474+P477+478+483+485+488 P473+475・484上・下古、身合南側に延び付く
SB-48	3	1	南北	7.4	西 2.5+2.3+2.6	3.3 北 3.3	東10° N-10°-E	構成P1: P438+451+467+470+479+480+P486 SR35より新
SB-49	1以上	-	2.1以上	南 2.1+~	2.1以上 東 2.1+~	- -	東2° N-2°-E	構成P1: P469+506+507 建物調査区外に延びる
SB-50	3	(1)+1	東西	4	南 1.1+1.2+1.7	3.7 西 0.8+3.7	東17° N-17°-E	構成P1: P499+500+501+502+503+504+P505+514+517+518+520 身合北側に延びる、4間の張出付4引×P506より新
SB-51	1	1	-	3.4	西 3.4	2.8 北 2.8	西21° N-21°-E	構成P1: P511+515+527+528 SR35より新
SB-52	2	2	-	7	北 4.0+3.0	6.8 西 3.2+3.6	東7° N-7°-E	構成P1: P516+522+523 SR34+526
SB-53	2	-	-	5.3	東 3.2+2.1	- -	西14° N-14°-E	構成P1: P512+522+523 建物調査区外に延びる

中平屋根後 () 内の数値は推定値。

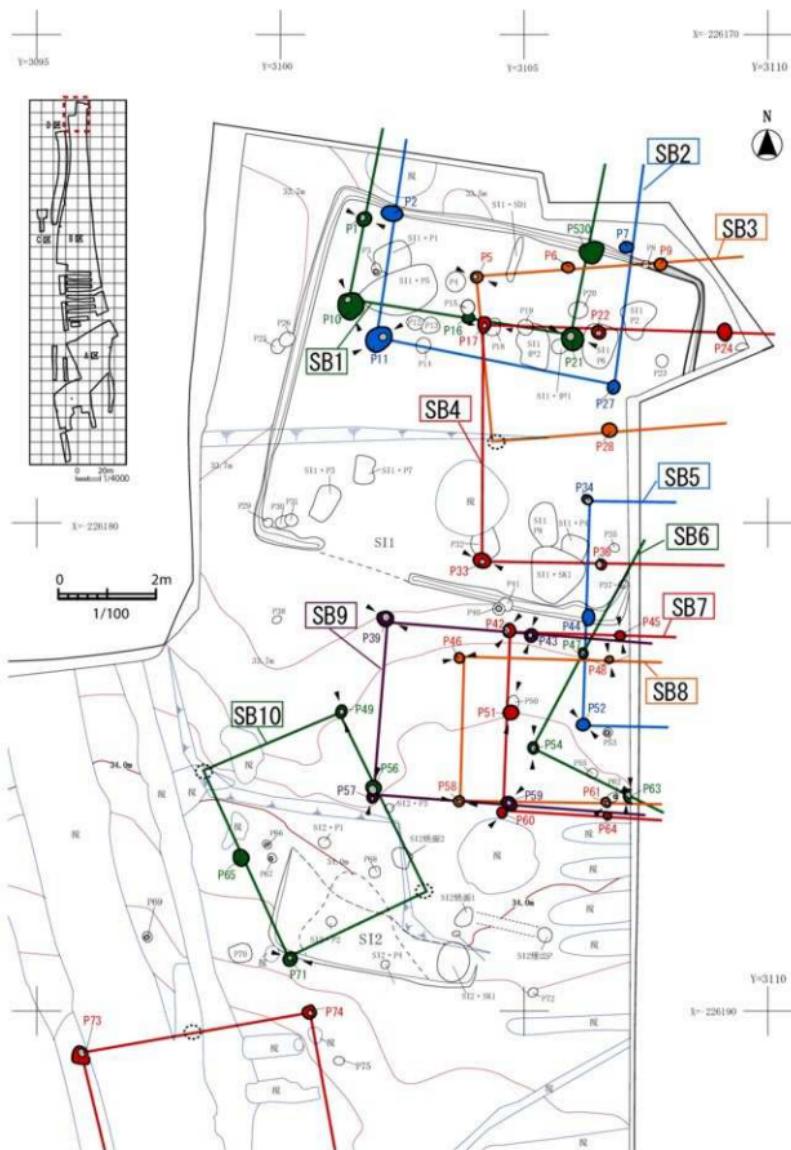
小建物や調査区外に延びているため、周囲に不明な建物や他の一部が現存していない建物については、下記のとおり記述した。

○調査区外に延びる建物・・・建物間隔：(●以上×1間)、平面規模：(●以上×1間)、柱間寸法：(●+~)と表記。

○第六の一部が現存していない建物・・・柱間・柱間寸法のうち、現存する柱間・柱間寸法は(●)とし、残長(●)、(●+~)、(●+●+~)と表記。

△建物の倒壊の様子「(+)」あるもの、「身合側」、南面または東面(+)現存(または撤去)(回)であることを示す。

△柱間寸法(1間)は、東西方向のものは西から、南北方向のものは北から順に記した。柱間寸法の「シケタ字數体」は既終または未満の柱間寸法を示す。



第30図 SB 1～10 堀立柱建物跡（1）



1. SB5～10 挖立柱建物跡 完掘状況（南東から）



2. SB1～4 挖立柱建物跡 完掘状況（北から）



3. SB1・P21 断面（南から）



4. SB2・P11 断面（南から）



5. SB3・P5 断面（南から）



6. SB4・P17 断面（北から）



7. SB6・P54 断面（東から）

8. SB7・P51(左)、P50(右)
断面（東から）

9. SB8・P58 断面（南から）



10. SB9・P39 断面（西から）

11. SB9・P57(左)、SB10・
P56(右) 断面（東から）

第31図 SB1～10 挖立柱建物跡（2）

【SB1 堀立柱建物跡】(第30~32図、第7-1・8-1表)

東西2間、南北1間以上の建物跡である。建物北側は、調査区外へ延びている。SI1、P15と重複し、SI1より新しく、P15より古い。建物は、P1・10・16・21・530の5個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個(P1・10・21)で柱痕跡を確認し、1個(P10)は柱が切り取り、2個(P16・530)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長4.6m、柱間寸法は西から2.5m・2.1m、梁行が東側柱列で総長1.7m以上である。方向は、真北に対して東に9°傾く(N-9°-E)。柱穴は長軸31~55cmの円形・楕円形・不整形で、深さは6~34cmである。柱痕跡は、長軸15~19cmの円形・楕円形である。遺物は、P10の掘方埋土から縄文土器片・土師器片、P16・P530の柱抜取穴から土師器片が出土した。



【SB2 堀立柱建物跡】(第30・31・33図、第7-1・8-1表)

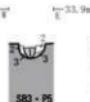
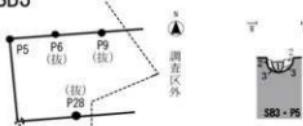
東西1間、南北1間以上の建物跡である。建物北側は、調査区外へ延びている。SI1と重複し、これより新しい。建物は、P2・7・11・27の4個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1個(P11)で柱痕跡を確認し、3個(P2・7・27)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長2.5m以上、梁行が南側柱列で総長4.8mである。方向は、真北に対して東に8°傾く(N-8°-E)。柱穴は長軸19~60cmの円形・楕円形で、深さは7~34cmである。柱痕跡は、長軸17cmの円形である。遺物は、P2の柱抜取穴・P11の掘方埋土から土師器片が出土した。



【SB3 挖立柱建物跡】(第30・31・34図、第7-1・8-1表)

東西2間以上、南北1間の東西棟建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。SI1と重複し、これより新しい。建物は、P5・6・9・28の4個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1個(P5)で柱痕跡を確認し、3個(P6・9・28)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長3.8m以上、柱間寸法は西から1.9m・1.9m、梁行が西側柱列で総長3.3m(推定値)である。方向は、真北に対して西に 10° 傾く(N- 10° -W)。柱穴は長軸25~30cmの円形・楕円形で、深さは5~25cmである。柱痕跡は、長軸12cmの楕円形である。

SB3



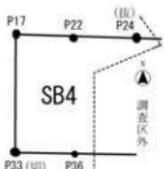
第34図 SB3 挖立柱建物跡

平面・断面図

1層：柱痕跡
※平面図S=1/200 断面図S=1/50
2・3層：粧方埋土

【SB4 挖立柱建物跡】(第30・31・35図、第7-1・8-1表)

東西2間以上、南北1間の東西棟建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。SI1、P18・32と重複し、これらより新しい。建物は、P17・22・24・33・36の5個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、4個(P17・22・36)で柱痕跡を確認し、1個(P33)は柱が切り取り、1個(P24)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長4.9m以上、柱間寸法は西から2.3m・2.6m、梁行が西側柱列で総長4.9mである。方向は、真北(N- 0° -E)である。柱穴は長軸24~38cmの円形・楕円形で、深さは28~49cmである。柱痕跡は、長軸11~16cmの円形・楕円形である。遺物は、P17の粧方埋土から土師器片、P33の粧方埋土から繩文土器片が出土した。



【P17】 【P33】

1層：柱痕跡
2・3層：粧方埋土
1層：柱切跡
2層：柱痕跡
3層：粧方埋土

※平面図S=1/200 断面図S=1/50

第35図 SB4 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB5 挖立柱建物跡】(第30・31・36図、第7-1・8-1表)

南北2間で東に延びる建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。柱穴列の可能性も考えられるが、周辺に同じ方向の建物が存在することから、建物跡として認定した。SI1と重複し、これより新しい。建物は、P34・44・52の3個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1個(P34)で柱痕跡を確認し、2個(P44・52)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長4.6m、柱間寸法は北から2.4m・2.2mである。方向は、真北(N- 0° -E)である。柱穴は長軸20~26cmの円形・楕円形で、深さは7~37cmである。柱痕跡は、長軸16cmの楕円形である。遺物は、P44の柱抜取穴から土師器片が出土した。



【P34】

1層：柱抜取
2層：粧方埋土

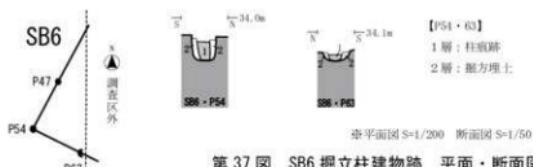
第36図 SB5 挖立柱建物跡

平面・断面図

※平面図S=1/200 断面図S=1/50

【SB6 堀立柱建物跡】(第30・31・37図、第7-1・8-1表)

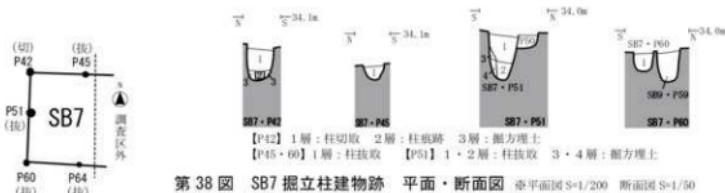
東西1間以上、南北1間以上の建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。建物は、P47・54・63の3個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、桁行が西側柱列で総長2.2m以上、梁行が南側柱列で2.1m以上である。方向は、真北に対して東に28°傾く(N-28°-E)。柱穴は長軸20~30cmの円形で、深さは8~26cmである。柱痕跡は、長軸13~14cmの楕円形である。遺物は、P63の掘方埋土から土師器片が出土した。



第37図 SB6 堀立柱建物跡 平面・断面図

【SB7 堀立柱建物跡】(第30・31・38図、第7-1・8-1表)

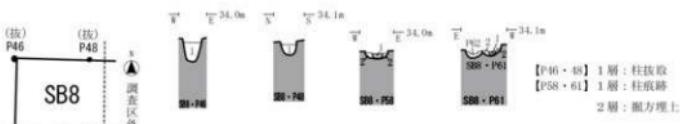
東西1間以上、南北2間の東西棟建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。P50と重複し、これより新しい。建物は、P42・45・51・60・64の5個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1個(P42)で柱痕跡を確認し、1個(P42)は柱が切り取り、4個(P45・51・60・64)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長2.3m以上、梁行が西側柱列で総長3.7m、柱間寸法は北から1.7m・2.0mである。方向は、真北に対して東に2°傾く(N-2°-E)。柱穴は長軸17~31cmの円形で、深さは7~50cmである。柱痕跡は、長軸16cmの楕円形である。



第38図 SB7 堀立柱建物跡 平面・断面図 ● 平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

【SB8 堀立柱建物跡】(第30・31・39図、第7-1・8-1表)

東西1間以上、南北1間の東西棟建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。P62と重複し、これより新しい。建物は、P46・48・58・61の4個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、2個(P58・61)で柱痕跡を確認し、2個(P46・48)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長3.0m以上、梁行が西側柱列で2.9mである。方向は、真北である(N-0°-E)。柱穴は長軸18~22cmの円形で、深さは5~27cmである。柱痕跡は、長軸9~10cmの円形・楕円形である。



第39図 SB8 堀立柱建物跡 平面・断面図 ● 平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

【SB9 据立柱建物跡】(第30・31・40図、第7-1・8-1表)

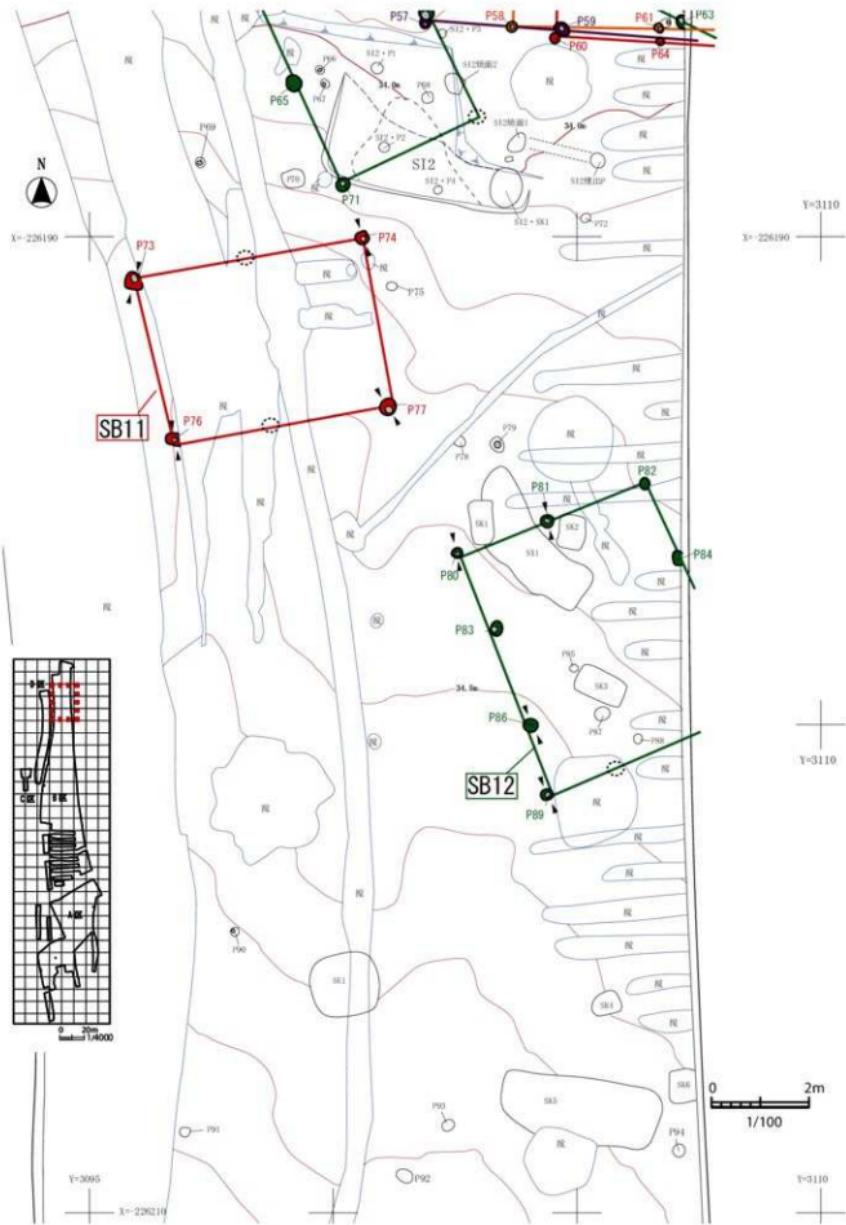
東西1間以上、南北1間の東西棟建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。SB10と重複し、これより古い。建物は、P39・43・57・59の4個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認し、1個(P59)は柱が切り取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長2.9m以上、梁行が西側柱列で3.6mである。方向は、真北に対して東に5°傾く(N-5°-E)。柱穴は長軸20~32cmの円形で、深さは19~33cmである。柱痕跡は、長軸10~17cmの円形・楕円形である。遺物は、P57の柱痕跡から土師器片が出土した。



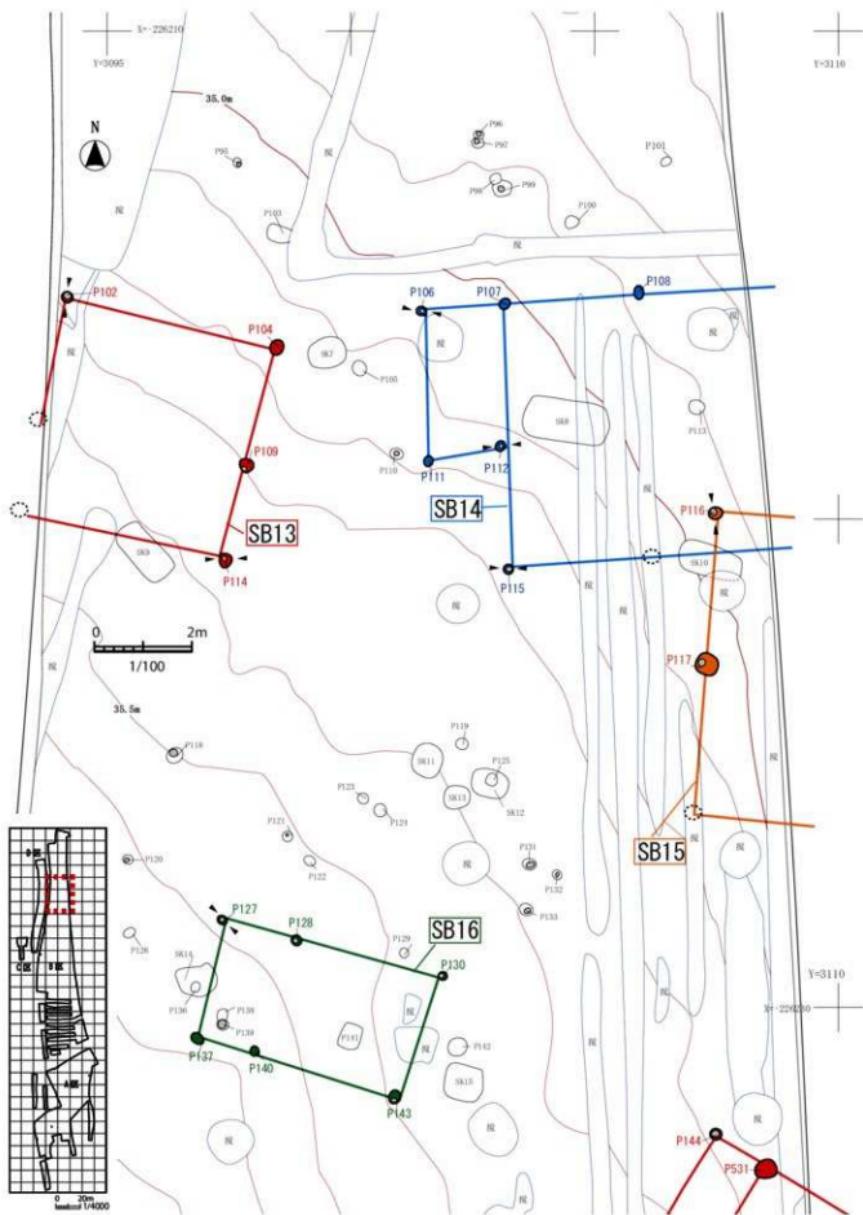
【SB10 据立柱建物跡】(第30・31・41図、第7-1・8-1表)

南北2間、東西1間の南北棟建物跡である。SI2、SB9と重複し、これらより新しい。建物は、P49・56・65・71の4個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個(P49・56・71)で柱痕跡を確認し、1個(P65)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長4.2m、柱間寸法は北から1.7m・2.5m(推定値)、梁行が北側柱列で3.1m(推定値)である。方向は、真北に対して西に24°傾く(N-24°-W)。柱穴は長軸25~34cmの円形で、深さは14~28cmである。柱痕跡は、長軸12~21cmの円形・楕円形である。遺物は、P56の掘方埋土から土師器片が出土した。





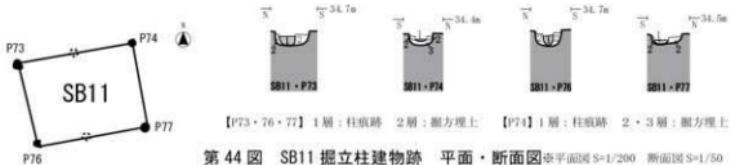
第42図 SB11・12 掘立柱建物跡



第43図 SB13~16 堀立柱建物跡

【SB11 堀立柱建物跡】(第42・44・59図、第7-1・8-1表)

東西2間、南北1間の東西棟建物跡である。建物は、P73・74・76・77の4個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、桁行が南側柱列で長総4.4m、柱間寸法は西から2.2m・2.2m（推定値）、梁行が西側柱列で3.4mである。方向は、真北に対して西に10°傾く（N-10°-W）。柱穴は長軸29~38cmの円形・隅丸方形で、深さは9~17cmである。柱痕跡は、長軸11~17cmの円形・梢円形である。



【SB12 堀立柱建物跡】(第42・45・59図、第7-1・8-1表)

南北3間、東西2間の南北棟建物跡である。建物東側の一部は、調査区外へ延びている。建物は、P80・81・82・83・84・86・89の7個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、4個（P80・81・83・89）で柱痕跡を確認し、3個（P82・84・86）は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で長総5.2m、柱間寸法は北から1.7m・2.0m・1.5m、梁行が北側柱列で長総4.0m、柱間寸法は西から1.9m・2.1mである。方向は、真北に対して西に19°傾く（N-19°-W）。柱穴は長軸21~34cmの円形で、深さは3~22cmである。柱痕跡は、長軸11~15cmの円形・梢円形である。遺物は、P86の柱痕跡から土師器片が出土した。



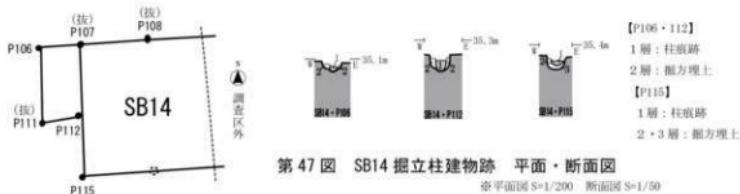
【SB13 堀立柱建物跡】(第43・46・59図、第7-1・8-1表)

南北2間、東西1間の建物跡である。建物西側の一部は、調査区外へ延びている。建物は、P102・104・109・114の4個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個（P102・109・114）で柱痕跡を確認し、1個（P104）は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で長総4.5m、柱間寸法は北から2.5m・2.0m、梁行が北側柱列で4.3mである。方向は、真北に対して東に13°傾く（N-13°-E）。柱穴は長軸22~30cmの円形で、深さは9~27cmである。柱痕跡は、長軸10~16cmの円形・梢円形である。



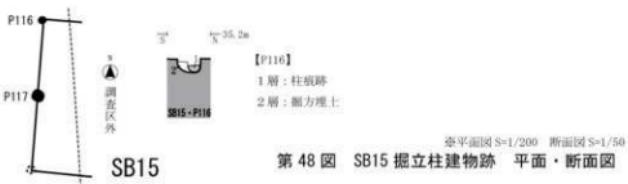
【SB14 挖立柱建物跡】(第43・47・59図、第7-1・8-1表)

東西1間以上、南北2間の身舎の西側に南北1間・東西1間の張出しが付く東西棟建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。建物は、P106・107・108・111・112・115の6個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個(P106・112・115)で柱痕跡を確認し、3個(P107・108・111)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長2.7m以上、梁行が西側柱列で総長5.3m、柱間寸法は北から2.8m・2.5mである。張出しは西側柱列からの出が1.7m、南北3.1mである。方向は、真北に対して西に3°傾く(N-3°-W)。柱穴は長軸17~23cmの円形で、深さは5~18cmである。柱痕跡は、長軸9~13cmの円形・楕円形である。



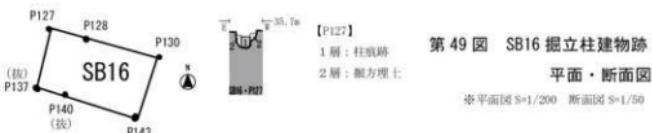
【SB15 挖立柱建物跡】(第43・48・59図、第7-1・8-1表)

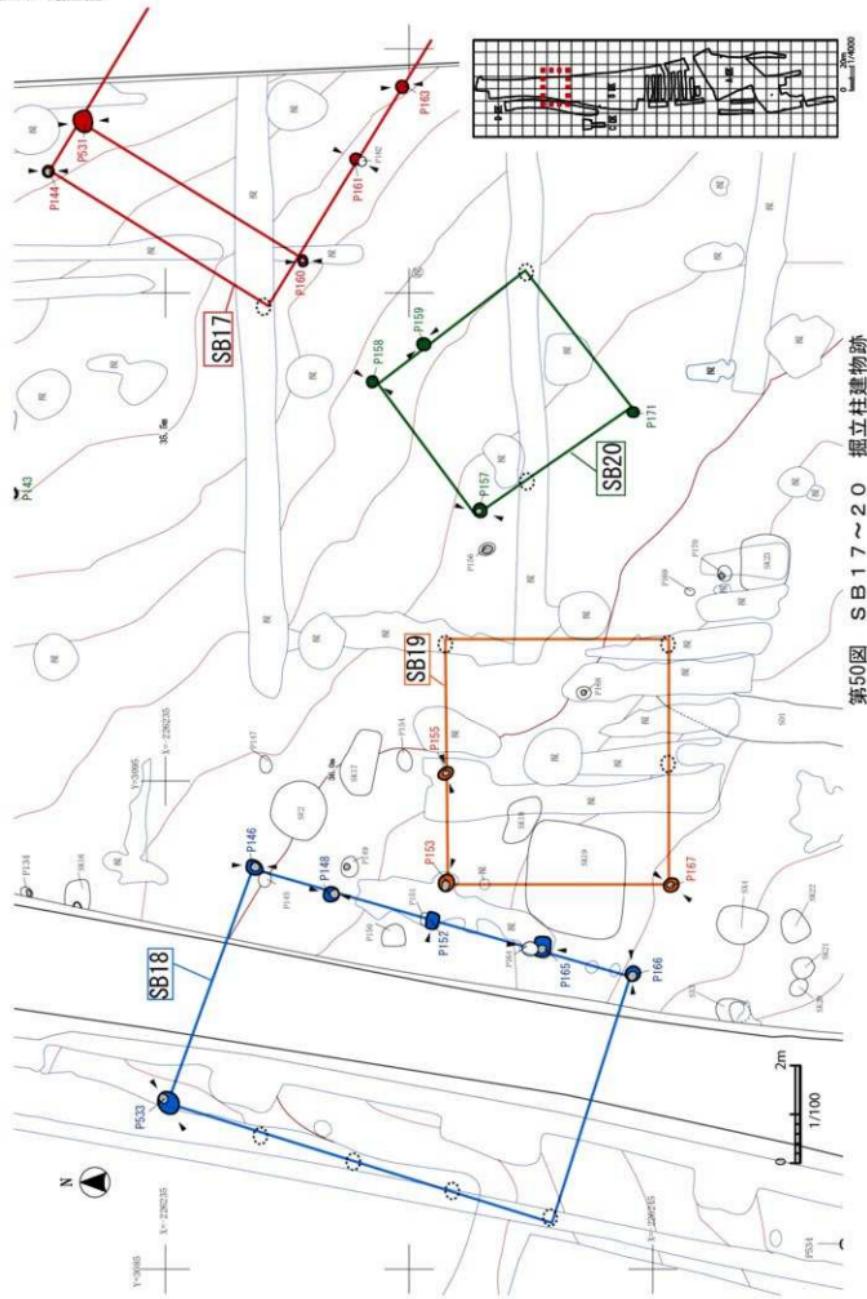
南北2間で東に延びる建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。柱穴列の可能性も考えられるが、周辺に同じ方向の建物が存在することから、建物跡として認定した。建物は、P116・117の2個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、西側柱列で総長6.2m(推定値)、柱間寸法は北から3.1m・3.1m(推定値)である。方向は、真北に対して東に5°傾く(N-5°-E)。柱穴は長軸30~42cmの円形で、深さは16~22cmである。柱痕跡は、長軸16~17cmの楕円形である。遺物は、P117の掘方埋土から土師器片が出土した。



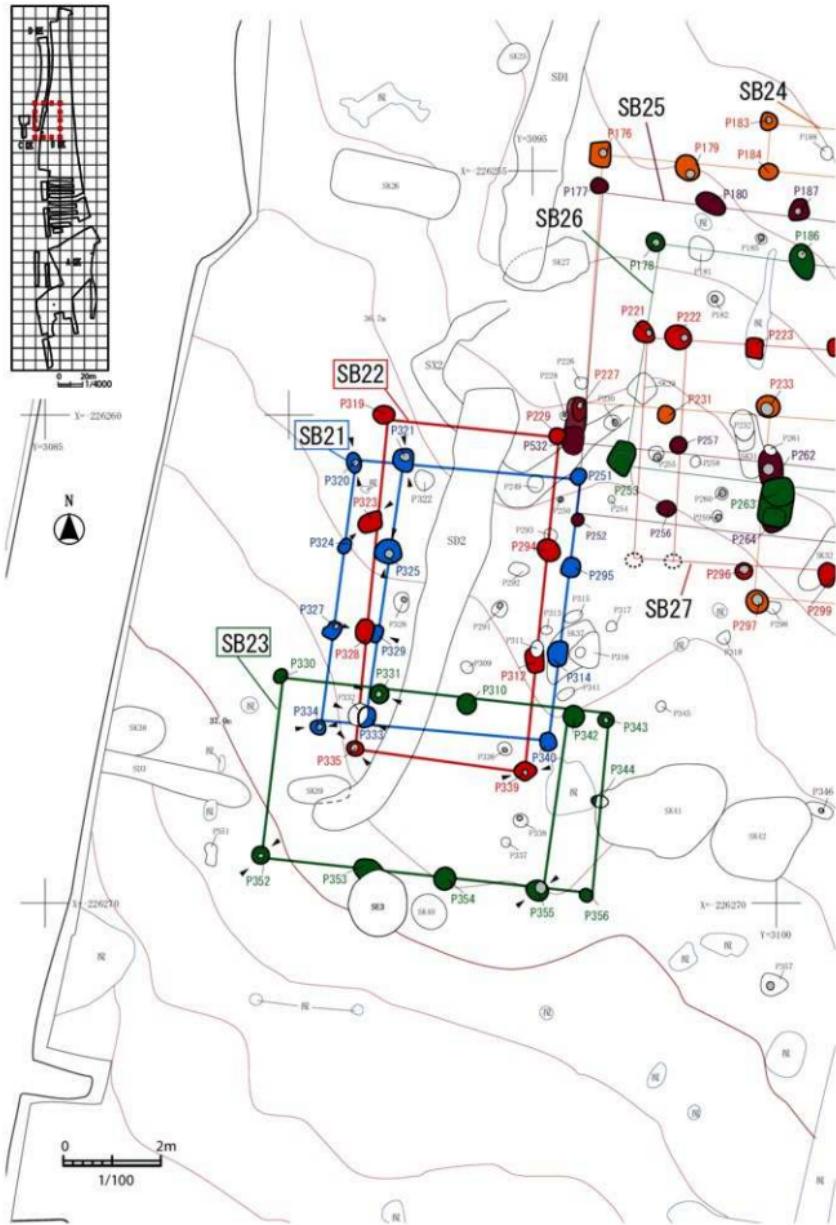
【SB16 挖立柱建物跡】(第43・49・59図、第7-1・8-1表)

東西2間、南北1間の東西棟建物跡である。建物は、P127・128・130・137・140・143の6個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、4個(P127・128・130・143)で柱痕跡を確認し、2個(P137・140)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長4.5m、柱間寸法は西から1.5m・3.0m、梁行が東側柱列で2.1mである。方向は、真北に対して東に13°傾く(N-13°-E)。柱穴は長軸15~24cmの円形で、深さは6~17cmである。柱痕跡は、長軸11~12cmの円形・楕円形である。





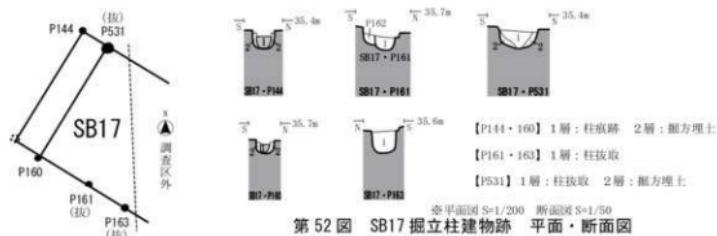
第50図 SB17～20 挖立柱建物跡



第51図 SB21～23 堀立柱建物跡

【S B17 挖立柱建物跡】(第 50・52・59 図、第 7-1・8-1 表)

東西 2 間以上、南北 1 間の身舎の西側に庇が 1 間付く東西棟建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。P162 と重複し、これより古い。建物は、P144・160・161・163・531 の 5 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、2 個(P144・160)で柱痕跡を確認し、3 個(P161・163・531)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長 4.1m 以上、柱間寸法は西から 2.4m・1.7m、梁行が西側柱列で 5.4m である。西側の庇の出は 1.0m である。方向は、真北に対して東に 31° 傾く(N-31°-E)。柱穴は長軸 20~42cm の円形で、深さは 16~25cm である。柱痕跡は、長軸 11~16cm の円形・楕円形である。



第 52 図 SB17 挖立柱建物跡 平面・断面図

【S B18 挖立柱建物跡】(第 50・53・59・97 図、第 7-1・8-1 表)

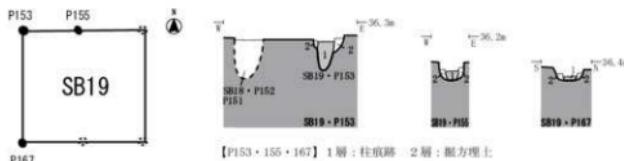
南北 4 間、東西 1 間の南北棟建物跡である。P151・164 と重複し、P164 より古く、P151 より新しい。建物は、P146・148・152・165・166・533 の 6 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、5 個(P146・148・165・166・533)で柱痕跡を確認し、1 個(P165)は柱が切り取り、1 個(P164)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長 8.1m、柱間寸法は北から 1.7m・2.2m・2.3m・1.9m、梁行が北側柱列で 5.1m である。方向は、真北に対して東に 16° 傾く(N-16°-E)。柱穴は長軸 28~50cm の円形・方形・楕円形で、深さは 11~40cm である。柱痕跡は、長軸 18~21cm の円形である。遺物は、P166 の掘方埋土から繩文土器鉢破片(第 97 図 1)・土師器破片、P148 の掘方埋土・P165 の柱切取穴・P533 の柱痕跡から土師器破片が出土した。



第 53 図 SB18 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB19 挖立柱建物跡】(第 50・54・59 図、第 7-1・8-1 表)

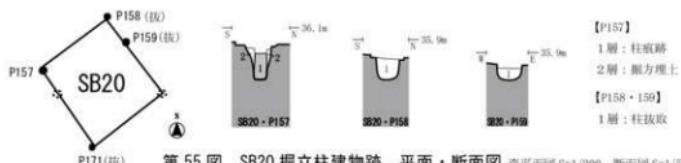
東西 2 間、南北 1 間の建物跡である。建物は、P153・155・167 の 3 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 4.7m (推定値)、柱間寸法は西から 2.3m・2.4m (推定値)、梁行が西側柱列で 4.7m である。方向は、真北 (N-0° -E) である。柱穴は長軸 30~32cm の円形で、深さは 14~33cm である。柱痕跡は、長軸 14~22cm の梢円形である。遺物は、P153 の掘方埋土から土師器片が出土した。



第 54 図 SB19 挖立柱建物跡 平面・断面図 [平図 S=1/200 断面図 S=1/50]

【SB20 挖立柱建物跡】(第 50・55・59 図、第 7-1・8-1 表)

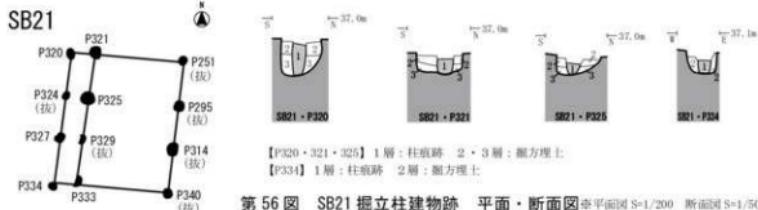
南北 2 間、東西 1 間の南北棟建物跡である。建物は、P157・158・159・171 の 4 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1 個 (P157) で柱痕跡を確認し、3 個 (P158・159・171) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長 3.9m、柱間寸法は北から 1.2m・2.7m (推定値)、梁行が北側柱列で 2.6m である。方向は、真北に対して西に 35° 傾く (N-35° -W)。柱穴は長軸 22~28cm の円形で、深さは 7~40cm である。柱痕跡は、長軸 14cm の円形である。



第 55 図 SB20 挖立柱建物跡 平面・断面図 [平図 S=1/200 断面図 S=1/50]

【SB21 挖立柱建物跡】(第 51・56・59 図、第 7-1・8-2 表)

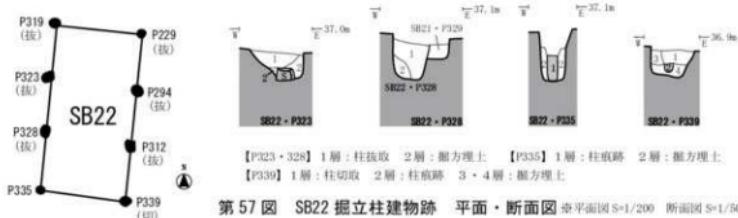
南北 3 間、東西 1 間の身舎の西側に庇が 1 間付く南北棟建物跡である。SB22、SK37、SX2、P316・332 と重複し、SB22、P332 より古く、SK37、SX2、P316 より新しい。建物は、P251・295・314・320・321・324・325・327・329・333・334・340 の 12 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、6 個 (P320・321・325・327・333・334) で柱痕跡を確認し、6 個 (P251・295・314・324・329・340) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長 5.5m、柱間寸法は北から 1.8m・1.7m・2.0m、梁行が北側柱列で 3.6m である。西側の庇の出は 1.0m である。方向は、真北に対して東に 6° 傾く (N-6° -E)。柱穴は長軸 30~54cm の円形・方形・梢円形・長方形で、深さは 8~45cm である。柱痕跡は、長軸 12~22cm の円形・梢円形である。



第 56 図 SB21 挖立柱建物跡 平面・断面図 [平図 S=1/200 断面図 S=1/50]

【SB22 挖立柱建物跡】(第 51・57・59 図、第 7-1・8-2 表)

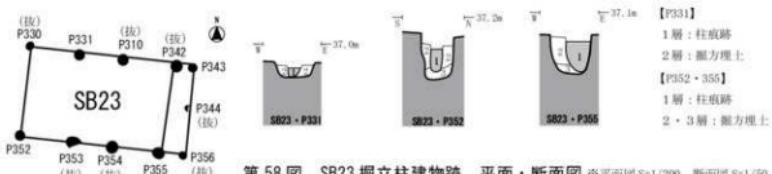
南北 3 間、東西 1 間の南北棟建物跡である。SB21・24、P293・311 と重複し、P311 より古く、SB21・24、P293 より新しい。建物は、P229・294・312・319・323・328・335・339 の 8 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、2 個 (P335・339) で柱痕跡を確認し、1 個 (P339) は柱が切り取り、6 個 (P229・294・312・319・323・328) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長 6.9m、柱間寸法は北から 2.2m・2.2m・2.5m、梁行が北側柱列で 3.5m である。方向は、真北に対して東に 6° 傾く (N-6° -E)。柱穴は長軸 33~60cm の円形・楕円形で、深さは 20~54cm である。柱痕跡は、長軸 14~19cm の楕円形である。



第 57 図 SB22 挖立柱建物跡 平面・断面図 ※平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

【SB23 挖立柱建物跡】(第 51・58・59 図、第 7-1・8-2 表)

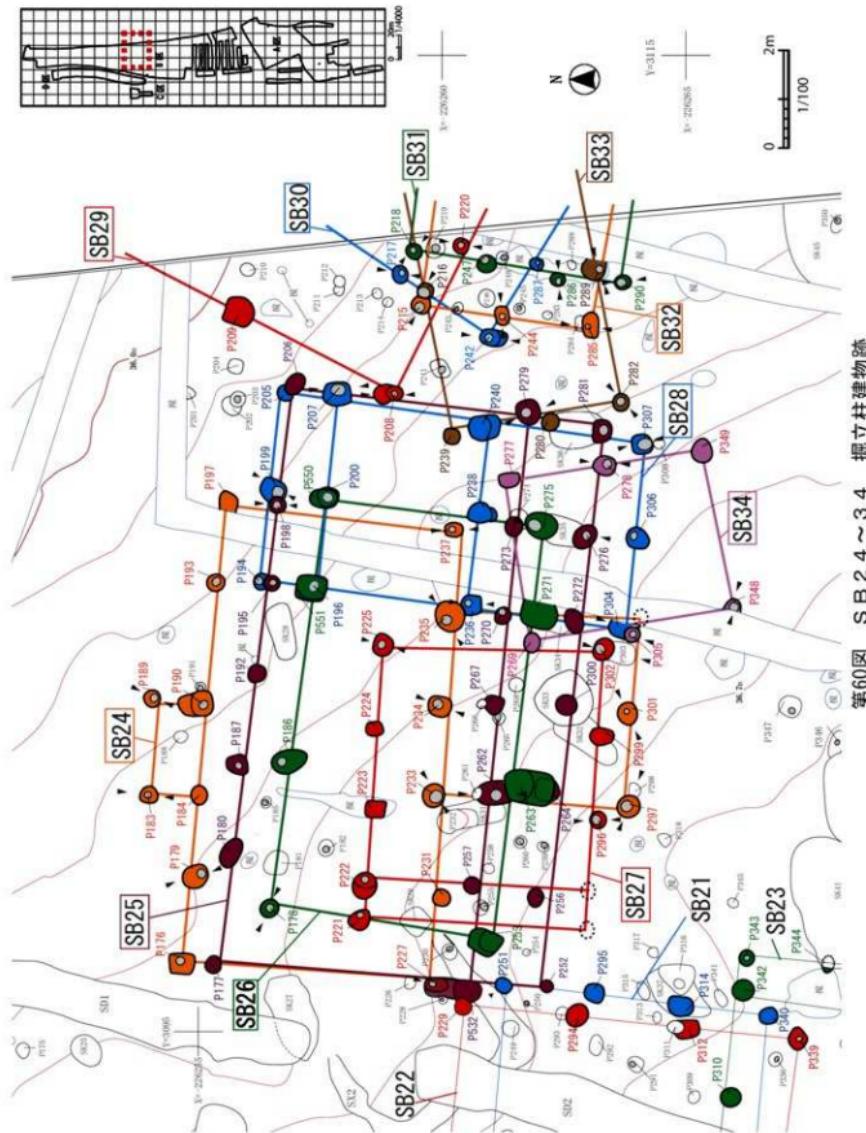
東西 3 間、南北 1 間の身舎の東側に庇が 1 間付く東西棟建物跡である。SE3、SK41 と重複し、これらより古い。建物は、P310・330・331・342・343・344・352・353・354・355・356 の 11 個の柱穴で構成される。柱穴の並びから、P351 についても建物に関連する柱穴である可能性がある。検出した柱穴のうち、4 個 (P331・343・352・355) で柱痕跡を確認し、7 個 (P310・330・342・344・353・354・356) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長 6.1m、柱間寸法は西から 2.0m・1.8m・2.3m、梁行が東側柱列で 3.6m である。東側の廟の出は 0.6m である。方向は、真北に対して東に 6° 傾く (N-6° -E)。柱穴は長軸 24~48cm の円形・楕円形で、深さは 6~48cm である。柱痕跡は、長軸 12~25cm の円形・楕円形である。遺物は、P355 の柱痕跡から土師器片・中世陶器片が出土した。



第 58 図 SB23 挖立柱建物跡 平面・断面図 ※平面図 S=1/200 断面図 S=1/50



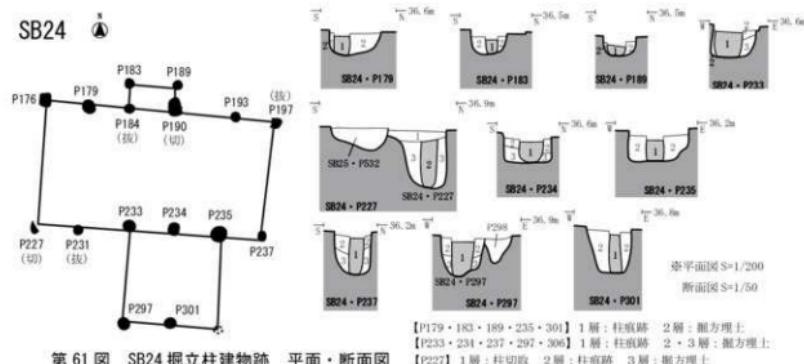
第59図 SB11～23 掘立柱建物跡



第60図 SB24~34 挖立建物跡

【SB24 挖立柱建物跡】(第60・61・78・97図、第7-1・8-2表)

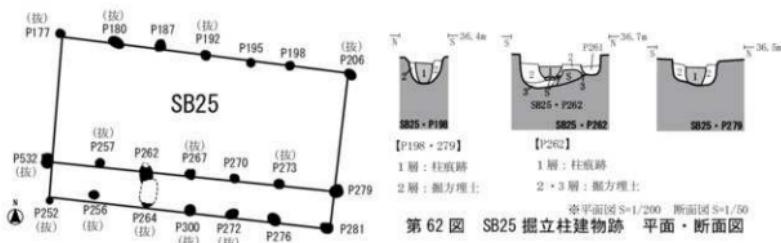
東西5間、南北1間の身舎の北側と南側に張出しが付く東西棟建物跡である。SB22・25・28、SX2、P191・228・298と重複し、SB22・25、P191・228より古く、SB28、SX2、P298より新しい。建物は、P176・179・183・184・189・190・193・197・227・231・233・234・235・237・297・301の16個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、13個(P176・179・183・189・190・193・227・233・234・235・237・297・301)で柱痕跡を確認し、2個(P190・227)は柱が切り取り、3個(P184・197・231)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長9.4m、柱間寸法は西から2.0m・1.6m・1.9m・2.4m・1.5m、梁行が西側柱列で5.0mである。北側の張出しへは北側柱列からの出が1.0m・東西1.9m、南側の張出しへは南側柱列からの出が3.7m・東西3.8mである。方向は、真北に対して東に12°傾く(N-12°-E)。柱穴は長軸28~65cmの円形・方形・楕円形で、深さは17~56cmである。柱痕跡は、長軸11~28cmの円形・楕円形である。遺物は、P176の掘方埋土から土師器片、柱痕跡から中世陶器甕(第97図2)、P297の掘方埋土から土師器片が出土した。



第61図 SB24 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB25 挖立柱建物跡】(第60・62・78・97図、第7-2・8-2表)

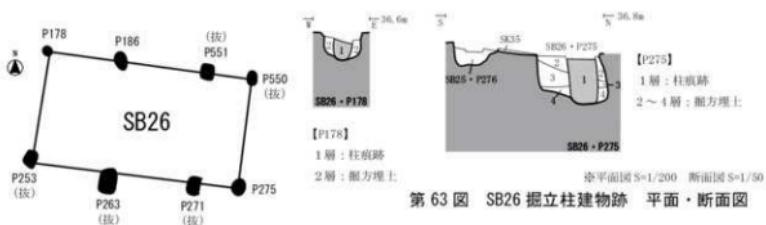
東西6間、南北1間の身舎の南側に庇が1間付く東西棟建物跡である。SB22・24・26・28、SK31~36、P228・265・266・274と重複し、SB22・26、P228・266より古く、SB24・28、SK31~36、P265・274より新しい。建物は、P177・180・187・192・195・198・206・252・256・257・262・264・267・270・272・273・276・279・281・300・532の21個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、8個(P187・195・198・262・270・276・279・281)で柱痕跡を確認し、13個(P177・180・192・206・252・256・257・264・267・272・273・300・532)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長11.8m、柱間寸法は西から2.2m・1.9m・1.8m・1.9m・1.6m・2.4m、梁行が東側柱列で4.9mである。南側の庇の出は1.6mである。方向は、真北に対して東に12°傾く(N-12°-E)。柱穴は長軸27~62cmの円形・楕円形で、深さは8~43cmである。柱痕跡は、長軸15~24cmの円形・楕円形である。遺物は、P177の柱抜取穴から土師器片、陶器破片(第97図3)、P281の掘方埋土から土師器片が出土した。



第62図 SB25 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB26 挖立柱建物跡】(第 60・63・78 図、第 7-2・8-2 表)

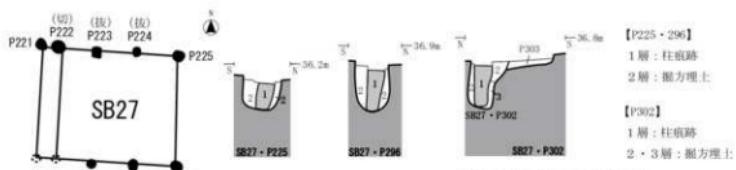
東西 3 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。SB25・28、SK31・34・35、P274 と重複し、これらより新しい。建物は、P178・186・253・263・271・275・550・551 の 8 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3 個 (P178・186・275) で柱痕跡を確認し、5 個 (P253・263・271・550・551) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長 8.5m、柱間寸法は西から 3.2m・3.5m・1.8m、梁行が西側柱列で 4.6m である。方向は、真北に対して東に 10° 傾く (N-10°-E)。柱穴は長軸 40~76cm の円形・楕円形で、深さは 20~55cm である。柱痕跡は、長軸 17~29cm の円形・楕円形である。遺物は、P271 の柱抜取穴から土師器片が出土した。



第 63 図 SB26 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB27 挖立柱建物跡】(第 60・64・78 図、第 7-2・8-3 表)

東西 3 間、南北 1 間の身舎の西側に庇が 1 間付く東西棟建物跡である。SK32、P303 と重複し、これらより新しい。建物は、P221・222・223・224・225・296・299・302 の 8 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、5 個 (P221・222・225・296・302) で柱痕跡を確認し、1 個 (P222) は柱が切り取り、3 個 (P223・224・299) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 4.9m、柱間寸法は西から 1.5m・1.7m・1.7m、梁行が東側柱列で 4.5m である。西側の庇の出は 0.7m である。方向は、真北に対して東に 3° 傾く (N-3°-E)。柱穴は長軸 37~52cm の円形・方形・楕円形で、深さは 22~56cm である。柱痕跡は、長軸 15~21cm の円形・楕円形である。遺物は、P221 の掘方埋土・P222 の柱切取穴から土師器片が出土した。

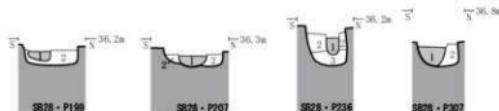
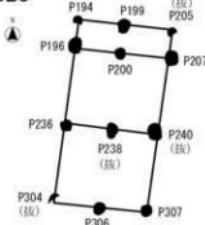


第 64 図 SB27 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB28 挖立柱建物跡】(第 60・65・78 図、第 7-2・8-3 表)

南北 2 間、東西 2 間の身舎の北側に庇が 1 間付く南北棟の縦柱建物跡である。SB24・25・26・34 と重複し、これらより古い。建物は、P194・196・199・200・205・207・236・238・240・304・306・307 の 12 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、8 個 (P194・196・199・200・207・236・304・306・307) で柱痕跡を確認し、4 個 (P205・238・240・304) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長 6.4m、柱間寸法は北から 3.0m・3.4m、梁行が北側柱列で総長 3.8m、柱間寸法は西から 1.7m・2.1m である。北側の庇の出は 1.0m である。方向は、真北に対して東に 9° 傾く (N^{9°} - E)。柱穴は長軸 33~62cm の円形・方形・隅丸方形・楕円形・不整形で、深さは 6~54cm である。柱痕跡は、長軸 15~31cm の円形・楕円形である。遺物は、P196 の掘方埋土から土師器片が出土した。

SB28



【P199・207・307】 1 層：柱痕跡 2 層：掘方埋土

【P236】 1 層：柱痕跡 2・3 層：掘方埋土

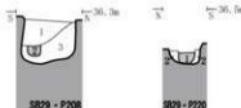
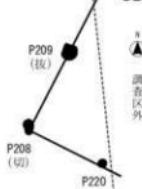
※ 平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

第 65 図 SB28 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB29 挖立柱建物跡】(第 60・66・78 図、第 7-2・8-3 表)

東西 1 間以上、南北 1 間以上の建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。建物は、P208・209・220 の 3 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、2 個 (P208・220) で柱痕跡を確認し、1 個 (P208) は柱が切り取り、1 個 (P209) は柱が抜き取られていた。平面規模については、西側柱列で総長 3.6m 以上、南側柱列で総長 3.3m 以上である。方向は、真北に対して東に 26° 傾く (N^{-26°} - E)。柱穴は長軸 33~53cm の円形・楕円形で、深さは 19~52cm である。柱痕跡は、長軸 14cm の円形・楕円形である。遺物は、P209 の柱抜取穴から土師器片・須恵器片が出土した。

SB29



【P208】

1 層：柱切跡
2 層：柱痕跡
3 層：掘方埋土

【P220】

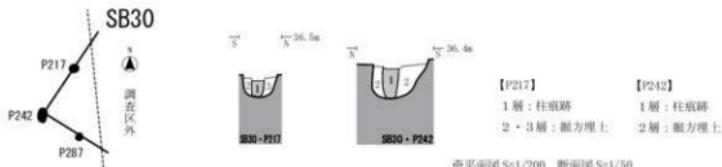
1 層：柱痕跡
2 層：掘方埋土
3 層：掘方埋土

※ 平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

第 66 図 SB29 挖立柱建物跡 平面・断面図

[SB30 堀立柱建物跡] (第 60・67・78 図、第 7-2・8-3 表)

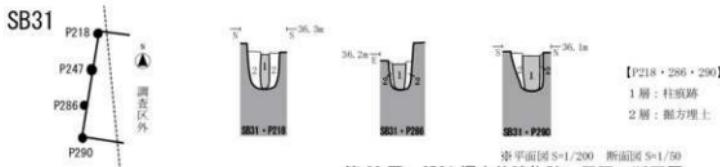
東西 1 間以上、南北 1 間以上の建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。建物は、P217・242・287 の 3 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、西側柱列で総長 2.2m 以上、南側柱列で総長 1.9m 以上である。方向は、真北に対して東に 36° 傾く (N-36°-E)。柱穴は長軸 26~57cm の円形・隅丸長方形で、深さは 22~35cm である。柱痕跡は、長軸 11~17cm の円形・楕円形である。



第 67 図 SB30 堀立柱建物跡 平面・断面図

[SB31 堀立柱建物跡] (第 60・68・78 図、第 7-2・8-3 表)

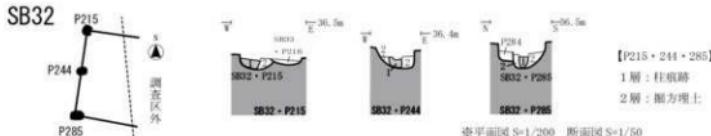
南北 3 間で東に延びる建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。柱穴列の可能性も考えられるが、周辺に同じ方向の建物が存在することから、建物跡として認定した。建物は、P218・247・286・290 の 4 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、西側柱列で総長 4.3m、柱間寸法は北から 1.5m・1.5m・1.3m である。方向は、真北に対して東に 13° 傾く (N-13°-E)。柱穴は長軸 25~38cm の円形で、深さは 38~45cm である。柱痕跡は、長軸 15~20cm の円形・楕円形である。



第 68 図 SB31 堀立柱建物跡 平面・断面図

[SB32 堀立柱建物跡] (第 60・69・78 図、第 7-2・8-3 表)

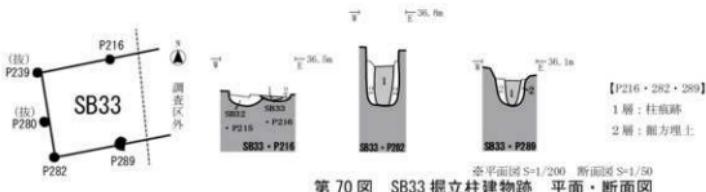
南北 2 間で東に延びる建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。柱穴列の可能性も考えられるが、周辺に同じ方向の建物が存在することから、建物跡として認定した。SB33、P284 と重複し、SB33 より古く、P284 より新しい。建物は、P215・244・285 の 3 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、西側柱列で総長 3.5m、柱間寸法は北から 1.7m・1.8m である。方向は、真北に対して東に 12° 傾く (N-12°-E)。柱穴は長軸 39~55cm の円形・楕円形で、深さは 15~35cm である。柱痕跡は、長軸 11~21cm の円形である。



第 69 図 SB32 堀立柱建物跡 平面・断面図

【SB33 堀立柱建物跡】(第60・70・78図、第7-2・8-3表)

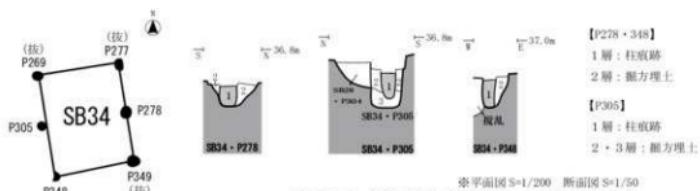
東西1間以上、南北2間の東西棟建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。SB32、SK36と重複し、これらより新しい。建物は、P216・239・280・282・289の5個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個(P216・282・289)で柱痕跡を確認し、2個(P239・280)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長2.9m以上、梁行が西側柱列で総長3.6m、柱間寸法は北から2.1m・1.5mである。方向は、真北に対して西に10°傾く(N-10°-W)。柱穴は長軸33~51cmの円形で、深さは8~56cmである。柱痕跡は、長軸16~27cmの円形である。遺物は、P280の掘方埋土から土師器片が出土した。



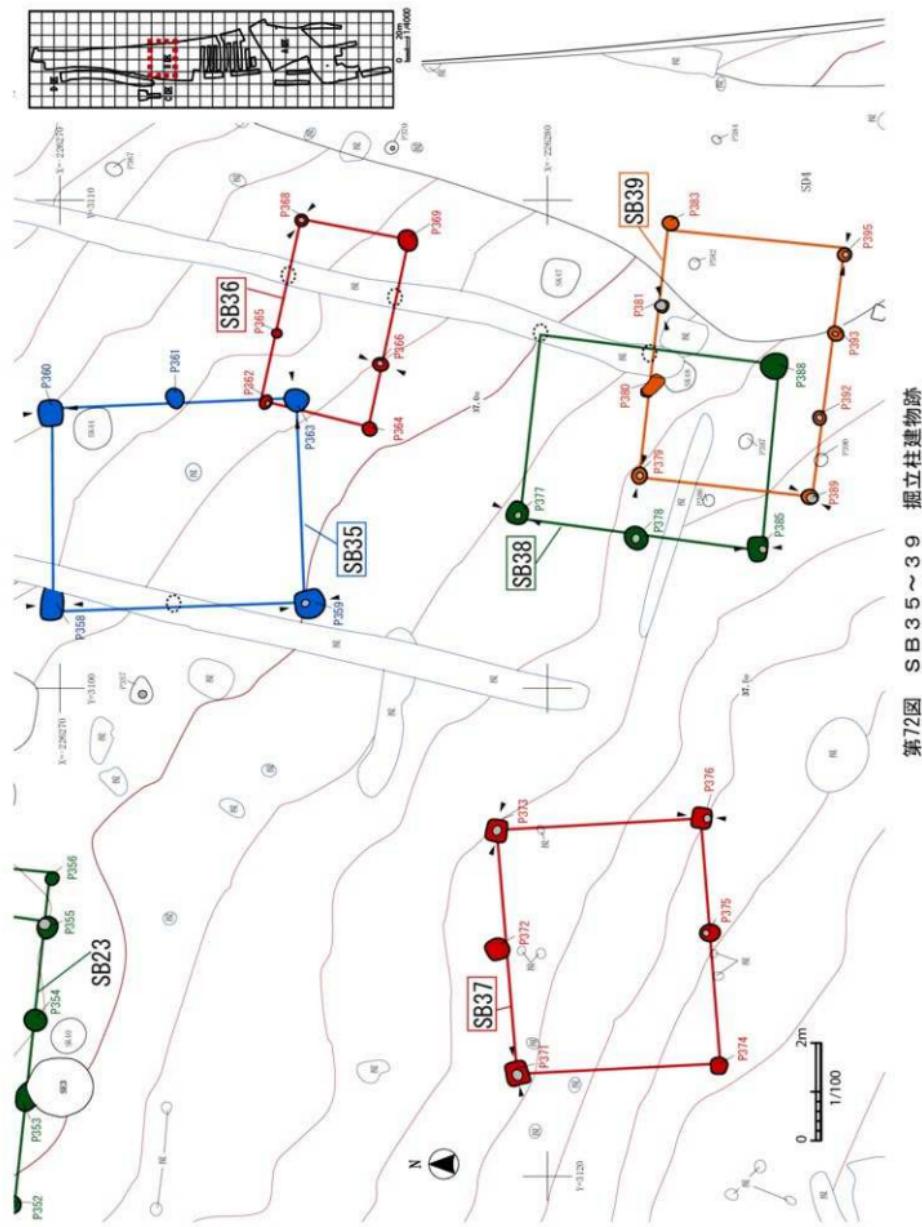
第70図 SB33 堀立柱建物跡 平面・断面図

【SB34 堀立柱建物跡】(第60・71・78図、第7-2・8-3表)

南北2間、東西1間の南北棟建物跡である。SB28と重複し、これより新しい。建物は、P269・277・278・305・348・349の6個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個(P278・305・348)で柱痕跡を確認し、3個(P269・277・349)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長4.2m、柱間寸法は北から2.1m・2.1m、梁行が北側柱列で3.4mである。方向は、真北に対して西に10°傾く(N-10°-W)。柱穴は長軸36~50cmの円形・長方形・楕円形で、深さは16~52cmである。柱痕跡は、長軸15~19cmの円形である。



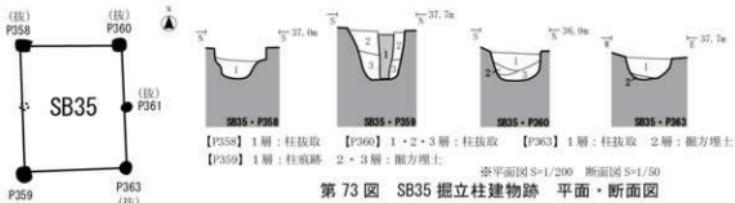
第71図 SB34 堀立柱建物跡 平面・断面図



第72図 SB35~39 挖立柱建物跡

【SB35 堀立柱建物跡】(第72・73・78図、第7-2・8-3表)

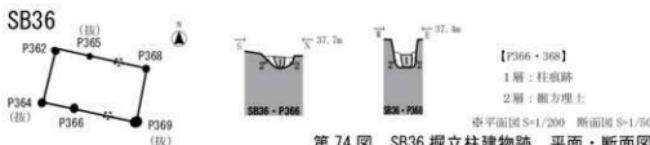
南北2間、東西1間の南北棟建物跡である。建物は、P358・359・360・361・363の5個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1個(P359)で柱痕跡を確認し、4個(P358・360・361・363)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長5.1m、柱間寸法は北から2.6m・2.5m、梁行が北側柱列で4.2mである。方向は、真北に対して西に3°傾く(N-3°-W)。柱穴は長軸40~61cmの円形・方形・楕円形で、深さは20~53cmである。柱痕跡は、長軸17cmの楕円形である。遺物はP358の柱抜取穴から土師器片が出土した。



第73図 SB35 堀立柱建物跡 平面・断面図

【SB36 堀立柱建物跡】(第72・74・78図、第7-2・8-3表)

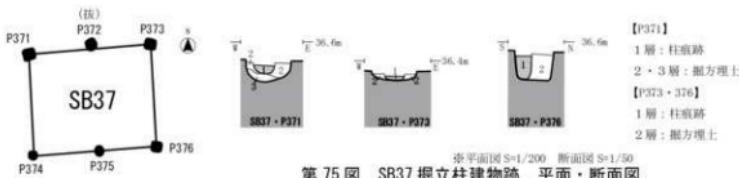
東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。建物は、P362・364・365・366・368・369の6個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個(P362・366・368)で柱痕跡を確認し、3個(P364・365・369)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長3.9m、柱間寸法は西から1.3m・1.3m(推定値)・1.3m(推定値)、梁行が西側柱列で2.3mである。方向は、真北に対して東に13°傾く(N-13°-E)。柱穴は長軸20~40cmの円形で、深さは2~28cmである。柱痕跡は、長軸11~14cmの楕円形である。遺物はP369の掘方埋土から土師器片が出土した。



第74図 SB36 堀立柱建物跡 平面・断面図

【SB37 堀立柱建物跡】(第72・75・78図、第7-2・8-3表)

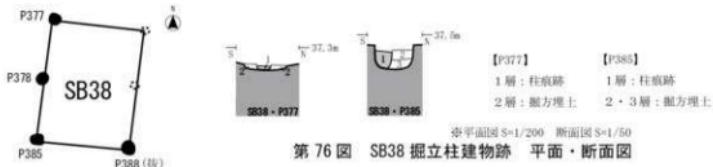
東西2間、南北1間の東西棟建物跡である。建物は、P371・372・373・374・375・376の6個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、4個(P371・373・375・376)で柱痕跡を確認し、2個(P372・374)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長5.0m、柱間寸法は西から2.6m・2.4m、梁行が西側柱列で4.2mである。方向は、真北に対して西に3°傾く(N-3°-W)。柱穴は長軸33~50cmの円形・方形・隅丸方形・楕円形で、深さは12~44cmである。柱痕跡は、長軸15~23cmの円形・楕円形である。遺物はP374の柱抜取穴から土師器片が出土した。



第75図 SB37 堀立柱建物跡 平面・断面図

【SB38 挖立柱建物跡】(第72・76・78図、第7-2・8-3表)

南北2間、東西1間の南北棟建物跡である。建物は、P377・378・385・388の4個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個(P377・378・385)で柱痕跡を確認し、1個(P388)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長5.0m、柱間寸法は北から2.5m・2.5m、梁行が南側柱列で3.7mである。方向は、真北に対して東に8°傾く(N-8°-E)。柱穴は長軸45~56cmの円形・隅丸方形で、深さは7~30cmである。柱痕跡は、長軸15~19cmの円形・梢円形である。



第76図 SB38 挖立柱建物跡 平面・断面図

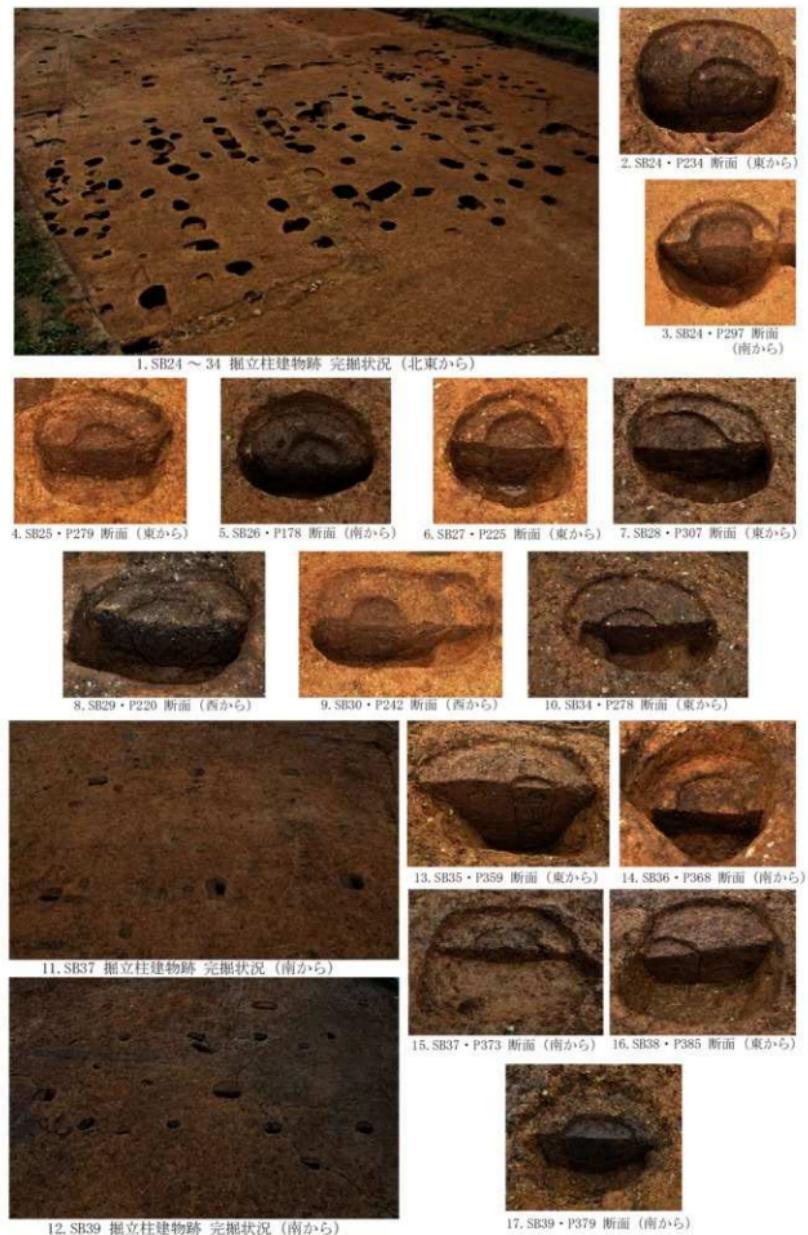
【SB39 挖立柱建物跡】(第72・77・78図、第7-2・8-3表)

東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。SD4、SK48と重複し、これらより新しい。建物は、P379・380・381・383・389・392・393・395の8個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、6個(P379・381・389・392・393・395)で柱痕跡を確認し、2個(P380・383)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長5.1m、柱間寸法は西から1.7m・1.7m・1.7m、梁行が東側柱列で3.6mである。方向は、真北に対して東に8°傾く(N-8°-E)。柱穴は長軸26~56cmの円形・梢円形で、深さは15~29cmである。柱痕跡は、長軸12~23cmの円形・梢円形である。



【P379・389・395】 1層：柱痕跡 2層：掘方埋土

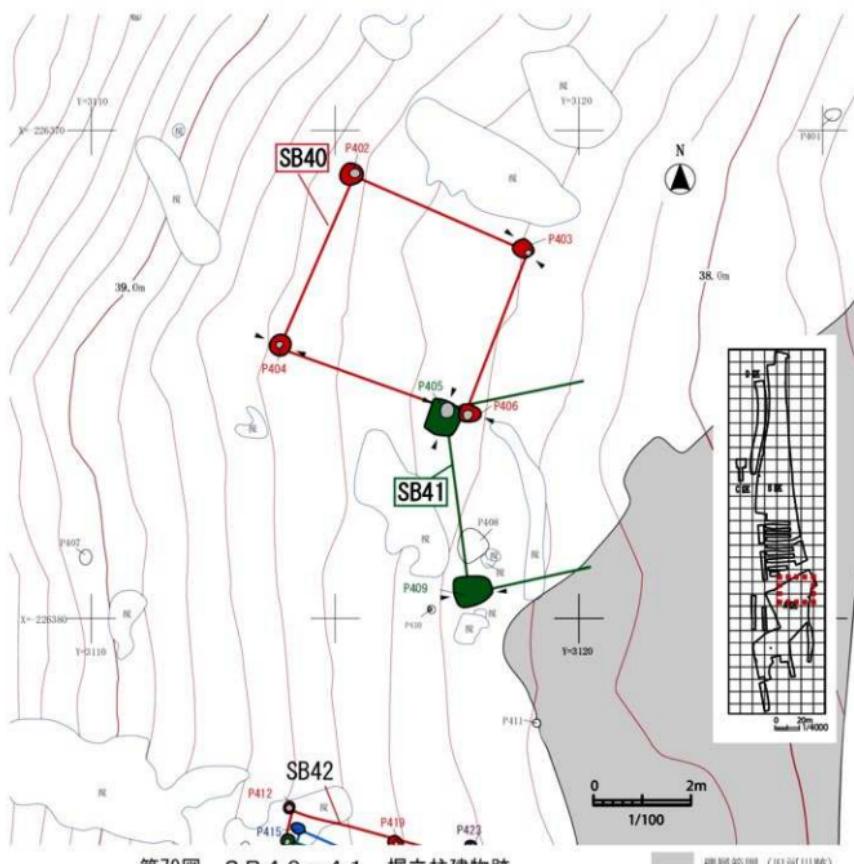
【P381】 1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土



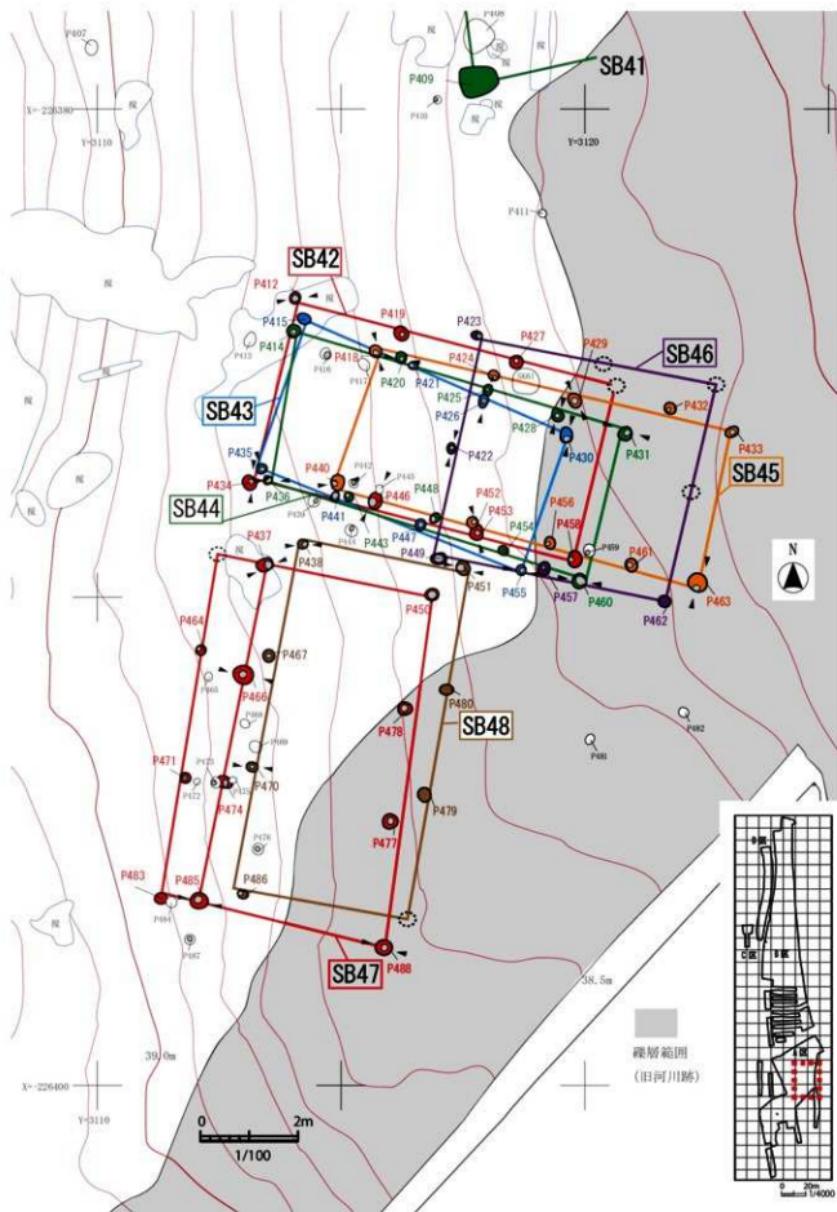
第78図 SB24～39 掘立柱建物跡

③A区建物跡 (第79~96図、第7-2、8-3・4表)

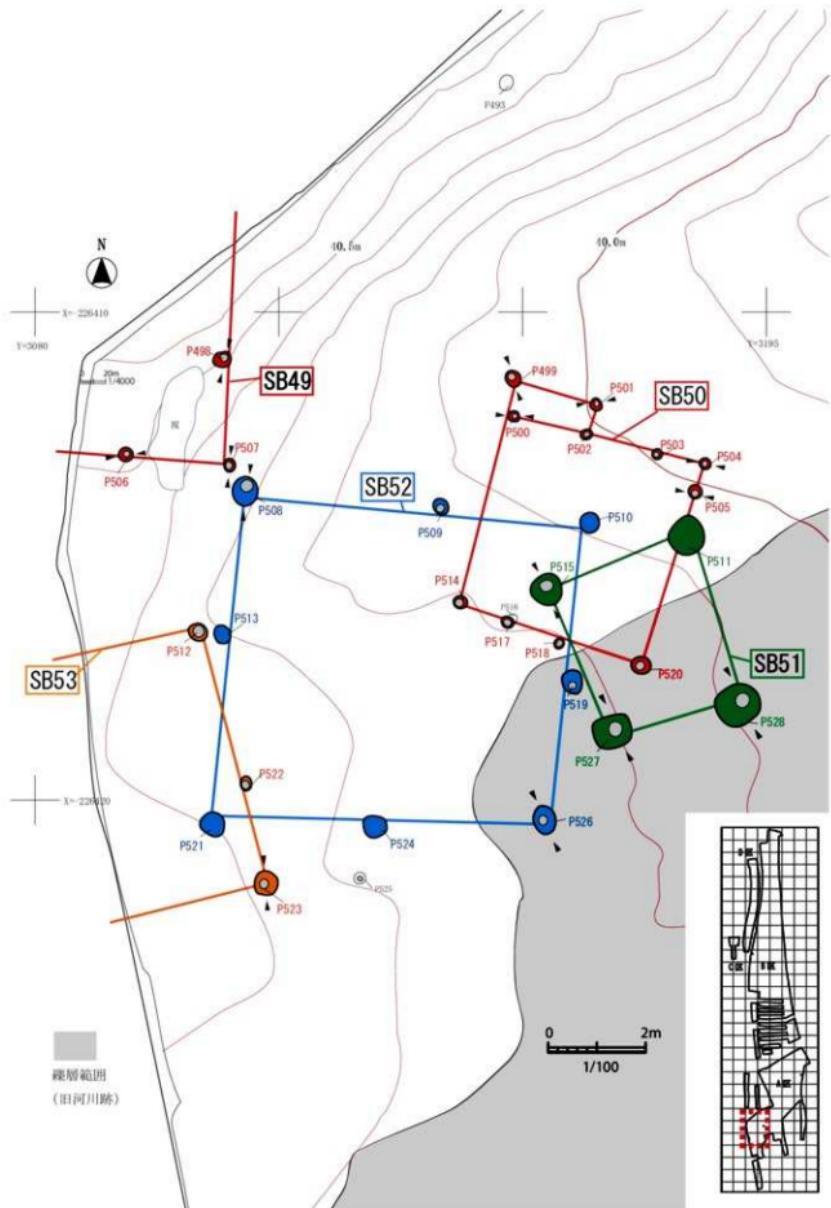
S B 40~53 掘立柱建物跡の計14棟を検出した。確認面はIV・Va層である。建物跡は、A調査区東半の標高38~39mの平坦面・緩斜面とA区西半の標高40m~41mの平坦面・緩斜面に立地している。



第79図 S B 4 0 ~ 4 1 掘立柱建物跡



第80図 SB42～48 据立柱建物跡



第81図 SB49~53 掘立柱建物跡

【SB40 挖立柱建物跡】(第 79・82・96 図、第 7-2・8-3 表)

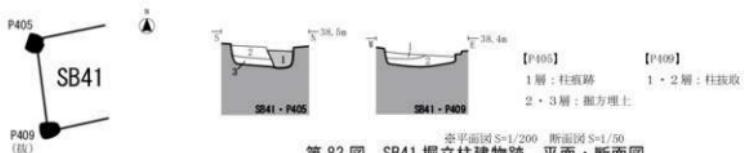
東西 1 間、南北 1 間の建物跡である。SB41 と重複し、これより新しい。建物は、P402・403・404・406 の 4 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、北側柱列で 4.0m、西側柱列で 3.7m である。方向は、真北に対して東に 22° 傾く (N-22°-E)。柱穴は長軸 41 ~46cm の円形・楕円形で、深さは 15~26cm である。柱痕跡は、長軸 14~22cm の円形である。遺物は、P404 の掘方埋土から縄文土器片が出土した。



第 82 図 SB40 挖立柱建物跡 平面・断面図 (平面上図 S=1/200 断面図 S=1/50)

【SB41 挖立柱建物跡】(第 79・83・96 図、第 7-2・8-3 表)

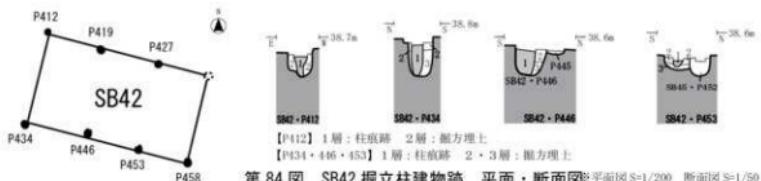
南北 1 間で東に延びる建物跡である。確認した柱穴は 2 個のみであったが、同じ調査区に同規模の建物が存在することから建物として認定した。建物東側の柱穴は後世の削平を受け、残存していないと考えられる。SB40 と重複し、これより古い。建物は、P405・409 の 2 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1 個 (P405) で柱痕跡を確認し、1 個 (P409) は柱が抜き取られていた。平面規模については、西側柱列で 3.8m である。方向は、真北に対して西に 12° 傾く (N-12°-W)。柱穴は長軸 68~73cm の隅丸方形・不整形で、深さは 20~25cm である。柱痕跡は、長軸 32cm の円形である。遺物は、P409 の柱抜取穴から土師器片が出土した。



第 83 図 SB41 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB42 挖立柱建物跡】(第 80・84・96 図、第 7-2・8-3 表)

東西 3 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。SB45、P445 と重複し、これらより古い。建物は、P412・419・427・434・446・453・458 の 7 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 6.7m、柱間寸法は西から 2.2m・2.4m・2.1m、梁行が西側柱列で 3.7m である。方向は、真北に対して東に 14° 傾く (N-14°-E)。柱穴は長軸 26~32cm の円形で、深さは 13~36cm である。柱痕跡は、長軸 10~18cm の円形である。



第 84 図 SB42 挖立柱建物跡 平面・断面図 (平面上図 S=1/200 断面図 S=1/50)

【SB43 堀立柱建物跡】(第 80・85・96 図、第 7-2・8-4 表)

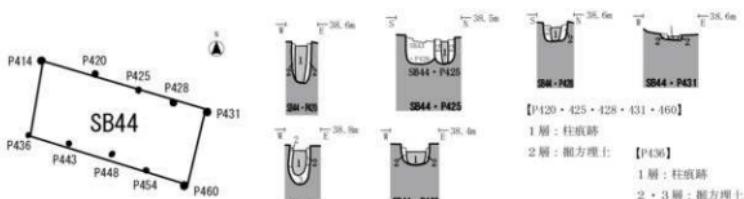
東西 3 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。SB44 と重複し、これより新しい。建物は P415・421・426・430・435・441・447・455 の 8 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1 個 (P421・426・430・435・441・447・455) で柱痕跡を確認し、1 個 (P415) は柱が切り取り、1 個 (P415) は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 5.7m、柱間寸法は西から 2.2m・1.6m・1.9m、梁行が東側柱列で 3.0m である。方向は、真北に対して東に 22° 傾く (N-22°-E)。柱穴は長軸 20~30cm の円形・楕円形で、深さは 7~39cm である。柱痕跡は、長軸 10~14cm の円形・楕円形である。



第 85 図 SB43 堀立柱建物跡 平面・断面図 平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

【SB44 堀立柱建物跡】(第 80・86・96 図、第 7-2・8-4 表)

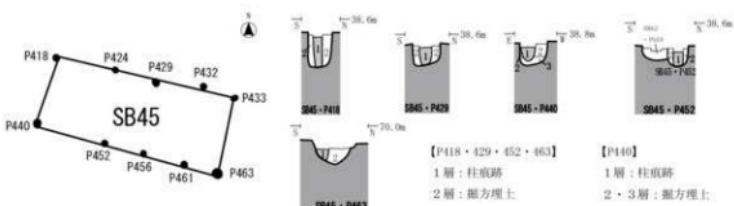
東西 4 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。SB43 と重複し、これより古い。建物は P414・420・425・428・431・436・443・448・454・460 の 10 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 6.9m、柱間寸法は西から 2.1m・1.9m・1.5m・1.4m、梁行が東側柱列で 3.2m である。方向は、真北に対して東に 16° 傾く (N-16°-E)。柱穴は長軸 20~30cm の円形で、深さは 9~40cm である。柱痕跡は、長軸 7~21cm の円形・楕円形である。



第 86 図 SB44 堀立柱建物跡 平面・断面図 平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

【SB45 堀立柱建物跡】(第 80・87・96 図、第 7-2・8-4 表)

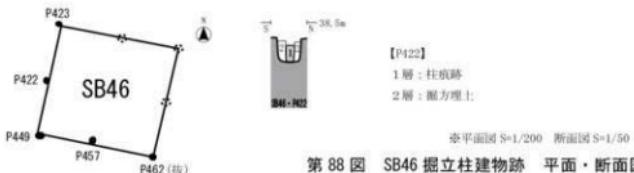
東西 4 間、南北 1 間の東西棟建物跡である。SB42 と重複し、これより新しい。建物は P418・424・429・432・433・440・452・456・461・463 の 10 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、桁行が北側柱列で総長 7.6m、柱間寸法は西から 2.6m・1.7m・2.0m・1.3m、梁行が東側柱列で 2.9m である。方向は、真北に対して東に 15° 傾く (N-15°-E)。柱穴は長軸 18~46cm の円形・楕円形で、深さは 9~32cm である。柱痕跡は、長軸 8~14cm の円形・楕円形である。



第 87 図 SB45 堀立柱建物跡 平面・断面図 平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

【SB46 堀立柱建物跡】(第80・88・96図、第7-2・8-4表)

東西2間、南北2間の建物跡である。建物はP422・423・449・457・462の5個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、4個(P422・423・449・457)で柱痕跡を確認し、1個(P462)は柱が抜き取られていた。平面規模については、南側柱列で総長4.8m、柱間寸法は西から2.2m・2.6m、西側柱列で総長4.6m、柱間寸法は北から2.4m・2.2mである。方向は、真北に対して東に11°傾く(N-11°-E)。柱穴は長軸20~28cmの円形・楕円形で、深さは7~28cmである。柱痕跡は、長軸8~19cmの円形・楕円形である。



第88図 SB46 堀立柱建物跡 平面・断面図

【SB47 堀立柱建物跡】(第80・89・96図、第7-2・8-4表)

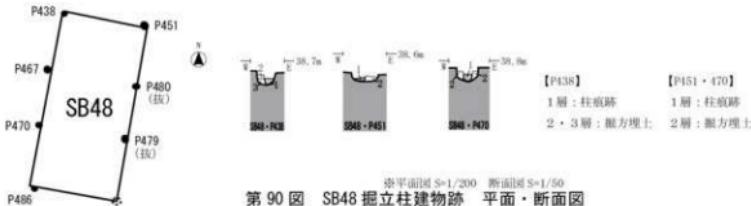
南北3間、東西1間の身舎の西側に底が1間付く南北棟建物跡である。P473・475・484と重複し、これらより古い。建物はP437・450・464・466・471・474・477・478・483・485・488の11個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、10個(P437・450・464・466・471・474・477・478・485・488)で柱痕跡を確認し、1個(P483)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長7.1m、柱間寸法は北から2.4m・2.3m・2.4m、梁行が南側柱列で3.8mである。西側の廂の出は0.7mである。方向は、真北に対して東に9°傾く(N-9°-E)。柱穴は長軸19~44cmの円形・楕円形で、深さは10~24cmである。柱痕跡は、長軸10~17cmの円形・楕円形である。



第89図 SB47 堀立柱建物跡 平面・断面図

【SB48 堀立柱建物跡】(第80・90・96図、第7-2・8-4表)

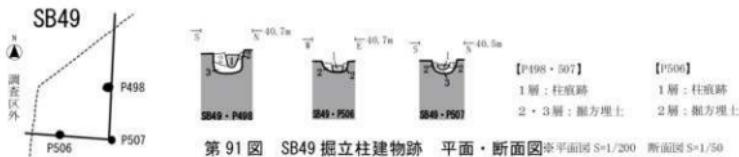
南北3間、東西1間の南北棟建物跡である。建物はP438・451・467・470・479・480・486の7個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、5個(P438・451・467・470・486)で柱痕跡を確認し、2個(P479・480)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長7.4m、柱間寸法は北から2.5m・2.3m・2.6m、梁行が北側柱列で3.3mである。方向は、真北に対して東に10°傾く(N-10°-E)。柱穴は長軸20~28cmの円形で、深さは5~21cmである。柱痕跡は、長軸9~18cmの円形・楕円形である。



第90図 SB48 堀立柱建物跡 平面・断面図

【SB49 挖立柱建物跡】(第 81・91・96 図、第 7-2・8-4 表)

東西 1 間以上、南北 1 間以上の建物跡である。建物西側は、調査区外へ延びている。建物は P498・506・507 の 3 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、南側柱列で総長 2.1m 以上、東側柱列で総長 2.1m 以上である。方向は、真北に対して東に 2° 傾く (N-2°-E)。柱穴は長軸 26~34cm の円形で、深さは 12~22cm である。柱痕跡は、長軸 14~16cm の円形・楕円形である。



第 91 図 SB49 挖立柱建物跡 平面・断面図※平面図 S=1/200 断面図 S=1/50

【SB50 挖立柱建物跡】(第 81・92・96 図、第 7-2・8-4 表)

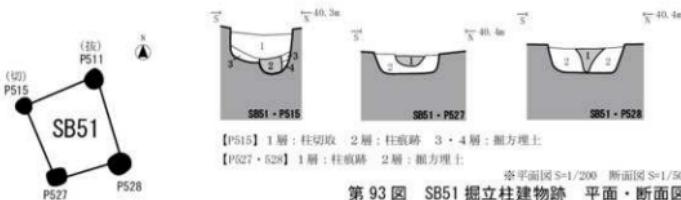
東西 3 間、南北 1 間の身舎の北側に張出しが付く東西棟建物跡である。P516 と重複し、これより新しい。建物は P499・500・501・502・503・504・505・514・517・518・520 の 11 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、桁行が南側柱列で総長 4.0m、柱間寸法は西から 1.1m・1.2m・1.7m、梁行が西側柱列で 3.7m である。北側の張出しが北側柱列からの出が 0.8m・東西 1.1m である。方向は、真北に対して東に 17° 傾く (N-17°-E)。柱穴は長軸 20~40cm の円形・楕円形で、深さは 6~24cm である。柱痕跡は、長軸 11~19cm の円形・楕円形である。遺物は、P501 の掘方埋土から土師器片が出土した。



第 92 図 SB50 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB51 挖立柱建物跡】(第 81・93・96・97 図、第 7-2・8-4 表)

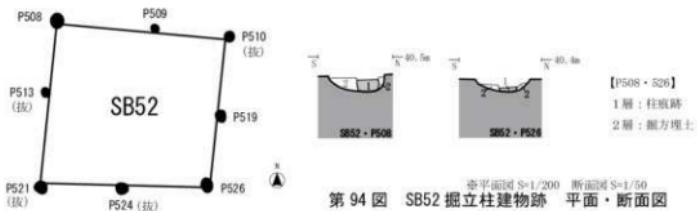
東西 1 間、南北 1 間の建物跡である。建物は P511・515・527・528 の 4 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3 個 (P515・527・528) で柱痕跡を確認し、1 個 (P511) は柱が切り取り、1 個 (P511) は柱が抜き取られていた。平面規模については、西側柱列で 3.4m、北側柱列で 2.8m である。方向は、真北に対して西に 21° 傾く (N-21°-W)。柱穴は長軸 67~84cm の円形で、深さは 25~45cm である。柱痕跡は、長軸 28~30cm の円形である。遺物は、P511 の柱抜取穴・掘方埋土から縄文土器片、土師器坏 (第 97 図 5~8)・甕、須恵器片が出土した。



第 93 図 SB51 挖立柱建物跡 平面・断面図

【SB52 挖立柱建物跡】(第 81・94・96・97 図、第 7-2・8-4 表)

東西 2 間、南北 2 間の建物跡である。建物は P508・509・510・513・519・521・524・526 の 8 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、4 個 (P508・509・519・526) で柱痕跡を確認し、4 個 (P510・513・521・524) は柱が抜き取られていた。平面規模については、北側柱列で総長 7.0m、柱間寸法は西から 4.0m・3.0m、西側柱列で総長 6.8m、柱間寸法は北から 3.2m・3.6m である。方向は、真北に対して東に 7° 傾く (N-7° -E)。柱穴は長軸 34~58cm の円形で、深さは 6~22cm である。柱痕跡は、長軸 15~19cm の円形である。遺物は、P510 の柱抜取穴から土師器坏 (第 97 図 4)・甕が出土した。



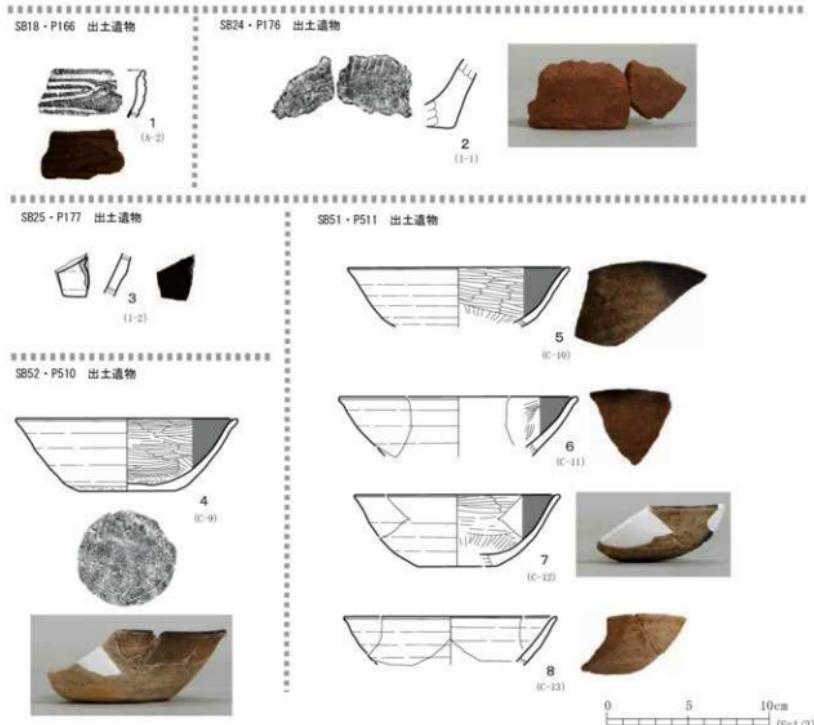
【SB53 挖立柱建物跡】(第 81・95・96 図、第 7-2・8-4 表)

南北 2 間で西に延びる建物跡である。建物西側は、調査区外へ延びている。建物は P512・522・523 の 3 個の柱穴で構成される。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。平面規模については、東側柱列で総長 5.3m、柱間寸法は北から 3.2m・2.1m である。方向は、真北に対して西に 14° 傾く (N-14° -W)。柱穴は長軸 25~48cm の円形で、深さは 6~14cm である。柱痕跡は、長軸 14~19cm の円形である。





第96図 SB40～53 挖立柱建物跡



No.	類	種別	酒種	現存	特徴【外法（外面・内面）→内調（外面・内面）→外法】その他の特徴の欄に記載】	基盤
1	SB18・P166 柱方理上	陶文土器	鉢	口縁部	外面：実形工文子、小波状口縁。内面：口縁部沈継、色調：内外面・褐色(7.5IR10/3)。法量：残存0.4cm	A-2
2	SB24・P176 柱頭部	陶器	鉢	外面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(SB5/4)、内面・にぶい褐色(7.5IR5/4)。法量：残存高4.3cm・底厚1.2~2.1cm、底面：厚壁、17世紀代	C-1	
3	SB25・P177 柱抜取穴	陶器	小型甕	外面：鉄錆に黒釉流し・ロクロナデ、内面：鉄錆・ロクロナデ。色調：内外面・暗褐色(7.5IR2/3)。法量：底厚0.5~0.6cm、底面不明、18~19世紀代	C-2	
4	SB52・P510 柱抜取穴	土師器	甕	口縁部 ~底部	外面：ロクロナデ・胴部下端斜面へラ削り、底部剥離系切り→凹削へラ削り再調整。内面：ヘラミガキ・黑色処理、色調：外面・にぶい黄褐色(10IR6/3)、内面・黑色(82/0)。法量：口径(13.6)cm・高さ4.5cm・底径5.9cm・底厚0.3~0.7cm	C-9
5	SB51・P511 柱抜取穴	土師器	甕	口縁部 ~胴部	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黑色処理。色調：外面・にぶい黄褐色(10IR6/3)、内面・黑色(82/0)。法量：口径(13.6)cm・残存高4.7cm・底厚0.3~0.5cm	C-10
6	SB51・P511 柱抜取穴	土師器	甕	口縁部 ~胴部	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黑色処理、色調：外面・にぶい褐色(7.5IR5/4)、内面・黑色(82/0)。法量：口径(14.6)cm・残存高3.7cm・底厚4.4~6.7cm	C-11
7	SB51・P511 柱抜取穴	土師器	甕	口縁部 ~底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し削痕不明、内面：ヘラミガキ・黑色処理。色調：外面・にぶい黄褐色(10IR6/3)、内面・黑色(82/0)。法量：口径(12.6)cm・高さ4.4cm・底径(4.8)cm・底厚0.3~0.7cm	C-12
8	SB51・P511 柱抜取穴	土師器	甕	口縁部 ~胴部	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ。色調：外面・にぶい黄褐色(10IR7/4)、内面・にぶい褐色(7.5IR7/4)。法量：口径(13.0)cm・残存高3.0cm・底厚0.4~0.5cm、赤壁土器	C-13

第97図 SB18・24・25・51・52 挖立柱建物跡出土遺物

(3)溝跡

B区で4条、C区で1条、D区で1条、合計6条検出した。このうち、SD1～3・5・6は、位置関係から同一の溝跡であると考えられる。それぞれの特徴等については第9表にまとめた。

第9表 的場遺跡 溝跡 属性表

溝番No.	検出長 (m)	方向	断面 (m)			断面形	堆積土	出土遺物	備考
			上幅	下幅	深さ				
SD1	12.24	南北	0.74～1.03	0.40～0.56	0.12～0.22	皿状	自然	繩文土器・土師器 砥石	SK27より新しい。
SD2	9.96	南北	0.50～1.16	0.45～0.90	0.08～0.18	皿状	自然	土師器	SK2、SK39より新しい。
SD3	3.08	東西	0.50～0.60	0.35～0.40	0.10～0.12	皿状	自然	—	SK38より新しい。
SD4	34.72	南北	2.51～5.36	0.60～2.08	0.38～0.58	皿状	自然	弥生土器・磁石 土師器・須恵器	P370、P382、P384、P394、SK39・P383、SK39・P393、SK39・P295 より古い。 SK54、SK55、SK56より新しい。
SD5	7.55	東西	0.82～0.90	0.50～0.68	0.26～0.34	U字形	自然	土師器・須恵器	SI4より新しい。
SD6	4.10	東西	0.65～0.75	0.40～0.44	0.25	U字形	自然	—	P545より新しい。

【SD1・2・3・5・6 溝跡】(第98・99図、第9表)

B区中央西側・C区中央・D区南端の標高36m～37mの平坦面に立地する。確認面はVa・b層である。

SD1は、北一南方向に延びる溝で、溝の北側は後世の搅乱により削平を受け残存していない。SK27と重複し、これより新しい。検出長は約12.24mで、上幅0.74～1.03m、下幅0.40～0.56m、深さ0.12～0.22mである。底面の標高は、溝の南部が高く、北部が低い。溝の断面形は皿状で、堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から繩文土器片、土師器片、砥石が出土した。

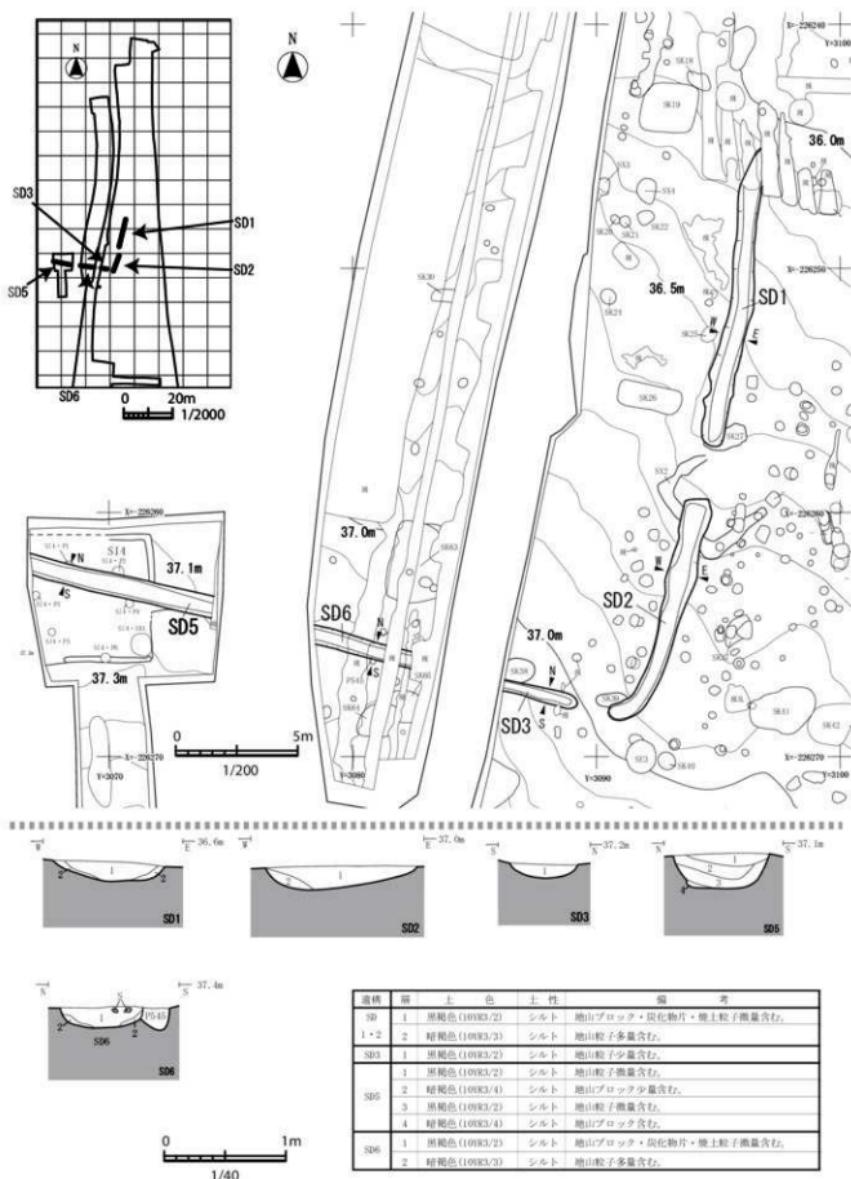
SD2は、北一南方向に延びる溝である。SK39、SX2と重複し、これらより新しい。検出長は約9.96mで、上幅0.50～1.16m、下幅0.46～0.90m、深さ0.08～0.18mである。底面の標高は、溝の南部が高く、北部が低い。溝の断面形は皿状で、堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から土師器片が出土した。

SD3は、東一西方向に延びる溝で、溝の西側は調査区外に続いている。SK38と重複し、これより新しい。検出長は約3.08mで、上幅0.50～0.60m、下幅0.35～0.40m、深さ0.10～0.12mである。底面の標高は、溝の西部が高く、東部が低い。溝の断面形は皿状で、堆積土は1層で、自然堆積である。

SD5は、東一西方向に延びる溝で、溝の西側・東側は調査区外に続いている。SI4と重複し、これより新しい。検出長は約7.55mで、上幅0.82～0.90m、下幅0.50～0.68m、深さ0.26～0.34mである。底面の標高は、溝の西部が高く、東部が低い。溝の断面形はU字形で、堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、1・3層・堆積土から土師器片、3層から須恵器片が出土した。

SD6は、東一西方向に延びる溝で、溝の西側・東側は調査区外に続いている。P545と重複し、これより新しい。検出長は約4.10mで、上幅0.65～0.75m、下幅0.40～0.44m、深さ0.25mである。底面の標高は、溝の西部が高く、東部が低い。溝の断面形はU字形で、堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。

SD1～3・5・6は、位置関係や方向、堆積土の状況が類似することから、一連の溝跡であると考えられる。



第98図 SD1・2・3・5・6 溝跡(1)



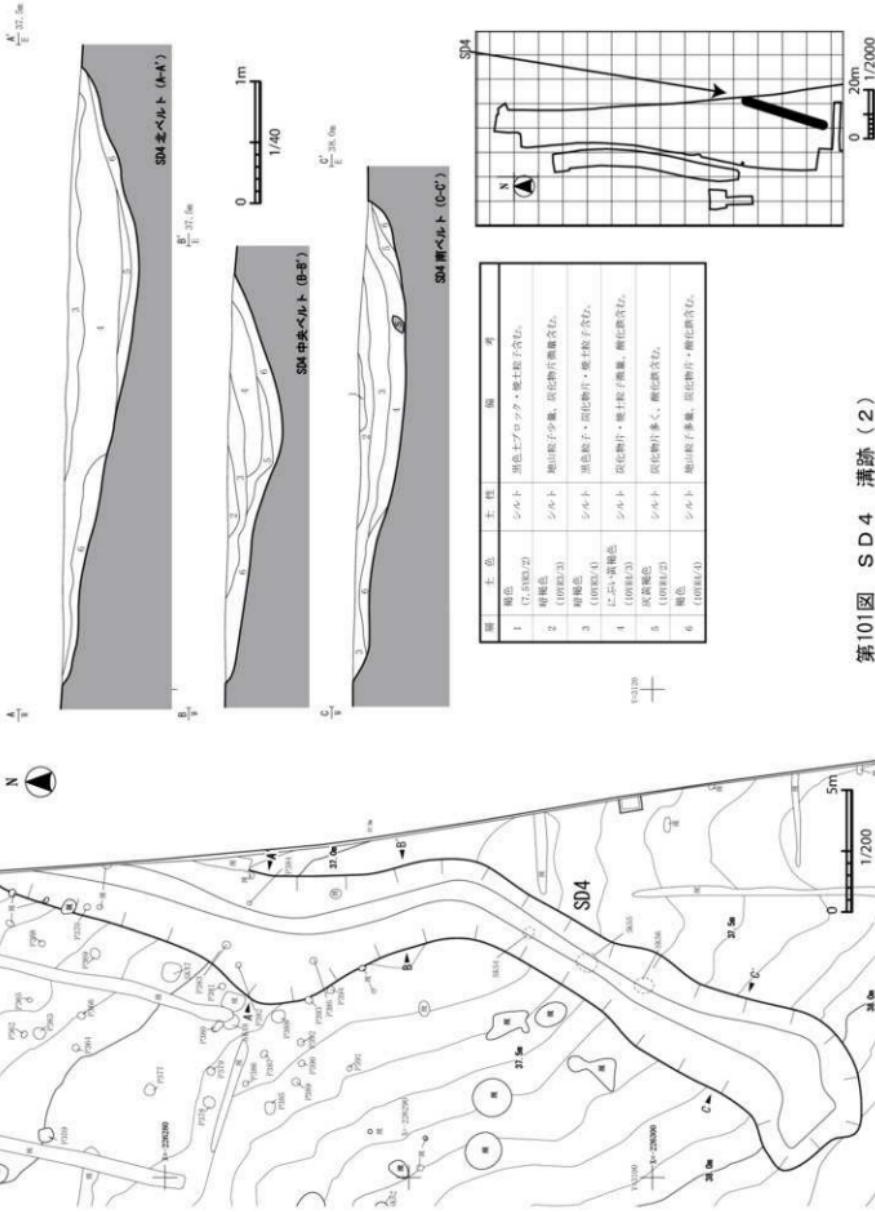
第99図 SD 1・2・3・5・6 溝跡 (2)

【SD 4 溝跡】(第100~105図・第9表)

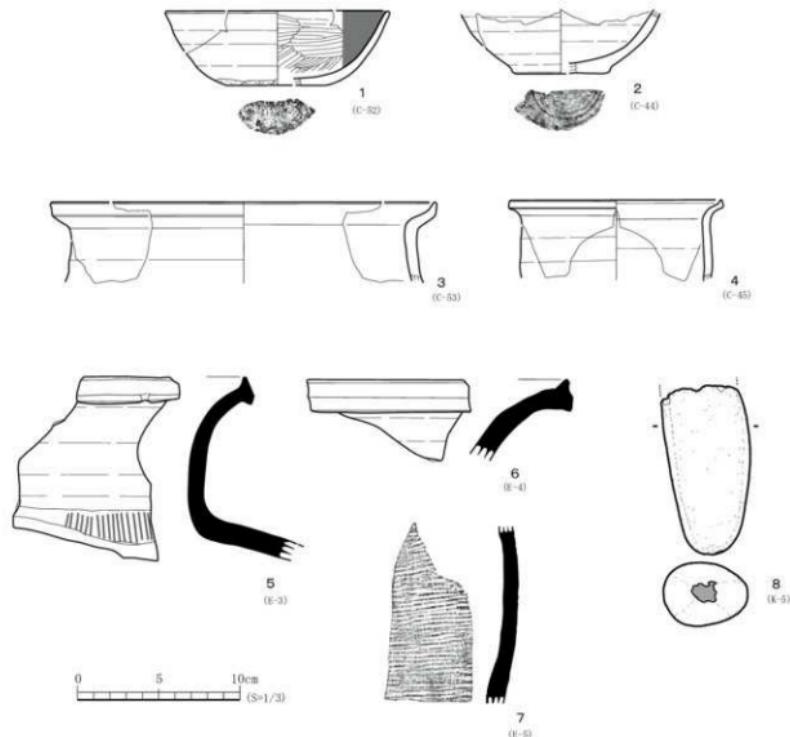
B区中央東端の標高36.5m~38.0mの平坦面に立地する。確認面はVa・b層である。北~南方向に延びる溝で、溝の北部分は調査区外へ続いている。SB39、SK54・55・56、P370・382・384・394と重複し、SB39、P370・382・384・394より古く、SK54・55・56より新しい。検出長は約34.72mで、上幅2.51~5.36m、下幅0.60~2.08m、深さ0.38~0.58mである。底面の標高は、溝の南部が高く、北部が低い。溝の断面形は皿状で、堆積土は6層に分かれ、いずれも自然堆積である。4層以下の堆積土には酸化鉄が比較的多く認められた。遺物は、1~2層から土師器(非クロロ・クロロ成形)・須恵器・石器、3~6層から弥生土器・土師器(非クロロ)が出土しており、遺物の大半は土師器(1,519点中1,512点)である。土師器の出土状況から、堆積土の1~2層にはクロロ成形の古代の土師器が含まれ、3層以下には古墳時代の土師器のみが含まれていることから、溝部分は長期間にわたり窪地状になっていたと思われる。これらの出土遺物のうち、図示できたものは、弥生土器(第104図38)、非クロロ成形の土師器壊・甕・壺・瓶、クロロ成形の土師器壊・甕(第102~104図)、須恵器甕(第102図5~7)、敲石(第102図8)である。



第100図 SD 4 溝跡 (1)



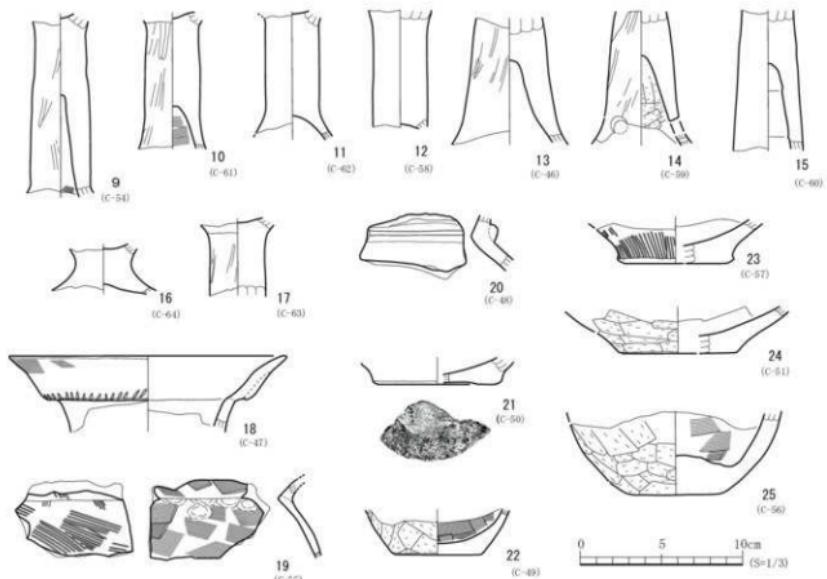
第101図 SD4 溝跡 (2)



No.	層	種別	器種	残存	特徴【括弧(外側・内側)】		参考	登録
					外側	内側		
1	SD4 1・2層	土師器	环	口縁部 ～底部	外側：ロクロナデ・底部下端持ちへた削り・底部切り離し技術不明(崩壊)→削出し切り無調整？・内側：ヘラミガキ・黒色処理。	色調：外側にぶい褐色(7.5YR5/4)、内側・黒色(3Z2/0)。法量：口径(13.0)cm・底高4.6cm・底径(6.2)cm・厚さ0.3～0.6cm	C-52	
2	SD4 1層	土師器	环	胸部 ～底部	外側：ロクロナデ・底部回転系切り無調整、内側：ロクロナデ。	色調：内外面にぶい黄褐色(10YR8/4)、法量：底径(6.0)cm・厚さ0.3～0.6cm	C-44	
3	SD4 1・2層	土師器	甕	口縁部 ～胸部	外側：ロクロナデ・内側：ロクロナデ、色調：内外面にぶい褐色(7.5YR5/3)。	法量：口径(23.0)cm・残存高5.0cm・底径(10.0)cm・厚さ0.4～0.8cm	C-53	
4	SD4 1層	土師器	甕	口縁部 ～胸部	外側：ロクロナデ・内側：ロクロナデ、色調：内外面にぶい黄褐色(10YR7/4)、法量：口径(13.0)cm・残存高5.0cm・底径(10.0)cm・厚さ0.3～0.5cm		C-45	
5	SD4 1・2層	須恵器	甕	口縁部 ～胸部	外側：ロクロナデ・胸部平行タタキ、内側：ロクロナデ・胸部ナデ、色調：内外面にぶい黄褐色(10YR6/3)、法量：底径(8.8)cm・厚さ1.4cm		E-3	
6	SD4 1・2層	須恵器	甕	口縁部	外側：ロクロナデ、内側：ロクロナデ。色調：内外面・黄褐色(2.8Y6/1)、法量：底径1.0～1.2cm		E-4	
7	SD4 1・2層	須恵器	甕	胸部	外側：平行タタキ、内側：同心円凹凸其瓶ナデ、色調：内外面・黄灰色(2.5Y5/1)、法量：底径0.8～1.0cm		E-5	

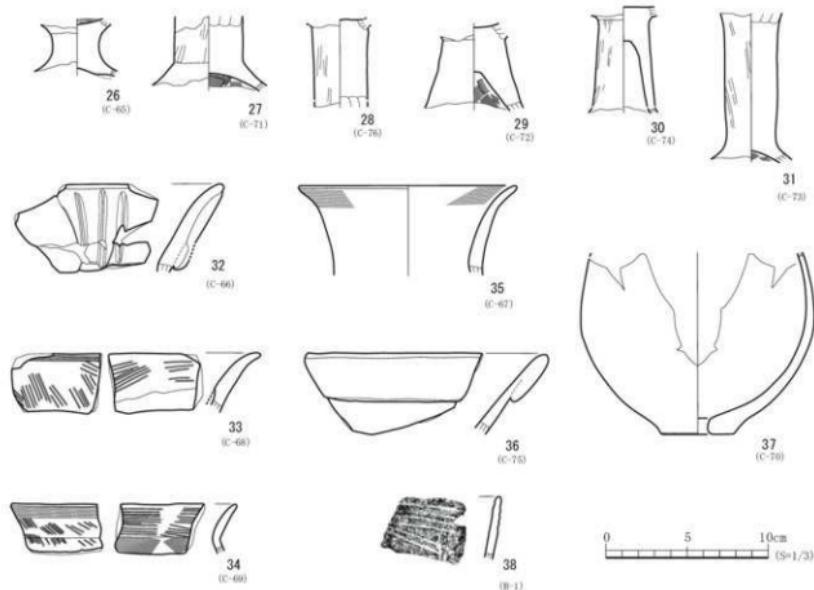
No.	層	器種	石材	残存部位	法量(mm)・(g)			参考	登録
					長さ	幅	厚さ		
8	SD4・2層	鐵石	安山岩	端部欠損	10.34	5.10	3.91	340	K-5

第102図 SD 4 溝跡(3)-1・2層出土遺物(1)-



No.	番	種別	器種	残存	特徴【既往（外側・内面）→色調（外側・内面）→底面→その他の特徴の順に記述】	備註
9	SD4 1・2層	土師器	高环	脚部	外側：磨滅のため不明。内面：ナデ。色調：外側面。にぶい褐色(7.SV85/4)。法量：残存高11.2cm・底厚0.9cm～1.7cm	C-54
10	SD4 2層	土師器	高环	脚部	外側：ヘラミガキ・磨減。内面：ナデ。色調：外側面・褐色(7.SV85/4)。法量：残存高8.4cm・底厚0.5～1.2cm	C-61
11	SD4 2層	土師器	高环	脚部	外側：磨滅のため不明。内面：磨滅のため不明。色調：外側。にぶい褐色(5.VH4/3)。法量：残存高7.9cm・底厚0.4～1.1cm	C-62
12	SD4 2層	土師器	高环	脚部	外側：磨滅のため不明。内面：磨滅のため不明。色調：外側面・明赤褐色(5.VH5/6)。法量：残存高7.2cm	C-58
13	SD4 1層	土師器	高环	脚部	外側：ヘラミガキ(磨減)。内面：磨滅のため不明。色調：外側。にぶい黄褐色(10.VH7/3)。内面：にぶい褐色(7.SV85/4)。法量：残存高3.8cm・底厚0.7～1.7cm	C-46
14	SD4 2層	土師器	高环	脚部	外側：ヘラ削り・磨減・円筒三分通し。内面：ヘラ削り。色調：外側面・明赤褐色(5.VH5/6)。法量：残存高8.5cm・底厚0.6～1.4cm	C-59
15	SD4 2層	土師器	高环	脚部	外側：磨滅のため不明。内面：磨滅のため不明。色調：外側面・明赤褐色(5.VH5/6)。法量：残存高8.7cm・底厚0.7～1.2cm	C-60
16	SD4 2層	土師器	高环	脚部	外側：磨滅のため不明。内面：磨滅のため不明。色調：外側。にぶい褐色(7.SV85/4)。内面：明赤褐色(5.VH5/6)。法量：残存高3.0cm・底厚0.6～1.5cm	C-64
17	SD4 2層	土師器	高环	脚部	外側：ヘラミガキ・磨減。色調：外側面・明赤褐色(5.VH5/6)。法量：残存高4.7cm・脚厚1.0～2.6cm	C-63
18	SD4 1層	土師器	甕	口縁部 ～底部	外側：口縁部ヨコギザワ・複合口縁(肥厚部にキザイ)・磨減。内面：磨滅のため不明。色調：外側面・明赤褐色(2.5.VH5/6)。法量：口径(17.0cm)・残存高4.7cm・底厚0.4～0.8cm	C-47
19	SD4 1・2層	土師器	甕or壺	甕部 ～脚部	外側：ハケメ。内面：ヘラナダ・泡オサエ。色調：外側面・灰黄色(2.5.VH5/1)。法量：器厚0.4～0.9cm	C-55
20	SD4 1層	土師器	甕or壺	甕部	外側：磨滅と脚部表面に粘帶付・磨滅。内面：磨滅のため不明。色調：外側面。にぶい黄褐色(10.VH5/3)。法量：器厚0.7～0.8cm	C-48
21	SD4 1層	土師器	甕or壺	底部	外側：磨滅のため不明・底部輪台技術。内面：磨滅のため不明。色調：外側・明赤褐色(2.5.VH5/6)。内面・褐色(7.5.VH4/3)。法量：底径(6.0cm)・残存高1.7cm・底厚0.5～1.4cm	C-50
22	SD4 1層	土師器	甕or壺	底部	外側：ヘラ削り。内面：ヘラナダ。色調：外側面。にぶい褐色(7.5.VH5/4)。法量：底径6.3cm・残存高2.8cm・底厚0.4～1.2cm	C-49
23	SD4 1・2層	土師器	甕or壺	底部	外側：ハケメ(磨減)。内面：磨滅のため不明。色調：外側面。にぶい褐色(7.5.VH5/4)。法量：底径(6.0cm)・残存高3.7cm・底厚0.6～1.3cm	C-57
24	SD4 1層	土師器	甕or壺	底部	外側：ヘラ削り。内面：磨滅のため不明。色調：外側・黑褐色(7.SV85/1)。内面：にぶい褐色(7.5.VH5/3)。法量：底径(7.2cm)・残存高2.9cm・底厚0.6～1.5cm	C-51
25	SD4 1・2層	土師器	甕or壺	底部	外側：ヘラ削り。内面：ヘラナダ。色調：外側。にぶい赤褐色(6.5.VH4/3)。内面・灰褐色(5.VH4/2)。法量：底径5.8cm・残存高3.1cm・底厚0.9～2.4cm	C-56

第103図 S D 4 溝跡 (4) - 1・2層出土遺物 (2) -



No.	層	種別	部位	残存	特徴【柱底（外面・内面）→柱頭（外面・内面）→柱頂→その他の特徴の順に記載】		写録
					外表面	内表面	
26	Sd4 3層	土師器	高环	脚部	外表面：磨滅のため不明。内面：磨滅・外周へラミガキ。色調：外面・にぶい褐色(7.0YR5/4)、内面・にぶい赤褐色(2.5YR4/0)。法量：残存高3.4cm・基厚0.6~1.1cm		C-65
27	Sd4 4層	土師器	高环	脚部	外表面：ヘラミガキ・磨滅。内面：ヘラナダ。色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)。法量：残存高4.6cm・基厚0.5~1.2cm		C-71
28	Sd4 5~6層	土師器	高环	脚部	外表面：ヘラミガキ・磨滅・中実。内面：磨滅のため不明。色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：残存高5.5cm・基厚3.2cm		C-76
29	Sd4 4~6層	土師器	高环	脚部	外表面：磨滅のため不明。内面：ヘラナダ。色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)。内面・褐色(7.5YR4/0)。法量：残存高5.4cm・基厚1.0~2.7cm		C-72
30	Sd4 4~6層	土師器	高环	脚部	外表面：ヘラミガキ・磨滅。内面：磨滅のため不明。色調：内外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)。法量：残存高6.0cm・基厚0.5~2.1cm		C-74
31	Sd4 4~6層	土師器	高环	脚部	外表面：ヘラミガキ・磨滅。内面：ナダ。色調：外面・明褐色(7.0YR5/6)、内面・黒褐色(7.0YR3/1)。法量：残存高9.2cm・基厚0.6~3.2cm		C-73
32	Sd4 3層	土師器	壺	口縁部	外表面：磨滅・頸部隆筋（椎状浮え・3本1対）付見。内面：磨滅のため不明。色調：内外面・にぶい黄褐色(10YR6/3)。法量：基厚0.6~0.9cm		C-66
33	Sd4 3層	土師器	壺或壺	口縁部	外表面：ハケメタコナデ・頸部。内面：ハケメ・磨滅。色調：内外面・にぶい褐色(7.0YR5/4)。法量：基厚0.5~0.8cm		C-68
34	Sd4 3層	土師器	壺或壺	口縁部	外表面：口沿部ヨコナデ・頸部ハケメ。内面：ハケメ・ヘラナダ。色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)。内面・にぶい褐色(5YR5/3)。法量：基厚0.2~0.6cm		C-69
35	Sd4 3層	土師器	壺	口縁部	外表面：口沿部ヨコナデ・磨滅。内面：口沿部ヨコナデ・磨滅。色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR6/4)。法量：口径13.4cm・残存高5.6cm・基厚0.4~0.9cm		C-67
36	Sd4 4~6層	土師器	壺	口縁部	外表面：磨滅のため不明・複合口縁。内面：磨滅のため不明。色調：内外面・にぶい褐色(7.0YR5/4)。法量：基厚0.6~1.1cm		C-75
37	Sd4 4層	土師器	壺	口縁部 ～底部	外表面：磨滅のため不明・底部背乳。内面：磨滅のため不明。色調：内外面・にぶい褐色(7.0YR5/4)。法量：底径4.1cm・残存高11.2cm・基厚0.3~1.0cm。サイズ：底径2.5cm以下		C-70
38	Sd4 4層	弦生土器	鉢	口縁部	外表面：変形工芸・磨滅。内面：口縁部底線・磨滅。色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：基厚0.5cm。弦生部後半?		B-1

第104図 S D 4 溝跡 (5) - 3~6層出土遺物-



第105図 S D 4 溝跡（6）-出土遺物写真-

(4) 土坑・井戸跡

土坑 65 基、井戸跡 3 基を検出した。それぞれの特徴等については第 10 表にまとめた。

第10表 的場遺跡 土坑・井戸跡 属性表

遺構No.	平面形	縦横 (m)	深さ (m)	断面形	埋埴土	出土遺物	備考
SK 1	長方形	0.99×0.45	0.23	直立形	人馬	—	SK1より新しい。
SK 2	長方形	0.75×0.46	0.39	直立形	人馬	—	—
SK 3	長方形	1.06×0.35	0.33	直立形	自然	—	—
SK 4	椭円形	0.60×0.45	0.22	U字形	自然	—	—
SK 5	圓丸長方形	3.40×1.14	0.60(10.79)	直立形	自然	—	第1穴、底面にP有。
SK 6	椭円形?	0.68×0.47	0.25	U字形	自然	—	—
SK 7	椭円形	0.75×0.55	0.16	直立	自然	土師器	—
SK 8	圓丸長方形	1.76×0.91	0.42(9.97)	直立形	自然	調文土器	第1穴、底面にP有。
SK 9	圓丸長方形	1.40×0.56	0.47(6.88)	直立形	自然	—	第1穴、底面にP有。
SK 10	圓丸長方形	1.37×0.50	0.54(6.73)	直立形	i+2層：人馬 3層：自然	調文土器	第1穴、底面にP有。
SK 11	円形	0.70×0.60	0.40	U字形	自然	土師器	—
SK 12	椭円形	0.74×0.36	0.18	直立形	自然	土師器	P12より古い。
SK 13	円形	0.53×0.51	0.36	U字形	自然	土師器	—
SK 14	不整形	0.78×0.66	0.46	U字形	自然	石臼	P14より古い。
SK 15	圓丸長方形	0.78×0.74	0.27	直立形	自然	土師器	—
SK 16	圓丸長方形?	0.52×0.62	0.54(6.85)	直立形	自然	—	第1穴、底面にP有。
SK 17	圓丸長方形	1.44×0.56	0.38(5.95)	直立形	自然	—	第1穴、底面にP有。
SK 18	不整形	0.97×0.43	0.37	直立形	自然	—	—
SK 19	圓丸長方形	2.11×2.01	0.17	直立	自然	土師器	—
SK 20	円形	0.28×0.26	0.07	U字形	自然	土師器	S20より新しい。
SK 21	円形	0.45×0.42	0.26	U字形	人馬	土師器	S21より古い。
SK 22	椭円形	0.76×0.62	0.20	直立	人馬	土師器	—
SK 23	円形	1.15×1.07	0.47	直立	自然	土師器	中央部に窪み有。
SK 24	円形	0.63×0.56	0.13	直立形	自然	土師器	—
SK 25	円形	0.60×0.58	0.23	U字形	自然	土師器	—
SK 26	圓丸長方形	2.67×0.91	0.24	直立形	自然	—	底面凸凹。
SK 27	圓丸長方形	1.85×0.82	0.19	直立	自然	—	底面部分的に凹凸有。S27より古い。
SK 28	圓丸長方形	1.16×0.55	0.28(6.51)	直立形	自然	—	第1穴、底面にP有。
SK 29	円形	0.53×0.42	0.26	U字形	自然	土師器	—
SK 30	圓丸長方形?	0.90×0.59	0.25(6.55)	—	自然	—	第1穴、底面にP有。
SK 31	圓丸長方形	1.44×0.40	0.20	U字形	人馬	—	P212, P211, SH25・P262, SH26・P263より古い。
SK 32	圓丸長方形	1.45×0.68	0.33	不整形	自然	—	SH27・P299, SH25・P260, SH23より古い。底面に凹凸。
SK 33	円形	1.20×1.10	0.43	U字形	自然	—	SH25・P260より古い。SH25より新しい。
SK 34	椭円形?	0.52×0.52	0.09	直立	人馬	—	SH24・P271, SH25・P272より古い。
SK 35	圓丸長方形?	0.80×0.51	0.11	—	人馬	—	SH26・P275, SH25・P276より古い。
SK 36	圓丸長方形	1.28×0.90	0.44	—	人馬	—	SH25・P281, SH23・P280より古い。
SK 37	不整形	0.60×0.36	0.15	直立形	自然	—	SH21・P214, P216より古い。
SK 38	椭円形?	(1.10×1.00)	0.17	直立	自然	調文土器・土師器	SH24より古い。底面に凹凸。
SK 39	圓丸長方形	1.20×0.90	0.35	U字形	自然	—	SH25より古い。底面に凹凸。
SK 40	円形	0.72×0.69	0.19	直立形	人馬	—	—
SK 41	不整形	2.73×1.77	0.17	直立	自然	陶器	SK42より古い。SK23・P244より新しい。
SK 42	椭円形	2.23×1.76	0.16	直立	自然	陶器	—
SK 43	円形?	0.50×0.30	0.16	直立	自然	—	—
SK 44	円形	0.90×0.72	0.15	直立	自然	石器	—
SK 45	不整形	(1.90×1.24)	0.14	直立	自然	—	P350より古い。
SK 46	圓丸長方形?	(1.27×0.55)	0.25(6.50)	直立形	自然	—	第1穴、底面にP有。
SK 47	椭円形	0.75×0.61	0.21	直立	自然	—	—
SK 48	円形?	0.70×0.50	0.25	不整形	自然	—	SH24・P280より古い。底面に凹凸。
SK 49	圓丸長方形	1.21×0.38	0.17(6.65)	直立形	自然	—	第1穴、底面にP有。
SK 50	圓丸長方形	1.25×0.32	0.45(6.60)	直立形	自然	—	第1穴、底面にP有。
SK 51	椭円形	1.00×0.90	0.23	直立	自然	調文土器	—
SK 52	圓丸形	0.51×0.50	0.14	直立形	自然	—	—
SK 53	圓丸形	0.77×0.64	0.51	直立形	自然	土師器	—
SK 54	圓丸形	0.47×0.46	0.11	U字形	自然	—	SH24より古い。
SK 55	圓丸形	0.39×0.79	0.26	不整形	自然	—	SH24より古い。
SK 56	椭円形	0.84×0.64	0.13	直立	自然	土師器	SH24より古い。
SK 57	圓丸形	0.74×0.36	0.18	U字形	自然	—	—
SK 58	椭円形	0.75×0.56	0.15	直立	人馬	土師器	P297より古い。SH23, P296より新しい。
SK 59	不整形	0.72×0.50	0.18	直立	人馬	土師器	SH23より古い。
SK 60	椭円形	0.50×0.44	0.26	U字形	人馬	土師器	SH23より古い。
SK 61	椭円形	0.60×0.49	0.10	直立	自然	—	—
SK 62	椭円形	0.75×0.60	0.14	直立	人馬	土師器	—
SK 63	椭円形	3.20×2.10	0.26	直立	人馬	—	P549, P542より古い。P541より新しい。
SK 64	椭円形	2.00×1.40	0.78	U字形	自然	調文土器	SH25より新しい。
SK 65	椭円形?	(1.30×1.20)	0.20	直立	自然	—	SH24より古い。
SE 1	円形	1.35×1.20	0.67	直立形	1~4層：自然, 5~11層：人馬	—	—
SE 2	円形	1.22×1.06	1.16	箱型	自然	—	—
SE 3	円形	1.36×1.30	3.34	直立形	自然	石器	SH23・P253より新しい。

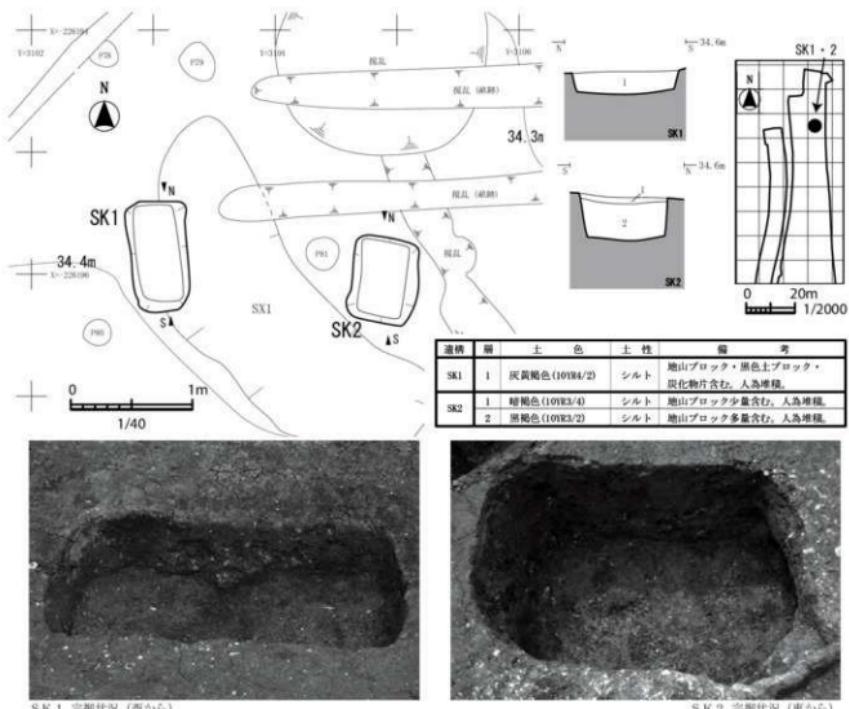
①土坑

【SK1土坑】(第106図)

B区北側の標高34.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SX1と重複し、これより新しい。平面形は、長軸0.90m、短軸0.45mの南北方向に長軸をもつ長方形を呈し、深さは23cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、人為堆積である。遺物は出土していない。

【SK2土坑】(第106図)

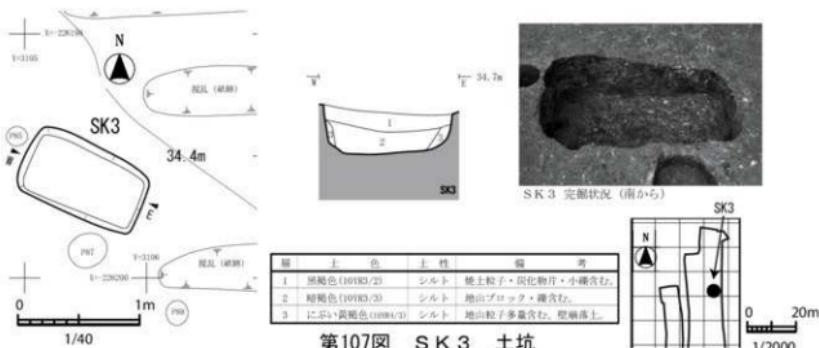
B区北側の標高34.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.75m、短軸0.48mの南北方向に長軸をもつ長方形を呈し、深さは39cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。



第106図 SK1・2 土坑

【SK3土坑】(第107図)

B区北側の標高34.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸1.06m、短軸0.55mの東西方向に長軸をもつ長方形を呈し、深さは33cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第107図 SK3 土坑

【SK4土坑】(第108図)

B区北側の標高34.6mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.60m、短軸0.45mの東西方向に長軸をもつ梢円形を呈し、深さは22cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面はやや凹凸がある。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK5土坑】(第108図)

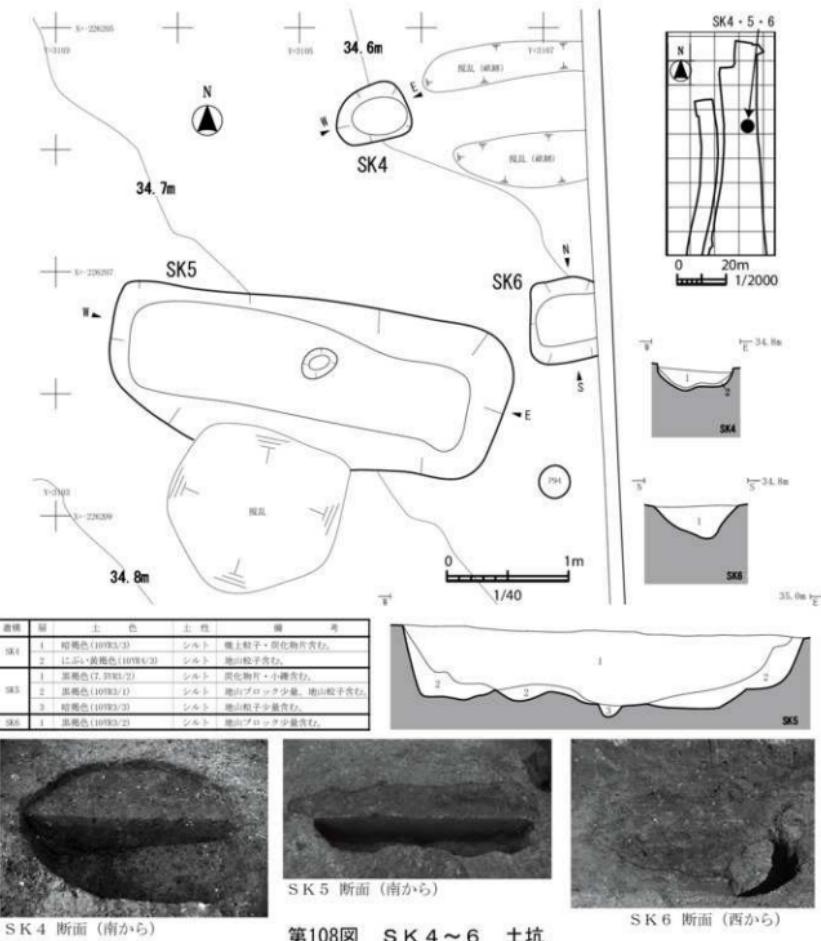
B区北側の標高34.7mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸3.40m、短軸1.14mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは60cmである。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央に直径31cm、深さ10cmの小穴がある。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状から、陥し穴と推定される。

【SK6土坑】(第108図)

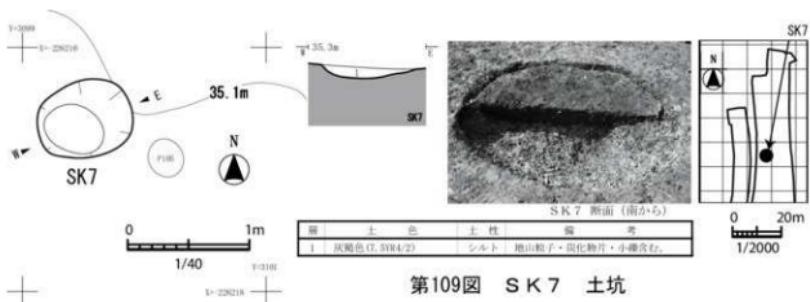
B区北側の標高34.6mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。土坑の東半は調査区外に続いている。平面形は、長軸0.68m、短軸0.47m以上の梢円形を呈すると推定され、深さは25cmである。断面形はU字形で、底面は中央部がやや窪む。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK7土坑】(第109図)

B区中央やや北寄りの標高35.1mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.75m、短軸0.55mの東西方向に長軸をもつ梢円形を呈し、深さは10cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物はクロ成形の土師器片が出土した。



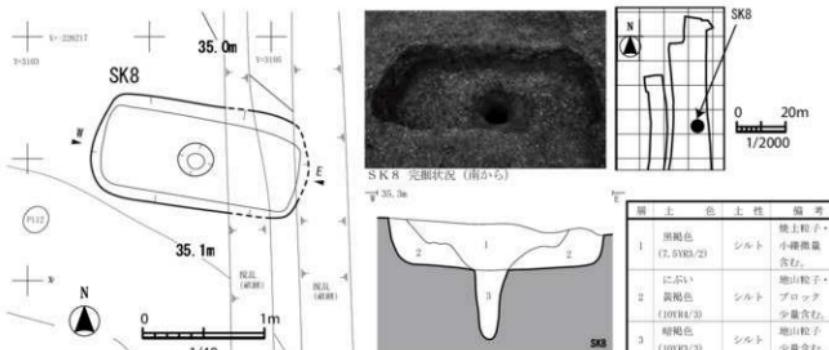
第108図 SK 4~6 土坑



第109図 SK 7 土坑

【SK8土坑】(第110図)

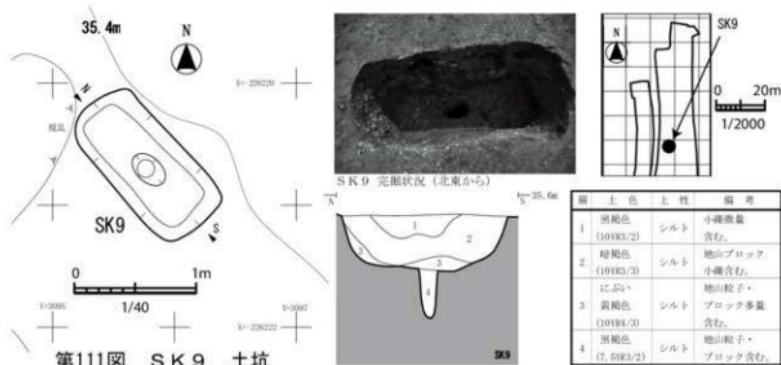
B区中央やや北寄りの標高35.0~35.1mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸1.76m、短軸0.91mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは42cmである。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央に直径29cm、深さ55cmの小穴がある。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は縄文土器片が出土した。形状から、陥し穴と推定される。



第110図 SK8 土坑

【SK9土坑】(第111図)

B区中央やや北寄りの標高35.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸1.40m、短軸0.56mの南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは47cmである。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央に直径30cm、深さ41cmの小穴がある。堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状から、陥し穴と推定される。



第111図 SK9 土坑

【SK10土坑】(第112図)

B区中央やや北寄りの標高35.0mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。土坑南壁の一部が搅乱により削平を受け、残存していない。平面形は、長軸1.37m、短軸0.50mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは54cmである。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央に直径9cm、深さ19cmの小穴がある。堆積土は3層に分かれ、1・2層が人為堆積、3層が自然堆積である。遺物は2層上面から縄文土器深鉢(第112図1)出土した。形状から、陥し穴と推定される。

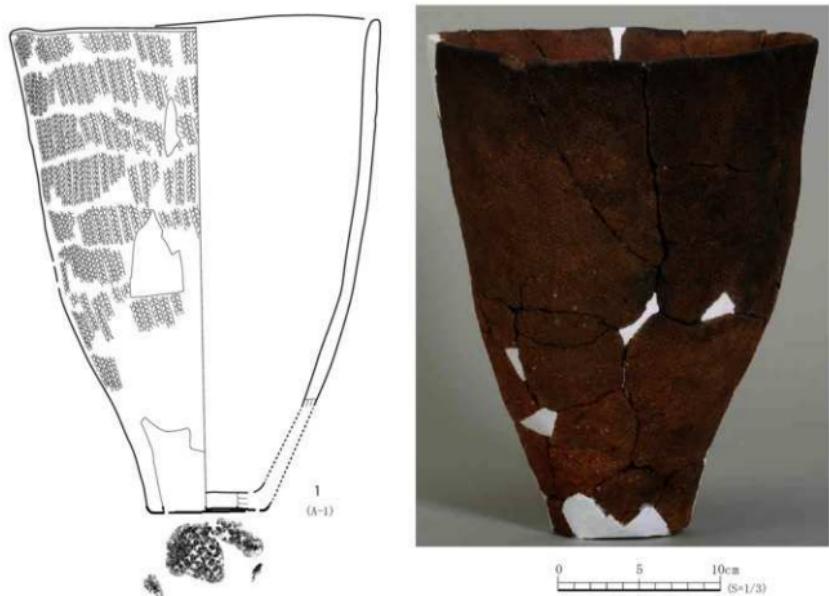


SK10 完態状況 (南から)

番	土色	上性	備考
1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山ブロック・燒土粒子・炭化物片含む。
2	に赤い黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子・ガラック多量含む。
3	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。

SK10 遺物出土状況 (西から)

SK10 遺物出土状況 (北から)



No.	層	種別	器種	残存	特徴【鉢底（外側・内側）- 陶調（外側・内側）- 一此兼一その他の特徴の順に記載】	界線
1	SK10 2層上面	調文土器	深鉢	口縁部 ～底部 直径 0.65～1.0cm、胎土：織維含む	外側：粗面の軋突。色調：内外面、に赤い赤褐色(10YR4/3)。法調：口径22.9cm、鉢高30.4cm、底径(2.5)cm。	A-1

第112図 SK10 土坑

【SK11 土坑】(第113図)

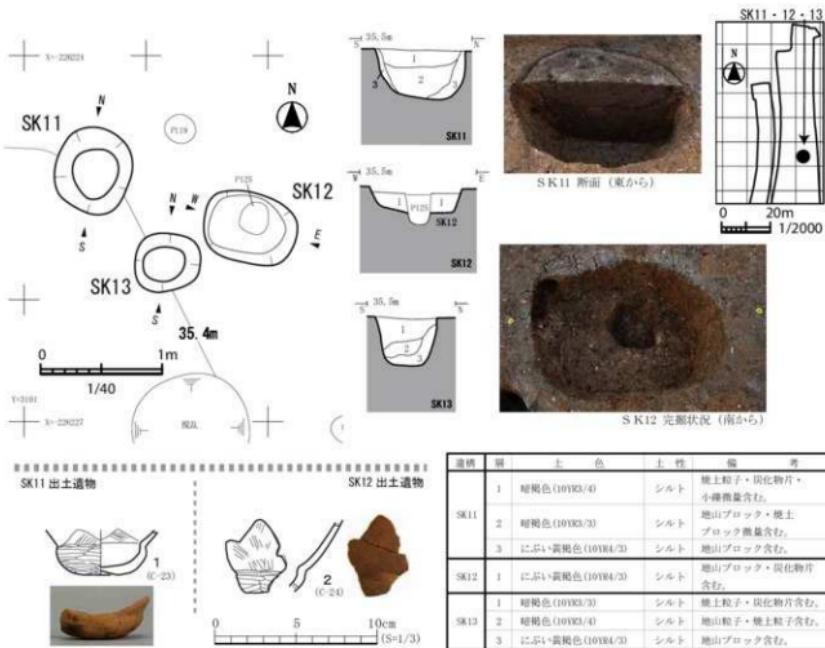
B区中央やや北寄りの標高35.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.70m、短軸0.60mの南北方向に長軸をもつ円形を呈し、深さは40cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、1・2層から非ロクロ成形の土師器片が出土し、このうち図示できたものは土師器鉢（第113図1）である。

【SK12 土坑】(第113図)

B区中央やや北寄りの標高35.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。P125と重複し、これより古い。平面形は、長軸0.74m、短軸0.56mの東西方向に長軸をもつ梢円形を呈し、深さは18cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は、1層からロクロ成形の土師器片が出土し、このうち図示できたものは土師器鉢（第113図2）である。

【SK13 土坑】(第113図)

B区中央やや北寄りの標高35.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.53m、短軸0.51mの円形を呈し、深さは38cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層で、いずれも自然堆積である。遺物は、1層からロクロ成形の土師器片が出土した。

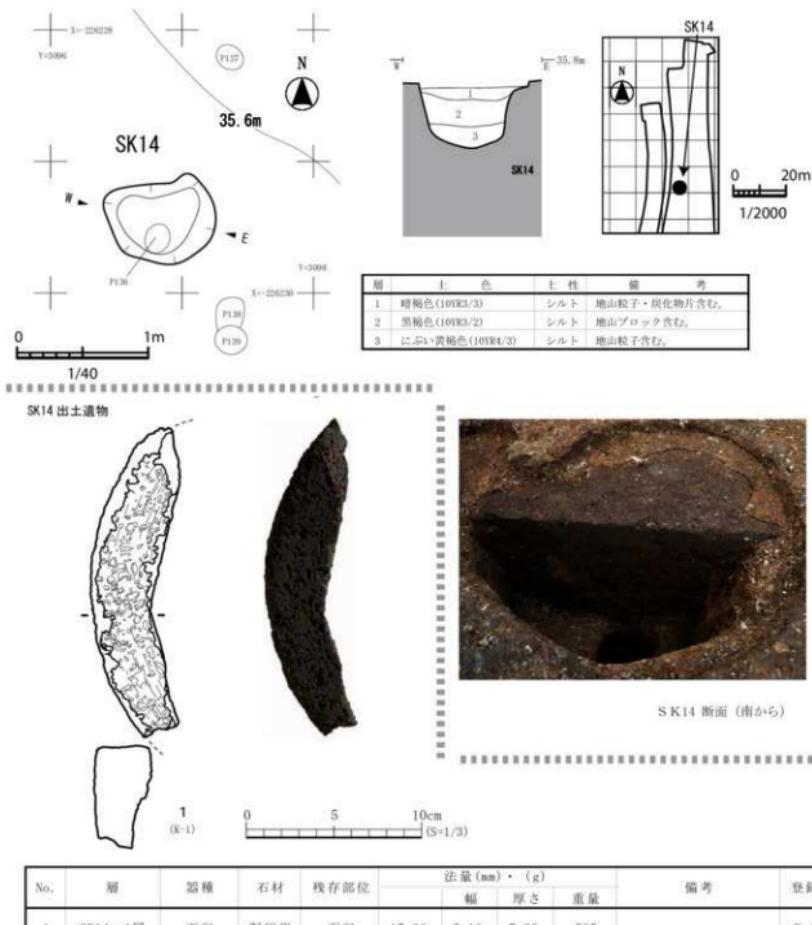


no.	層	種別	断面	現存	特徴【出土・外観・内面】→底面【外観・内面】→基盤→その他の特徴の間に記載】	登録
1	SK11 2層	土師器	鉢	頭部 ～底部 (10YR7/4)	外観：ヘラミガキ。内面：頭部ヘラミガキ。脚部～底部濃黒のため不明。色調：外観・に赤い・黄褐色	C-23
2	SK12 1層	土師器	鉢	頭部 ～脚部	外観：ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ。色調：外観・に赤い・黄褐色(10YR4/4)。法量：頭部0.3～0.6cm	C-24

第113図 SK11・12・13 土坑

【SK14土坑】(第114図)

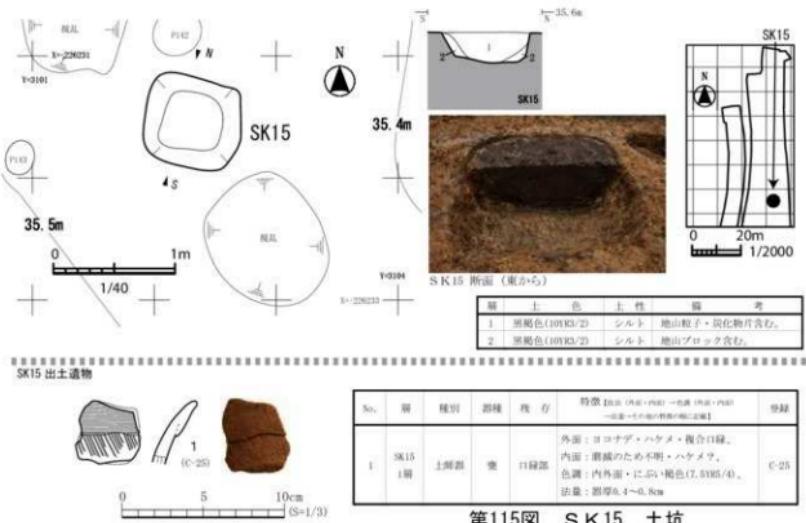
B区中央やや北寄りの標高35.6mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。P136と重複し、これより古い。平面形は、長軸0.70m、短軸0.60mの東西方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは46cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面は中央部がやや窪む。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、1層から石臼(第114図1)が出土した。



第114図 SK14 土坑

【SK15土坑】(第115図)

B区中央やや北寄りの標高35.5mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.78m、短軸0.74mの隅丸方形を呈し、深さは27cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、1層から非ロクロ成形の土器瓶(第115図1)が出土した。



第115図 SK15 土坑

【SK16 土坑】(第 116 図)

B 区中央やや北寄りの標高 35.9m の平坦面に立地する。確認面は Va 層である。土坑の西半は調査区外に続いている。平面形は、長軸 0.52m 以上、短軸 0.52m の東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈すると推定され、深さは 54cm である。短軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央に直径 14cm、深さ 31cm の小穴がある。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状から、陥し穴と推定される。



【SK17 土坑】(第 117 図)

B 区中央やや北寄りの標高 36.0m の平坦面に立地する。確認面は Va 層である。平面形は、長軸 1.44m、短軸 0.56m の東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは 38cm である。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央に直径 24cm、深さ 17cm の小穴がある。堆積土は 4 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状から、陥し穴と推定される。



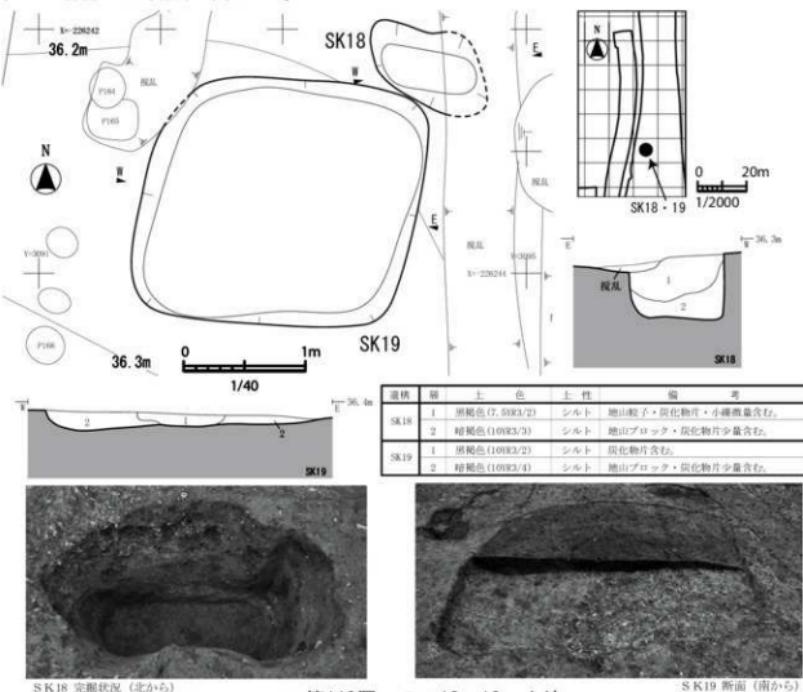
第117図 SK17 土坑

【SK18土坑】(第118図)

B区中央やや北寄りの標高36.2mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。土坑の東側は後世の擾乱により削平を受けている。平面形は、長軸0.97m、短軸0.63mの東西方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは57cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK19土坑】(第118図)

B区中央やや北寄りの標高36.2mの平坦面に立地する。確認面はV_a層である。平面形は、長軸2.11m、短軸2.01mの東西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈し、深さは17cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、検出面・1層から非クロコ成形の土師器片が出土した。



第118図 SK18・19 土坑

【S K20 土坑】(第 119・120 図)

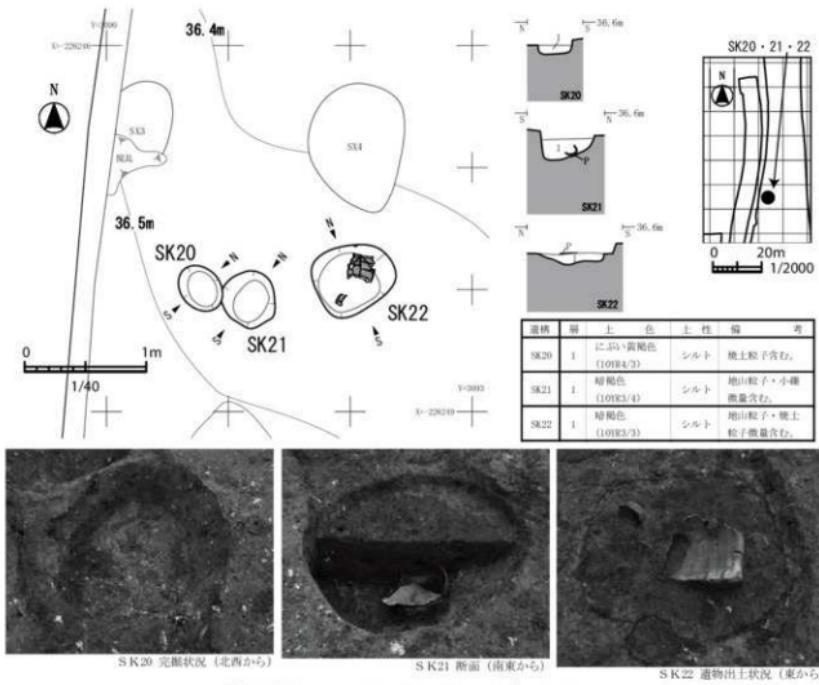
B 区中央やや北寄りの標高 36.5m の平坦面に立地する。確認面は Va 層である。SK21 と重複し、これより新しい。平面形は、長軸 0.38m、短軸 0.28m の東西方向に長軸をもつ円形を呈し、深さは 7cm である。短軸方向の断面形は U 字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、自然堆積である。遺物は、堆積土からロクロ成形の土師器片が出土し、このうち図示できたものは土師器壺 (第 120 図 1) である。

【S K21 土坑】(第 119・120 図)

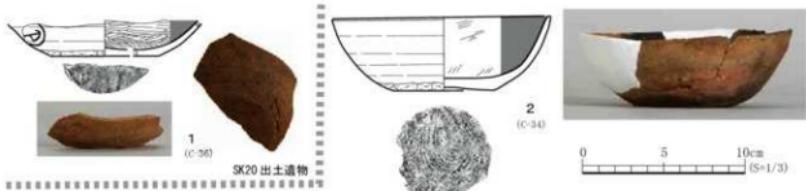
B 区中央やや北寄りの標高 36.5m の平坦面に立地する。確認面は Va 層である。SK20 と重複し、これより古い。平面形は、長軸 0.45m、短軸 0.42m の円形を呈し、深さは 26cm である。断面形は U 字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、人為堆積である。遺物は、堆積土からロクロ成形の土師器壺 (第 120 図 2) と土師器瓶と思われる破片 (第 120 図 3) が出土した。

【S K22 土坑】(第 119・120 図)

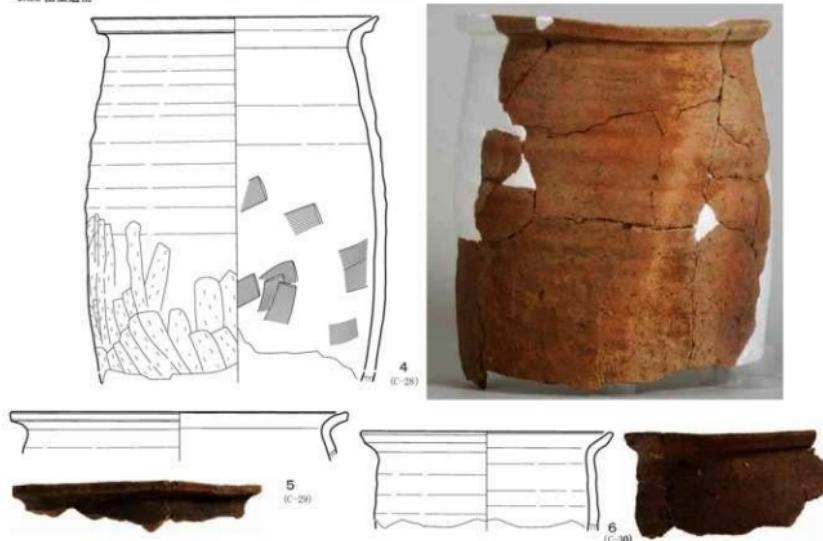
B 区中央やや北寄りの標高 36.5m の平坦面に立地する。確認面は Va 層である。平面形は、長軸 0.76m、短軸 0.62m の東西方向に長軸をもつ梢円形を呈し、深さは 20cm である。短軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、人為堆積である。遺物は、1 層からロクロ成形の土師器片が出土し、このうち図示できたものは土師器甕 (第 120 図 4~6) である。



第119図 S K20・21・22 土坑 (1)



SK22 出土遺物

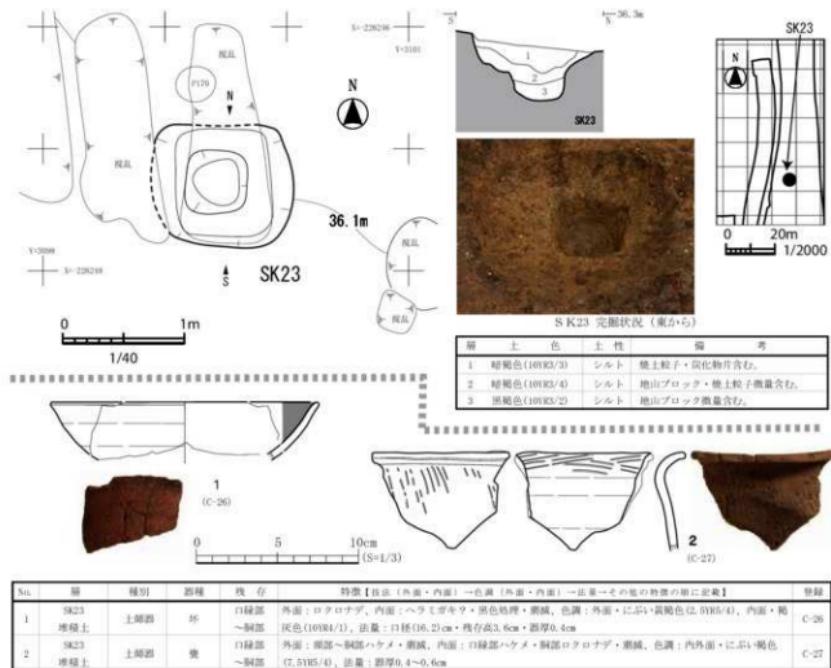


No.	編	種別	器種	残存	特徴【技法（外側・内面）→色調（外側・内面）→法縁→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK20 堆積上	土師器	杯	脚部 ～底盤	外面：ロクロナダ・脚部下端手持ち～ハラ削り・底部切り離し・技法不明・手持ち～ハラ削り内調査、内面：ハラモガキ・墨色処理、色調：外側・にぶい褐色(7.3IVR5/4)、内面・黒色(3II2/0)。法縁：底径(6.6)cm・残存高2.2cm・源厚0.3～0.5cm、墨青	C-36
2	SK21 堆積上	土師器	杯	口縁部 ～底盤	外面：ロクロナダ・脚部下端手持ち～ハラ削り・底部切込糸切り～周縁部手持ち～ハラ削り、内面：ヘラミガキ？・墨色処理・墨絞、色調：外側・にぶい褐色(7.3IVR5/4)、内面・黒褐色(1IVR3/2)。法縁：口径13.4cm・高さ4.6cm・底径6.1cm・源厚0.3～0.8cm	C-34
3	SK21 堆積上	土師器	瓶？	口縁部 ～脚部	外面：ロクロナダ・脚部下ハラ削り、内面：ロクロナダ・脚部下ナダ。色調：内外面・にぶい褐色(7.3IVR5/4)、法縁：口径(22.8)cm・残存高11.1cm・源厚0.4～0.6cm	C-35
4	SK22 1層	土師器	甕	口縁部 ～脚部	外面：ロクロナダ・ハラ削り、内面：ロクロナダ・ハラナダ・崩缺、色調：外外面・にぶい褐色(7.3IVR5/4)。法縁：口径17.6cm・残存高22.5cm・源厚0.6～0.9cm	C-28
5	SK22 1層	土師器	甕	口縁部	外面：ロクロナダ、内面：ロクロナダ・外側・底部・褐色(7.5VII4/1)、内面・にぶい黄褐色(10VII4/0)。法縁：口径(20.6)cm・残存高6.0cm・源厚0.5～0.6cm	C-29
6	SK22 1層	土師器	甕	口縁部 ～脚部	外面：ロクロナダ、内面：ロクロナダ・外側・底部・褐色(7.3IVR5/4)、内面・にぶい黄褐色(10VII5/3)。法縁：口径(15.4)cm・残存高6.1cm・源厚0.5～0.6cm	C-30

第120図 S K 20・21・22 土坑 (2)

【S K23 土坑】(第121図)

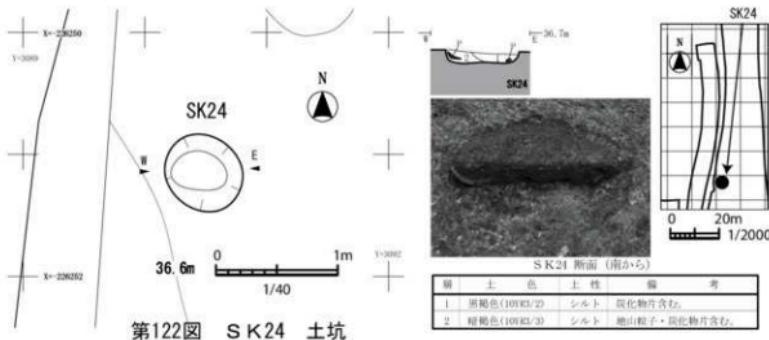
B区中央の標高36.1mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。土坑の中央と西側の一部は後世の擾乱により削平を受けている。平面形は、長軸1.15m、短軸1.07mの東西方向に長軸をもつ円形を呈し、深さは47cmである。短軸方向の断面形は漏斗状で、底面の中央がさらに方形に掘り込まれている。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土からロクロ成形・非ロクロ成形の土師器片が出土し、このうち図示できたものは土師器坏(第121図1)・甕(第121図2)である。



第121図 SK23 土坑

【S K24 土坑】(第122図)

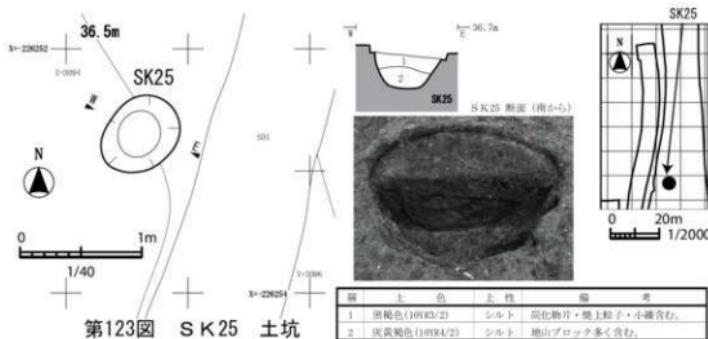
B区中央の標高36.6mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.65m、短軸0.56mの東西方向に長軸をもつ円形を呈し、深さは13cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土からロクロ成形の土師器片が出土した。



第122図 SK24 土坑

【SK25 土坑】(第123図)

B区中央の標高36.5mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.60m、短軸0.58mの円形を呈し、深さは32cmである。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から非ロクロ成形の土器器片が出土した。

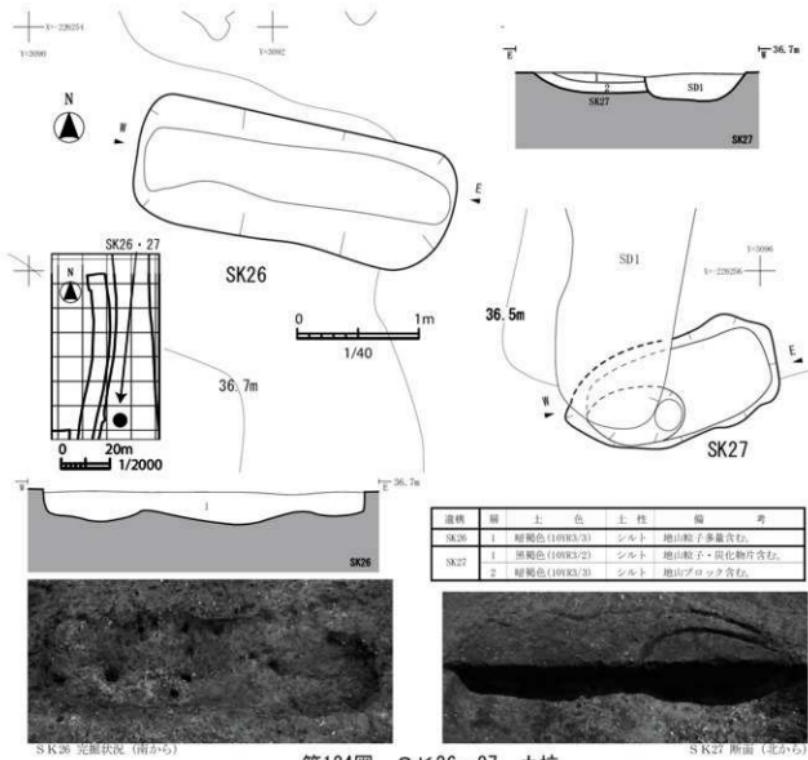


【SK26 土坑】(第124図)

B区中央の標高36.6mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸2.67m、短軸0.91mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは24cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面には凹凸がある。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK27 土坑】(第124図)

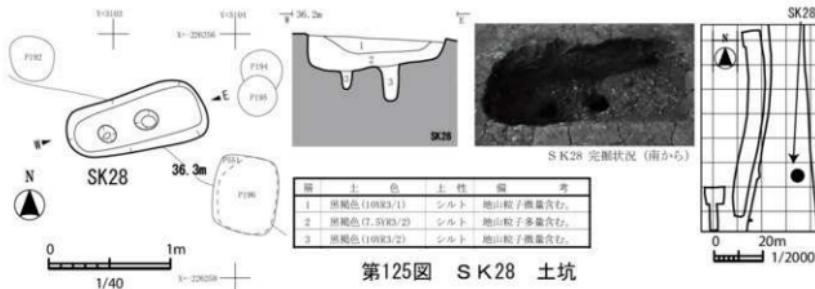
B区中央の標高36.5mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SD1と重複し、これより古い。平面形は、長軸1.65m、短軸0.82mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは19cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面には凹凸がある。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第124図 SK26・27 土坑

【SK28 土坑】(第125図)

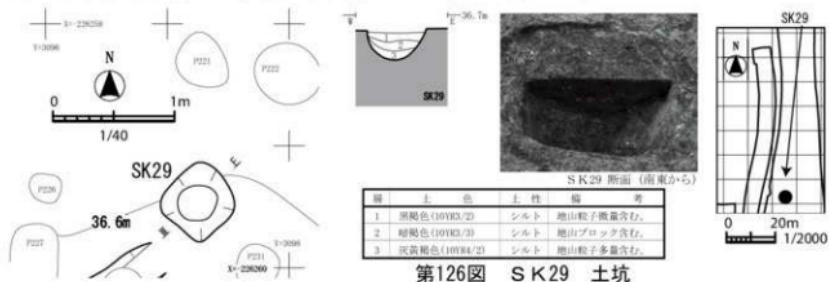
B区中央の標高36.3mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸1.16m、短軸0.55mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは28cmである。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央付近に直径20cm・深さ23cmと直径15cm・深さ15cmの小穴が2個ある。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状から、陥れ穴と推定される。



第125図 SK28 土坑

【SK29 土坑】(第126図)

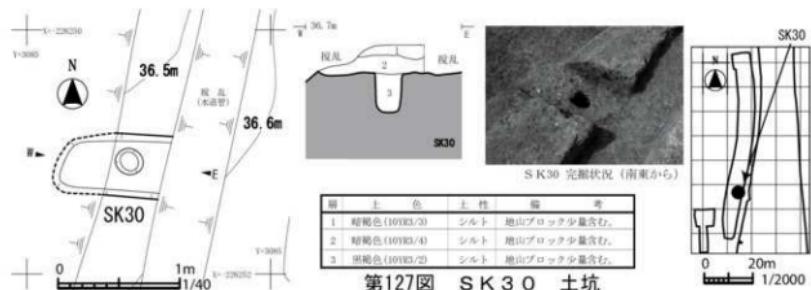
B区中央の標高36.6mの平坦面に立地する。確認面はV_a層である。平面形は、長軸0.53m、短軸0.52mの円形を呈し、深さは26cmである。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から土師器片が出土した。



第126図 SK29 土坑

【SK30 土坑】(第127図)

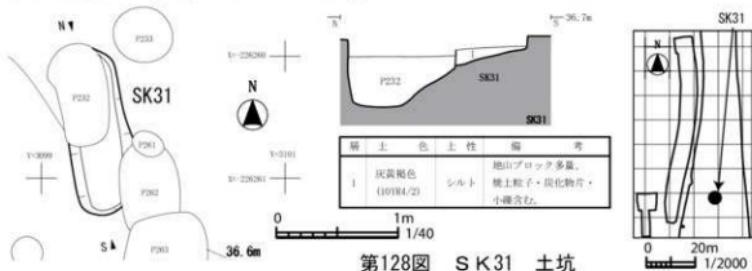
D区南側の標高36.5mの平坦面に立地する。確認面はV_b層である。土坑の東側と西側が後世の搅乱により削平を受け、残存していない。平面形は、長軸0.90m以上、短軸0.50mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈すると推定され、深さは25cmである。底面はほぼ平坦で、中央付近に直径24cm・深さ30cmの小穴がある。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状から、陥穴と推定される。



第127図 SK30 土坑

【SK31 土坑】(第128図)

B区中央の標高36.6mの平坦面に立地する。確認面はV_a層である。SB25・P262、SB26・P263、P232・261と重複し、これらより古い。平面形は、長軸1.44m、短軸0.40mの南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは20cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、人為堆積である。遺物は出土していない。



第128図 SK31 土坑

【SK32 土坑】(第129図)

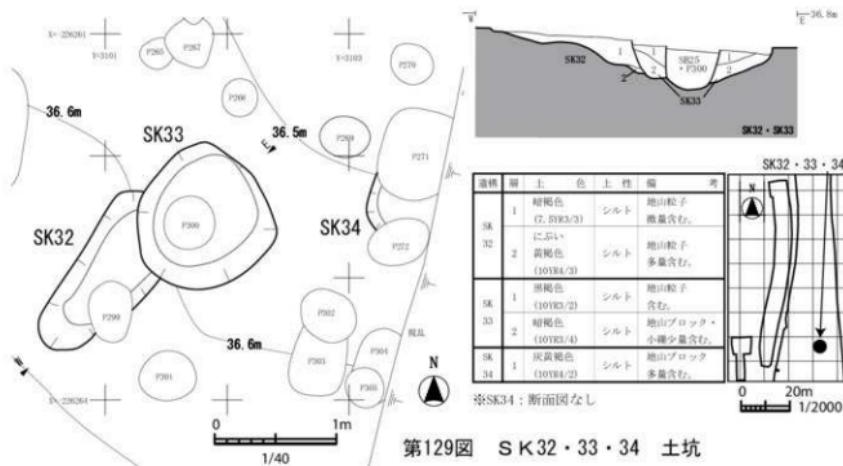
B区中央の標高36.6mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SB25・P300、SB27・P299、SK33と重複し、これらより古い。平面形は、長軸1.45m、短軸0.68mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは33cmである。長軸方向の断面形は不整形で、底面には凹凸がある。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK33 土坑】(第129図)

B区中央の標高36.6mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SB25・P300、SK32と重複し、P300より古く、SK32より新しい。平面形は、長軸1.20m、短軸1.10mの東西方向に長軸をもつ円形を呈し、深さは43cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK34 土坑】(第129図)

B区中央の標高36.5mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SB25・P272、SB26・P271と重複し、これらより古い。平面形は、長軸0.52m以上、短軸0.52mの南北方向に長軸をもつ梢円形を呈すると推定され、深さは9cmである。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、人為堆積である。遺物は出土していない。



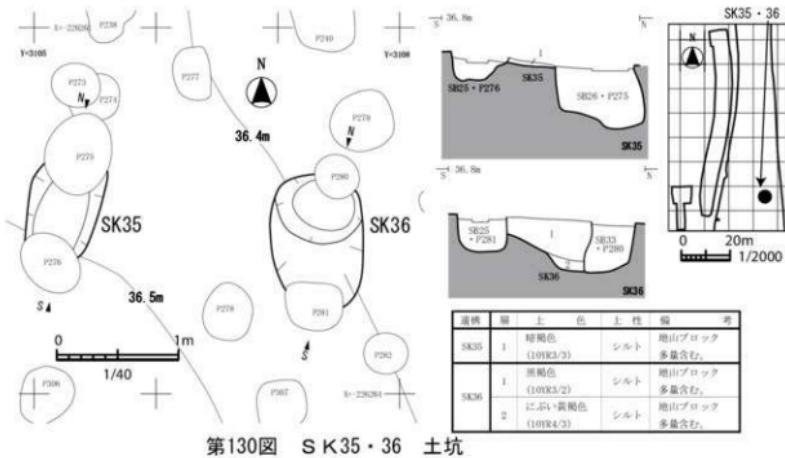
第129図 SK32・33・34 土坑

【SK35 土坑】(第130図)

B区中央の標高36.5mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SB25・P276、SB26・P275と重複し、これらより古い。平面形は、長軸0.80m以上、短軸0.51mの南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈すると推定され、深さは11cmである。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、人為堆積である。遺物は出土していない。

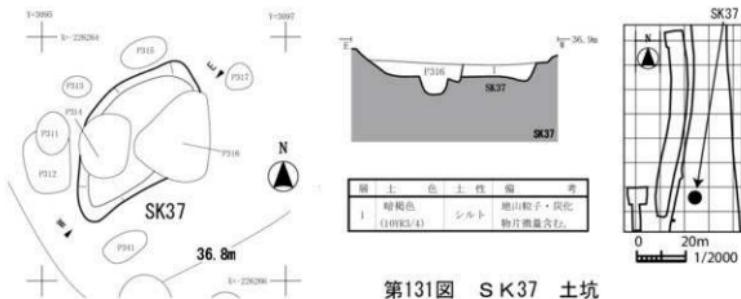
【SK36 土坑】(第130図)

B区中央の標高36.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SB25・P281、SB33・P280と重複し、これらより古い。平面形は、長軸1.28m、短軸0.80mの南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは44cmである。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。



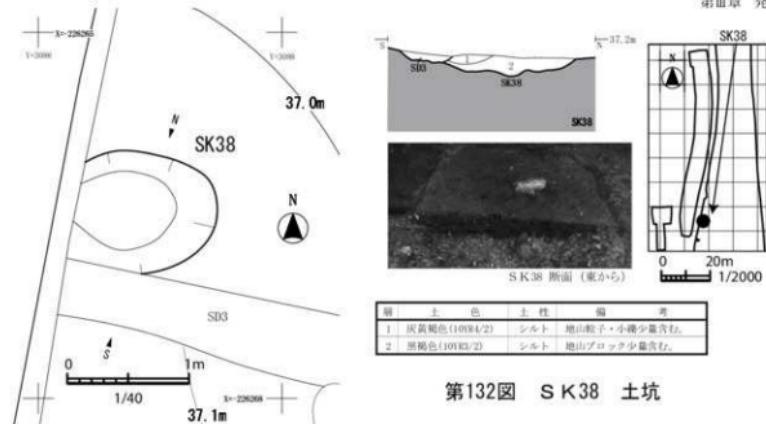
【SK37土坑】(第131図)

B区中央の標高36.8mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SB21・P314、P316と重複し、これらより古い。平面形は、長軸0.60m、短軸0.38mの東西方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは15cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



【SK38土坑】(第132図)

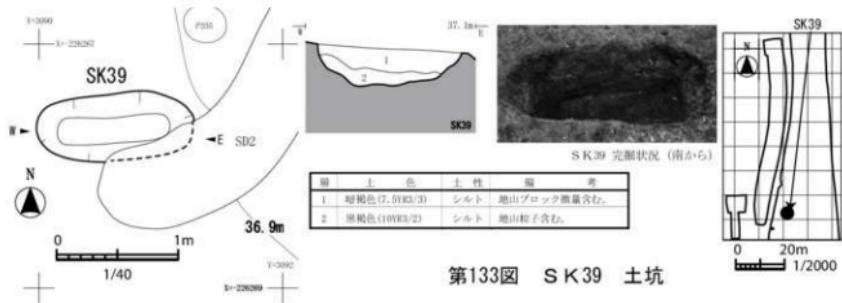
B区中央の標高37.0mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。土坑の西側は調査区外に続いている。SD3と重複し、これより古い。平面形は、長軸1.18m以上、短軸1.00m以上の東西方向に長軸をもつ橢円形を呈すると推定され、深さは17cmである。短軸方向の断面形は皿状で、底面には凹凸がある。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から縄文土器片、ロクロ成形の土師器片が出土した。



第132図 SK38 土坑

【SK39 土坑】(第133図)

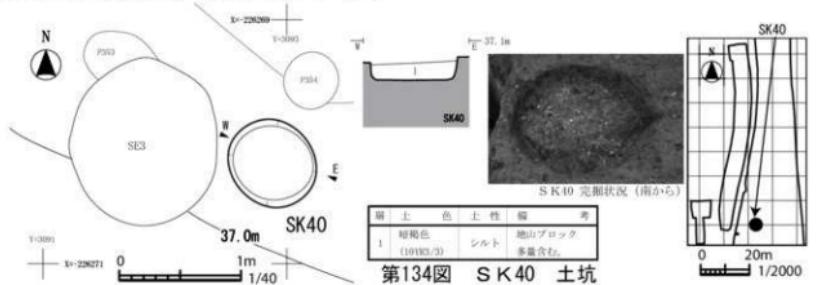
B区中央の標高36.9mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SD2と重複し、これより古い。平面形は、長軸1.20m、短軸0.50mの東西方向に長軸をもつ卵円長方形を呈し、深さは35cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面には凹凸がある。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第133図 SK39 土坑

【SK40 土坑】(第134図)

B区中央の標高37.0mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.72m、短軸0.69mの円形を呈し、深さは19cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、人為堆積である。遺物は出土していない。



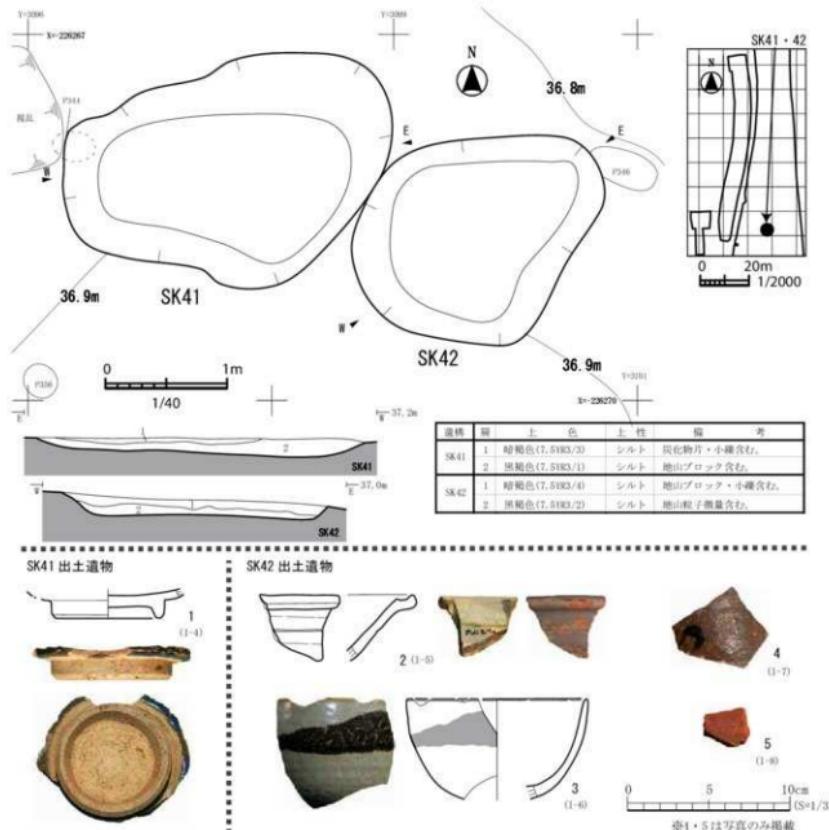
第134図 SK40 土坑

【SK41 土坑】(第135図)

B区中央の標高36.9mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SB23・P344、SK42と重複し、SK42より古く、SB23・P344より新しい。平面形は、長軸2.73m、短軸1.77mの東西方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは17cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から近世の陶器片(第135図1)が出土した。

【SK42 土坑】(第135図)

B区中央の標高36.9mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SK41、P346と重複し、これらより新しい。平面形は、長軸2.23m、短軸1.76mの東西方向に長軸をもつ梢円形を呈し、深さは16cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から近世の陶器片(第135図2~5)が出土した。



No.	層	種別	断面	残存	特徴	参考
1	SK41・堆積土	陶器	香炉	近底	法量：口径6.5cm・残存高1.8cm・底厚0.4~0.7cm・灰褐色・つり掛け・底地：小野相間、18世紀代	1~4
2	SK42・堆積土	陶器	大鉢	口縁部	鉄筋、絆縫流し、底の内側は長石釉、底地：美濃、17世紀前葉	1~5
3	SK42・堆積土	陶器	瓶	口縫部～脚部	法量：口径(11.0)cm・残存高6.2cm・底厚0.3~0.8cm・白濁釉、あめ袖流し・底地：小野相間、18世紀代	1~6
4	SK42・堆積土	陶器	更	脚部	鉄錆、黒褐流し、底地不明、江戸時代	1~7
5	SK42・堆積土	陶器	壺	内外面鉄錆、内面：おろし目、底地：芦窓、17世紀代	1~8	

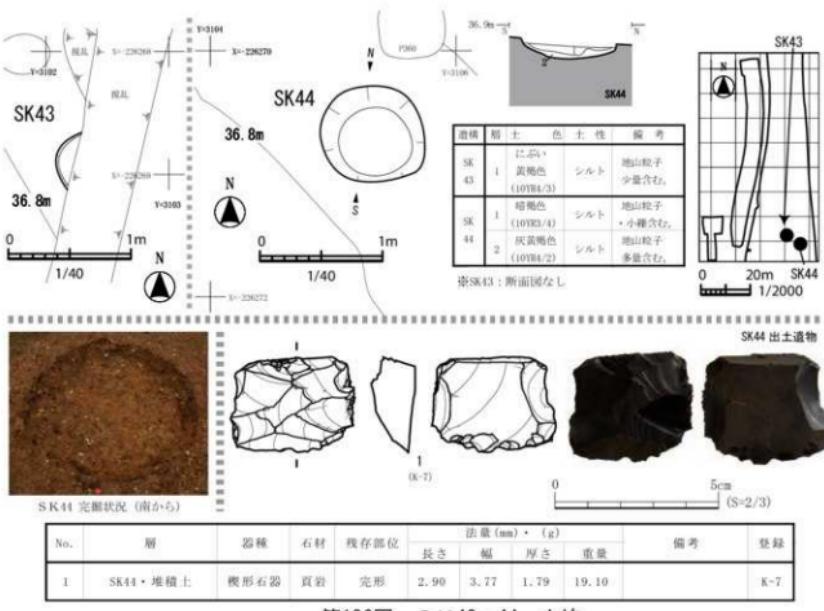
第135図 SK41・42 土坑

【SK43 土坑】(第136図)

B区中央の標高36.8mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。土坑の東側が後世の搅乱により削平を受け、残存していない。平面形は、長軸0.50m、短軸0.20m以上の円形を呈すると推定され、深さは16cmである。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK44 土坑】(第136図)

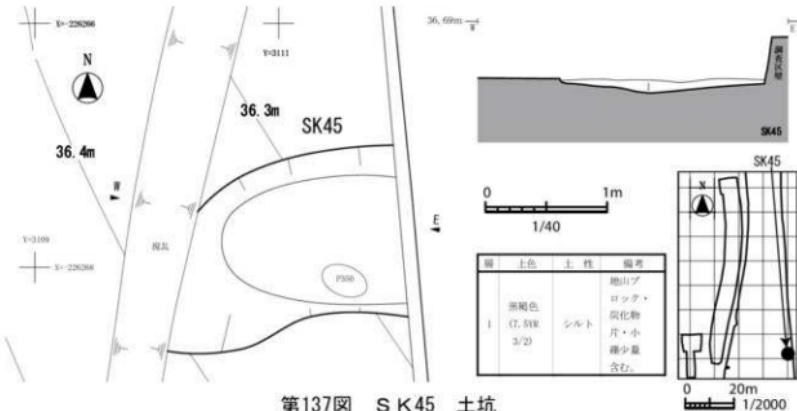
B区中央の標高36.8mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.80m、短軸0.72mの円形を呈し、深さは15cmである。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から楔形石器(第136図1)が出土した。



第136図 SK43・44 土坑

【SK45 土坑】(第137図)

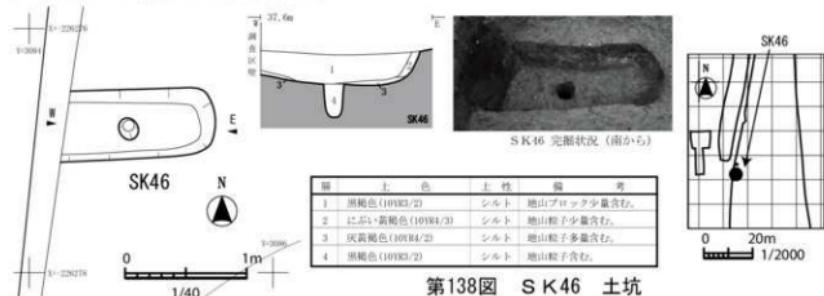
B区中央の標高36.3mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。土坑の東側は調査区外に続いている。土坑の西側は後世の搅乱により削平を受け、残存していない。P350と重複し、これより古い。平面形は、長軸1.90m以上、短軸1.34mの東西方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは14cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



第137図 SK45 土坑

【SK46 土坑】(第138図)

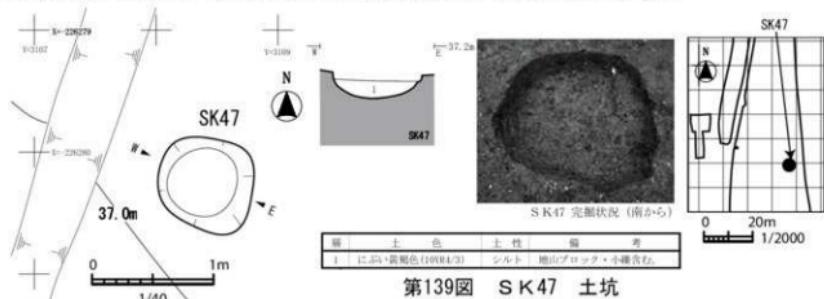
B区中央や南寄りの標高37.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。土坑の西側は調査区外に続いている。平面形は、長軸1.27m以上、短軸0.55mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈すると推定され、深さは25cmである。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央に直径19cm、深さ33cmの小穴がある。堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状から、陥穴と推定される。



第138図 SK46 土坑

【SK47 土坑】(第139図)

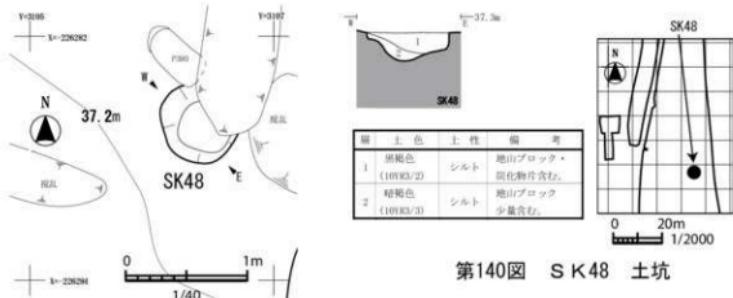
B区中央や南寄りの標高37.0mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.75m、短軸0.61mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは21cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



第139図 SK47 土坑

【SK48 土坑】(第140図)

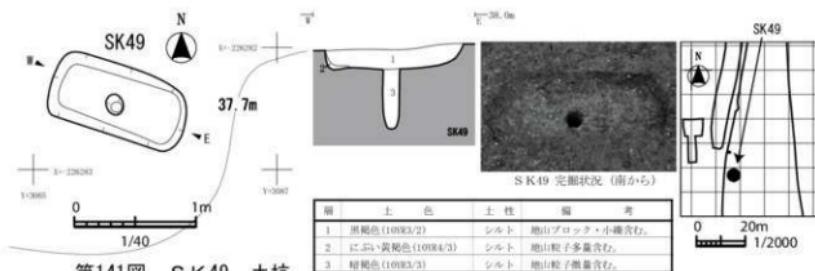
B区中央やや南寄りの標高37.2mの平坦面に立地する。確認面はV_a層である。土坑の北西部は後世の擾乱により削平を受け、残存していない。SB39・P380と重複し、これより古い。平面形は、長軸0.70m、短軸0.51m以上の円形を呈すると推定され、深さは25cmである。断面形は不整形で、底面には凹凸がある。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第140図 SK48 土坑

【SK49 土坑】(第141図)

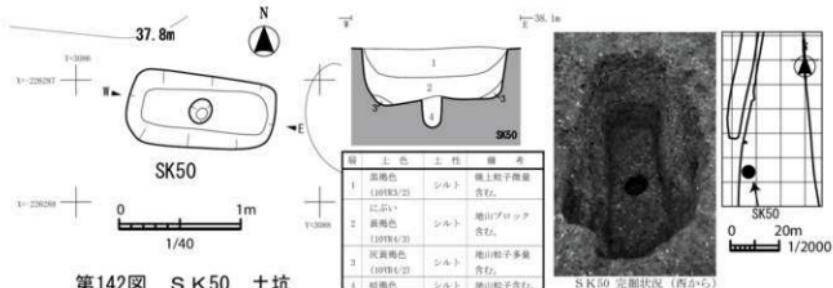
B区中央やや南寄りの標高37.7mの平坦面に立地する。確認面はV_b層である。平面形は、長軸1.21m、短軸0.58mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは17cmである。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央に直径18cm、深さ48cmの小穴がある。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状から、陥穴と推定される。



第141図 SK49 土坑

【SK50 土坑】(第142図)

B区中央やや南寄りの標高37.8mの平坦面に立地する。確認面はV_b層である。平面形は、長軸1.25m、短軸0.52mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは45cmである。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、中央に直径18cm、深さ22cmの小穴がある。堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状から、陥穴と推定される。



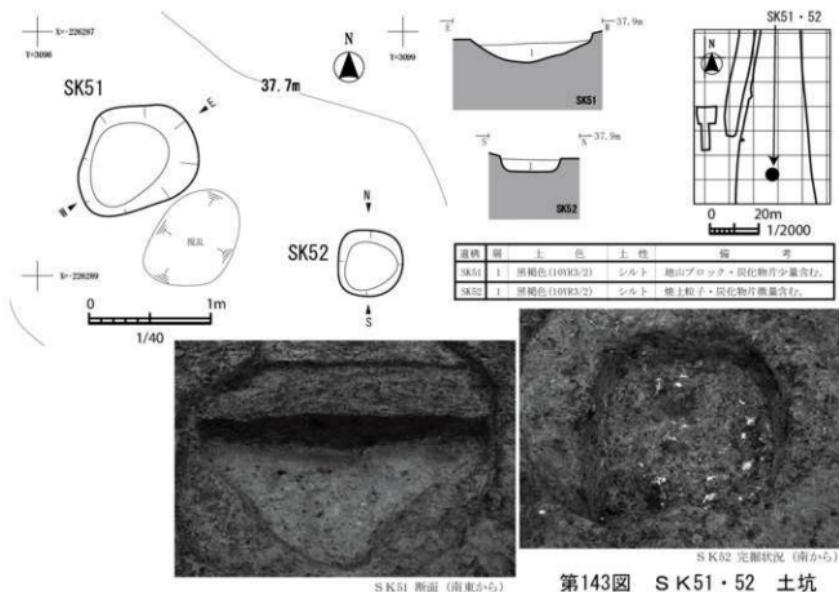
第142図 SK50 土坑

【SK51 土坑】(第143図)

B区中央やや南寄りの標高37.7mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸1.00m、短軸0.90mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは23cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面は中央部がやや窪む。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は、堆積土から縄文土器片が出土した。

【SK52 土坑】(第143図)

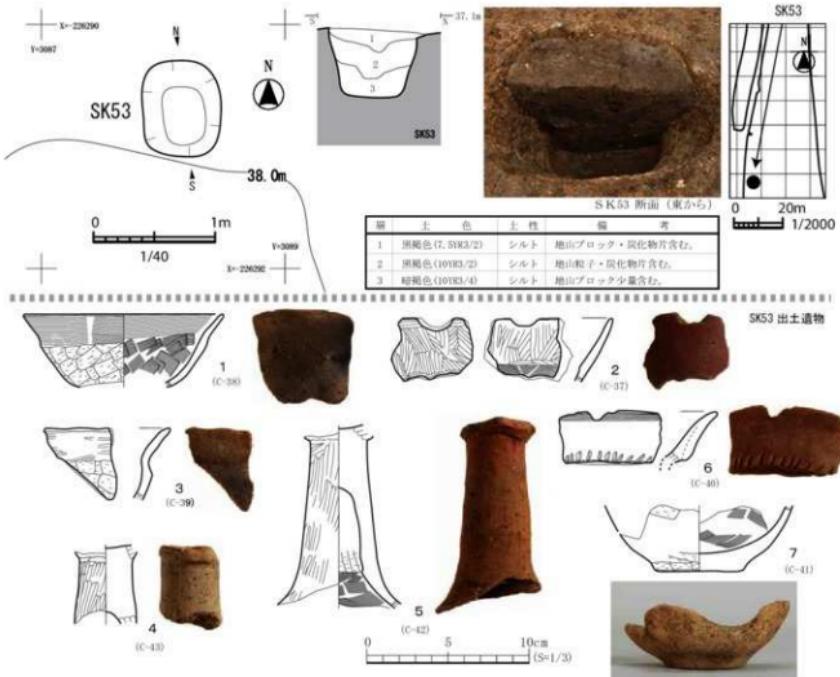
B区中央やや南寄りの標高37.7mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.51m、短軸0.50mの隅丸方形を呈し、深さは14cmである。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



第143図 SK51・52 土坑

【SK53 土坑】(第144図)

B区中央やや南寄りの標高38.0mの平坦面に立地する。確認面はVb層である。平面形は、長軸0.77m、短軸0.64mの南北方向に長軸をもつ隅丸方形を呈し、深さは51cmである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、1~3層から非クロ成形の土器片が出土し、このうち図示できたものは、土器鉢(第144図1~3)・高壙(第144図4・5)・壺(第144図6・7)である。

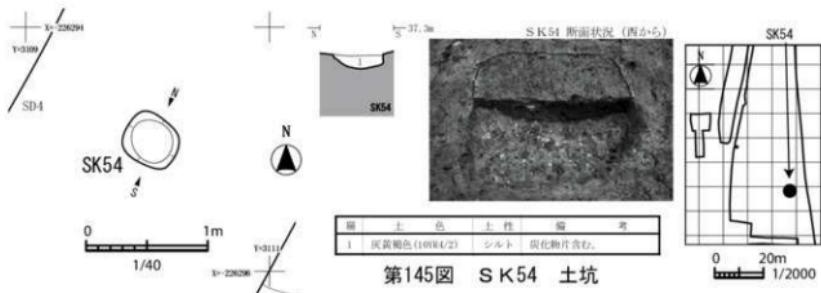


No.	層	種別	器種	堆存	特徴【鉢「外面・内面」一画面（外面・内面）→底裏→その他の骨・骨質の順に記載】		界線
					外側	内側	
1	SK53 2層	土解剖	鉢	口縁部 ～脚部	外面：口縁部ヨコナギ・脚部ヘラ削り、内面：口縁部ヨコナギ・脚部ヘナナギ、色調：外面：にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面：にぶい褐色(7.5YR4/4)。法量：口径12.2cm、残存高4.5cm、底厚0.3~0.6cm		C-38
2	SK53 2層	土解剖	鉢	口縁部	外面：ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ・ヘナナギ、色調：外面：にぶい赤褐色(2.5YR4/4)、法量：底厚0.2~0.6cm、内面：赤彩		C-37
3	SK53 2層	土解剖	鉢	口縁部 ～脚部	外面：口縁部ヘラミガキ(崩壊)・脚部ヘラ削り、内面：崩壊のため不明、色調：外面：にぶい褐色(7.5YR6/3)、内面：にぶい赤褐色(2.5YR5/4)。法量：底厚0.5cm		C-39
4	SK53 3層	土解剖	高坏	脚部	外面：ヘラミガキ、内面：にぶい黄褐色(10YR7/3)。法量：残存高4.9cm、底厚1.0~3.6cm		C-43
5	SK53 2層	土解剖	高坏	脚部	外面：ヘラミガキ、内面：ヘナナギ、色調：外面・赤褐色(2.5YR5/3)、内面：にぶい赤褐色(3YR4/3)。法量：残存高1.3cm、底厚0.9~1.0cm		C-42
6	SK53 2層	土解剖	鉢	口縁部	外面：口縁部ヨコナギ・複合口縁部(脚部厚部にキザギ)、内面：崩壊のため不明、色調：外面・赤褐色(2.5YR4/6)、内面：にぶい赤褐色(3YR4/4)。法量：底厚0.4~1.1cm		C-40
7	SK53 2層	土解剖	鉢	底部	外面：ヘラ削り(崩壊)、内面：ヘナナギ(崩壊)、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)。法量：底径4.6cm、堆積高1.1cm、底厚0.4~1.4cm		C-41

第144図 SK53 土坑

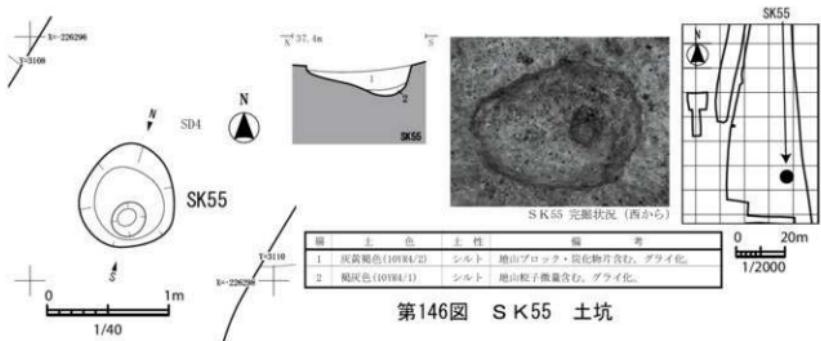
[SK54 土坑] (第145図)

B区中央やや南寄りのSD4の底面で確認した。SD4と重複し、これより古い。平面形は、長軸0.47m、短軸0.46mの隅丸方形を呈し、深さは11cmである。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



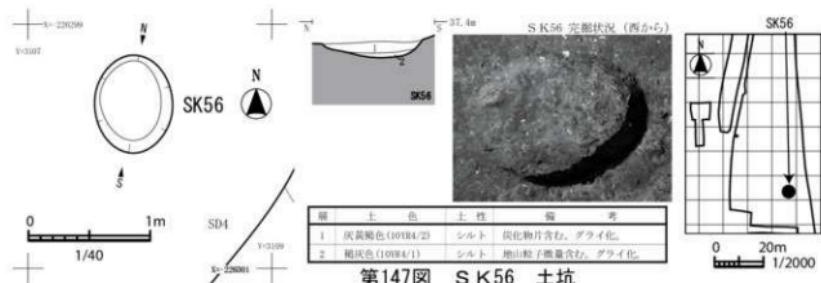
【SK55 土坑】(第146図)

B区中央やや南寄りのSD4の底面で確認した。SD4と重複し、これより古い。平面形は、長軸0.89m、短軸0.79mの南北方向に長軸をもつ橢円形を呈し、深さは26cmである。長軸方向の断面形は不整形で、底面は土坑の南側付近が窪む。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



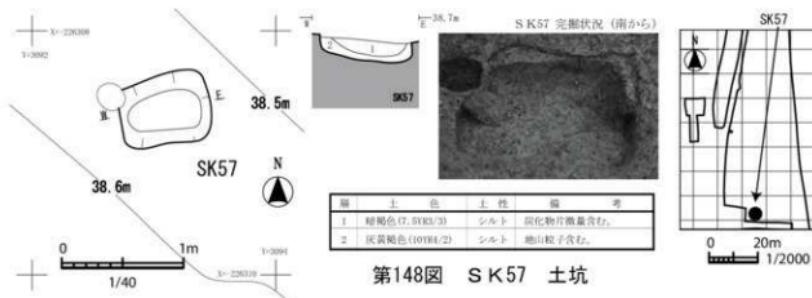
【SK56 土坑】(第147図)

B区中央やや南寄りのSD4の底面で確認した。SD4と重複し、これより古い。平面形は、長軸0.84m、短軸0.64mの南北方向に長軸をもつ橢円形を呈し、深さは13cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から非クロロコム形の土師器片が出土した。



【SK57 土坑】(第148図)

B区南側の標高38.5mの平坦面に立地する。確認面はVb層である。平面形は、長軸0.74m、短軸0.58mの東西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈し、深さは18cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

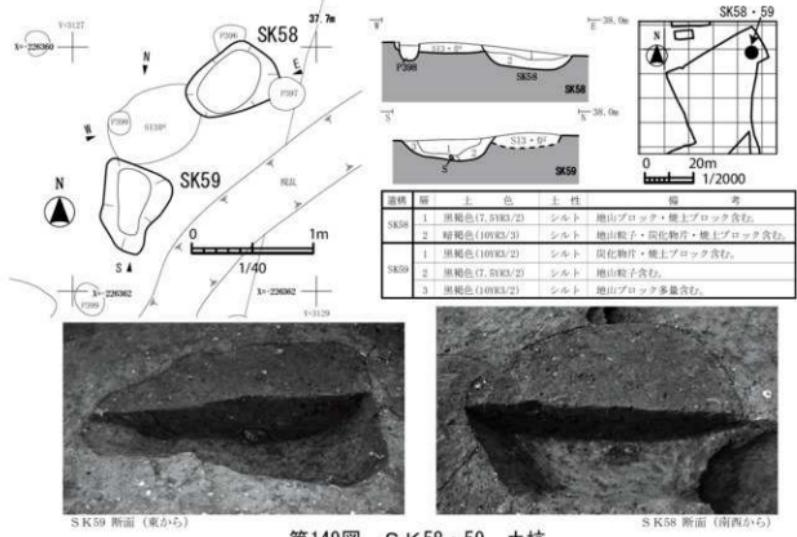


【SK58 土坑】(第149図)

A区北側の標高37.7mの平坦面に立地する。確認面はSI3上面である。SI3、P396・397と重複し、P397より古く、SI3、P396より新しい。平面形は、長軸0.75m、短軸0.56mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは15cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は、1層から非クロロ成形の土師器片が出土した。

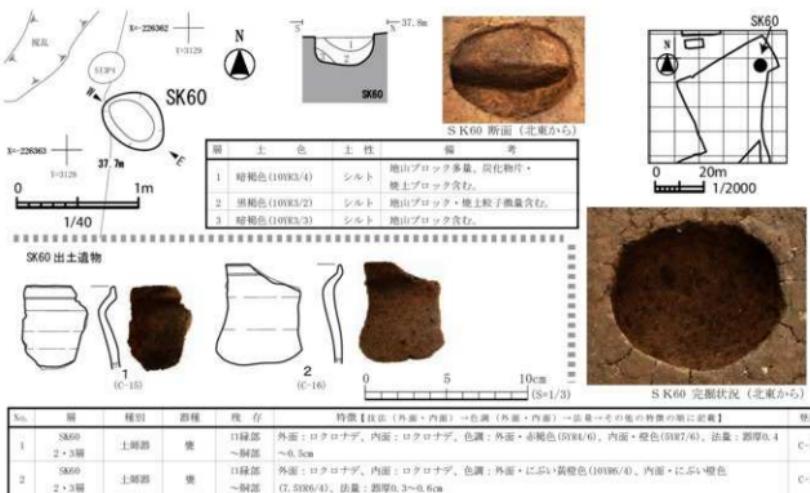
【SK59 土坑】(第149図)

A区北側の標高37.7mの平坦面に立地する。確認面はSI3上面である。SI3と重複し、これより新しい。平面形は、長軸0.72m、短軸0.50mの南北方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは18cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は、1層からロクロ成形の土師器片が出土した。



【SK60 土坑】(第150図)

A区北側の標高37.7mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SI3と重複し、これより新しい。平面形は、長軸0.50m、短軸0.44mの東西方向に長軸をもつ梢円形を呈し、深さは26cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は、2・3層からロクロ成形の土師器片が出土し、このうち図示できものは、土師器甕(第150図1・2)である。



第150図 SK60 土坑

【SK61 土坑】(第151図)

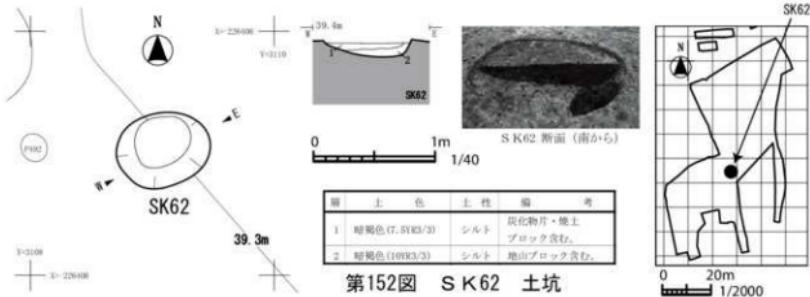
A区北側の標高38.3mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.60m、短軸0.49mの南北方向に長軸をもつ梢円形を呈し、深さは10cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第151図 SK61 土坑

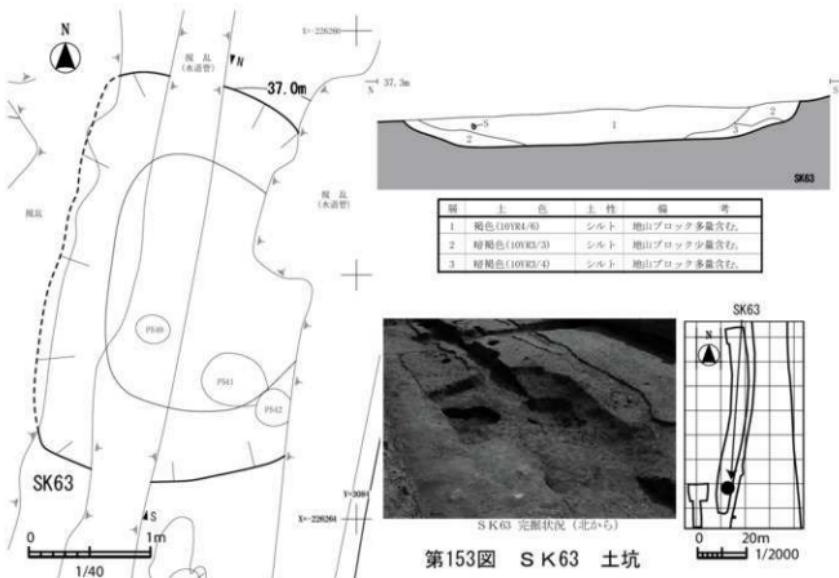
【SK62 土坑】(第152図)

A区中央の標高39.3mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は、長軸0.75m、短軸0.60mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは14cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は、1層からロクロ成形の土師器片が出土した。



【SK63 土坑】(第153図)

D区南側の標高37.0mの平坦面に立地する。確認面はVb層である。土坑の東側と西側が後世の搅乱により削平を受け、残存していない。P540・541・542と重複し、P540・542より古く、P541より新しい。平面形は、長軸3.20m、短軸2.10mの南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは36cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。

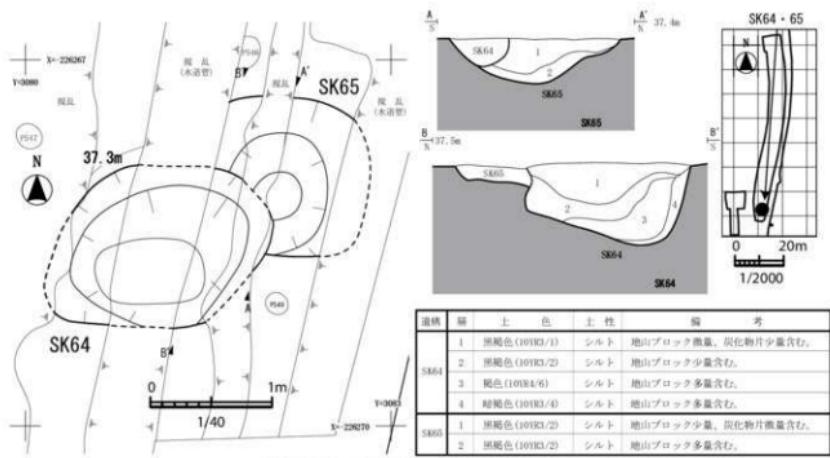


【SK64・65 土坑】(第154図)

D区南側の標高37.3mの平坦面に立地する。確認面はVb層である。後世の搅乱により削平を受け、残存状態は悪い。SK65と重複し、これより新しい。平面形は、長軸2.00m、短軸1.40mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは78cmである。長軸方向の断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は、1層から縄文土器片が出土した。

【SK64 土坑】(第154図)

D区南側の標高37.3mの平坦面に立地する。確認面はVb層である。後世の搅乱により削平を受け、残存状態は悪い。SK64と重複し、これより古い。平面形は、長軸1.30m以上、短軸1.20mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈すると推定され、深さは38cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

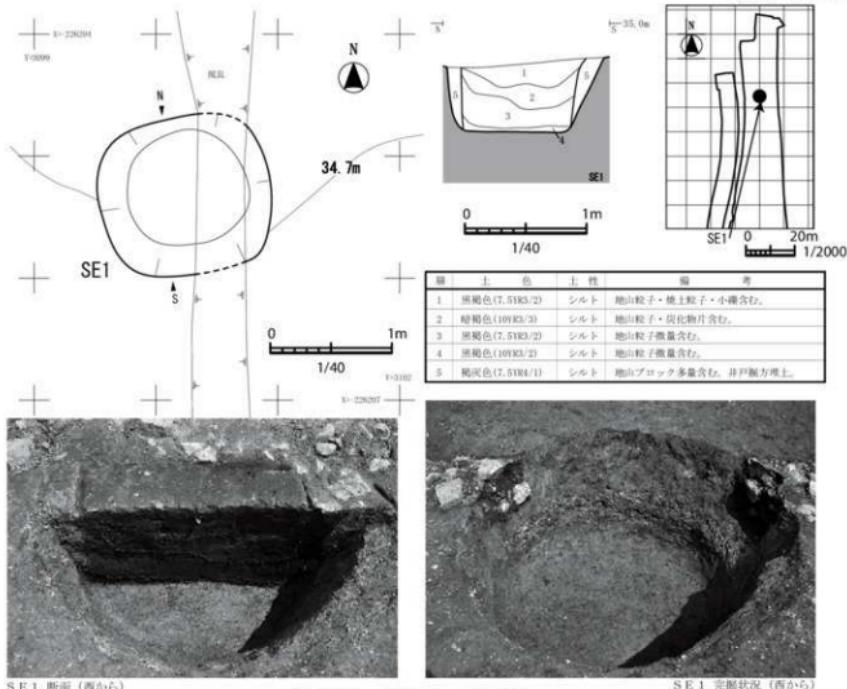


第154図 SK64・65 土坑

②井戸跡

【SE1井戸跡】(第155図)

B区北側の標高34.7mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。井戸跡の一部は後世の搅乱により削平を受けている。平面形は長軸1.35m、短軸1.20mの円形を呈し、深さは0.62mである。短軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は5層に分かれ、1~4層は自然堆積、5層は井戸の掘方埋土（人為堆積）である。井戸枠は確認されなかったが、掘方埋土が井戸の底面から上面まで直立する形で堆積していることから、本来は井戸枠を有した井戸であった可能性がある。遺物は出土していない。



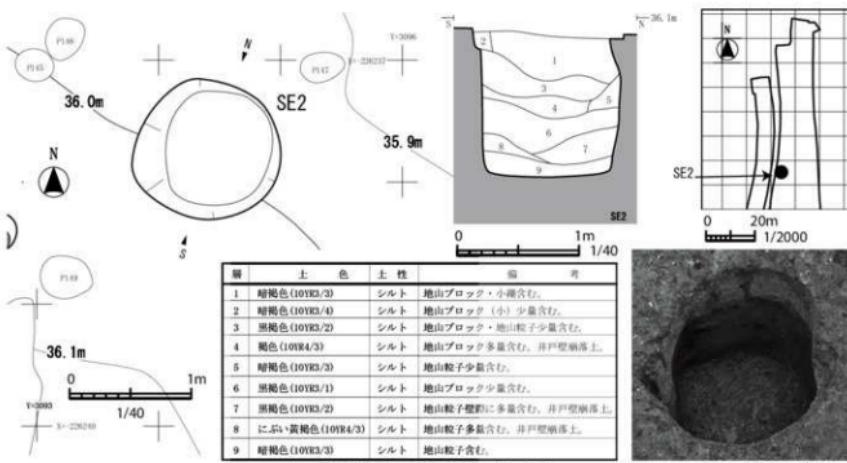
SE 1 断面（西から）

第155図 SE 1 井戸跡

SE 1 完掘状況（西から）

【SE 2 井戸跡】(第156図)

B区中央やや北寄りの標高 36.0m の平坦面に立地する。確認面はVa層である。素掘りの井戸で、平面形は長軸 1.22m、短軸 1.06m の円形を呈し、深さは 1.16m である。長軸方向の断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 9 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

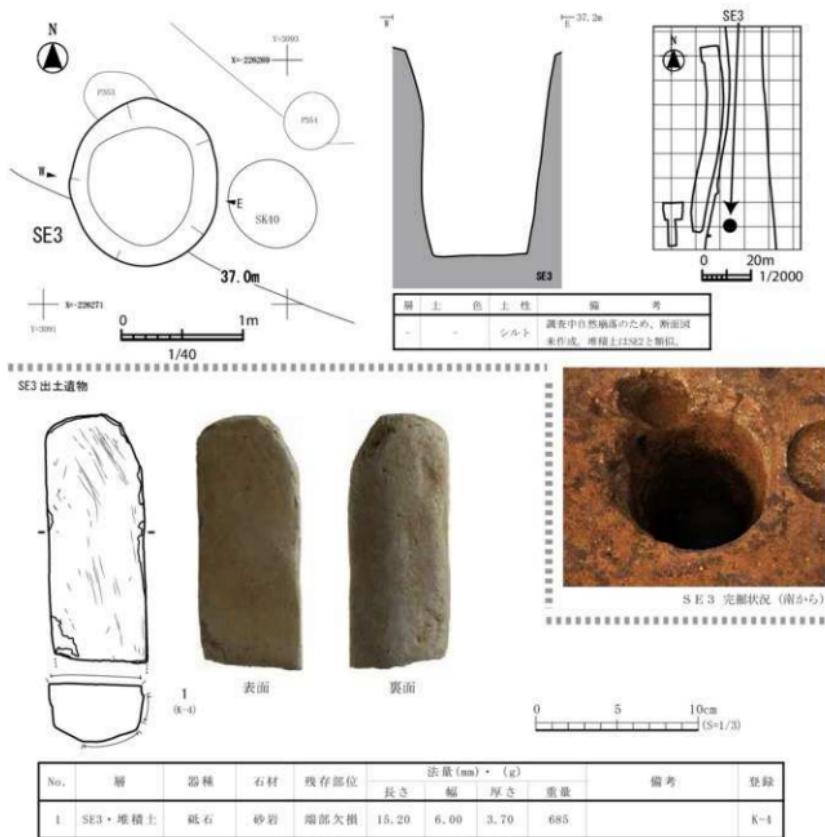


第156図 SE 2 井戸跡

SE 2 完掘状況（南から）

【S E 3 井戸跡】(第157図)

B区中央の標高37.0mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SB23・P353と重複し、これより新しい。素掘りの井戸で、平面形は長軸1.36m、短軸1.20mの円形を呈し、深さは3.34mである。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。遺構精査(半裁)中に土層断面が崩落してしまったため、断面図は作成することができなかったが、堆積土は自然堆積で、黒褐色を基調とする堆積土であった。遺物は、堆積土から砾石(第157図1)が出土した。



第157図 S E 3 井戸跡

(5) 性格不明遺構・焼成遺構・ピット

性格不明遺構 2 基、焼成遺構 2 基、ピット 221 個を検出した。性格不明遺構・焼成遺構の特徴等については第 11 表、ピットについては第 12 表にまとめた。

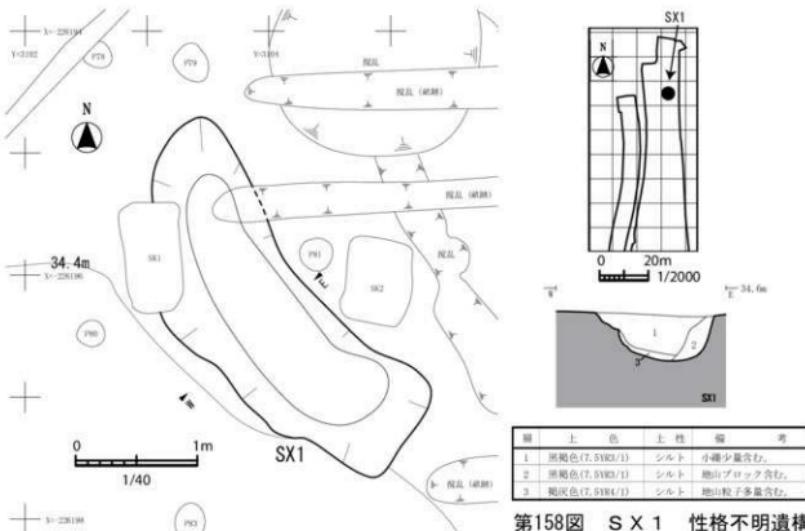
第11表 的場遺跡 性格不明遺構・焼成遺構 属性表

遺構No.	平面形	規模 (m)	深さ (m)	断面形	堆積土	出土遺物	備考
SX.1	不整形	3.24×1.18	0.38	不整形	自然	—	SK1より古い。底面に凹凸
SX.2	圓筒状	上幅: 0.30~0.60 下幅: 0.20~0.55	0.04~0.10	圓筒状	自然	—	P230, P249, SB21・P251, SB24・P227, SB25・P532, SB2より古い
SX.3	不整形	0.71×0.39	0.18	圓筒状	1層: 地面 2層: 人為	土師器	焼成遺構、底面に凹凸
SX.4	椭円形	0.96×0.77	0.07	圓筒状	1層: 地面 2層: 人為	土師器	焼成遺構

①性格不明遺構・焼成遺構 (SX.1~4)

【SX.1 性格不明遺構】(第158図)

B 区北側の標高 34.4m の平坦面に立地する。確認面は Va 層である。遺構の一部は後世の擾乱により、削平を受けている。SK1 と重複し、これより古い。平面形は長軸 3.24m、短軸 1.18m の不整形を呈し、深さは 38cm である。長軸方向の断面形は不整形で、底面には凹凸がある。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。形状が不整形で、底面や壁に凹凸がみられることから、土坑ではなく、性格不明遺構として取り扱った。

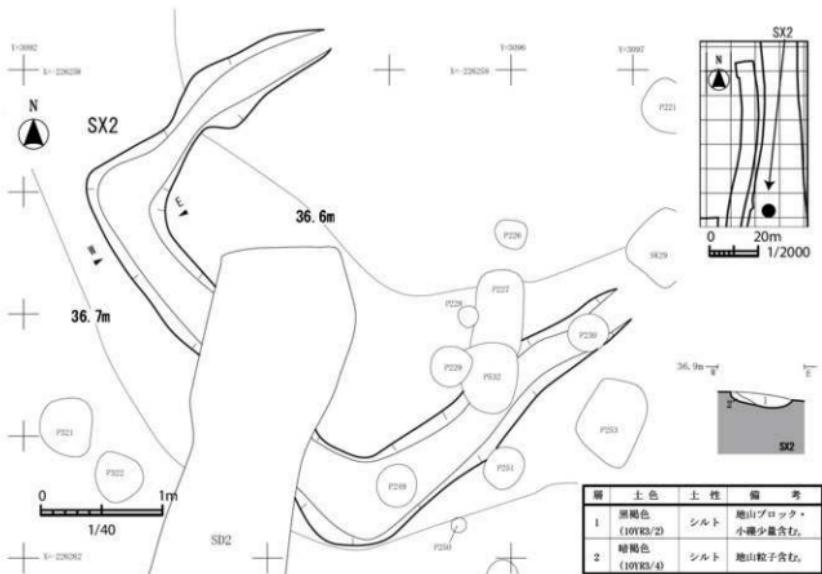


第158図 SX.1 性格不明遺構

【S X 2 溝状遺構】(第159図)

B区中央の標高36.6mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。SB21・P251、SB24・P227、SB25・P532、SD2、P230・249と重複し、これらより古い。平面形は「コの字形」の溝状となる。検出長は北辺で2.2m、西辺で3.3m、南辺で2.8mの総長8.3mである。全体の規模は、溝の北辺と南辺で南北約4.0mである。溝の北辺と溝の上幅は0.30~0.60m、下幅は0.20~0.55mで深さは4~10cmである。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

溝の東半が残存していないため、その詳細は不明であるが、溝の規模や形状から、溝跡は堅穴住居跡の周溝部分のみが残存しているものである可能性が想定される。しかし、周溝の内側で柱穴や焼面等を確認することができなかったことから、今回は性格不明遺構として取り扱った。



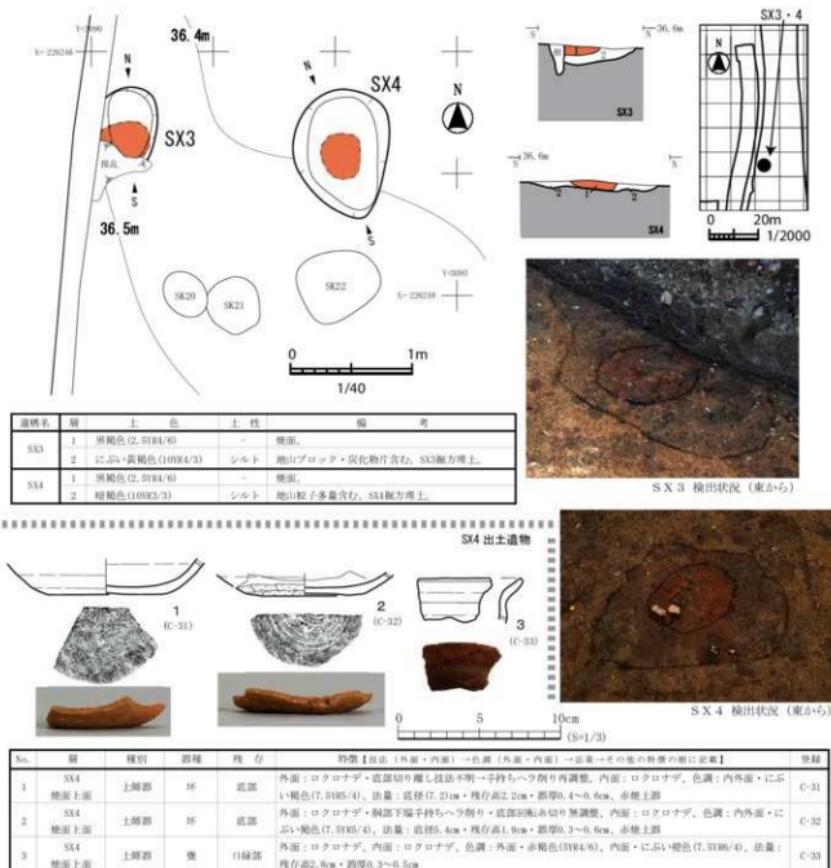
第159図 SX2 溝状遺構

【S X 3 焼成遺構】(第160図)

B区中央の標高36.5mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。遺構の西側は調査区外に続いている。また、南側は後世の擾乱により、削平を受けている。平面形は長軸0.71m、短軸0.39mの不整形を呈し、深さは18cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面には凹凸がある。堆積土は2層に分かれ、1層は焼けが及んだ範囲、2層は掘方埋土(人為堆積)である。遺物は、掘方埋土から土師器片が出土した。

【SX4 焼成遺構】(第160図)

B区中央の標高36.4mの平坦面に立地する。確認面はVa層である。平面形は長軸0.96m、短軸0.77mの橢円形を呈し、深さは7cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、1層は焼け及んだ範囲、2層は掘方埋土（人為堆積）である。遺物は、焼面（1層）上面からロクロ成形の土器片が出土し、このうち図示できたものは、土器器坏（第160図1・2）・甕（第160図3）である。



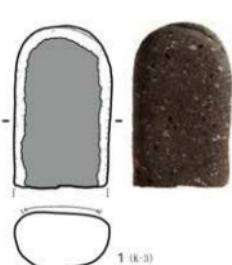
第160図 SX3・4 焼成遺構

②ピット（第9～15図、第12-1・12-2表）

ピットには、柱痕跡が認められる「柱穴跡」と、柱痕跡が認められない「小穴跡」がある。このうち、本項で報告する「柱穴」は、本来は掘立柱建物や柱穴列などを構成する柱穴跡であったと考えられるが、現地調査・整理作業段階において、これらを構成する建物跡を認定することができなかつたため、ここではピットとして報告することとした。

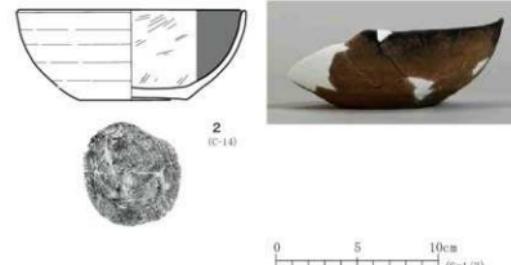
ピットは、A～D区で221個検出した（第8～10図）。確認面はVa～b層である。それぞれの規模、柱痕跡の有無、堆積土・埋土、重複関係等については第12-1・12-2表にまとめた。これらのピットは、長軸16～60cm、短軸12～48cmの円形・楕円形・長方形・隅丸方形・不整形を呈し、深さは3～55cmである。221個中76個で直径7～49cmの円形・楕円形の柱痕跡を確認した。これらのピットは、A区～D区全城に分布するが、特にB区中央部に多く分布している。遺物は、P13・32・142・149・150・169・172・185・202・246・384・397から土師器、P408から土師器坏（第161図2）、P266から磨石（第161図1）が出土した。

P266 出土遺物



1 (K-3)

P408 出土遺物

2
(C-14)0 5 10cm
(S=1/3)

No.	層	器種	石材	残存部位	法量(mm)・(g)			備考	登録
					長さ	幅	厚さ		
1	P266・堆積土	磨石	安山岩	端部欠損	10.10	6.10	3.50	445	K-3

No.	層	種別	器種	残存状況	特徴【抜量（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量】→その他の特徴の順に記載】	備考
2	P408 掘立土	土師器	坏	口縁部 ～底部 （H9BS/3）、内面：黑色（N2/0）、底面：白色（N2/0）、法量：口径13.9cm・高さ6.5cm・底径6.5cm・厚さ0.3～0.8cm	C-14	

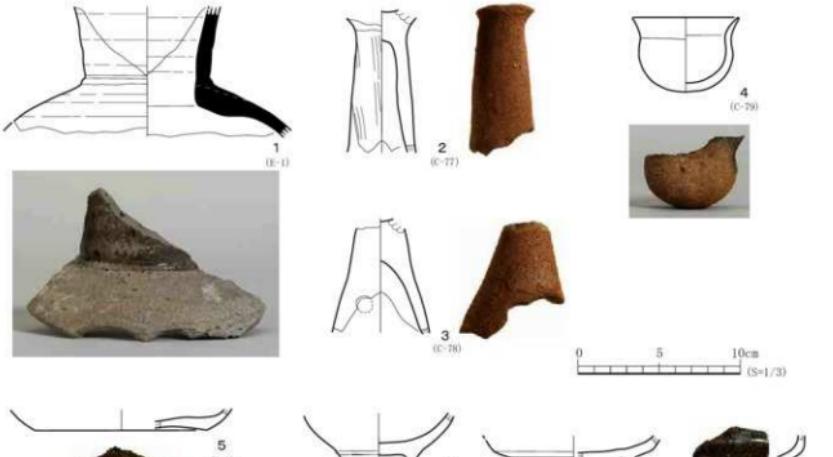
第161図 Pit出土遺物



的場遺跡 発掘調査作業の様子

(6) 遺構検出面、排土等出土遺物 (第162図)

このほか、遺構検出面・排土・搅乱等から縄文土器・土師器・須恵器・陶器・石器が出土した。このうち図示できたものは、須恵器壺 (第162図1)、土師器高坏 (第162図2・3)、土師器ミニチュア土器 (第162図4)、陶器 (第162図5~9) である。



No.	種	種別	器種	現存	特徴【技術(外側・内面)→色調(外側・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	参考
1	ADK 検出面	須恵器	壺	頸部 ～底部	外側：クロロナガ・黒褐色自然釉(灰色系)付着、内面：オクロナガ・黒褐色自然釉付着、色調：外側・灰褐色(B6/6)、内面・灰褐色(B5/9)。法量：頸部径8.0cm・残存高8.0cm・底厚0.6～1.5cm、合併大戸窓型	E-1
2	BOK 移土	土師器	高坏	脚部	外側：ハラミカギ・素面、内面：素面のため不明。色調：内外面・褐色(7.5YR8/6)、法量：残存高8.8cm・底厚0.6～0.9cm	C-77
3	BOK 移土	土師器	高坏	脚部	外側：素面のため不明、円窓穿孔(複数2箇所)、内面：素面のため不明。色調：内外面・褐色(7.5YR8/6)、法量：残存高7.0cm・底厚0.4～2.4cm	C-78
4	表器	土師器	ミニチュア 土器	口縁部 ～底部	外側：素面のため不明、丸底、内面：素面のため不明、色調：内外面・にじみ・黄褐色 (10/06/21)。法量：口径16.0cm・底厚4.6cm・底厚0.2～0.3cm	C-79

No.	種	種別	器種	現存	特徴	参考
5	DK検出面	陶器	小型甕	底部	法量：直径約10.6cm・残存高1.3cm・底厚0.4～0.7cm。 鉄錆、痕跡不明、18～19世紀代？	1-9
6	DK搅乱	陶器	土瓶	口縁部	法量：口径(8.6)cm・残存高1.3cm・底厚0.2～0.4cm。 鉄錆、白色破損、透明釉、底地：大輪相馬、明治時代以前	1-10
7	DK搅乱	陶器	甕	底部	法量：直径4.4cm・残存高3.3cm・底厚0.4～0.7cm、底地：美濃守、江戸時代	1-11
8	DK排土	陶器	鉢	底部	法量：底径17.4cm・口径22.0cm・底厚0.4～0.6cm。 瓦石錆、底地：志野、17世紀初め	1-12
9	CD表土	陶器	小型甕	頸部～底部	法量：底径0.4～0.6cm、鉄錆、底地不明、18～19世紀代？	1-13

第162図 その他の出土遺物-検出面・搅乱・表土・排土・表採-

第IV章 総 括

今回の調査で検出した遺物・遺構について、ここでは、その特徴や時期を検討し、本遺跡における各時代の特徴をまとめる。

1. 出土遺物の特徴と時期

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器である。出土した土器類の総数は2,582点（約28,315g）、石器類の総数は7点（約2,098g）である。このうち、土器類の内訳は、縄文土器が25点（約2,535g）、弥生土器が1点（約10g）、土師器が2,526点（約24,360g）、須恵器が12点（約930g）、陶器が18点（約480g）である。これらの出土遺物のうち、本報告では、土器類105点、石器類は5点について図示した。なお、それぞれの遺構から出土した遺物については第13-1・2表にまとめた。

以下、それぞれについて検討を行う。

(1) 縄文土器（第163図）

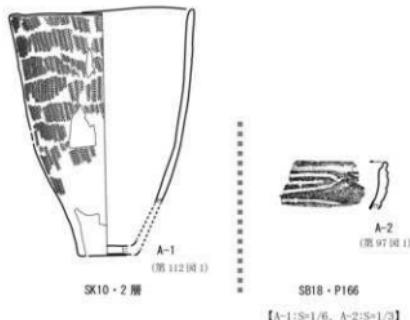
25点出土した。そのほとんどが破片資料で、図示できたものはSK10出土の深鉢1点（第112図1）とSB18・P166出土の鉢1点（第97図1）である。

第112図1の深鉢は、ほぼ完形の状態で、SK10に据えられた状態で出土した。深鉢は、地紋のみで、外面全体に組紐回転文を施し、胎土に纖維を含む。組紐回転文を施す深鉢は、山元町西石山原遺跡（初鹿野ほか2012）などに類例があり、これらの特徴から、縄文時代前期前葉の大木1式前後ものと思われる。

第97図1の鉢は、SB18・P166掘方埋土から出土しており、建物柱穴構築時に掘方埋土に混入したものと思われる。外面に変形工字文、内面口縁端部に沈線を施す。文様の特徴から、縄文時代晩期の大洞A'式（山内1964）のものと思われる。

(2) 弥生土器（第164図）

1点出土した（第104図38）。器形の特徴から、器種は鉢の口縁部と思われる。文様は、外面に変形工字文、内面口縁端部に沈線を施す。この特徴をもつ土器の類例としては、名取市原遺跡（大友・福山1997、大友・鶴崎2000）などがあり、弥生時代中期前半の原式（須藤1999）と考えられる。



第163図 的場遺跡出土縄文土器



第164図 的場遺跡出土弥生土器

第13-1表 的場遺跡

遺構名	出土部位	出土点数【上段：出土点数、下段：物類重量(g)】					計
		縄文土器	弥生土器	土器部	漢式器	陶器	
SI1	堆積土			2 (5)			2 (5)
	離力埋土			56 (855)			56 (855)
	P12 離力埋土			4 (765)			4 (765)
	P2 柱切 敷穴			3 (10)		3 (10)	
	P5 柱切 敷穴	2 (20)				2 (20)	
	P8 柱切 敷穴			3 (10)		3 (10)	
	1層			2 (5)		2 (5)	
	2層			10 (85)		10 (85)	
	小計	2 (20)		82 (735)		84 (720)	
	1層		1 (11)			1 (140)	
SI2	1+2層		23 (23)			23 (150)	
	小計	24 (24)				24 (290)	
	1層		53 (810)			53 (810)	
SI3	床面		23 (75)			23 (75)	
	離力 敷土		1 (5)			1 (5)	
	小計	77 (960)				77 (960)	
	1層		4 (35)			4 (35)	
SI4	カマド燃焼部		14 (480)	1 (25)		15 (515)	
	P4 柱抜 敷穴		4 (90)			4 (90)	
	SK1 1層		2 (120)			2 (120)	
	小計	24 (23)	1 (25)			25 (760)	
	P10 離力 敷穴	1 (10)		2 (15)		3 (25)	
SI5	P16 柱抜 敷穴		2 (45)			3 (45)	
	P530 柱抜 敷穴		1 (5)			1 (5)	
	小計	6 (65)				7 (75)	
	P7 離力 埋土		2 (25)			2 (25)	
SI6	P11 離力 埋土		1 (10)			1 (10)	
	小計	4 (35)				4 (35)	
	P17 離力 埋土		2 (10)			2 (10)	
SI7	P33 離力 埋土	2 (15)				2 (15)	
	小計	2 (15)	2 (20)			4 (35)	
	P41 柱抜 敷穴		25 (195)			25 (195)	
SI8	P63 離力 埋土		1 (5)			1 (5)	
	P57 柱抜 埋土		1 (25)			1 (25)	
SI9	P56 離力 埋土		1 (5)			1 (5)	
	P66 柱抜 埋土		8 (280)			8 (280)	
SI10	P117 離力 埋土		1 (5)			1 (5)	

遺物出土状況(1)

遺構名	出土部位	出土点数【上段：出土点数、下段：物類重量(g)】					計
		縄文土器	弥生土器	土器部	漢式器	陶器	
P18 離力 埋土				1 (5)			1 (5)
P165 柱切 敷穴				1 (5)			1 (5)
P166 離力 埋土	1 (10)			1 (5)			2 (15)
P533 柱抜 埋土				1 (10)			1 (10)
小計	1 (10)			4 (25)			5 (25)
P153 離力 埋土				1 (5)			1 (5)
P255 柱抜 埋土				1 (15)		1 (15)	2 (15)
P76 柱抜 埋土				1 (5)			1 (5)
P297 離力 埋土				2 (15)			2 (15)
P177 柱抜 敷穴				3 (15)		1 (5)	4 (20)
P281 柱抜 埋土				1 (5)			1 (5)
小計				4 (20)		1 (15)	5 (20)
P271 柱抜 埋土				1 (5)			1 (5)
P221 離力 埋土				1 (5)			1 (5)
P222 柱切 敷穴				1 (10)			1 (10)
小計				2 (15)		1 (10)	3 (25)
P282 柱抜 埋土				1 (10)			1 (10)
P285 柱抜 敷穴				5 (15)		1 (5)	6 (20)
P286 柱抜 埋土				4 (20)		1 (15)	5 (20)
P289 柱抜 敷穴				5 (20)	1 (20)		6 (40)
P290 柱抜 埋土				2 (10)			2 (10)
P358 柱抜 敷穴			1 (5)				1 (5)
P369 柱抜 埋土			2 (5)				2 (5)
P374 柱抜 敷穴			1 (15)				1 (15)
P404 離力 埋土	1 (40)						1 (40)
P409 柱抜 敷穴			2 (10)				2 (10)
P501 柱抜 埋土			1 (5)				1 (5)
P511 柱抜 敷穴			2 (30)				2 (30)
小計	2 (5)		88 (88)	1 (320)	1 (95)		91 (420)
P510 柱抜 敷穴			35 (35)				35 (35)

※土器部の()内の数字は、出土点数の中におけるクロロ土器の点数である。

※出土遺物点数は、上段の数字が「出土点数」、下段()内の数字が「出土遺物の総重量(g)」である。

※石器の内容は下記のとおり

SK1：石臼(石材：離力土) SK4：砾石(石材：安山岩)

SK6：磨石(石材：安山岩) SK9：砾石(石材：砂岩)

P266：磨石(石材：安山岩) 表盤：不定形石器(石材：真岩)

SK44：磨石(石材：真岩)

第13-2表 の場跡遺跡

遺構名	出土層位	出土点数【上段：出土点数、下段：乾燥重量(g)】						計	
		縦文土器	弥生土器	土器部	須恵器	陶器	石器		
S01	新縁土	1 (20)	7 (15)		1 (7)	9 (42)			
S02	新縁土		1 (5)			1 (5)			
S04	1層		238 (2060)			238 (2060)			
	1・2層		114 (154)	5 (805)		119 (1560)			
	2層		321 (294)	1 (12)		321 (3105)			
	3層		478 (3569)			478 (3569)			
	3・4層		53 (480)			53 (480)			
	4層	8 (16)	277 (2145)			278 (2155)			
	4~6層		17 (545)			17 (545)			
	5・6層		3 (155)			3 (155)			
	底面		8 (20)			8 (20)			
		4 (16)	1512 (1337)	5 (305)	1 (305)	1519 (1337)			
			5 (95)			5 (95)			
S06	新縁土		1 (35)			1 (25)			
	1層		1 (55)			1 (55)			
	2層		1 (55)	1 (110)		2 (165)			
	小計		7 (175)	1 (110)		8 (265)			
S07	新縁土					1 (605)	1 (605)		
S07	1層		2 (15)			2 (15)			
S07	2層		1 (15)	1 (15)		1 (15)			
S08	新縁土	1 (16)				1 (16)			
S09	2層	1 (225)				1 (225)			
SK11	1層		1 (5)			1 (5)			
	2層		34 (450)			34 (450)			
	小計		35 (455)			35 (455)			
			5 (25)			5 (25)			
			1 (10)			1 (10)			
SK12	1層		1 (10)			1 (10)			
SK12	2層	1 (225)				1 (225)			
SK13	1層		1 (5)			1 (5)			
	2層		34 (450)			34 (450)			
	小計		35 (455)			35 (455)			
SK14	1層		5 (25)			5 (25)			
SK15	1層		2 (25)			2 (25)			
SK19	検出面		7 (35)			7 (35)			
	新縁土		2 (30)			2 (30)			
	小計		9 (65)			9 (65)			
SK20	新縁土	18 (90)				18 (90)			
SK21	新縁土	2 (160)				2 (160)			
SK22	1層	37 (1400)				37 (1400)			
SK23	新縁土	24 (125)				24 (125)			
SK24	新縁土	29 (195)				29 (195)			
SK25	新縁土	5 (25)				5 (25)			
SK29	新縁土	1 (5)				1 (5)			
SK38	新縁土	15 (155)				15 (155)			
SK39	新縁土	1 (100)				1 (100)			
SK42	新縁土		8 (105)			8 (105)			
SK44	新縁土					1 (10)			
SK51	新縁土	2 (20)				2 (20)			
遺構名		出土点数【上段：出土点数、下段：乾燥重量(g)】						計	
遺構名		縦文土器	弥生土器	土器部	須恵器	陶器	石器		
SK53	1層					7 (15)		7 (15)	
	2層					25 (675)		25 (675)	
	3層					2 (75)		2 (75)	
	小計					34 (265)		34 (265)	
						9 (60)		9 (60)	
SK56	堆積土					1 (5)		1 (5)	
SK56	1層					1 (50)		1 (50)	
SK59	1層					25 (60)		25 (60)	
SK60	2・3層					15 (75)		15 (75)	
SK62	1層					1 (5)		1 (5)	
SK64	1層	2 (15)						2 (15)	
SK3	離方堆積土					3 (5)		3 (5)	
SK4	離方堆積土					12 (15)		12 (15)	
P13	1層					1 (3)		1 (3)	
P32	1層					1 (5)		1 (5)	
P142	堆積土					2 (5)		2 (5)	
P149	離方堆積土					1 (10)		1 (10)	
P150	堆積土					2 (5)		2 (5)	
P169	堆積土					1 (10)		1 (10)	
P172	離方堆積土					1 (5)		1 (5)	
P185	柱跡群					1 (10)		1 (10)	
P202	1層					1 (35)		1 (35)	
P206	堆積土					1 (440)		1 (440)	
P216	堆積土					2 (5)		2 (5)	
P264	堆積土					9 (50)		9 (50)	
P287	離方堆積土					1 (10)		1 (10)	
P408	離方堆積土					16 (180)		16 (180)	
A1K						10 (260)	2	112 (550)	
検出面						15 (110)	1	17 (155)	
小計						125 (390)	3	129 (690)	
A1K						6 (60)		6 (60)	
壁						26 (110)	2	28 (120)	
壁						32 (185)	3	37 (280)	
小計						64 (280)	5	71 (460)	
表土(CIK)						1 (5)	2	3 (20)	
A1K						50 (420)		50 (420)	
壁						2 (5)	1	3 (5)	
壁						55 (630)	4	58 (680)	
表土(DIK)						5 (110)	1	7 (147)	
合計		25 (250)	1 (16)	2506 (2436)	6265 (6260)	32 (620)	18 (680)	7 (2000)	2995 (29412)

出土時器の()内の数字は、出土点数の中におけるクロト跡の点数である。

※出土重量点数は、上段の数字が「出土点数」、下段の()内の数字が「出土重物の総重量(g)」(乾燥重量)である。

(3) 土師器 (第 165・167 図)

1) 土師器の特徴

2,526 点出土し、このうち 83 点を図示した。残りの悪いものが多く、磨滅のため器面調整を判読できたものは一部である。これらは、非クロロ成形のものとクロロ成形のものに分かれる。

非クロロ成形の土師器は 1,900 点出土し、このうち 54 点を図示した。図示したすべての資料は破片のため、全体の器形は不明である。器種は高壺、壺、甕、鉢、瓶、ミニチュア土器で、SD4 溝跡から高壺を中心に、比較的多く出土しており、その他に S 11・3 堪穴住居跡や SK11・12・15・53 土坑、B 区排土からも出土している。また、一部表探遺物も含まれる。

クロロ成形の土師器は 626 点出土し、このうち 29 点を図示した。器種は壺、甕である。なお、図示したものは S 12・4 堪穴住居跡、掘立柱建物跡(柱抜取穴)、SD4 溝跡、SK20~23・60 土坑、SX4 焼成遺構、P408 から出土している。

以下、溝跡(SD4)、堪穴住居跡(S 11~4)、土坑(SK11・12・15・20~23・53・60)、掘立柱建物跡、焼成遺構(SX4)、その他(P408・B 区排土・表探)に分け、それぞれの遺構で出土した土師器の各器種の特徴を説明することとする。

①溝跡(SD4) (第 102~104 図)

【非クロロ成形】

図示したものは 29 点で、器種は高壺・壺・甕(または壺)・瓶である。

高壺(第 103 図 9~17、第 104 図 26~31)はすべて脚部資料である。据部が欠損しているため、脚部全体の器形は不明である。図示した資料には、「ハ」字状にひらくもの、脚の短いもの、柱状部が中空棒状のものや中実棒状のものがみられる。いずれも、器面調整は外面にわずかにヘラミガキが認められる。内面の調整については、第 103 図 9・10、第 104 図 31 はわずかにナデが認められ、第 103 図 14 はヘラ削り、第 104 図 27・29 はヘラナデが認められる。このうち第 103 図 14 は円窓が穿たれている。また、第 104 図 26 はわずかに残存している壺部内面にヘラミガキが認められる。

壺はすべて口縁部資料である。外反しながら外上方に聞く単純口縁のもの(第 104 図 35)と複合口縁のもの(第 103 図 18、第 104 図 32・36)がある。このうち、複合口縁のものには、口縁下端に刻みを施すもの(第 103 図 18)、頸部に隆帯・3 本 1 対の棒状浮文を付すもの(第 104 図 32)がある。

瓶(第 104 図 37)は単孔平底で、体部が球形を呈する甕型のものである。口縁部が欠損しているため、全体の器形は不明である。器面調整は内外面ともに判読できなかった。

この他に、器種が壺または甕の口縁部資料(第 104 図 33・34)、頸部資料(第 103 図 19・20)、底部資料(第 103 図 21~25)がある。口縁部資料はともに外反する単純口縁である。第 104 図 33 は内外面ともに調整は不明瞭だが、外面にハケメ→ヨコナデ、内面にハケメが施されている。第 104 図 34 は外面にハケメ→口唇部ヨコナデ、内面にヘラナデ→ハケメを施す。頸部資料の第 103 図 19 は外面にハケメ、内面にヘラナデ・指オサエが認められる。第 103 図 20 は内外面ともに調整は判読できなかったが、頸部と胴部の境に隆帯を伴う。底部資料はいずれも平底である。第 103 図 21 は内外面ともに調整は不明であるが、輪台充填技法が用いられている。第 103 図 22・25 はともに外面にヘラ削り、内面にヘラナデが認められる。第 103 図 23 は外面にハケメが認められる。内面の調整は不明である。

【ロクロ成形】

図示したものは4点で、器種は壺・甕である。壺は内面にヘラミガキ・黒色処理を施したもの(第102図1)と赤焼土器(註1)(第102図2)がある。第102図1の底部切り離し技法は磨滅により不明だが、外面胴部下端に手持ちヘラ削り調整が施される。第102図2の底部切り離しは回転糸切り無調整である。甕(第102図3・4)は、いずれもロクロ成形である。

②豊穴住居跡(S I 1~4)(第18・20・23・26図)

【非ロクロ成形】(第18・23図)

図示したものは12点で、器種は高壺・壺・甕である。高壺(第23図1)は脚部資料である。裾部が欠損しているため、脚部全体の器形は不明である。柱状部が中空棒状のもので、外面にわずかにヘラミガキが認められる。内面の調整は不明である。

壺(第23図3)は口縁部資料である。口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させた複合口縁で、内外面ともに口唇部にヨコナデ、頭部にハケメが認められる。

甕は口縁部資料(第18図1)と底部資料(第18図2~4)である。第18図1の口縁部資料は内外面ともに調整は不明である。底部資料の第18図2は外面にヘラ削り、内面にヘラナデを施す。第18図3は外面にハケメ→ヘラ削り、内面にハケメ→ヘラナデを施す。なお、外面底部中央に凹みがある。第18図4は外面にヘラ削りを施す。内面の調整は不明である。

この他に、器種が壺と断定できなかった口縁部資料(第23図2・4・5)と壺または甕の底部資料(第23図6~8)がある。口縁部資料は単純口縁のものと(第23図2)と口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させた複合口縁のもの(第23図4・5)がある。第23図2は外面にヨコナデ、内面にヘラナデ→ヨコナデを施す。第23図4は外面にヨコナデが認められるが、内面の調整は不明である。第23図5は内外面とも調整は不明である。底部資料は第23図6・7とともに、外面にヘラ削りを施し、輪台充填技法が用いられている。内面の調整は不明である。第23図8は外面の調整は不明であるが、内面にわずかにヘラナデが認められる。

【ロクロ成形】(第20・26図)

図示したものは7点で、器種は壺・甕である。壺は内面にヘラミガキ・黒色処理を施したもの(第20図1・2、第26図1)と赤焼土器(第26図2・3)がある。

第20図1、第26図1の底部切り離しは回転糸切り無調整である。第26図2の底部切り離し技法は不明であるが、回転ヘラ削りによる再調整、外面胴部下端に回転ヘラ削り調整が施される。甕(第26図4)はロクロ成形である。

③土坑(S K11・12・15・20~23・53・60)(第113・115・120・121・144・150図)

【非ロクロ成形】(第113・115・144図)

図示したものは10点で、器種は高壺・壺・甕・鉢である。高壺(第144図4・5)は脚部資料である。裾部が欠損しているため、脚部全体の器形は不明である。4は脚が短く、5は柱状部上部が中実のものである。どちらも外面はヘラミガキである。5の内面にはヘラナデが認められる。

壺は口縁部資料(第144図6)と底部資料(第144図7)である。第144図6の口縁部資料は粘土を貼り付けて肥厚させた複合口縁で、外面はヨコナデ、更に口縁部下端には刻みが施されている。内面の調整は不明である。第144図7の底部資料の調整は不明瞭だが、外面にヘラ削り、内面にヘラナデが認められる。

甕(第115図1)は口縁部資料である。粘土を貼り付けて肥厚させた複合口縁で、外面にハケメ→ヨコナデを施す。内面の調整は不明である。

鉢は浅い体部に外反する口縁部がつくもの(第144図1)と小型丸底鉢(第113図1・2、第144図2・3)がある。第144図1は口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面にヘラ削り、内面にヘラナデを施す。第113図1・2、第144図2はいずれも外面にヘラミガキを施し、赤彩されている。内面の調整は、第113図1は頸部にヘラミガキ、底部は凹み底である。第113図2はヘラミガキ、第144図2はヘラミガキ→ヘラナデを施し、赤彩されている。第144図3は外面の調整は、口縁部にヘラミガキ、胴部にヘラ削りが認められる。

【ロクロ成形】(第120・121・150図)

図示したものは10点で、坏・甕などである。坏は内面にヘラミガキ・黒色処理を施したもの(第120図1・2、第121図1)である。第120図1の底部は、手持ちヘラ削りによる再調整が認められる。また、胴部外面には墨書が認められ、胴部下端には手持ちヘラ削り調整が施される。第120図2の底部切り離しは回転糸切り→周縁部手持ちヘラ削り再調整である。外面胴部下端には手持ちヘラ削り調整が施される。

甕(第120図4~6、第121図2、第150図1・2)は、いずれもロクロ成形である。第120図4は外面にヘラ削り、内面にヘラナデが施される。第121図2は内外面ともに調整は不明瞭だが、外面頸部から胴部にハケメ、内面口縁部にハケメが認められる。

この他、第120図3は甕の可能性のある口縁部資料である。外傾する単純口縁で、外面胴部にヘラ削り、内面胴部にナデが認められる。

④掘立柱建物跡(第97図4~8)

【ロクロ成形】

図示したものは5点で、器種はすべて坏である。内面にヘラミガキ・黒色処理を施したもの(4~7)と赤焼土器(8)がある。S B52・P510(柱抜取穴)から4が出土し、S B51・P511(柱抜取穴)から5・6が出土した。4の底部切り離しは回転糸切り→回転ヘラ削り再調整で、外面胴部下端に回転ヘラ削りが施されている。7の底部切り離し技法は不明である。

⑤焼成遺構(S X 4)(第160図1~3)

【ロクロ成形】

図示したものは3点で、器種は坏と甕である。坏(1・2)はいずれも赤焼土器である。1の底部は手持ちヘラ削りによる再調整、2の底部切り離しは回転糸切り無調整で、外面胴部下端に手持ちヘラ削りによる調整が施されている。甕(3)はロクロ成形である。

⑥その他(P408・B区排土・表探)(第161図2・第162図2~4)

【非ロクロ成形】(第162図2~4)

図示したものは3点で、器種は高坏・ミニチュア土器である。高坏(2・3)はいずれも脚部資料で、B区排土から出土した。裾部が欠損しているため、脚部全体の器形は不明である。2は柱状部が中空棒状で、外面にわずかにヘラミガキが認められる。3は円窓(残存2箇所)が穿たれている。

ミニチュア土器(4)は表探遺物である。鉢型のもので、口径6.5cm(推定値)・器高4.6cmの丸底である。内外面ともに調整は不明である。

【ロクロ成形】(第 161 図 2)

図示したものは 1 点で、器種は壺である。P 408(掘方埋土)から出土した。内面にヘラミガキ・黒色処理を施したもので、底部の切り離しは回転ヘラ切り無調整である。

2) 土師器の編年的位置

【非ロクロ成形】(第 165 図)

非ロクロ成形の土師器のうち、高壺、鉢、壺、甕は器種や器形、製作技術の諸点から古墳時代前期の特徴を有しており、東北地方南部における土師器編年に当てはめると塩釜式期に位置づけられる(氏家 1957)。「塩釜式」土器の編年については、丹羽茂によって I・IIA・IIB・III の 3 期 4 段階に細分され(丹羽 1985)、この細分案をふまえて次山淳は、高壺・小型丸底鉢・甕の 3 器種をもとに 6 段階に編年した(次山 1992)。また、これらの成果をもとに辻秀人は器形ごとの型式学的な変遷から II 期 6 段階に編年した(辻 1994・1995)。その後の資料増加に伴い、近年では、青山博樹により編年が検討されている(青山 2010・2011)。

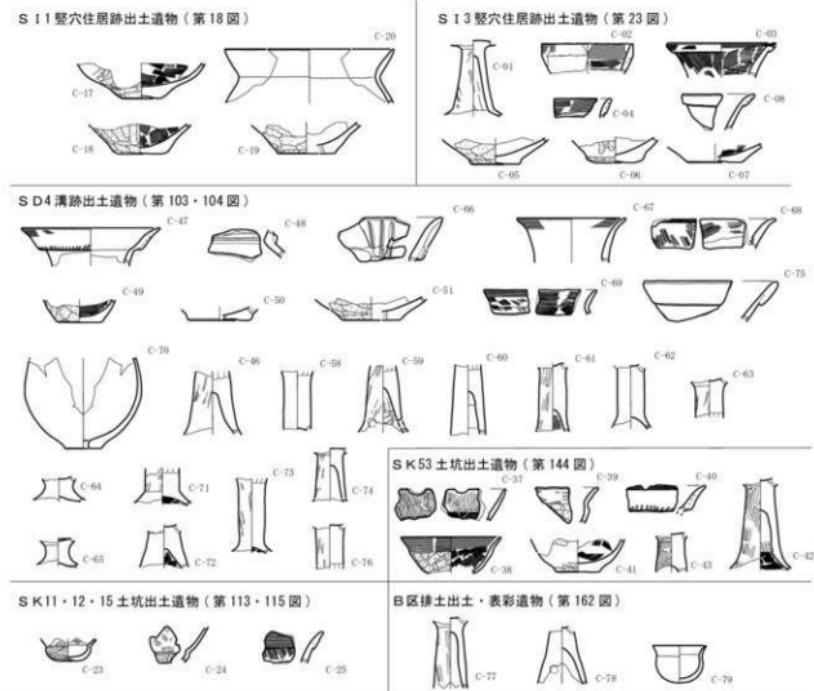
丹羽編年 (1985)	I 段階	IIA 段階		IIB 段階	III 段階	
次山編年 (1992)	1 段階	2 段階		3 段階	4 段階	5・6 段階
辻編年 (1994・1995)	II-1 期	II-2 期	III-1 期	III-2 期	III-3 期	III-4 期
青山編年 (2010・2011)	塩釜 1 式 (古相)	塩釜 1 式 (新相)	塩釜 2 式 (古相)	塩釜 2 式 (新相)	塩釜 3 式 (古相)	塩釜 3 式 (新相)

第 14 表 塩釜式土器 編年対照表(田嶋 2012)

今回の調査で出土した塩釜式期の土師器は、すべて破片資料で、残りの悪いものが多く、磨滅のため器面調整の判読ができなかったものや不明瞭なものが多いことから、これら編年案と対比してその詳細な位置づけをすることは難しい。このような点を考慮した上で、編年的位置づけを決める手掛かりとなる高壺と鉢とともに、各氏の編年を参考にして、その編年的位置づけを検討する。

① S D4 溝跡

本遺跡の中で比較的資料数の多かった遺構は、S D 4 溝跡(第 103・104 図)で、高壺を中心に出土している。図示できた高壺はすべて脚部資料で、高壺全体の器形は不明である。また、脚裾部が欠損しているため、脚部全体の器形も不明である。残存する脚部には「ハ」字状にひらくもの(第 103 図 13・14、第 104 図 30)、脚の短いもの(第 103 図 16、第 104 図 26)、柱状部が中空棒状のもの(第 103 図 9・15、第 104 図 30)や中実棒状のもの(第 103 図 11、第 104 図 27・31)などがみられる。脚部が「ハ」字状にひらくものは、名取市今熊野遺跡 15 号住居跡(丹羽 1985)出土資料などにあり、辻編年の III-2 期、丹羽編年の II A 段階、次山編年の 3 段階、青山編年の塩釜 2 式新相におかれ。脚部の短い「ハ」字状にひらくものは、美里町山前遺跡 30 号住居跡での出土例から、辻編年の III-2 期、丹羽編年の II A 段階、次山編年の 3 段階、青山編年の塩釜 2 式新相まで存続していることが確認されている(青山 2010)。また、辻編年における高壺の変遷(辻 1995)を

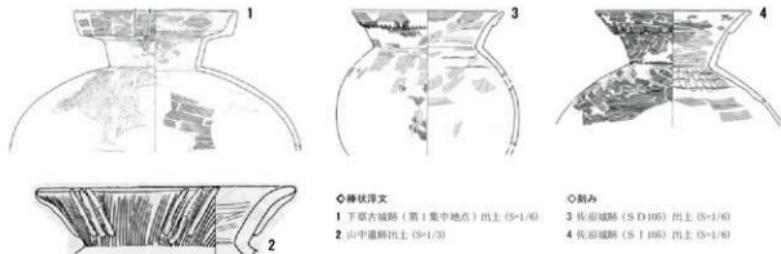


第 165 図 的場遺跡出土土器（1）—非口クロ成形—

S=1/6

参考にすると、脚上半部が中実、下半部が外反しながらひらく裾部のものは福島県域・宮城県域のIII期に広く認められるとし、脚上部が柱状中空で、脚下部が屈曲して内彎しながら外方にのびる裾部のものはIII-3期、中実棒状で脚下部が「ハ」字状にひらくものはIII-4期に位置づけられている。しかし、第103図12・17、第104図28などにより脚部全体の器形が不明で、詳細な編年的位置づけをすることが難しいことから前述したことを踏まえ、辻編年のIII-2～III-4期(丹羽編年のIIA～III段階、次山編年の3～6段階、青山編年の塩釜2式新相～塩釜3式新相)の枠内で捉えることができると考えられる。

この他、特徴的な資料の中に、複合口縁下端に刻みが施された壺(第103図18)や頸部に隆起を伴うもの(第103図20)、口縁部に3本1対の棒状浮文を付す壺(第104図32)がSD4溝跡から出土している。複合口縁下端に刻みが施されたものは、SK53(第144図6)からも同一個体と思われる資料が出土している。こうした複合口縁の下端に刻みをもつ壺は、登米市(旧迫町)佐沼城跡SD105溝跡、S I 105住居跡・F群出土資料にあり、口縁部に棒状浮文を付す壺は、大和町下草古城跡第1集中地点(天野 1994)、福島県新地町山中遺跡グリッド119地番(石本ほか 1990)出土資料などにある(第166図)。



第166図 口縁部に棒状浮文・刻みのある壺の類例

S D4 溝跡出土の非ロクロ成形の土師器は、器種組成などの諸点の特徴から、迫町佐沼城跡 S D105 溝跡から出土している土器群と類似している(佐沼城跡 S D105 溝跡出土の土器群は、全体として辻編年のIII-2～III-4期、丹羽編年のII～III段階、次山編年の3～5段階、青山編年の塩釜2式新相～塩釜3式新相の枠内で捉えることができるし、塩釜式の中でも概ね前期の終わり頃とされている)。今回の調査で出土したS D4 溝跡出土の非ロクロ調整の土師器も諸点の特徴から全体としては、辻編年のIII-2～III-4期(丹羽編年のII～III段階、次山編年の3～6段階、青山編年の塩釜2式新相～塩釜3式新相)の枠内で捉えることができると考えられる。

② 壺穴住居跡・土坑ほか

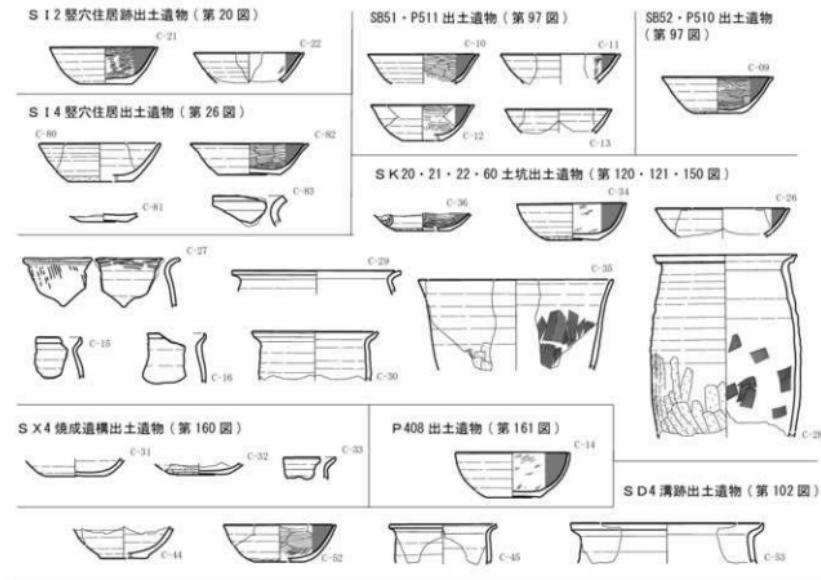
S D4 溝跡以外では、S I 3 壺穴住居跡・SK53 土坑から高坏脚部が出土し、SK11・12・53 土坑からは鉢が出土している。図示できたものはすべて破片資料のため、全体の器形が分かるものはないが器形や製作技術などの諸点の特徴から、S D4 溝跡出土土器と同様の時期幅で捉えることができると考えられる。

【ロクロ成形】(第167図)

ロクロ成形の土師器については、底部切り離し技法や器形などの特徴から、東北地方南部における土師器編年に当てはめると表衫ノ入式期に位置づけられる(氏家1957)。比較的資料数が多いのはS I 4 壺穴住居跡、次いでSD4 溝跡である。ほとんどが破片資料で、資料数も十分ではないことから、詳細な編年的位置づけをすることは難しいが、資料数の多い坏をもとに検討すると、口径に対しての底径の大きさや深身で塊形を呈すること、口縁端部が外傾することなどの特徴から、概ね9世紀後半を中心としたものと考えられる。

③まとめ

以上のことから、本遺跡で出土した非ロクロ成形の土師器は、全体として塩釜式期の辻編年のIII-2～III-4期(丹羽編年のII～III段階、次山編年の3～6段階、青山編年の塩釜2式新相～塩釜3式新相)の枠内で捉えることができると考えられ、塩釜式の中でも、概ね前期の終わり頃と考えられる。ロクロ成形の土師器については、表衫ノ入式期の中でも、9世紀後半を中心としたものと考えられる。



第167図 的場遺跡出土土師器(2) 一ロクロ成形一

S=1/6

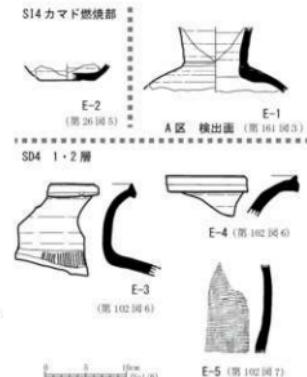
(4) 須恵器 (第168図)

12点出土し、このうち5点図示した。出土した器種は、壺・甕・壺である。今回の調査で出土した土師器が2,526点（うちロクロ土師器は626点）であるのに対し、須恵器の出土数は非常に少ない。出土した須恵器は遺構に伴うものが少なく、破片資料であることから、ここでは、それぞれの個別の特徴からおおよその時期について検討することとする。

今回図示できたものは、SI4堅穴住居跡出土の壺（第26図5）、SD4溝跡出土の甕（第102図5～7）、A区検出面出土の壺（第161図3）である。

第26図5の壺は底部資料で、底径が6.7cm、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。共伴している土師器壺の年代から、9世紀第4四半期前後のものと思われる。

第161図3の甕は頭部～肩部資料であるが、全体の器形は不明である。長頸瓶の可能性がある。頭部にリング状の凸帯が付き、外面には灰色の自然釉がかかり、胎土の色調が灰色系であることから、福島県会津若松市に所在する大戸窯跡群で生産されたものと推定され、9世紀後半代のものとみられる（註2）。



第168図 的場遺跡出土須恵器

甕には、口縁部資料と胸部資料があり、口縁部資料（第102図5・6）は、口縁端部が上下につまみあげられ口縁帯が作られており、このうち第102図5の甕は肩部付近に平行タタキが施されている。胸部資料（第102図7）は、外面の調整が平行タタキ、内面が同心円文で当具痕→ナデ調整である。甕の口縁部資料は、中型の甕と思われる。中型の甕は、県内で8世紀後半期から生産され、10世紀後半期頃まで生産されている（村田1992）が、頸部が無文のものがほとんどで、本資料では年代の位置づけが難しい。ここでは、共伴している土師器や周辺の遺構出土の遺物の年代から、これらの甕は9世紀後半期前後のものとしておきたい。

（5）陶器（第97・135・162図）

18点出土し、このうち12点図示した。なお、出土した陶器のそれぞれの主な特徴・産地・年代については下記のとおりである。器種には、碗・香炉・土瓶・擂鉢・鉢・甕などがあり、図示できたものは、SB24・P176出土の擂鉢（第97図2）、SB25・P177出土の小型甕（第97図3）、SK41出土の香炉（第135図1）、SK42出土の大鉢・碗・甕・擂鉢（第135図2～5）、検出面出土の小型鉢（第162図5）、搅乱出土の土瓶・碗（第162図6・7）、排水土・表土出土の鉢・小型甕（第162図8・9）である。これらの陶器の生産地は、岸窯（3点）、小野相馬（2点）、大堀相馬（1点）、美濃（2点）、志野（1点）などで、その年代は17～19世紀代である（註3）。

出土位置	種別	器種	残存	特徴	直径	高さ
SB24・P176柱直跡南面	擂鉢	直鉢	岸窯	岸窯、17世紀代	I-1	97-2
SB25・P177柱直跡南面	小型甕	肩部	岸窯	底地不明、鉄輪・巻輪底なし、18～19世紀代	I-2	97-3
SB23・P356柱直跡南面	擂鉢	直鉢	岸窯	岸窯、外側は鉄輪、内面は灰釉、17世紀代	I-3	-
SK41・堆積土	陶器	香炉	直鉢	小野相馬、灰釉、つけ掛け、18世紀代	I-4	135-1
SK42・堆積土	陶器	大鉢	口縁部	美濃、鉄輪、輪脚なし、地の跡は長石釉、17世紀前葉	I-5	135-2
SK42・堆積土	陶器	碗	口縁部	小野相馬、白毛釉、あめ踏出し、18世紀代	I-6	135-3
SK42・堆積土	陶器	甕	肩部	底地不明、鉄輪、輪脚なし、江戸時代	I-7	135-4
SK42・堆積土	陶器	甕	肩部	岸窯、内面は長石釉、17世紀代	I-8	135-5
BB256出張	陶器	小型甕	底部	岸窯、底地不明、鉄輪、18～19世紀代？	I-9	162-5
BB256出張	陶器	土瓶	口縁部	大堀相馬、鉄輪、白の底釉、透明釉、柄持時代以前	I-10	162-6
D区搅乱	陶器	瓶	肩部	奥窯？発見しない、江戸時代	I-11	162-7
B区搅乱土	陶器	鉢	直鉢	志野、長石釉、17世紀前葉	I-12	162-8
C区直土	陶器	小型甕	直鉢	岸窯、底地不明、鉄輪、18～19世紀代？I-12と同一個体	I-13	162-9
表銀	陶器	中口甕	肩部	岸窯、底地不明、鉄輪	I-14	-
BB区搅乱	陶器	鉢	直鉢	岸窯、底地不明、鉄輪	I-15	-
D区搅乱	陶器	大鉢	直鉢	美濃、輪脚なし、地の跡は長石釉、17世紀前葉、I-15と同一個体？	I-16	-
D区搅乱	陶器	甕	肩部	岸窯、底地不明、鉄輪、発色美しい白釉	I-17	-
C区直土	陶器	小型甕	直鉢	岸窯、底地不明、鉄輪、18～19世紀代？I-13と同一個体	I-18	-

（6）石器

石器は楔形石器1点、不定形石器1点・磨石1点・敲石1点・石臼1点・砥石2点が出土した。以下に全点を対象に各器種の特徴について整理する。

【楔形石器】断面が凸レンズ状で、長軸の対向する縁辺に階段状の剥離痕が認められる石器である。1点出土した（第136図1）。石材は頁岩である。

【不定形石器】二次加工の施された石器の中で、石器の形状に一定の傾向が認められないものを一括し不定形石器とした。二次加工の頻度や加工部分の形状で分類した。I類は連続的な二次加工が行われるもので、いわゆるスクレイパー、II類は鋸歯状の部位が作り出されるもの、III類は剥片・分割縫・縫の一部に二次加工が行われるもので、I類に比べて二次加工が疎らなもの、IV類はその他の未製品やトゥール、トゥールの一部と考えられるものである。IV類が1点出土した。石材は頁岩である。

【磨石】磨面が認められるものである。1点出土し、綫長の扁平縫を利用している（第161図1）。石材は安山岩である。

【敲石】敲打痕が認められるもので、棒状のものが1点出土した（第102図8）。石材は安山岩である。

【石臼】石臼の下臼部分が1点出土した（第114図1）。石材は凝灰岩である。

【砥石】板状で表面に線状の擦痕が認められるものである。2点出土した。石材は砂岩（第157図1）、泥岩である。

2. 検出した遺構の特徴と時期

今回の調査では、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡53棟、溝跡6条、土坑65基、井戸跡3基、性格不明遺構・焼成遺構4基、ピット221個を検出した。ここでは、これらの遺構の堆積土の特徴・出土遺物・遺構の重複関係等からその時期について検討する。

(1) 出土遺物・遺構の重複関係等からみた各遺構の時期

今回の調査で検出した遺構の堆積土のうち、自然堆積のものほとんどは、黒褐色・暗褐色シルトを主体とするものである。検出した遺構は出土遺物の特徴から、大きく縄文時代・古墳時代・平安時代・近世に分けられるが、その堆積土に大きな差異は認められなかった。そこで、今回の調査で検出した遺構について、出土遺物や重複関係から、各遺構の時期を検討する。

なお、各遺構から出土した遺物は第13-1・2表、主要遺構の重複関係と所属時期は第169図にまとめた。

1) SI1~4 竪穴住居跡

竪穴住居跡は4軒確認され、その堆積土・床面・床面施設等から一定量遺物が出土している。

SI1 竪穴住居跡は、中央部に炉を有し、隅丸方形を呈する住居である。遺物は、堆積土・床面（掘方埋土）・炉掘方・床面施設（P2・5・8、SK1）から、古墳時代前期の特徴を有する土師器が出土している。**SI2 竪穴住居跡**は、平面形が隅丸方形を呈すると思われる、カマドを付設する住居である。出土遺物は少ないが、堆積土中から9世紀後半頃の土師器壺が出土している。**SI3 竪穴住居跡**は、SI1と同様、炉を有する住居で、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。遺物は、堆積土・床面・炉掘方から古墳時代前期の特徴を有する土師器が出土している。**SI4 竪穴住居跡**は、カマドを付設し、隅丸方形を呈する住居である。遺物は、堆積土・カマド燃焼部堆積土・床面施設（P4・SK1）から9世紀後半頃の土師器・須恵器が出土している。

以上のとおり、出土遺物の特徴から、SI1・3 竪穴住居跡は古墳時代前期、SI2・4 竪穴住居跡は9世紀後半のものと思われる。

2) SB1~53 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡53棟の柱穴からは、主に縄文土器片・土師器片・須恵器片・陶器片が出土しているが、これらのほとんどは掘方埋土や柱の抜・切取穴の埋め戻し土に混入したと判断される小破片が多く、建物の詳細な年代を特定することは難しい。このうち、出土遺物から時代がある程度推定できる建物としては、SB23・24・25・51・52 建物跡が挙げられる。**SB51・52**では柱抜取後の埋め戻し土から、9世紀後半頃の遺物が一定量（SB51：土師器片85点・須恵器片1点うち4点図示、SB52：土師器片35点うち1点図示）出土している。これらは、遺物の出土状況から、柱抜取後、抜取穴の埋め戻しの際に、遺物が自然に混入したものとは考えにくく、埋め戻しの際に、使用していた遺物を人為的に埋戻土とともに遺棄したものと推定される。したがって、SB51・52の建物の廃絶年代は9世紀後半以降と考えられる。SB51は1間×1間の建物跡で、柱穴掘方の規模は60～80cm前後のもので構成され、周辺で確認された柱穴よりも掘方の規模が大きい。建物規模や柱穴掘方の面でSB51と類似する建物跡には、SB40・41があり、これらの建物についても9世紀後半頃の可能性が考えられる。**SB23・24**の柱痕跡では17世紀代の陶器片、**SB25**の柱抜取穴では18～19世紀代の陶器片が出土しており、建物の廃絶年代については、SB23・24は17世紀以降、SB25は18～19世紀以降であると考えられる。このSB23～25の分布範囲には多くの建物が所在し、遺構の重複関係・柱穴掘方の形

状の特徴から周辺の建物跡（SB21～34）についても、同様の年代の建物であると考えられる。

上記以外の掘立柱建物跡については、建物の年代を特定できる遺物が出土していない。これらの建物の柱穴は、掘方が円・楕円形を主体とし、長軸 20～40cm 前後の比較的小規模の掘方になるものが多い。こうした柱穴の特徴は、近世と考えられる SB23～25 の柱穴と類似しており、また、建物の方向についても概ね同様の方向である。的場遺跡では、SB23～25 以外の遺構や検出面・排土等から近世の遺物が出土しており、中世の遺物は確認されていない。このことから、SB40・41・51・52 を除く、掘立柱建物跡は近世を主体とする建物である可能性が想定される。

3) 溝跡

SD1・2・3・5・6 溝跡は、所々途切れる箇所があるが、位置関係や方向、堆積土の状況から一連の遺構であると判断される。遺物は、SD1 から縄文土器片・土師器片・砥石、SD2 から土師器片、SD5 から土師器片・須恵器片が出土した。出土した遺物は、小破片のため、図示できる遺物はなく、年代の特定は難しい。遺構の重複関係からみてみると、SD1 は縄文時代の SK27 土坑より新しい、SD2 は SX2 周溝状遺構・縄文時代の SK39 土坑より新しい、SD3 は平安時代以降の SK38 土坑より新しい、SD5 は平安時代の SI4 穫穴住居跡より新しい、SD6 は P545 小穴より新しいという関係にあり、溝跡は重複しているすべての遺構より新しい状況にある。このことから、SD1・2・3・5・6 は古代以降に構築された溝跡であると考えられる。また、遺構の位置関係からは、近世以降と思われる掘立柱建物跡（SB21～23）の一部と同位置にあることから、これらとは共存していなかったと思われる。ただし、溝跡の方向が溝側に所在する建物跡と共通するものもあることから、これらの近世の建物と共存していた可能性が考えられる。以上のことから、SD1・2・3・5・6 は、近世以降の可能性を想定しておきたい。

SD4 溝跡は、B 区中央東側を南北方向に延びる溝跡で、溝の北東部は調査区外に続いている。SD4 は堆積土が 6 層に分かれ、遺物は、堆積土上層である 1・2 層から古墳時代前期の土師器と平安時代（9 世紀後半頃）の土師器・須恵器が出土し、堆積土下層～底面付近の 3～6 層には古墳時代前期の土師器のみが出土している。このことから、SD4 は古墳時代前期に機能していた溝と考えられ、その後、溝部分が平安時代まで窪地状に落ち込んだ状態であったと推測される。SD4 が 9 世紀後半頃の段階で、溝として機能していたかは不明である。

4) 土坑

土坑は 65 基検出され、主に縄文土器片・土師器片・須恵器片が出土している。

このうち、出土遺物から時代がある程度推定できる土坑としては、SK10・11・12・14・15・20～24・41・42・53・59・60 が挙げられる。**SK10** 土坑は、隅丸長方形を呈し、底面の中央付近にピットを掘り込む土坑で、その形状から陥し穴と思われる。遺物は、人為堆積土から縄文時代前期の深鉢が 1 個体出土しており、SK10 は縄文時代前期のものと考えられる。的場遺跡では、SK10 の他に隅丸長方形を呈し、底面中央付近に Pit がある「陥し穴」と推定される土坑が 11 基（SK5・8・9・16・17・27・28・30・46・49・50）確認されている。また、底面に Pit が確認されなかったが、土坑の平面形が隅丸長方形を呈し、SK10 と堆積土が類似する土坑が 2 基（SK26・39）確認されている。これらの土坑では、SK8 以外を除き、遺物は出土していないが、その形状・堆積土が SK10 と類似することから、これらの土坑は SK10 と同様の年代である可能性を想定しておきたい。**SK11・53** 土坑は、円形・隅丸方形を呈し、堆積土から土師器片が一定量出土（SK11：35

点うち1点図示、SK53:34点うち7点図示)した。土坑の堆積土は自然堆積であるが、出土した土師器は、非ロクロ成形で古墳時代前期の特徴を有するもののみで構成されており、土坑機能時に土坑内に遺物が廃棄された可能性が高いと考えられる。このことから、SK11・53は古墳時代前期のものと思われる。SK12・15土坑は、古墳時代前期の土師器片のみが数点出土 (SK12:5点出土うち1点図示、SK15:2点出土うち1点図示)し、土坑の形状や堆積土がSK11・53と類似することから、これらと同様の年代の土坑である可能性が高いと思われる。SK14では堆積土から石臼が出土していることから、中世以降のものとみられるが、今回の調査区では中世の遺物が出土していないこと、周辺の建物が近世を主体としていることから、近世以降のものとみられる。SK20~24・59・60土坑では、9世紀後半頃の特徴を有する土師器片が一定量出土 (SK20:18点うち1点図示、SK21:2点うち2点図示、SK22:37点うち3点図示、SK23:24点うち2点図示、SK24:39点、SK59:25点、SK60:15点うち2点図示)しており、遺物の出土数・残存状況から、土坑構築後の埋没過程の段階で遺物が廃棄された可能性が高いと考えられる。このことから、これらの土坑は9世紀後半頃のものと思われる。SK41・42土坑では、堆積土から近世の陶器片が出土しており、これらの年代から、17~18世紀以降のものとみられる。

この他に遺物が少量出土している土坑にはSK7・13・19・29・38・44・51・62・64がある。これらの遺物は、いずれも堆積土出土で、かつ小破片のものがほとんどであり、遺構に伴うものではなく、周辺から流入したものと判断される。SK19・25・29土坑では非ロクロ成形の土師器が出土しているが、小破片のため年代推定は難しいため、古墳時代~古代以降のものとしたい。SK7・13・38・62土坑ではロクロ土師器片が出土しており、少なくとも古代以降のものとみられる。SK44土坑では楔形石器、SK51・64土坑では縄文土器小破片が出土しているが、これらの遺物では年代の特定が難しいことから、時期不明としておきたい。

遺構の重複関係から年代の推定が可能な土坑としては、SK32~37・48・54~56・58がある。SK54~56土坑は古墳時代前期のSD4と重複し、これより古いことから古墳時代前期以前、SK58土坑は、古墳時代前期のSI3と重複し、これより新しいことから古墳時代前期以降、SK32~37・48土坑は近世の掘立柱建物跡の柱穴と重複し、これらより古いことからそれ以前のものと想定される。

SK1~6・18・40・43・45・47・52・54・57・61・63・65土坑については、出土遺物がなく、所属時期は不明である。

5) 井戸跡

井戸跡は3基検出され、遺物が出土したのはSE3井戸跡のみである。

SE3井戸跡からは、砥石が出土しているが、詳細な年代を特定することは難しい。遺構の重複関係をみてみると、SE3はSB23掘立柱建物跡の柱穴との重複し、SB23より新しい。SB23は17世紀以降の建物跡であると想定されることから、それ以降の井戸であると考えられる。

SE1・2井戸跡については、出土遺物がなく、遺構の重複関係もないため、所属時期は不明であるが、SE3と形状・堆積土の特徴が類似することから、SE3と近い時期のものである可能性が考えられる。

6) 性格不明遺構・周溝状遺構・焼成遺構・ピット

SX1性格不明遺構・SX2溝状遺構は、遺物が出土していないため、詳細な所属時期は不明である。そこで遺構の重複関係からみてみると、SX1は時期不明のSK1土坑より古いが、その他の遺構と重複していないため時期不明、SX2は近世と想定されるSD2溝跡や近世の掘立柱建物跡より古い遺構であることから、近世以

前の遺構であると考えられる。

SX4 焼成遺構では、ロクロ成形の土師器片が出土し、出土状況から遺構に伴う遺物であると判断されるこ^とから、SX4は9世紀後半頃のものと考えられる。

SX3 焼成遺構については、その形状等がSX4と類似し、土師器片が出土していることからSX4と同様の年代が想定される。

ピットは、その掘方の形状・規模が掘立柱建物跡の柱穴と類似し、分布範囲が掘立柱建物跡と共通するこ^とから、掘立柱建物跡の柱穴と同様の年代である可能性が高いと推定される。

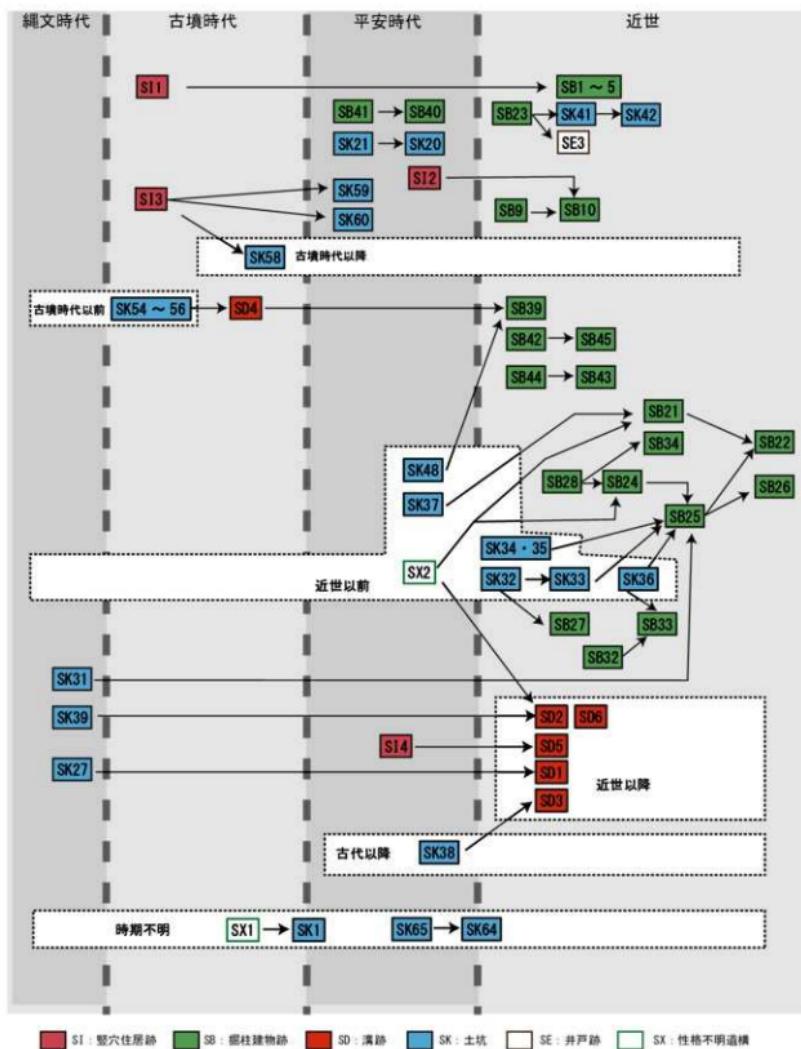
(2) まとめ

以上の検討より、検出した遺構のおおよその時期は次のとおりである。

第15表 的場遺跡検出遺構の所属時期

時代・時期	遺構名
縄文時代前期	SK5・8・9・10・16・17・(26)・27・28・30・(39)・46・49・50 土坑
古墳時代前期以前	SK54～56 土坑
古墳時代前期	SI1・3 竪穴住居跡 SD4 溝跡 SK11・12・15・53
古墳時代前期以降	SK58 土坑
古墳時代～古代以降	SK19・25・29 土坑
古代以降	SK7・13・38・62 土坑
平安時代 (9世紀後半頃)	SI2・4 竪穴住居跡 SB(40)・(41)・51・52 掘立柱建物跡 SK20～24・59・60 土坑 SX3・4 焼成遺構
近世以前	SK32～37・48 土坑 SX2 溝状遺構
近世	SB(1～22)・23～25・(26～39)・(42～50)・(53) 掘立柱建物跡 SD1～3・5・6 溝跡 SK14・41・42 土坑 SE(1)・(2)・3 井戸跡
時期不明	SK1～6・18・40・43・44・45・47・51・52・54・57・61・63・64・65 土坑 SX1 性格不明遺構

※()表記の遺構名は推定の時代



第169図 的場遺跡 主要遺構の重複関係と所属時期（※Pitを除く）

3. 各時代の遺構の特徴と変遷

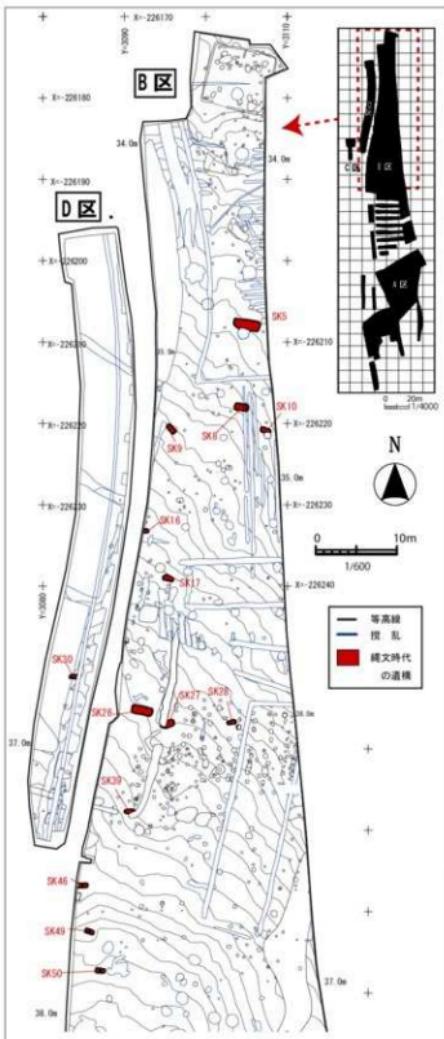
的場遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵上に位置する。遺跡の南・東側には山寺川、北側には涌沢川が流れ、遺跡はこれらの河川に挟まれた標高33~41mの中位段丘上の平坦面に立地する。なお、的場遺跡北部を流れる涌沢川から北側の平坦面には石垣遺跡、南部を流れる山寺川の南側には山王B遺跡が所在する。

今回の調査箇所(A~D区)は、南北約300m、東西約30~50mの細長い調査区で、縄文~近世までの各時代の遺構が確認された。ここでは、これまでの検討をもとに、各時代の遺構の特徴とその変遷等について検討したい。なお、それぞれの遺構の詳細は本報告第III章、出土遺物・遺構の年代については本報告第IV章1・2を参照されたい。

(1) 縄文時代の遺構（第170図）

A~D区において確認した縄文時代の遺構は、土坑14基(SK5・8・9・10・16・17・26・27・28・30・39・46・49・50)である。このうち、年代を特定できる遺物が出土した土坑はSK10のみで、その特徴から縄文時代前期のものとみられる。その他の土坑については、その形状・堆積土の状況がSK10土坑と類似することから、同様の年代であると想定した。土坑14基の土坑は隅丸長方形を呈し、底面中央部にPitのあるものが12基(SK5・8・9・10・16・17・27・28・30・46・49・50)、Pitのないものが2基(SK26・39)ある。これらの土坑は、その形状から「陥し穴」と思われる。陥し穴は、標高34.7m~37.8mの平坦面で確認され、それぞれ一定の間隔で配置されている。重複関係のあるものは認められず、遺構内の堆積土の土色も類似している。このことから、これらの「陥し穴」は、近い時期に機能していた可能性が想定される。

なお、今回の調査区では、「陥し穴」と推定される土坑以外に縄文時代と特定できる遺構は検出されなかった。したがって、縄文時代前期における的場遺跡の周辺地帶は、居住城ではなく、「狩り場」として利用されていたと考えられる。



第170図 的場遺跡 縄文時代の遺構

(2) 古墳時代の遺構 (第171図)

A～D区において確認した古墳時代の遺構は、竪穴住居跡2軒(SI1・3)、溝跡1条(SD4)、土坑4基(SK11・12・15・53)である。これらは、遺構の重複関係や出土遺物から、いずれも古墳時代前期のものと考えられる。この他、SK19・29 土坑についても非ロクロ成形の土師器片が出土しており、古墳時代の遺構である可能性がある。

【竪穴住居跡】

SI1 竪穴住居跡は涌沢川南側の調査区北端(B区北端)に位置する。住居の平面形は8.1m×7.7mの隅丸方形を呈し、当該期の住居跡としては比較的大型のものである。主柱穴が8個確認され、調査の結果、住居上屋を1度建て替えていることが想定された。壁際には周溝が巡り、床面の周縁部は掘方埋土を床としている。住居中央には炉が2ヶ確認され、炉の一つには掘方が認められた。後世の削平を受け、堆積土はほとんど残存していない。SI3 竪穴住居跡は調査区南側(A区北端)に位置する。住居の平面形は4.8m×3.5m以上の隅丸方形を呈する。主柱穴が3個確認され、住居コーナー部分の床面は掘方埋土を床としている。住居中には炉は配置され、炉には掘方が認められた。周溝は確認されていない。

これらの住居跡では、古墳時代前期の土師器が出土しているが、遺物の出土数が少なく、それぞれの住居の前後・共存関係を特定することはできなかった。

【溝跡】

SD4 溝跡は、調査区中央(B区中央東端)に位置する。溝跡は、南北方向に延びる溝で、調査区外の北東方向に延びている。検出長は約34mで、溝の上幅は2.5～3.3m、残存深は38～58cmと比較的浅い。溝の断面形は皿状で、堆積土下層には水の影響を受けたと考えられる酸化鉄が多く含む層が認められた。溝はB区中央部で立ち上がって止まっており、溝の底面は南から北に向かって傾斜していた。溝の堆積土上層では平安時代の遺物、下層では古墳時代前期の遺物が出土し、SD4部分は長期間にわたり窪地状になっていたと考えられる。

SD4 溝跡は、今回の調査で最も遺物が出土した遺構で、古墳時代前期とみられる非ロクロ成形の土師器片が1,394点(約12,375g)出土している。出土器種は、鉢(28点)、高杯(51点)、ミニチュア土器(4点)、瓶(1点)、甕・壺類(1,310点)で、甕・壺類を除けば、高杯の占める割合が高い傾向が認められる。出土遺物は、破片資料が多く、器形を復元できるものが非常に少ない。出土遺物のまとまりも特に認められなかった。こうした遺物の出土状況から、SD4溝跡出土の土師器は、祭祀などの行為により一括廃棄されたものではなく、ある一定期間をかけて、不要になったものが徐々に流入もしくは廃棄されたものとみられる。

このような古墳時代前期の多量の遺物が出土した規模の大きい溝跡の類例としては、登米市(旧迫町)佐沼城跡 SD105溝跡がある(佐久間1995)。佐沼城跡 SD105溝跡は、幅約3m・深さ50cm程度の検出長19mの溝跡で、一括廃棄したとみられる土師器が多く出土している。この溝跡は、溝と平行する柱穴列が存在することから、集落内での「区画施設」の一つとして捉えられている。佐沼城跡の事例と本遺跡で検出したSD4溝跡を比較してみると、規模の大きい点が類似するが、溝の上幅にばらつきがあり溝跡が蛇行していること、堆積土下層に水の影響が認められること、溝底面が南から北に向かって傾斜していること、遺物の出土状況に一括性が認められないこと、周間に区画施設とみられる遺構が確認されていないことなど異なる点が多い。

以上の点を踏まえると、本遺跡で確認されたSD4溝跡は、佐沼城跡 SD105溝跡のような区画施設ではなく、

集落内での排水等のための溝として機能していた可能性が想定される。

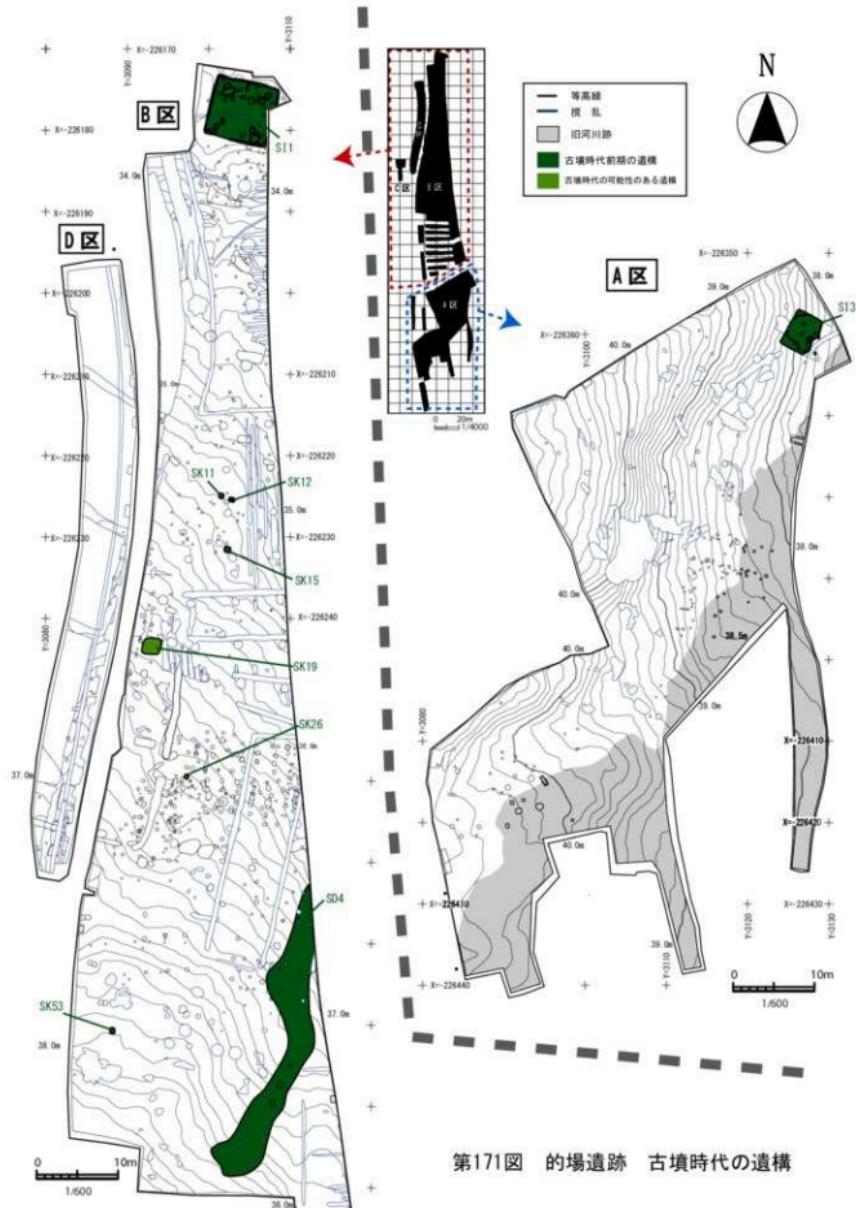
【土坑】

SK11・12・15・53 土坑は、調査区中央（B 区中央）付近に位置し、長軸 70～78cm、残存深 18～40cm の円形・楕円形・隅丸方形を呈する。これらの土坑は、いずれも自然堆積で、堆積土中から一定量の土師器が出土している（SK11：35 点、SK12：5 点、SK15：2 点、SK53：34 点）。出土器種は高壺・鉢・壺・甕で、このうち、SK53 土坑出土の壺破片（第 144 図 6）と前述の SD4 溝跡出土の壺破片（第 103 図 18）は、その形状や胎土、焼成の面から同一個体の可能性が高く、遺構間の関連性が想定される。その他の土坑についても、SK53 と堆積状況・出土遺物の面で共通性が認められ、SD4 溝跡の周囲に位置していることから、SK53 と同様の性格を有していた可能性が考えられる。

【的場遺跡における古墳時代前期集落の様相】

今回確認した古墳時代前期の遺構配置状況をみてみると、調査区北端（B 区北端）に竪穴住居（SI1）、中央付近（B 区中央）に溝・土坑、南側（A 区北端）に竪穴住居（SI2）が配置されている（第 171 図）。SI1・2 竪穴住居は、直線距離にして約 180m 離れた箇所に位置しており、その間の広い空間には、溝・土坑が所在する。古墳時代前期の竪穴住居跡は、的場遺跡北側に隣接する石垣遺跡の調査区南端でも確認されており（平成 23 年度調査 SI8・9 竪穴住居跡）、これらは SI1 竪穴住居跡に近い箇所（約 50m）に分布している。また、SI3 竪穴住居跡の北側付近（B 区南端）についても、後世の削平を受けた影響で遺構が皆無であった範囲にあたることから、SI3 北側周辺の平坦面にも古墳時代前期の住居跡が存在した可能性が想定される。当該時期の住居跡が確認されなかった調査区中央には、溝跡・土坑のみが分布し、出土遺物の点で共通性が認められ、これらは関連性の高い遺構群であると判断された。

以上のことから、古墳時代前期における的場遺跡は、SI1 周辺の B 区北端・涌沢川周辺の北側平坦面区域と SI3 周辺の A 区北端・B 区南端の南側平坦面区域は「居住域」として利用され、それぞれの居住域間の空間（B 区中央～B 区南側）には溝や土坑が作られ、居住以外の目的で利用された可能性が考えられる。今回発見された古墳時代前期の集落の存続期間については、SI1 竪穴住居跡で「上屋の建て替え」が確認されたこと、SD4 溝跡出土遺物の年代にある程度の幅が認められたことから、的場遺跡の前期集落はある一定期間存続していたと推測される。亘理郡内において、発掘調査により古墳時代前期の遺構が確認された遺跡は、北から亘理町の堤の内遺跡（鈴木 2002）・館南園遺跡（古川ほか 1991）・堀の内遺跡（亘理町教育委員会 1997）・宮前遺跡（丹羽 1983）、山元町の北経塚遺跡（山田ほか 2010・2013）などが挙げられる。このうち、大規模な集落が確認されたのは竪穴住居跡が 23 軒検出された宮前遺跡のみである。堤の内遺跡や北経塚遺跡においても竪穴住居跡は確認されているが、その検出軒数は 2～4 軒程度と少ない。堀の内遺跡・館南園遺跡では土坑が数基検出された程度である。亘理郡内の前期古墳は、宮前遺跡に隣接する長井戸古墳群 1 例のみで（註 4）、この他に、北経塚遺跡で前期の方形周溝状の溝跡が確認されているが、その性格は明らかではない。このように、亘理郡における古墳時代前期の様相については、良好な調査事例が少なく不明な点が多い。今回の的場遺跡で確認された前期集落についても、確認された遺構は竪穴住居跡 2 軒、溝跡 1 条、土坑 4 基程度で、調査面積に対してその密度は低く、その位置付けは難しい。今回の調査成果では、的場遺跡の遺構は調査区東側外に統一していると予想される。このことから、今回検出された的場遺跡の古墳時代前期集落の位置付けについては、今後の周辺の調査や他遺跡の調査事例を待って検討することとしたい。



第171図 的場遺跡 古墳時代の遺構

(3) 平安時代の遺構（第172図）

A～D区において確認した平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒（SI2・4）、掘立柱建物跡（SB40・41・51・52）、土坑7基（SK20～24・59・60）、焼成遺構（SX3・4）である。これらは、遺構の重複関係や出土遺物から、いずれも平安時代（9世紀後半代）のものと考えられる。この他、SK7・13・38・62土坑についてもロクロ成形の土師器片が出土しており、平安時代以降の遺構である可能性がある。また、SX2溝状遺構については、近世の掘立柱建物跡の柱穴より古く、近世以前の遺構と考えられ、平面形が方形の周溝状になり、その規模がSI2・4に類似することから古代の竪穴住居跡の可能性が想定される。

【竪穴住居跡】

SI2 竪穴住居跡は調査区北側（B区北側）に位置する。住居の平面形は4.3m×2.1m以上の隅丸方形を呈し、住居東側にカマドを付設する。柱穴は3個、カマド南脇に土坑が確認され、周溝は認められなかった。床面は地山を床とし、一部に貼床が確認された。SI4 竪穴住居跡は調査区西側（C区）に位置する。住居の平面形は5.2m×4.9m以上の隅丸方形を呈し、住居東側にカマドを付設する。柱穴は4個、カマド南脇に土坑、周溝は住居北東部分と南側で確認された。床面は地山を床としている。この他、竪穴住居跡の可能性がある遺構として、SX2溝状遺構がある。SX2は、南北約4mのコの字状を呈する。溝の内部では、住居に隣接する柱穴等は確認されなかつたが、その規模や堆積土がSI2・4 竪穴住居跡と類似すること、SI2・4の残存状況が悪いことなどから判断すると、SX2は住居の周溝のみが残存したものである可能性が想定される。

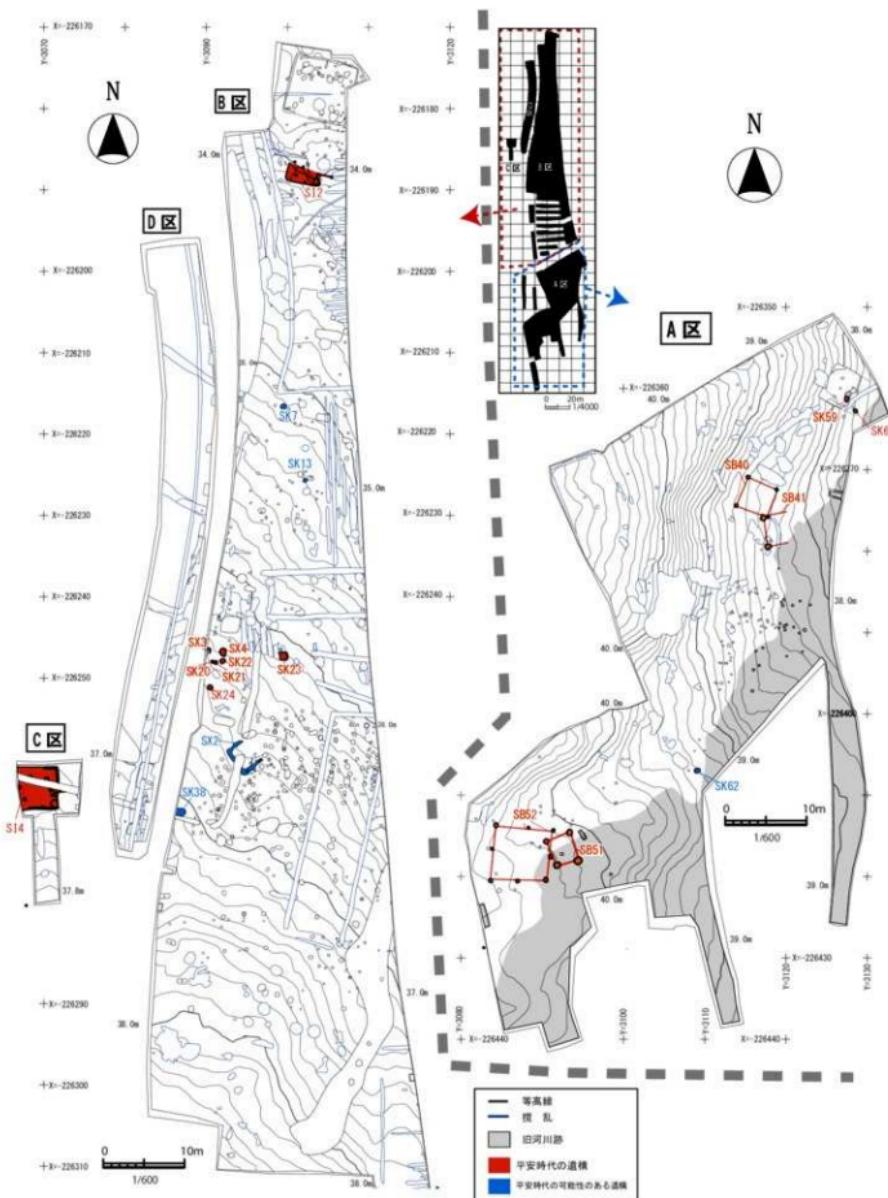
SI2・4 竪穴住居跡では、いずれも9世紀後半代の土師器が出土しており、周溝の有無や床面の構造等で相違点が認められるものの、規模・カマド付設位置等の特徴が類似し、調査区内での位置関係から、同時存在していた可能性が高いと考えられる。また、SX2溝状遺構についても、その規模がSI2と類似することから、同様の年代のものである可能性が考えられる。

【掘立柱建物跡】

掘立柱建物跡は、調査区南側（A区中央・南側）に位置する。建物の規模は、1×1間のものが2棟（SB40・41・51）、1×1以上のものが1棟（SB41）、2×2間のものが1棟（SB52）である。これらの建物跡は、SB40とSB41、SB51と52がそれぞれ近接した箇所に位置することから、建物跡は各箇所で2時期の変遷が想定される。また、SB40とSB41は重複関係にあり、SB40の方が古い。柱穴の掘方は、SB40・50が長軸40cm前後であるの対し、SB41・51が長軸70cm前後である。したがって、前述のSB40・41の重複関係と柱穴掘方の規模から、掘立柱建物跡は、柱穴掘方が70cm前後の建物（SB41・SB51）→40cm前後（SB40・52）の建物へと変遷したと想定される。SB51・52の柱抜取穴では、内黒処理のロクロ土師器壺が出土しており、遺物の年代から建物の廃絶年代は9世紀後半以降とみられ、これらの建物は、近い時期に建て替えられた可能性が考えられる。なお、建物跡の性格については、不明な点が多いが、今回確認した掘立柱建物跡は、同集落内に竪穴住居跡が存在し、その居住域から離れた箇所に位置していることや、建物の規模が小規模であることから、居住目的の建物でなく、倉庫等の別の用途で使用されたものと推察される。

【その他の遺構】

その他の遺構として、土坑4基（SK20～24・59・60土坑）、焼成遺構（SX3・4）がある。これらは、遺構の重複関係や出土遺物から、いずれも竪穴住居跡や掘立柱建物跡とほぼ同様の年代（9世紀後半代）に機能



第172図 的場遺跡 平安時代の遺構

していたものとみられる。また、SK7・13・38・62 土坑についてもロクロ成形の土師器片が出土しており、同様の時期の遺構である可能性が考えられる。

このうち、SK20~24、SX3・4は、遺構の分布がある程度まとまった範囲に收まり、遺物の出土量も多い。また、SK20からは墨書き土器が1点出土している。このことから、SK20周辺に位置する土坑と焼成遺構のまとまりは、集落内で発見された同時期の他の土坑とは異なる性格を有していた可能性が考えられる。

【的場遺跡における平安時代集落の様相】

今回確認した平安時代の主要遺構の配置状況をみてみると、調査区北側～中央部付近（B 区北側・中央部、C 区）には堅穴住居（S12・4、SX2？）、南側付近（A 区中央・南側）には掘立柱建物、中央部（B 区中央西側）には土坑群・焼成遺構（SK20~24・59・60 土坑、SX3・4）が配置されている（第172図）。集落内での遺構配置の特徴としては、堅穴住居が調査区北半の範囲、掘立柱建物跡は調査区南部、土坑群・焼成遺構は調査区中央西側のみに限定されることが挙げられる。こうした状況は、集落内において、それぞれの目的に応じた土地利用が行われていた可能性が考えられる。しかしながら、今回の調査では当該時期の遺構が多数発見されたわけではなく、遺構は調査区外のさらに東側にも続いていると予想されることから、的場遺跡の平安時代集落の全体像については、今後の調査を待って再度検討することしたい。

（4）近世の遺構（第173図）

A～D 区において確認した近世以降と考えられる遺構は、掘立柱建物跡 49 棟（SB1～39・42～50・53）、溝跡 5 条（SD1～3・5・6）、土坑 3 基（SK14・41・42）、井戸跡 3 基（SE1～3）、ピット多数である。

【掘立柱建物跡】

掘立柱建物跡は、A～D 区のうち、A・B・D 区の範囲内にのみ分布している。その分布域は、B 区北半～中央の標高 33～37m の平坦面、A 区中央～南側の標高 38～40m 平坦面の大き 2 箇所にまとまる。このうち、B 区中央の SB21～34、A 区中央の SB42～48 の範囲には建物が多く分布している。

検出した近世以降の 49 棟の建物跡のうち、その身舎の規模の内訳は、6 間×1 間が 1 棟（SB25）、5 間×1 間が 1 棟（SB24）、4 間×1 間が 3 棟（SB18・44・45）、3 間×2 間が 1 棟（SB12）、3 間×1 間が 12 棟（SB21～23・26・27・36・39・42・43・47・48・50）、2 間×2 間が 2 棟（SB28・46）、2 間×1 間が 9 棟（SB10・11・16・19・20・34・35・37・38）で、建物が調査区外に延びているため規模不明なものが 20 棟である。このうち、庇の付く建物は 7 棟（SB17・21・23・25・27・28・47）、張出の付く建物は 3 棟（SB14・24・50）ある。建物の面積については、庇・張出も含めた面積でみてみると、庇の付く建物は 24～32・76 m²、張出のある建物は 16・19・62 m²、その他は 9～39 m²で 20 m²前後のものが多い（第16表）。柱穴掘方の規模は、長軸 20～40 前後の円形・椭円形を呈するものが主体で、桁行の柱間寸法は、1.1～3.6m でばらつきがあるが、2.0～2.5m ものが多い。建物の方向は、大きく分けると、建物の東辺・西辺が真北に対して①西に傾くもの（N-10°～35°-W）、②真北・ほぼ真北もの（N-5°-W～N-5°-E）、③東に傾くものがあり（N-6°～35°-E）がある。

前述のとおり、掘立柱建物跡は、A・B・D 区の範囲内にのみ分布し、特に B 区中央部（SB21～34）と A 区中央部（SB42～48）の範囲では、建物がある一定の範囲に幾度となく建て替えられている状態で確認された。こうした建物跡の密集範囲内の遺構の重複関係（第169図）、建物どうしの重なりや位置関係から、同時存在が不可能なものを考慮すると、A 区中央部では 7 時期、B 区中央部では 6～8 時期の建物の建て替えが想

【溝跡】

SD1～3・5・6 溝跡は、その方向・規模・堆積土の状況から同一の遺構であると判断され、B区中央の掘立柱建物跡の密集地域西側からC・D区にかけて確認された。溝跡は、L字状を呈する溝跡で、溝跡はC区の調査区外から東側に東西方向に延び、B区西側で南北方向に折れ曲がり、SB19南側付近で途切れる。重複関係から近世以降の溝跡とみられる。また、溝跡の形状から、区画溝の可能性が考えられる。位置関係からはSB19・21～23とは共存しないとみられる。溝の南北方向の軸は、真北に対し東に15°程度傾く(N-15°-E)。この傾きは、溝東側で確認された掘立柱建物跡と類似する。また、溝跡の堆積土についても、周辺で確認された建物と類似していることから、SD1～3・5・6 溝跡は、周辺で確認された近世の掘立柱建物群と関連のある区画溝である可能性が想定される。一方、この溝跡は、D区で確認された近・現代の水田跡（上面よりガラス片が出土し、現地調査時、攪乱として取り扱った）とも方向が類似しており、これとの関係性も想定される。D区で確認された水田跡は、現在の町道1号東街道線下で検出され、調査の結果、昭和28年頃の町道改修工事の際に埋め戻されたと判断されたものである（山元町史編纂委員会編 1971）。D区西側は、現在も水田として利用されており、D区で確認された水田跡は、現在も耕作されている水田の一部であったとみられる（第4・173図）。この水田の耕作開始年代については、水田の最下層から17世紀前葉の大鉢や近世の碗が出土していることから、少なくとも近世以降に耕作され、昭和28年以前まで使用されていたと考えられる。仮にSD1～3・5・6 溝跡・掘立柱建物跡・水田の三者が関連する遺構であれば、現在も耕作されている水田の耕作開始年代が建物群の年代まで遡る可能性がある。しかしながら、現状では溝・建物・水田の三者を結び付ける根拠は乏しく、現段階では、溝跡は建物跡・水田跡のどちらにも関連する遺構である可能性を想定するにとどめておきたい。

【井戸跡】

井戸跡は3基(SE1～3)確認され、B区の範囲内にのみ分布している。確認された井戸跡は長軸1.2～1.3m前後の円形を呈する。SE1 井戸跡でのみ掘方が認められた。このうち、SE3については、堆積土から砥石が出土し、また、重複関係からSB23 掘立柱建物跡以降の井戸跡とみられる。今回の調査で中世と考えられる土器が皆無であること、掘立柱建物跡の分布域から比較的離れた箇所に位置していることから、周辺で確認された近世以降の建物跡と関連がある井戸跡であると考えられる。

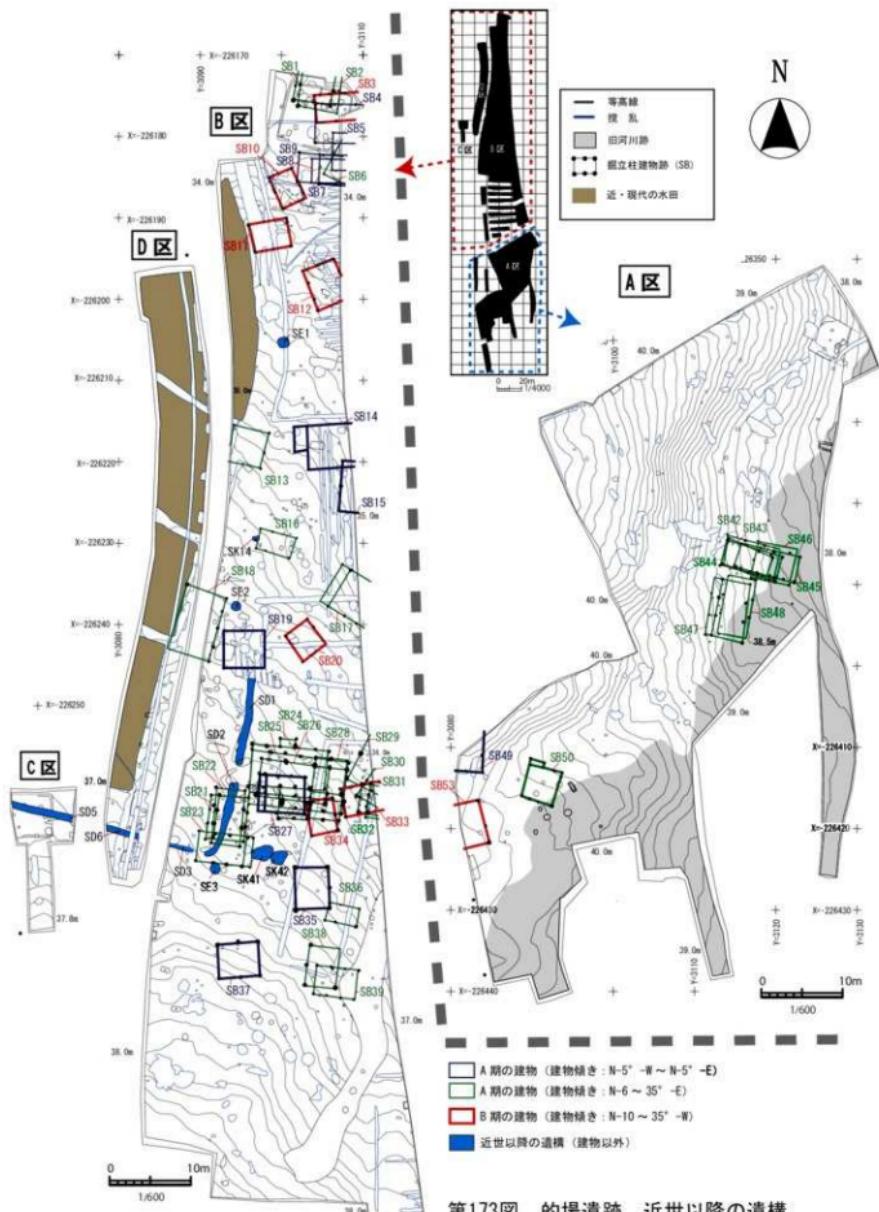
【土坑】

出土遺物から近世以降と推定できた土坑は3基(SK14・41・42)である。SK14からは砥石、SK41・42からは17～18世紀代の陶器片が出土しており、井戸跡と同様、これらの土坑についても周辺の建物跡と関連がある遺構とみられる。SK41はSB23・SK42と重複関係にあり、SB23→SK41→SK42の順で変遷する。

この他に今回の調査区では、時期不明の土坑が多数確認されているが、SK14・41・42と形状・堆積状況が類似する土坑もあり、この中に近世以降の建物跡と関連のある土坑が存在すると考えられる。

【的場遺跡における近世集落の様相】

上記の検討により、掘立柱建物跡はその方向からA・B期に大別できた。このうち、A期の建物群は建物の重複関係・重なりから6～8時期の変遷が想定され、屋敷を構成する建物群は相当期間存続していたと思われる。また、A期の一部の建物の柱穴跡からは、17～19世紀代と推定される陶器片が出土していることか



第173図 的場遺跡 近世以降の遺構

ら、A期の建物群は少なくとも17~19世紀前後のものであったと想定され、B期はそれ以降の建物群であると考えられる。建物以外の近世以降の遺構には、SK14・41・42土坑、SE1~3、SD1~3・5・6溝跡がある。これらの遺構と建物の直接的な共存関係については、出土遺物や重複関係のみで捉えることは難しいが、A・B期のいずれかの時期に屋敷内の中での機能した遺構であったと考えられる。このうち、SK41・42土坑については、出土遺物から17~18世紀頃の遺構と思われ、A期に機能した遺構である可能性がある。

検出した掘立柱建物跡には、規模・平面形が複数種類認められることから（第16表）、その用途は居住施設・付属施設・倉庫等のさまざまな機能が推測され、これらの建物が屋敷を構成していたと考えられる。検出した建物の身舎面積は、平均的なもので20m²前後が多いが、庇や張出が付く建物は、検出した建物の中でもその規模（面積20~70m²前後）が大きいものが多く、屋敷内でも中心的な建物（主屋等）であったと想定される。また、庇・張出が伴わない建物の中にも面積が30m²を超えるもの（SB18・26）もあり、これらの建物も平均的な大きさの建物とは異なる性格を有していた可能性がある。この他に、的場遺跡内では、建物の分布域がA区中央とB区中央～北半に大きく分かれており（第173図）、集落内での用途の違いによる土地利用が意識されていた可能性が考えられる。

亘理郡内で近世を主体とする集落は、山元町山王B遺跡（初鹿野ほか）で確認されているが、集落全体を調査した事例はあまりなく、周辺地域の近世における集落内の屋敷の建物構成・土地の利用など不明な点が多い。的場遺跡における近世集落についても、建物が調査区東側に統いており、その全容については、今後の周辺の調査を待って再度検討することとした。

註

- 1) 宮城県内において、平安時代のロクロ成形の内黒処理されていない土師器について、「赤焼土器」・「須恵系土器」等の名称で呼ばれる場合がある（桑原1976・小井川1984）。本稿では、原則として内黒処理・非内黒処理のものをすべてを土師器として分類したが、両者を区別する際に「赤焼土器」の名称を使用することとした。
- 2) 大戸窯跡で生産された須恵器の産地・年代については、石本弘氏（福島県文化振興事業団）・佐藤敏幸氏（東松島市教育委員会）にご教示いただいた。
- 3) 陶磁器類の産地・年代については、佐藤洋氏（仙台市教育委員会）・日下和寿氏（白石市教育委員会）・川又隆央氏（岩沼市教育委員会）にご教示いただいた。
- 4) 亘理郡内の古墳は、現在のところ、前期の長井戸古墳群（ほかに、亘理町吉田大塚古墳（中期）、山元町北経塚遺跡の円墳（中期）・合戦原古墳群・戸花山古墳群・孤塚古墳群（後期）が確認されている。このうち、合戦原古墳群に所在する前方後円墳は未調査であるが、前期に造成された可能性も指摘されている（青山ほか、2000）。

4. まとめ

的場遺跡は、宮城県南東部の阿武隈山地から東に延びる丘陵上に位置する。遺跡の時期は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、近世にわたる。今回の調査では、堅穴住居跡4軒、掘立柱建物跡53棟、溝跡6条、土坑65基、井戸跡3基、性格不明遺構・焼成遺構4基、ピット221個を検出し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器が出土した。以下、各時代の遺構について要点をまとめる。

- ① 縄文時代の遺構には、土坑14基がある。その形状から陥し穴と考えられ、出土遺物から縄文時代前期前葉のものとみられる。陥し穴は、標高34.7m～37.8mの平坦面に一定の間隔で配置されており、この他に縄文時代の遺構が検出されなかつたことから、縄文時代前期における的場遺跡の周辺地帯は、居住域ではなく、「狩り場」として利用されていたと考えられる。
- ② 古墳時代の遺構には、堅穴住居跡2軒、溝跡1条、土坑4基がある。これらは、遺構の重複関係や出土遺物から、いずれも古墳時代前期のものと考えられる。
- ③ 平安時代の遺構には、堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟、土坑7基、焼成遺構2基がある。これらは、遺構の重複関係や出土遺物から、いずれも平安時代（9世紀後半）のものと考えられる。
- ④ 近世以降と考えられる遺構は、掘立柱建物跡49棟（SB1～39・42～50・53）、溝跡5条（SD1～3・5・6）、土坑3基（SK14・41・42）、井戸跡3基（SE1～3）、ピット多数であり、これらは屋敷地を構成していたことが推測される。時期は、出土遺物から、概ね17～19世紀を主体とする屋敷跡であったと考えられる。掘立柱建物跡は、方向から大別2時期が想定され、建物同士の重複関係やその位置などから、集落は相当期間が存続していた可能性がある。出土遺物は、陶器・砥石で、陶器の生産地は岸窯、小野相馬、大堀相馬、美濃、志野である。
- ⑤ この他、今回の調査では、時期を確定できなかった遺構が多数残されているが、これらは縄文時代～近世にかけてのいずれかに属する遺構であると考えられる。また、調査区内の遺構からは、縄文時代晩期の縄文土器片や弥生時代中期前半の弥生土器片が出土した。遺構は検出されていないが、周辺にはこの時期の遺構が分布する可能性がある。

引用・参考文献

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』76-1
青山博樹ほか 2000 「宮城県山元町合戸原古墳群の測量調査」『宮城考古学』2
青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年-仙台平野とその周辺-」『北杜-辻秀人先生還暦記念論集-』
青山博樹 2011 「土器部の編年」②東北』『古墳時代の考古学I 古墳時代史の枠組み』同成社
天野順陽 1994 「下草古城跡」『下草古城跡(まほ)』宮城県文化財調査報告書第 168 集
天野順陽 1996 「下草古城跡」『下草古城跡(まほ)』宮城県文化財調査報告書第 169 集
石本弘ほか 1990 「山中道跡」『相馬開発見聞調査報告書』福島県文化財調査報告書第 234 集
伊東信雄 1957 「第2章 弥生式文化(時代)」『宮城県史』古代史・中世史・宮城県史刊行会
井上雅孝 1997 「「陸奥における10・11世紀の土器群」『北陸古代土器研究』第7号
岩見和泰・佐藤憲幸 1991 「合戸原遺跡」『合戸原遺跡(まか)』宮城県文化財調査報告書第 140 集
氏家和泰 1957 「東北土器部の型式分類とその編年」『歴史』14
大坂拓 2012 「仙台平野の「新」」『平成 24 年度別記呈報書』発掘富沢-30 年のあゆみ-』仙台市教育委員会
大友透・福山宗志 1997 「『祇園跡』名取市文化財調査報告書 38 集
大友透・鶴崎哲也 2000 「『祇園跡』名取市文化財調査報告書 44 集
太田昭夫 1987 「宮城県における弥生式土器編年研究の課題と課題」『第2回圓文文化検討会シンポジウム 東北地方の弥生式土器の編年について』
岡田茂弘・桑原忠志 1974 「『新潟城跡』における古代灰陶土器の変遷」『研究紀要!』宮城県多賀城跡調査研究所
小山正忠・竹原秀雄編 1973 「新潟標準土色帳」2010 年版
加藤道男 1989 「宮城県における土器の調査研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』
窟田忍 1995 「孤塚遺跡」『山元町文化財調査報告書』
桑原忠雄 1976 「須恵土器について」『東北考古学論』
小井川和夫 1984 「いわゆる赤陶土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第 10 号
佐久間光平 1995 「佐渡城跡-近世武家屋敷と古代の集落跡-」追町文化財調査報告書第 2 集
佐々木・志賀泰治・吉家和也 1971 「「井戸横掘穴古墳調査報告書」『山町町』」
佐藤麻洋 2009 「宮城県における庶民市町陶磁器の生産と流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 間車・東北・北海道編』
白鳥良一 1980 「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要!』宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一 1982 「土器」『多賀城跡研究本編』宮城県多賀城跡調査研究所
須藤隆 1999 「第三章 弥生時代」『仙台市史』通史編 1・原始
桃崎正隆 1974 「史料 仙台御内古城・館」第四卷
志間泰治 1966 「宮城県立理都における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
志間泰治 1975 「『亘理の古墳』」
志間泰治 2007 「報復! 歴史を振り起こす」
鈴木朋子 2002 「星の内遺跡」『亘理町文化財調査報告書第 8 集』
関教司 2004 「北経伝跡」『山元町文化財調査報告書第 3 集』
根掛達人 2006 「北海道・東北」『江戸時代のやまともの一生産と流通-』
田嶋明人 2012 「古墳遺跡の立派な東日本城を対象とした検討(その 5)」『東生』第 1 号
千葉正康 1993 「孤塚遺跡」『孤塚遺跡(まか)』宮城県文化財調査報告書第 157 集
次山淳 1992 「塙釜式土器の変遷とその位置づけ」『研究一埋蔵文化財研究会 15 周年記念論文集-』
辻秀人 1994 「東北南部の古墳出土地の様相」『東日本古の古墳の出現』山川出版社
辻秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年」一その 2-『東北大学院論集-歴史学・地理学-』第 27 号
辻秀人 2001 「東北の弥生土器と土師器」『アジア文化研究』第 1 号
辻秀人 2008 「大塚森古墳の研究」『歴史と文化』第 43 号 東北学院大学論集
辻秀人編 2007 「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化の交流」『研究』平成 15~18 年度科学研究費補助金(基盤研究 B)研究成果報告書
東北陶磁文化学術研究会 1987 「東北の古墳跡」
東北中世考古学会編 2001 「東北中世考古学叢書 2 猪立と堅穴 中世遺構論の課題」高志書院
丹羽茂 1983 「宮前遺跡」『木舟横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第 96 集
丹羽茂 1985 「今熊野遺跡」『木舟横穴古墳群・馬越石塚』p. 宮城県文化財調査報告書 104 集
初鹿野博之・山口厚・千葉直樹・大坂拓 2012 「西石山原遺跡(まか)常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書 1-』宮城県文化財調査報告書第 230 集
初鹿野博之 2013 「官城県山元町内手遺跡・上宮前北遺跡」第 39 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集
早瀬亮介 2008 「前期大木式土器」『通鑑 文土器』
引地弘行 2002 「館の内遺跡」『宮城県文化財調査報告書第 188 集』
平塚幸人 2001 「仙台平野における小丸鉢について」『仙台市富沢遺跡保存館研究報告』4
福島考古学會中世部会編 2009 「福島県考古學會中世部會平成 12 年度研究セミナー 東北地方南部における中世集落の諸問題」
藤田至則・加納博、斎藤文次郎、八島隆一 1988 「角田地域の地質」地盤調査研究報告 地質研究
藤沼邦彦・荒井健太郎 2008 「「鬼岡式土器」(鬼岡式土器群)」『絶賛 織文土器』
古川一明・鈴木真一郎・大和生幸 1991 「猪南園遺跡」『猪南園遺跡(まか)』宮城県文化財調査報告書第 144 集
文化庁文化財修復技術研修会 2010 「発掘調査の手引き・整理・報告書編」
文化庁文化財修復技術研修会 2010 「発掘調査の手引き・整理・報告書編」
宮城県考古学会編 2010 「平成 22 年度宮城県遺跡調査会発表会発表要旨」
宮城県考古学会編 2011 「平成 23 年度宮城県遺跡調査会発表会発表要旨」
宮城県考古学会編 2012 「平成 24 年度宮城県遺跡調査会発表会発表要旨」
宮城県考古学会編 2013 「平成 25 年度宮城県遺跡調査会発表会発表要旨」
宮城県企画部土地政策課編 1983 「土地分類基本調査 角田」
村田晃一 1992 「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
村田晃一 1994 「土器からみた宮衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』
村田晃一 1995 「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号
柳澤和明 1994 「東北地方の施釉土器」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東 3 施釉陶器-』
山田隆博 2008 「企画展説明文」亘理郡の古墳時代『山元町歴史民俗資料館』
山田隆博・村上祐次・山口厚 2010 「北経伝跡」『山元町文化財調査報告書第 4 集』
山田隆博・藤田祐、佐伯弘司 2013 「『中島貝塚』山元町文化財調査報告書第 5 集』
山内清男編 1964 「日本原始美術 1」
山元町史編纂委員会編 1971 「山元町誌」
山元町史編纂委員会編 1996 「中島貝塚」『山元町誌 二巻』
亘理町教育委員会 1997 「船の内遺跡」亘理町文化財調査報告書第 7 集

報告書抄録

ふりがな	まとはいせき						
書名	的場遺跡						
副書名	常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書Ⅰ						
巻次							
シリーズ名	山元町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第6集						
編著者名	山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓						
編集機関	山元町教育委員会						
所在地	〒989-2303 宮城県亘理郡山元町茂生原字日向 12-1 電話 0223-37-5116						
発行年月日	平成26（2014）年3月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	位置 北緯 東経		調査期間	調査面積	調査原因
的場遺跡	宮城県 亘理郡 亘理町 山元町 山寺字 的場	043621	37 度 57 分 40 秒	140 度 52 分 7 秒	20110627～0825 20111014～1020 20130628～0809	6,790 m ²	常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
的場遺跡	土坑	縄文時代前期前葉 (大木1式)	土坑		縄文土器、石器	土坑14基	
	散布地	縄文時代晚期	—				
	散布地	弥生時代中期	—		弥生土器	—	
	集落	古墳時代前期	竪穴住居跡、溝跡、 土坑		土師器	竪穴住跡2軒、溝跡1条、 土坑4基	
	集落	平安時代 (9世紀後半)	竪穴住居跡、掘立 柱建物跡、土坑		土師器、須恵器	竪穴住跡2軒、掘立柱建物 跡4棟、土坑7基、焼成遺構2 基	
	屋敷跡	近世 (17～19世紀)	掘立柱建物跡、土坑、 溝跡、井戸跡、ビ ット		陶器	掘立柱建物跡49棟、溝跡5条、 土坑3基、井戸跡3基、ビッ ト多数	
要約	的場遺跡は、亘理郡山元町山寺字的場に所在し、山元町役場の西約800mに位置する。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵の山寺川と涌沢川に挟まれた標高33～41mの中位段丘に立地する。遺跡の範囲は、東西60m、南北320mほどの広がりをもつ。						
	調査の結果、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡53棟、溝跡6条、土坑65基、井戸跡3基、性格不明遺構・焼成遺構4基、ビット221個を検出した。出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器などである。						
	縄文時代の遺構には、縄文時代前期前葉の土坑（陥し穴）14基がある。陥し穴は、一定の間隔で配置されており、遺跡周辺は、「狩り場」として利用されていたと考えられる。						
	古墳時代の遺構には、古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、溝跡1条、土坑4基がある。						
	平安時代の遺構には、9世紀後半の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟、土坑7基、焼成遺構2基がある。						
	近世以降と考えられる遺構は、掘立柱建物跡49棟、溝跡5条、土坑3基、井戸跡3基、ビット多数であり、これらは屋敷地を構成していたことが推測される。時期は、出土遺物から、概ね17～19世紀を主体とする屋敷跡と考えられる。						
	この他、時期不明の遺構が多数あり、これらは縄文時代～近世にかけてのいずれかに属する遺構であると考えられる。また、縄文時代晚期の縄文土器や弥生時代中期前半の弥生土器が出土し、周辺にはこの時期の遺構が分布する可能性がある。						

山元町文化財調査報告書第6集

的 場 遺 跡

一ノ谷古墳群遺跡（那須～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書－

平成26年3月28日発行

発 行 山 元 町 教 育 委 員 会

宮城県亘理郡山元町浅生字田向12-1

TEL0223-37-5116 / FAX0223-37-0119

印 刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト

宮城県仙台市青葉区立町24-24
